

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第2集

海津横馬場遺跡Ⅱ

福岡県三池郡高田町所在遺跡の調査

2006

福岡県教育委員会

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第2集

海津横馬場遺跡Ⅱ

福岡県三池郡高田町所在遺跡の調査



1. 海津横馬場遺跡遠景（北から）



2. 海津横馬場遺跡遠景（南から）



1. 96号土坑 須恵器出土状況



2. 出土小型仿製鏡 (実寸大)

序

福岡県教育委員会では、平成13年度から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（旧日本鉄道建設公団）の委託を受けて、九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

本報告書は平成15年度に発掘調査を実施した三池郡高田町大字海津に所在する海津横馬場遺跡の第3次調査の記録です。同遺跡からは弥生時代の竪穴住居跡や土坑、甕棺墓の他、奈良時代の土坑などが多数見つかかり、先人の足跡を知る貴重な成果を得ることができました。

この成果が、教育・研究・文化財愛護思想普及の一助になれば幸いに存じます。

なお、発掘調査及び本書の作成にあたりまして、多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成18年3月31日

福岡県教育委員会教育長

森 山 良 一

例言

1. 本書は平成15年度に九州新幹線建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県三池郡高田町大字海津字横馬場に所在する海津横馬場遺跡（第3次）の報告で、九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告の第2集である。
2. 発掘調査・整理・報告書作成は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真については宮地聡一郎が行った。遺物写真は九州歴史資料館参事 石丸洋、文化財保護課整理指導委員 北岡伸一が撮影し、空中写真は九州航空株式会社に委託した。
4. 本書に掲載した遺構図は宮地が作成した。掲載した遺構図の方位は全て座標北である。
5. 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館で行った。
6. 鉛同位対比の分析については（財）元興寺文化財研究所に委託し、その成果をIVに収録した。
7. 出土遺物の実測は宮地の他、一ノ瀬智、高田千恵、平田春美、中川陽子、中川真理子、中村陽子、掘江圭子、西原節子、田中典子、若松三枝子、栗林明美、寺岡和子、久富美智子、橋口雅子、荒川妙、棚町陽子、坂田順子が行った。
8. 遺構・遺物の製図等は豊福弥生・原カヨ子・宮地が行った。
9. 本書の執筆はIVを（財）元興寺文化財研究所に委託した他は宮地が行った。
10. 本書のIVは依頼原稿である関係上、挿図版及び表番号は別個となっている。
11. 本書の編集は宮地が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査の組織	3
II. 位置と環境	5
III. 発掘調査の記録	9
1. 基本層序	9
2. 第3次調査の内容	10
(1) 概要	10
(2) 竪穴住居跡	12
(3) 土坑	52
(4) 甕棺	88
(5) 土器溜まり	88
(6) 鏡出土ピット	92
(7) ピット出土土器	95
(8) 包含層出土土器	95
(9) 石器	109
(10) 土製品・鉄製品・玉類	117
(11) まとめ	118
IV. 自然科学的分析	120

図版目次

- 巻頭図版 1 1. 海津横馬場遺跡遠景（北から）
2. 海津横馬場遺跡遠景（南から）
- 巻頭図版 2 1. 96号土坑須恵器出土状況
2. 出土小型仿製鏡（実寸大）
- 図版 1 1. 第3次調査A区北半空中写真（東から）
2. 第3次調査A区南半空中写真（西から）
3. 第3次調査A区上層遺構（南西から）
- 図版 2 1. 第3次調査B区空中写真（西から）
2. 第3次調査C区全景（北東から）
3. 第3次調査D区空中写真（西から）
- 図版 3 1. A区東壁土層B
2. A区東壁土層C
3. 18号竪穴住居跡（南東から）
- 図版 4 1. 19・20・22号竪穴住居跡（北東から）
2. 21号竪穴住居炉跡（南西から）
3. 21号竪穴住居炉跡断ち割り土層（南東から）
- 図版 5 1. 23号竪穴住居跡（北西から）
2. 24号竪穴住居跡（南東から）
3. 25号竪穴住居跡（北西から）
- 図版 6 1. 26号竪穴住居跡（南西から）
2. 27号竪穴住居跡（南から）
3. 28号竪穴住居跡（南西から）
- 図版 7 1. 29号竪穴住居跡（南西から）
2. 30号竪穴住居跡（南西から）
3. 31号竪穴住居跡（南西から）
- 図版 8 1. 32号竪穴住居跡（北東から）
2. 33号竪穴住居跡（南から）
3. 34号竪穴住居跡（南西から）
- 図版 9 1. 35号竪穴住居跡（南から）
2. 36号竪穴住居跡（南西から）
3. 37号竪穴住居跡（南東から）
- 図版10 1. 38号竪穴住居跡（南西から）
2. 39号竪穴住居跡（西から）
3. 40号竪穴住居跡（北西から）
- 図版11 1. 41号竪穴住居跡（西から）
2. 42号竪穴住居跡（西から）

3. 43・44号竪穴住居跡（北西から）
- 図版12
1. 45号竪穴住居跡（南西から）
 2. 46号竪穴住居跡（北西から）
 3. 93号土坑（南から）
- 図版13
1. 94号土坑（南から）
 2. 95号土坑（北西から）
 3. 96号土坑（北から）
- 図版14
1. 97号土坑（西から）
 2. 98号土坑（西から）
 3. 99号土坑（西から）
- 図版15
1. 100号土坑（東から）
 2. 101号土坑（東から）
 3. 102号土坑（北から）
- 図版16
1. 102号土坑土層（東から）
 2. 103号土坑（北から）
 3. 104号土坑（東から）
- 図版17
1. 105号土坑（北東から）
 2. 106号土坑（南東から）
 3. 107号土坑（北から）
- 図版18
1. 108号土坑（北西から）
 2. 109号土坑（北西から）
 3. 110号土坑（西から）
- 図版19
1. 111号土坑（北西から）
 2. 112号土坑（西から）
 3. 113号土坑（東から）
- 図版20
1. 114号土坑（北東から）
 2. 115号土坑（北西から）
 3. 116号土坑（北から）
- 図版21
1. 117号土坑（北から）
 2. 118号土坑（西から）
 3. 119号土坑（南西から）
- 図版22
1. 120号土坑（北東から）
 2. 121号土坑（北東から）
 3. 122号土坑（南西から）
- 図版23
1. 123号土坑（東から）
 2. 124号土坑（西から）
 3. 125号土坑（西から）
- 図版24
1. 126号土坑（西から）

2. 127号土坑（西から）
3. 128号土坑（東から）
- 図版25 1. 129号土坑（北から）
2. 130号土坑（西から）
3. 131号土坑（西から）
- 図版26 1. 132号土坑（北西から）
2. 134号土坑（北西から）
3. 135号土坑（東から）
- 図版27 1. 136号土坑（南東から）
2. 137号土坑（東から）
3. 137号土坑土層（東から）
- 図版28 1. 138号土坑（南から）
2. 139号土坑（西から）
3. 140号土坑（東から）
- 図版29 1. 141号土坑（北から）
2. 142号土坑（南東から）
3. 143号土坑（南東から）
- 図版30 1. 144号土坑（東から）
2. 145号土坑（西から）
3. 146号土坑（西から）
- 図版31 1. 147号土坑（東から）
2. 148号土坑（北西から）
3. 149号土坑（北西から）
- 図版32 1. 150号土坑（北から）
2. 151号土坑（南から）
3. 152号土坑（南東から）
- 図版33 1. 153号土坑（西から）
2. 154号土坑（南東から）
3. 155・156号土坑（南東から）
- 図版34 1. 1号甕棺（西から）
2. 土器溜まり1（南西から）
3. 鏡出土ピット（北西から）
- 図版35 20～25・28～30号竪穴住居跡出土土器
- 図版36 30・31・35・37～42号竪穴住居跡、94号土坑出土土器
- 図版37 43～45号竪穴住居跡、96号土坑出土土器
- 図版38 96・102・120・121・129・137号土坑出土土器
- 図版39 138・140・142・151・154号土坑、1号甕棺、土器溜まり1出土土器
- 図版40 土器溜まり1・2、A区包含層出土土器

図版41	土器溜まり2、ピット、B区包含層出土土器
図版42	A区包含層出土土器①
図版43	A区包含層出土土器②
図版44	A区包含層出土土器③
図版45	1. 出土石器① 2. 出土石器② 3. 出土石器③
図版46	1. 出土石器④ 2. 出土石器⑤ 3. 出土石器⑥
図版47	1. 出土石器⑦ 2. 出土石器⑧ 3. 出土石器⑨
図版48	1. 出土土製品 2. 出土鉄製品 3. 出土玉類

挿図目次

第1図	九州新幹線位置図 (1/500,000)	2
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6
第3図	発掘調査区周辺地形図 (1/2,000)	8
第4図	基本土層図 (3次調査A区) (1/40)	9
第5図	A区遺構配置図 (1/200)	折込
第6図	B～D区遺構配置図 (1/200)	11
第7図	18号竪穴住居跡、21号竪穴住居跡実測図 (18号は1/60、21号は1/40)	13
第8図	18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	14
第9図	19・20・22号竪穴住居跡実測図 (1/80)	15
第10図	19号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	16
第11図	19～22号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	17
第12図	23・24号竪穴住居跡実測図 (1/60)	18
第13図	21・23号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	19
第14図	24号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	20
第15図	25・26号竪穴住居跡実測図 (1/60)	22
第16図	27・28号竪穴住居跡実測図 (1/60)	23
第17図	25～28号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	24
第18図	29・30・32号竪穴住居跡実測図 (1/60)	25
第19図	29・30号竪穴住居跡出土土器実測図 (20は1/3、他は1/4)	27

第20図	31・33号竪穴住居跡実測図 (1/60)	29
第21図	31～33号竪穴住居跡出土土器実測図 (21・22は1/3、他は1/4)	30
第22図	34・35号竪穴住居跡実測図 (1/60)	31
第23図	34・35号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	32
第24図	36・37号竪穴住居跡実測図 (1/60)	33
第25図	36号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	34
第26図	37号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)	35
第27図	37号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)	36
第28図	38・39号竪穴住居跡実測図 (1/60)	37
第29図	38・39号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)	38
第30図	38・39号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)	39
第31図	38・39号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/4)	40
第32図	40・41号竪穴住居跡実測図 (1/60)	42
第33図	40・41号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)	43
第34図	40・41号竪穴住居跡出土土器実測図② (26・27は1/3、他は1/4)	44
第35図	42～44号竪穴住居跡実測図 (1/60)	45
第36図	42号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)	46
第37図	42号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)	47
第38図	43号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	48
第39図	44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	49
第40図	45・46号竪穴住居跡実測図 (1/60)	50
第41図	45号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	51
第42図	93～96号土坑実測図 (1/30)	52
第43図	93～95号土坑出土土器実測図 (4～7・14は1/4、他は1/3)	53
第44図	96号土坑出土土器実測図 (1/3)	54
第45図	97～100号土坑実測図 (100号は1/40、その他は1/30)	56
第46図	97～100号土坑出土土器実測図 (1/4)	57
第47図	102～107号土坑実測図 (1/30)	59
第48図	108～112・114号土坑実測図 (1/30)	60
第49図	101～105、107～110号土坑出土土器実測図 (11、12、15は1/3、他は1/4)	61
第50図	113・115～118号土坑実測図 (1/30)	64
第51図	112・114・116～119号土坑出土土器実測図 (1/4)	65
第52図	119～123号土坑実測図 (1/30)	67
第53図	120・121号土坑出土土器実測図 (1/4)	68
第54図	124～128号土坑実測図 (1/30)	70
第55図	129～134号土坑実測図 (1/30)	72
第56図	122～125、128～134号土坑出土土器実測図 (16・17は1/3、他は1/4)	73
第57図	135～138号土坑実測図 (138号は1/40、その他は1/30)	76

第58図	135・136号土坑出土土器実測図 (1/4)	77
第59図	137号土坑出土土器実測図 (23・24は1/3、他は1/4)	78
第60図	139～143号土坑実測図 (1/30)	80
第61図	138～142号土坑出土土器実測図 (3～7、15～28は1/3、他は1/4)	81
第62図	144～149号土坑実測図 (1/30)	83
第63図	150～153号土坑実測図 (1/30)	85
第64図	144～154号土坑出土土器実測図 (1/4)	86
第65図	154～156号土坑実測図 (1/30)	87
第66図	155・156号土坑出土土器実測図 (1/4)	88
第67図	土器溜まり、甕棺、鏡出土ピット実測図 (ピットは1/20、その他は1/30)	89
第68図	1号甕棺実測図 (1/8)	90
第69図	土器溜まり1出土土器実測図① (1・2は1/6、他は1/4)	91
第70図	土器溜まり1出土土器実測図② (1/4)	92
第71図	土器溜まり2出土土器実測図① (1・2は1/6、他は1/4)	93
第72図	土器溜まり2出土土器実測図② (1/4)	94
第73図	土器溜まり2出土土器実測図③ (1/4)	95
第74図	ピット出土土器実測図 (1～20は1/4、21～26は1/3)	96
第75図	B区包含層出土土器実測図 (1～8は1/4、9～29は1/3)	97
第76図	A区包含層出土土器実測図① (1/4)	98
第77図	A区包含層出土土器実測図② (1/4)	99
第78図	A区包含層出土土器実測図③ (1/4)	100
第79図	A区包含層出土土器実測図④ (1/4)	101
第80図	A区包含層出土土器実測図⑤ (1/4)	102
第81図	A区包含層出土土器実測図⑥ (1/4)	103
第82図	A区包含層出土土器実測図⑦ (1/4)	104
第83図	A区包含層出土土器実測図⑧ (1/4)	106
第84図	A区包含層出土土器実測図⑨ (1/3)	107
第85図	A区包含層出土土器実測図⑩ (1/3)	108
第86図	出土石器実測図① (2/3)	110
第87図	出土石器実測図② (33～37は2/3、他は1/2)	111
第88図	出土石器実測図③ (1/2)	112
第89図	出土石器実測図④ (52～58は1/2、その他は1/3)	113
第90図	出土石器実測図⑤ (1/3)	114
第91図	出土土製品、鉄製品、玉類、小型仿製鏡実測図 (1～20は1/2、21～30は1/3)	116

表目次

第1表	出土石器觀察表	115
第2表	出土土製品、鉄製品、玉類、小型仿製鏡觀察表	117

I. はじめに

1. 調査の経緯

九州新幹線は国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道で、博多から船小屋、八代を經由し鹿児島に至る総延長257kmの路線である。このうち新八代―鹿児島中央間については既に平成16年3月13日に部分開業したが、九州新幹線の全線開業は社会、経済、文化活動を活性化し、新たな産業の立地、観光産業の振興等に寄与するものとして大いに期待されるところである。

九州新幹線全区間のうち船小屋～新八代間については、平成8年12月25日の政府与党合意により、新規着工区間として示され、平成10年3月12日に工事実施計画が認可され、同年3月21日に建設工事が起工された。

福岡県は平成10年4月8日に企画振興部交通対策課のもと、関係部局で九州新幹線鹿児島ルート情報連絡会議を設置し、鹿児島ルートに関する情報等についての連絡調整を行うこととした。この会議は同年4月22日に行われた後、同年8月27日、平成11年4月26日、平成12年5月16日、平成13年1月23日、平成13年6月13日に開催された。文化財についての取り扱いについては平成10年6月18日付で日本鉄道建設公団九州新幹線建設局（当時）から福岡県教育委員会に対し、九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財の有無及び取扱についての照会がなされた。これに対し平成10年7月13日付で、周知の遺跡の範囲を示し、用地買収が完了した時点で、現地の踏査及び全線の試掘調査が必要である旨を回答した。

工事の具体的な計画については平成10年8月27日に情報連絡会議にて、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局から示され、測量、ボーリング調査、弾性波探査による地質調査、水利用調査、今後の工事発注時期等についての説明を受けた。実際の工事は高田トンネル部分の南側で、文化財が存在しないことを確認したうえで、平成10年12月19日に着工した。

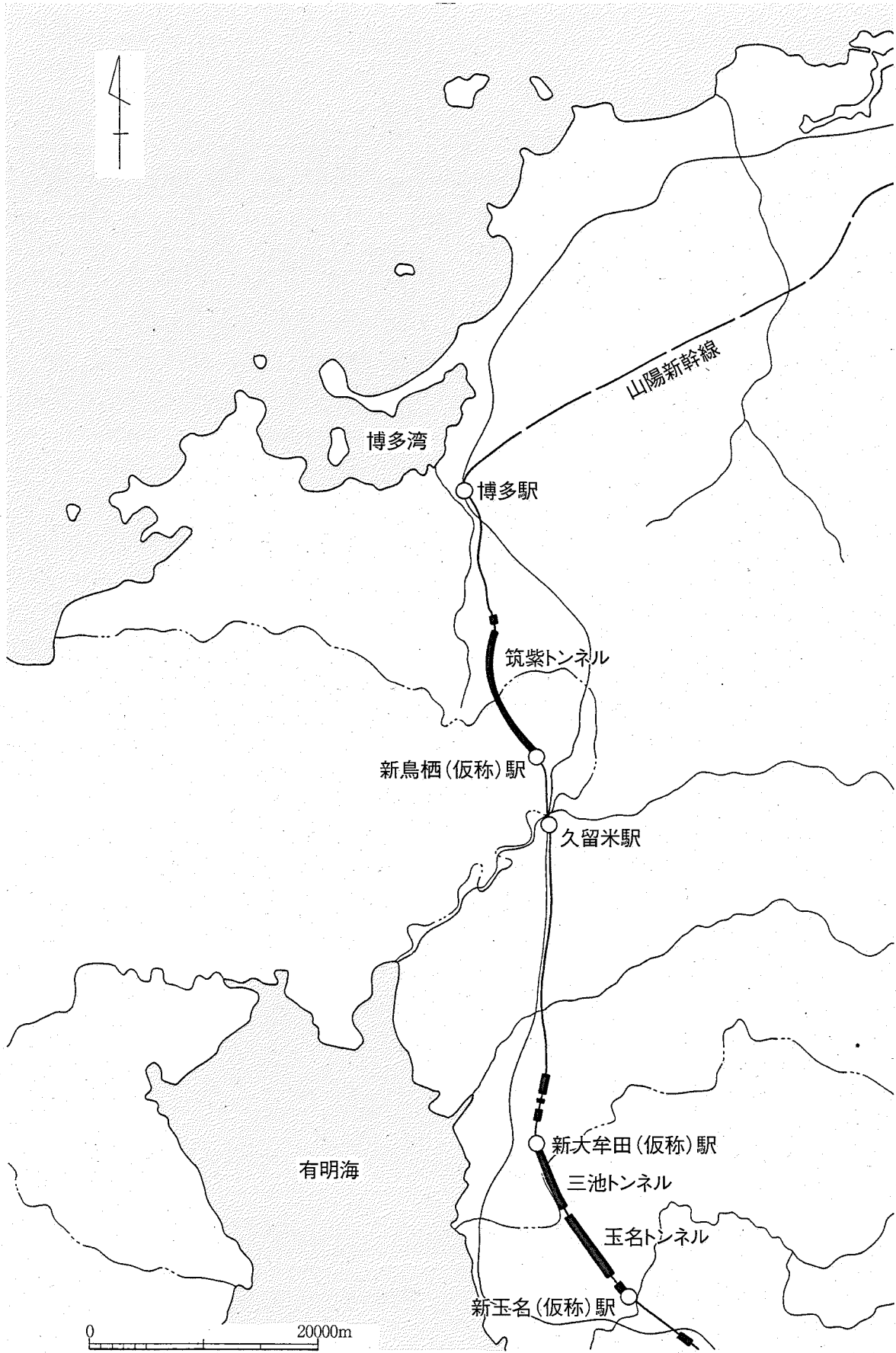
船小屋～新八代間のうち、用地買収の進んでいた高田トンネル北側出入口～高田町散田地区については、平成13年9月11日付で、日本鉄道建設公団より当該地の文化財試掘確認調査についての依頼があり、これを受けて平成13年9月28日（一部は12月18・19日）に福岡県教育委員会（文化財保護課）が現地の試掘調査を行い、高田町大字海津字横馬場の地については本調査の必要がある旨を回答した。

この地についての実際の本調査は、平成13年11月20日～平成14年3月8日に「海津横馬場遺跡」として第1次調査を行った。第1次調査は廃土置き場の確保等の事情により、約400㎡の範囲で、遺物包含層を切り込む遺構の調査及び、包含層の掘削のみの調査で終了した。

第2次調査は平成14年6月3日～平成15年3月14日に行い、第1次調査区の下層の調査及び、隣接する北側の範囲にまで調査区を延ばして調査を行った。

第3次調査は平成15年4月18日～平成16年3月10日に、第1・2次調査区の南から飯江川の堤防に至るまでの箇所、及び第1・2次調査区の北側、また一部の工事用道路部分の調査を行った。

第1・2次調査分についての報告は、既に平成16年度事業として『海津横馬場遺跡Ⅰ』を刊行している。今回は第3次調査分についての報告を行う。



第1図 九州新幹線位置図 (1/500,000)

2. 調査の組織

発掘調査から本報告書作成にいたる間の関係者は以下のとおり。

独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部

九州新幹線建設局（旧日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局）

	平成15年度	平成16年度	平成17年度
局長	高山 博文	高山 博文 (~H16.11) 北川 隆 (H16.12~)	北川 隆
次長	伊神 英二	伊神 英二	関根 茂
用地第一課長	関根 茂	関根 茂 (~H16.8) 田中 等 (H16.9~)	田中 等
用地第一課長課長補佐	有屋田 幸郎 (~H15.7) 木佐一 正和 (H15.7~)	木佐一 正和	木佐一 正和
用地第一課 担当係長	入江 万久	入江 万久	入江 万久
工事第三課長	石徳 博行	石徳 博行 (~H16.9) 北原 太一 (H16.9~)	北原 太一
工事第三課長補佐	立分 雅史 上野 登	立分 雅史 上野 登	上野 登
大牟田鉄道建設所長	松室 哲彦 (~H15.8) 渡邊 修 (H15.9~)	渡邊 修	長谷川 正明
大牟田鉄道建設所担当副所長	武藤 和久 (~H15.8) 赤坂 勝徳 (H15.9~)	赤坂 勝徳	加藤 彰

福岡県教育委員会

	平成15年度	平成16年度	平成17年度
総括			
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	三瓶 寧夫	清水 圭輔	清水 圭輔
総務部部長	清水 圭輔	中原 一憲	中原 一憲
文化財保護課長	井上 裕弘	井上 裕弘	久芳 昭文
副課長			川述 昭人
参事兼課長技術補佐	川述 昭人 木下 修	川述 昭人 木下 修	木下 修
参事兼課長補佐	久芳 昭文	安川 正郷	安川 正郷
参事補佐兼調査第二係長	中間研志	中間 研志	飛野 博文
庶務			
参事補佐兼管理係長	古賀 敏生	稲尾 茂	稲尾 茂
事務主査	宮崎 志行	宮崎 志行	石橋 伸二
管理係主任主事	秦 俊二 末竹 元	石橋 伸二 末竹 元	末竹 元 湖上 大輔
調査・報告書作成			
主任技師		進村 真之 (報告書作成)	大庭 孝夫 (整理担当)
		宮地 聡一郎 (報告書作成)	
技師	坂元 雄紀 (整理担当)	坂元 雄紀 (整理担当)	
アジア文化交流センター			
主任技師			宮地 聡一郎 (報告書作成)

Ⅱ．位置と環境

海津横馬場遺跡は福岡県三池郡高田町大字海津字横馬場に所在する。遺跡は飯江川右岸の扇状台地が西側に突出した先端付近の標高約9mに位置し、至近距離に位置する竹海校遺跡、竹海校東遺跡等を含めた遺跡群の一角をなすと考えられる。この扇状台地は筑肥山地より流れ出る飯江川や大根川によって形成され、現在は主に果樹園としての利用がなされている。北側の低地部との境は段丘状となり、海津横馬場遺跡付近ではその比高差は約3mである。この扇状台地上には多くの遺跡が知られ、上記の竹海校遺跡や竹海校東遺跡の他、満願寺遺跡、岩畑遺跡、南本村遺跡でも弥生時代の遺構や遺物が確認されていることから、この扇状台地の西側突出部の広い範囲に遺跡群の広がりが見込まれる。海津横馬場遺跡はこの中にあって西に向かって標高を減じた箇所に占地している。

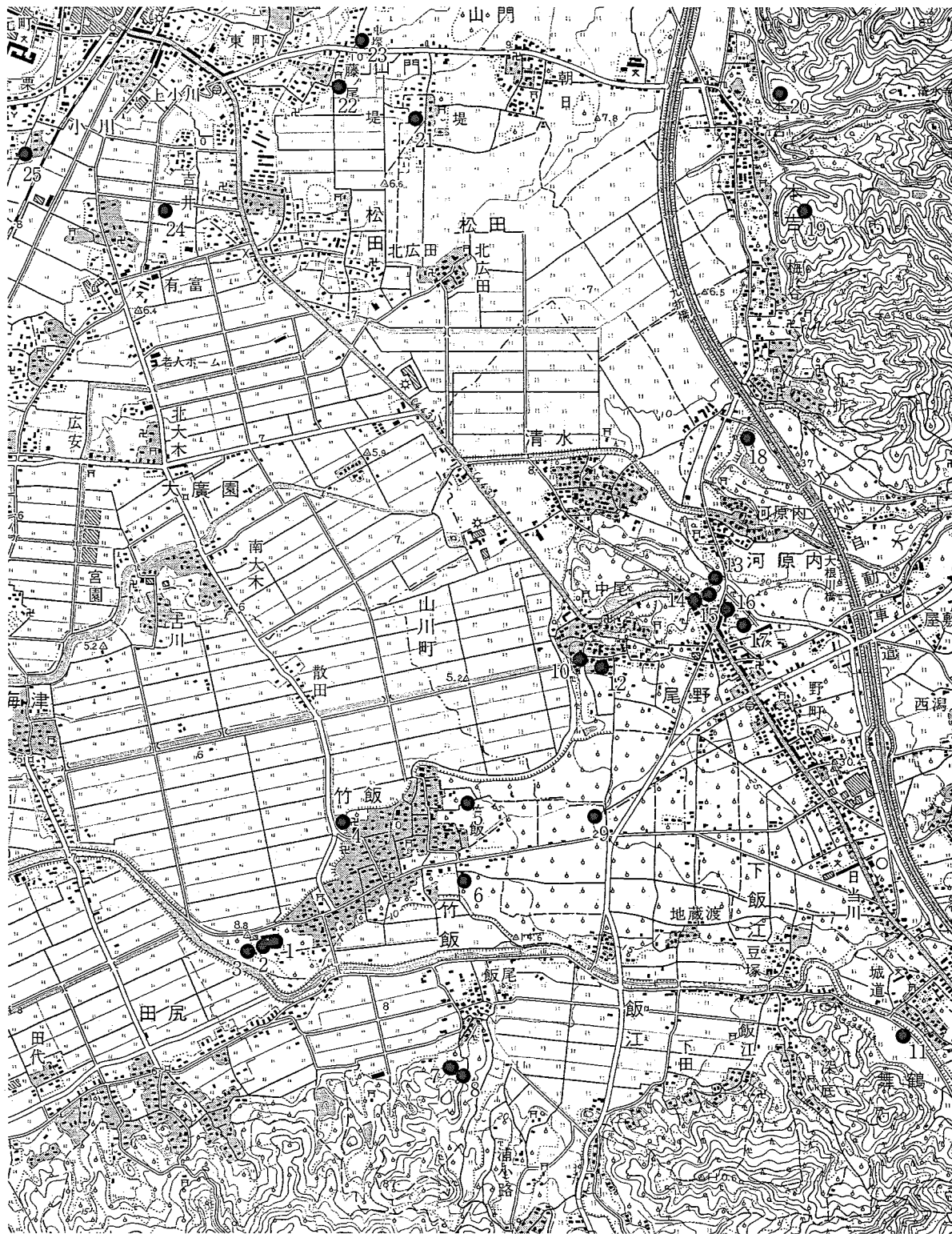
付近の遺跡で縄文時代の遺跡は点的にしか存在せず、また遺物の出土量も少ないことから詳細は不明であるが、山川町の前畑遺跡からは早期の押型文土器や石器が比較的多く出土している⁽¹⁾。その他同じく山川町の山ノ上遺跡では、縄文晩期終末（弥生時代早期）の土器棺墓群がまとまって調査されており注目される⁽²⁾。

弥生時代になると遺跡数は飛躍的に増加し、瀬高町内では沖積平野の中の微高地上に遺跡が展開する。鉢田遺跡では弥生時代中期の甕棺墓群が調査され、その中の特定墓群のみに細形銅剣の破片や磨製石鏃、紡錘車がそれぞれ副葬されていた。後期のもものでは小型仿製鏡が出土している⁽³⁾。また、藤の尾垣添遺跡でも中期の甕棺墓群や後期の竪穴住居跡が確認されており、甕棺墓からは1点翡翠製の勾玉が出土している⁽⁴⁾。至近距離にある車塚古墳の周囲は甕棺墓群として知られており、車塚古墳の傍の畑から1面の銅鏡が出土したとされ⁽⁵⁾、甕棺墓の副葬品の可能性もある。その他、上枇杷遺跡からは中期初頭～前半の貯蔵穴群や、中期後半の祭祀遺構が調査されている⁽⁶⁾。また、これらの遺跡を望む筑肥山地西麓裾部の標高約50mに位置する三船山遺跡では、弥生時代中期後半～後期前半を主体とする集落跡が調査されており⁽⁷⁾、その立地の特異性も注目される場所である。

高田町では海津横馬場遺跡の傍を流れる飯江川の上流約2.5kmの城道遺跡で中細形銅剣が発見されており⁽⁸⁾、遺構は明確でないものの飯江川の形成した扇状台地上の遺跡群と密接な関係があるものと思われる。

古墳時代では飯江川の扇状台地北側先端部に5世紀初頭の面の上1号墳⁽⁹⁾、5世紀末にはクワンス塚⁽¹⁰⁾、赤坂1・2号墳⁽¹¹⁾、中尾3号墳が、6世紀前半に九折大塚古墳、中尾2号墳、6世紀後半に面の上2号墳⁽¹²⁾と次々に古墳が築造される。この中でクワンス塚は全長約65m程の帆立貝タイプの墳形で、赤坂1号墳と九折大塚古墳（全長約50m）は前方後円墳である。古墳の立地する扇状台地上に古墳時代の集落跡のまとまった調査例はないが、これだけの規模の首長墓と目される古墳が狭い範囲に築かれる背景には興味深いものがある。

瀬高町では5世紀代に先述の車塚古墳が築かれる。かなりの改変を受けているが、前方後円墳であり、全長は約55mである。内部構造等は不明であり、詳細は不明なものかつ銅鏡が2面出土したとされる。また沖積微高地に立地する堤古墳群はかなり破壊されているものの、横穴式石室を主体とする群集墳と考えられる⁽¹³⁾。6世紀後半には筑肥山地西麓裾部の標高約60mの箇所に、横穴式石室内に石棚を持つ成合寺谷1号墳が築かれる。石室内部には三角文や菱形文が描かれ、装飾古墳として注目される⁽¹⁴⁾。集落跡では藤の尾垣添遺跡で古墳時代前期～中期の住居跡が多数調査されている⁽¹⁵⁾。



- | | | | | |
|------------|------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 海津横馬場遺跡 | 6. 南本村遺跡 | 11. 城道遺跡 | 16. 赤坂古墳群 | 21. 堤古墳群 |
| 2. 竹海校東遺跡 | 7. 飯尾1・2号墳 | 12. 中尾古墳群 | 17. クワンス塚古墳 | 22. 藤の尾垣添遺跡 |
| 3. 竹海遺跡 | 8. 飯尾横穴墓 | 13. 山ノ上遺跡 | 18. 九折大塚古墳 | 23. 車塚古墳 |
| 4. 満願寺遺跡 | 9. 長者原遺跡 | 14. 面の上1号墳 | 19. 成合寺谷1号墳 | 24. 上枇杷遺跡 |
| 5. 岩畑遺跡 | 10. 前畑遺跡 | 15. 面の上2号墳 | 20. 三船山遺跡 | 25. 鉦田遺跡 |

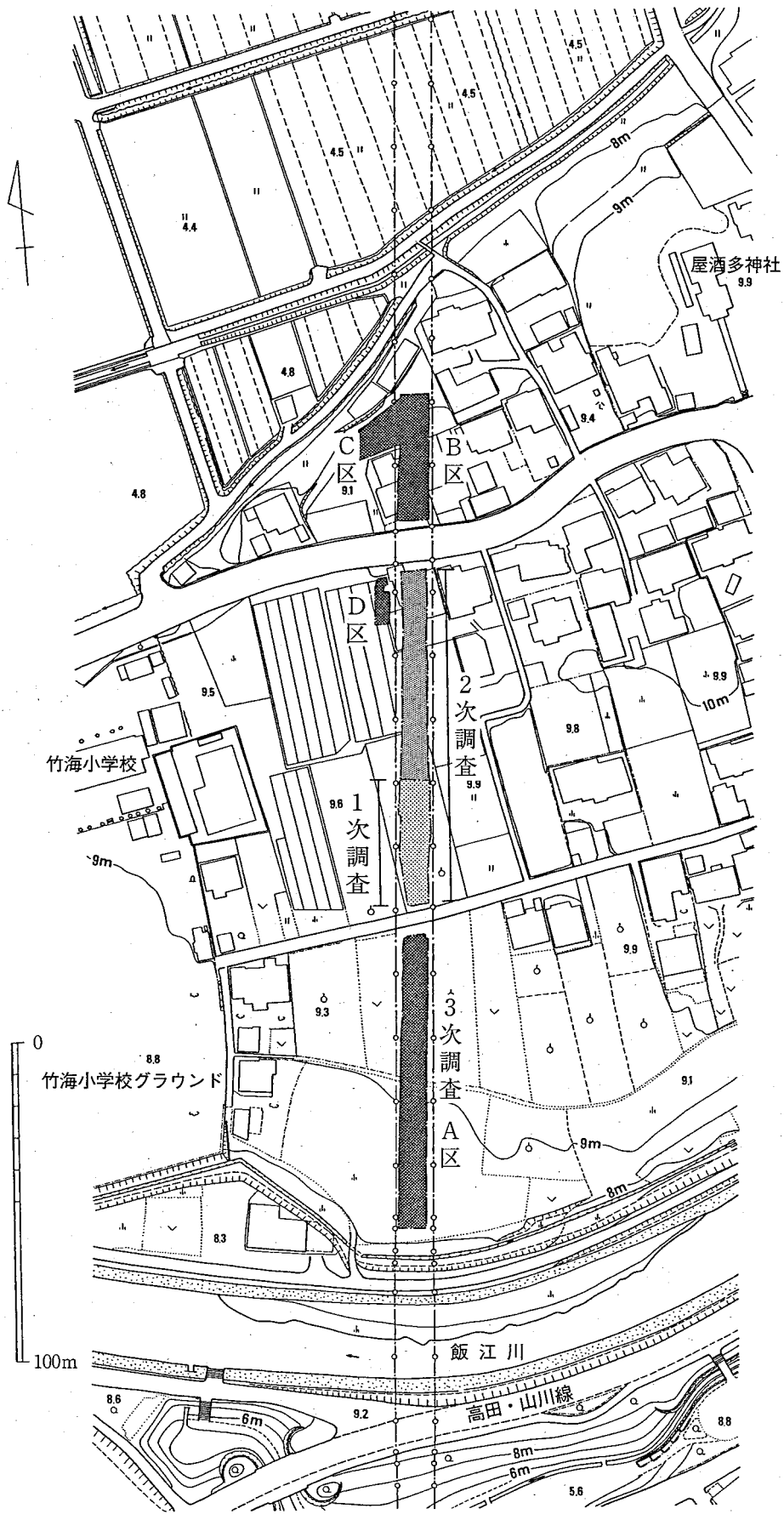
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

奈良時代では、ここ海津の地に狩路駅を比定する説も存在する。また、この狩路の長者とされる牡丹長者の伝説も残り、交通の要衝として栄えた往時をしのばせる。付近の遺跡では瀬高町の御二田遺跡から円面硯と石帯が出土し注目される⁹⁶。また鉾田遺跡では奈良時代～平安時代にかけての竪穴住居跡や、中世の井戸、溝などが確認されている⁹⁷。山川町では山ノ上遺跡から風字硯の他、「国前」、「田前主帳」の刻書土器が出土している⁹⁸。

その他、時代は不詳ながら、山川町野町十三塚では13基の墳丘が存在し、一部調査が行われ盛土が確認されている⁹⁹。

註

- (1) 鈴木忠司1984『清水山遺跡群の調査』(財)古代学協会
- (2) 東竜雄・新原正典2002『山ノ上遺跡』(山川町文化財調査報告書第4集)山川町教育委員会
- (3) 鏡山猛1972『九州考古学論攷』吉川弘文館
- (4) 田中康信1988『藤の尾垣添遺跡』(瀬高町文化財調査報告書第4集)瀬高町教育委員会
- (5) 渡辺村尾1915『耶馬臺国探見紀』
- (6) 川述昭人1988『上枇杷・金栗遺跡』(福岡県文化財調査報告書第82集)福岡県教育委員会
- (7) 川述昭人1985『観音丸遺跡・向野古墳群・三船山遺跡』(福岡県文化財調査報告書第71集)福岡県教育委員会
- (8) 猿渡真弓1999「福岡県三池郡高田町出土の中細形銅剣」『九州考古学』第75号
- (9) 佐々木隆彦1995「山川町・面の上1号墳の再検討」『九州歴史資料館研究論集』20
- (10) 小田和利2001『山ノ上遺跡・赤坂古墳群』(福岡県文化財調査報告書第164集)福岡県教育委員会
- (11) 註9に同じ。
- (12) 佐々木隆彦1993『面の上2号古墳』(山川町文化財調査報告書第1集)山川町教育委員会
- (13) 村山健治1967『堤古墳群』筑後地区郷土研究会・邪馬台郷土史会
- (14) 田中康信2002『成合寺谷1号墳』(瀬高町文化財調査報告書第16集)瀬高町教育委員会
三池賢一・石山勲・小川泰樹ほか2004『成合寺谷1号墳』(瀬高町文化財調査報告書第17集)瀬高町教育委員会
- (15) 田中康信1989『藤の尾垣添遺跡Ⅱ』(瀬高町文化財調査報告書第5集)瀬高町教育委員会
- (16) 田中康信1995『御二田遺跡』(瀬高町文化財調査報告書第12集)瀬高町教育委員会
- (17) 註3に同じ。
- (18) 註2、註10文献
- (19) 伊崎俊秋1995『野町十三塚遺跡』(山川町文化財調査報告書第1集)山川町教育委員会



第3図 発掘調査区周辺地形図 (1/2,000)

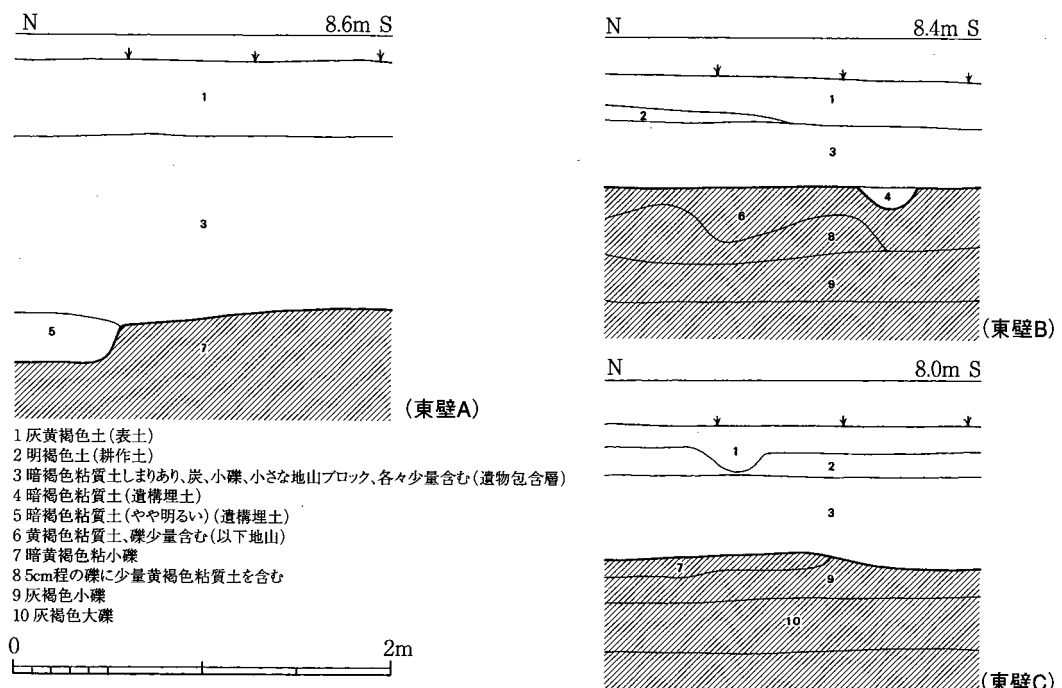
Ⅲ. 発掘調査の記録

1. 基本層序 (図版3、第4図)

海津横馬場遺跡はⅡの位置と環境の章で述べたように、飯江川が形成した扇状台地上に立地する。従って真の意味で地山と呼べる土層は、拳大ほどの円礫の層が該当すると思われるが、実際にはこの円礫層の上に橙色～黄褐色のきれいな粘質土層（6層）が堆積しており、この土層中からは全く遺物を確認することができなかった。この粘質土層の成因は今回の調査では明らかにできなかったが、上記の状況から一応地山と考え調査を進めた。

第1層は灰黄褐色土の表土、第2層は明褐色土の耕作土である。第3層は暗褐色粘質土で、炭や小さな地山ブロックを各々少量含み非常に堅くしまっている。この土層中には多量の遺物が含まれており、報告で包含層と呼ぶ土層はこの層を指す。当初は地山ブロック等を含むことから埋め戻し土と想定されたこと、及びその土質のしまり具合から、整地した層ではないかとも考えられたが、隣接する竹海校東遺跡の調査でもこの土層が確認でき、また周囲の畑の開墾時にも一部確認されていることから、相当な広がりをもつことが確実であり、建物等を建てる際の整地とは考えにくい。遺構の一部はこの第3層暗褐色粘質土層を切り込む格好で存在する。第1次調査で確認した遺構、及び第2・3次調査時の上層遺構がそれに該当する。この第3層からは弥生時代から中世までの土器が出土するが、その色調から遺構の埋土との峻別が困難なこともあり、相当数の遺構がこの層を切り込んでいると考えられる。第1次調査でこの第3層を切り込む格好で古墳時代前期の遺構が存在したことから、第3層の形成時期を弥生時代と想定した。しかし今回の第3次調査では弥生時代中期後半に比定できる1号甕棺が上層より出土しており、包含層の性格を見直す必要性が出てきた。

第6層は先述した黄褐色粘質土層の地山である。第2・3次調査時のほとんどの遺構はこの第6層上面で確認できたが、第3層が暗褐色の色調を呈し遺構の埋土との峻別が困難であったこと、上述の甕棺よりも新しい堅穴住居跡が存在することを考えると、第3層から切り込んでいる遺構もかなり多いと思われる。



第4図 基本土層図 (3次調査A区) (1/40)

2. 第3次調査の内容

(1) 概要

第3次調査は第1・2次調査区の南側（A区）及び、北側（B区）、及び工事用道路によって削り取られる予定の2カ所（C・D区）を含む計約1,300㎡を対象とした。

A区では上下2層にわたって遺構面が確認されたが、実際、上層の遺構（第3層上面にて検出）は調査区北半の中央付近のみで確認するにとどまった。上層遺構の下には分厚く遺物包含層（第3層）が存在し、その下の地山面にて下層遺構を検出した。しかし先述のとおり包含層は遺構埋土との峻別が容易でなく、本来は遺物包含層を切り込む遺構も多いと思われる。検出遺構は弥生時代の竪穴住居跡、土坑、ピット等だが圧倒的に下層の遺構が多く、上層の遺構のみ文中で、上層での検出であることを明記する。

B区は表土直下で地山面を確認し、遺構を検出した。かなり削られているが古代～中世を中心としたピット及び土坑を多数検出している。B区の北側は試掘調査の結果、遺構の存在が見られなかったため調査区からはずしている。

C区は地形が北西に落ちる箇所にあたり、斜面部分に遺構はほとんど見られない。

D区は第2次調査区の隣接地で、A区同様、分厚い遺物包含層の下の地山面から弥生時代の方形土坑を多数確認した。

特にA・D区においては遺構密度が極めて高く、また埋土はほとんどの遺構が暗褐色粘質土であり、包含層との区別、及び遺構同士の切りあい関係等の確認ができなかった場面が多々存在した。

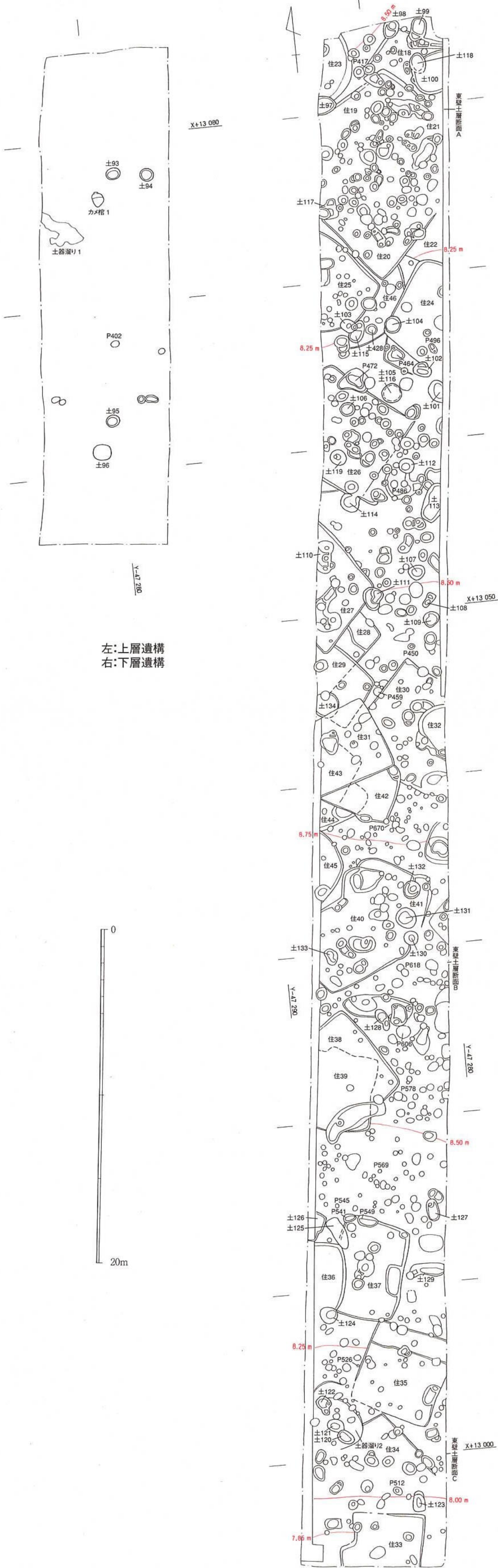
調査の経過は以下のとおりである。

平成15年

- 4月18日 プレハブ等設営。機材搬入。
- 4月22日 A区調査着手。
- 5月27日 上層遺構の全景写真撮影を行った後、包含層の掘削にかかる。
- 6月9日 包含層掘削の後、遺構の検出にかかる。
- 7月30日 小型仿製鏡を検出。精査を行い、ピットに伴うことを確認。
- 9月19日 A区北側の空中写真撮影を行う。
- 9月27日 高田町教育委員会主催「ふるさと探検隊」開催。小学生40数名体験発掘に参加。
- 10月9日 A区北側の埋め戻し終了後、重機によってA区南側の掘削にかかる。
- 10月17日 A区南側の調査に着手。
- 11月13日 A区南側と併行して、B区の調査にとりかかる。
- 12月10日 A区南側と併行して、D区の調査にとりかかる。

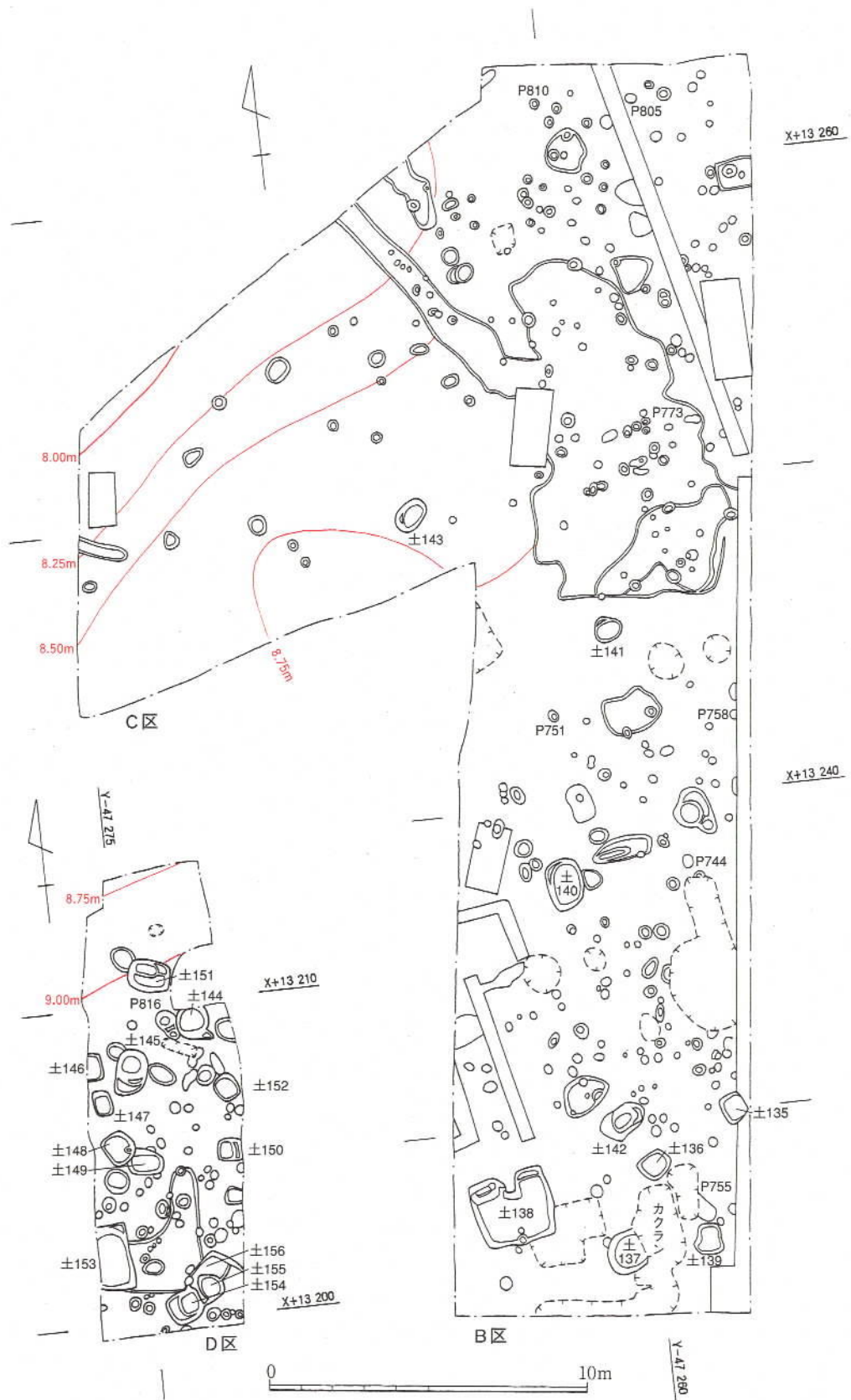
平成16年

- 1月27日 空中写真撮影を行う。
- 1月28日 記録を終え、A・B・D区の調査を終了させる。
- 3月3日 C区の調査に着手。
- 3月8日 写真撮影終了後、撤収にかかる。
- 3月10日 引渡し。



左:上層遺構
右:下層遺構

第5図 A区遺構配置図 (1/200)



第6図 B～D区遺構配置図 (1/200)

(2) 竪穴住居跡

18号竪穴住居跡 (図版3、第7図)

A区北東角に位置し、98～100、118号土坑に切られる。南側では19号竪穴住居跡に切られる。東側は調査区外に延びる。平面形態は長方形で、長軸400cm以上、短軸は南西部分で一部南壁が確認でき、360cmである。主柱穴は判然としないが、中央のピットが一つ該当すると思われ、北西―南東軸に2本柱になると思われる。北壁沿いには幅30cm程の溝状のものが存在する。

出土土器 (第8図)

1～5は甕の口縁部である。1～3は口縁外面に突帯を貼り付け、4・5は逆L字状の長い口縁部を形成する。6は浅い上げ底の甕の底部である。7は高杯で内面が大きく肥厚する。当住居跡出土土器は弥生時代中期前半のものであるが、量が少なく時期比定には慎重を期するべきであろう。

19・20・22号竪穴住居跡 (図版4、第9図)

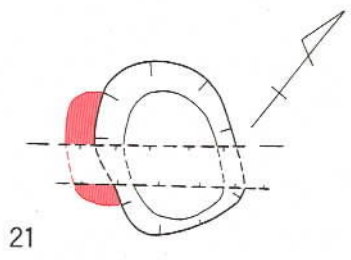
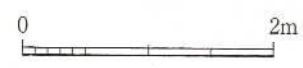
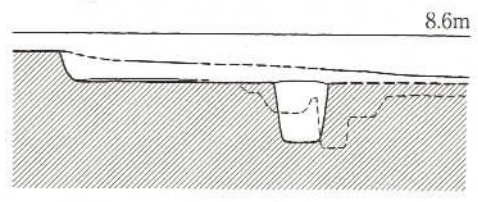
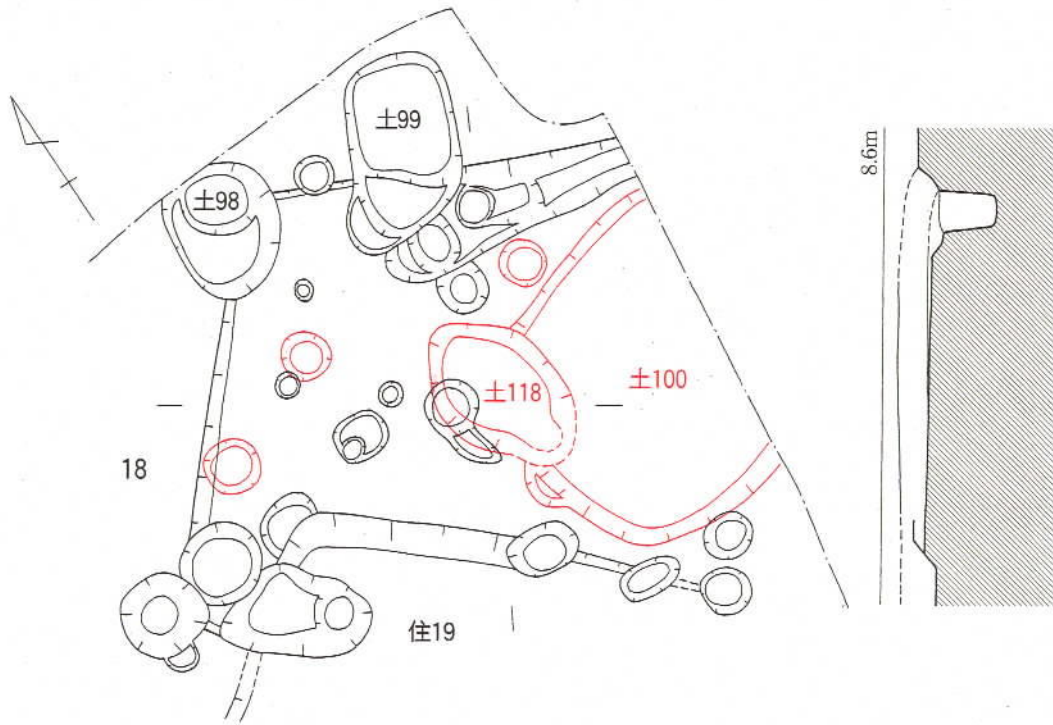
A区北部に位置する。調査時はこの付近一帯が同じ暗褐色粘質土であったため、土層観察用の畦を残しながら掘削を行ったが、結局切り合い関係を確認できなかった。おそらく方形プランの3つの住居跡が切り合っていると思われ、北側を19号、南側を20号とし、南東側の一段浅く床面が確認できた箇所を22号とした。22号竪穴住居跡は24号竪穴住居跡に切られる。19・20号は床面レベルもほとんど変わらない。各住居跡の規模は不明であり、それぞれに伴うであろう炉跡や柱穴も特定することができなかった。

出土土器 (図版35、第10・11図)

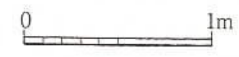
1～44は19号竪穴住居跡に帰属すると考えられる土器である。1～2は壺の口縁部である。1は口縁端部のみが短く外反する。精製でミガキ調整を行う。2は口縁端部が上方へ立ち上がる箇所欠損している。下端部も拡張し、屈曲部下に突帯を持つ。3は壺の胴～底部で、全体が摩滅している。4～7は薄い底部で、5はやや尖り気味に収める。8～30は甕の口縁部である。16・17は外面に大きな丸味を帯びた突帯を貼り付ける。18～27は逆L字状の長い口縁部を形成するが、21・24・25は端部内面も大きく突出する。29は短く外反し、端部はやや上方へ跳ね上げ気味に仕上げる。30は緩く字形に屈曲する。31～37は甕の分厚い底部で、37を除き大きく窪む。33は底面中央のみが窪む。31は広い接地面を持つ。38は鉢で口縁端部が短く外反する。39は直口口縁で、白っぽい色調の硬い仕上がりである。土師器もしくは製塩土器の可能性もある。40～42は高杯の口縁部で、内面は大きく肥厚する。43は高杯の脚部で、内面にユビオサエを施す。44は丹塗磨研の脚部で、内面はケズリ調整を行う。

45～53は20号竪穴住居跡に帰属すると考えられる土器である。45～48は甕の口縁部である。45は端部を短く折り返す。46～48は外面に大きな突帯を貼り付ける。49・50はく字形に屈曲する甕で、内面に明瞭な稜を形成する。底部は薄い平底である。50は端部にナデを施し少し窪む。51は甕の分厚い底部で、中央のみが窪む。52・53は高杯口縁部で、内面は大きく肥厚する。53は外面に暗文風にタテミガキを施す。

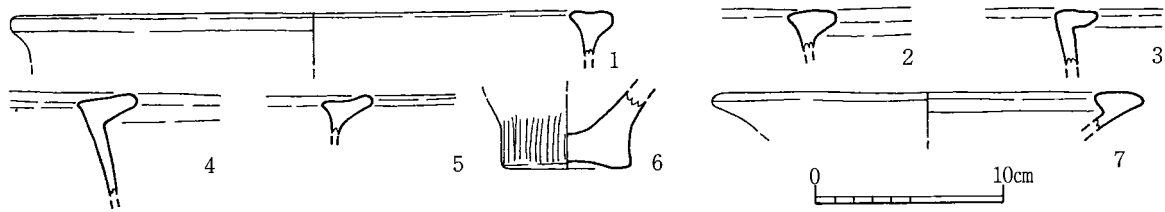
54～59は22号竪穴住居跡に帰属すると考えられる土器である。54・55は甕の口縁部である。54は外面に小さな突帯を貼り付け、胴部に1条沈線を施す。55は大きな突帯を貼り付ける。56は甕の分厚い底部で中央のみが窪む。57はやや突出気味な平底で、底面にハケ調整を行う。58は丹塗磨研鉢である。59は丹塗磨研土器の底部である。



- 1. 暗褐色粘質土 (住21埋土)
- 2. 淡黄灰色弱粘質土
- 3. 黒褐色粘質土 (炭)
- 4. 赤橙色土しまりあり (焼土)
- 5. 暗褐色粘質土 (住19埋土)



第7図 18号竪穴住居跡、21号竪穴住居炉跡実測図 (18号は1/60、21号は1/40)



第8図 18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

60~67は19~22号竪穴住居跡のいずれに属するか不明なものである。60・61は壺の底部で61はわずかに上げ底である。62は口縁外面に大きな突帯を貼り付ける甕である。63・64は甕の底部で高い上げ底になる。65は鉢で口縁内面はわずかに肥厚する。66は丹塗磨研高杯で、内面は突出する。67は器台になろうか。大きく外反しハケ調整を行う。

21号竪穴住居跡 (図版4、第7図)

A区北部に位置し、18・19号竪穴住居跡の上で確認できた。当初はプランを全く意識しておらず、18・19号竪穴住居跡を掘削している途中で完形に近い土器が多く出土するレベルが認識できたため、このレベルで注意深く精査していく過程で炉跡と思われる焼土を確認したものである。従って当住居跡は炉跡のみの確認となってしまう、住居跡のプランや規模、付施設等は確認できなかった。炉跡は楕円形プランで長径70cm、短径55cmで播り鉢状を呈し、下層の埋土は多くの炭を含む柔らかい粘質土である。床面は焼けていないが、炉跡の肩部分がよく焼けているようである。

出土土器 (図版35、第13図)

1~3は壺である。1はく字形に屈曲し、胴部は大きく張る。最大径の箇所には2条の突帯を貼り付け刻目を施す。摩滅しておりハケ調整の痕跡が残るが、本来はミガキ調整を行っていたと思われる。2も1と同様く字形に屈曲する。3はハケ調整であるが、胴部の張りが強いことから壺に含めている。胴部上半はナデによって仕上げる。5~8は甕である。5は口縁内面が大きく突出しT字状を呈する。6・7はく字形に屈曲する。7は底部が脚台状を呈し、外面にミガキ調整を行う。8は短く外反し、上下に拡張した端部に凹線を施す。胴部外面は上位に板によるナデ、下位はタテミガキを行う。内面はケズリを施す。吉備系の甕と思われる。当住居跡は弥生時代中期末~後期前半に比定できよう。

23号竪穴住居跡 (図版5、第12図)

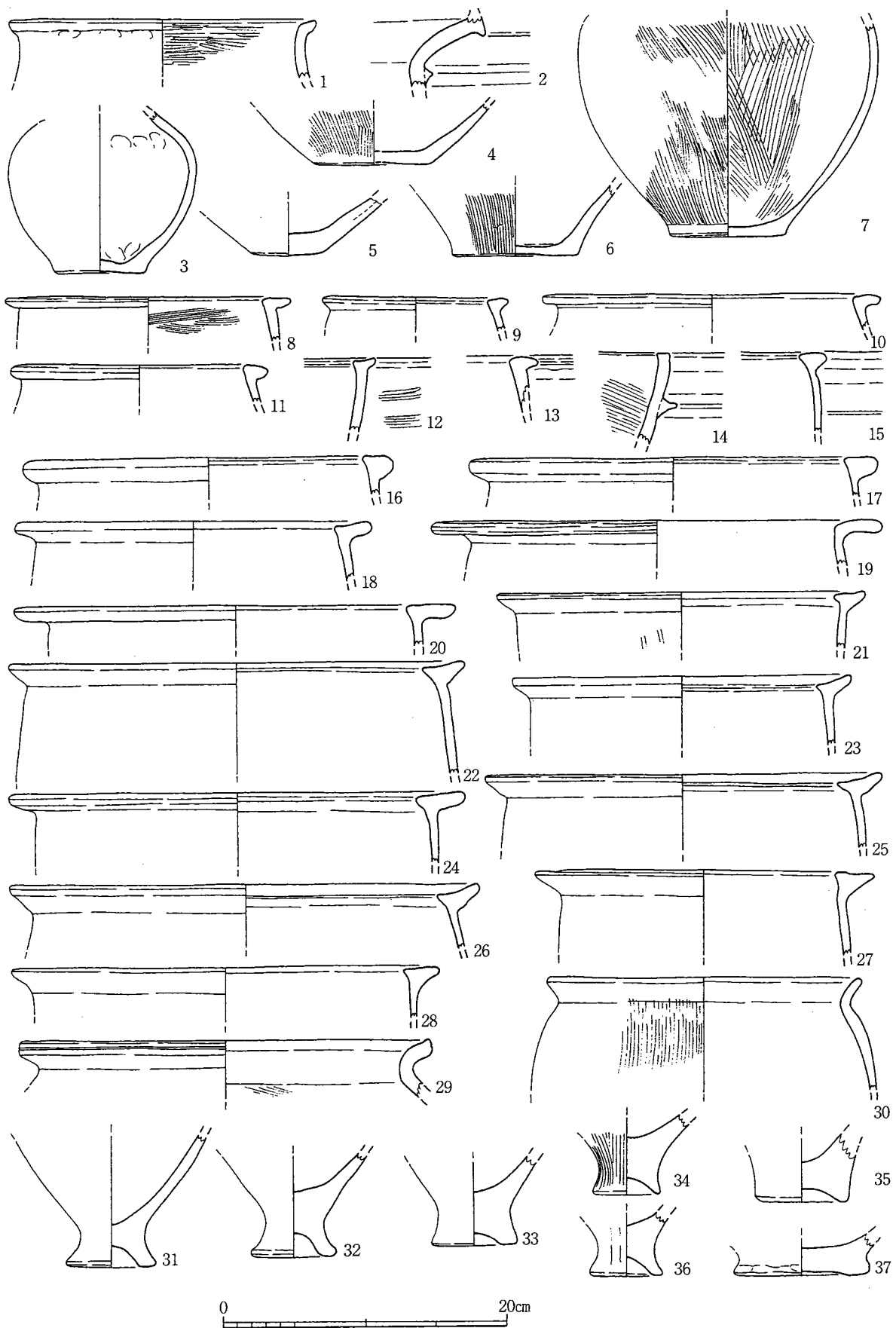
A区北西隅に位置する。南側は97号土坑に切られ、北側と西側は調査区外に延びる。平面形態は円形と思われる。規模や付施設については、調査できた面積が狭いため不明である。埋土はやや赤みのかかった粘質土である。

出土土器 (図版35、第13図)

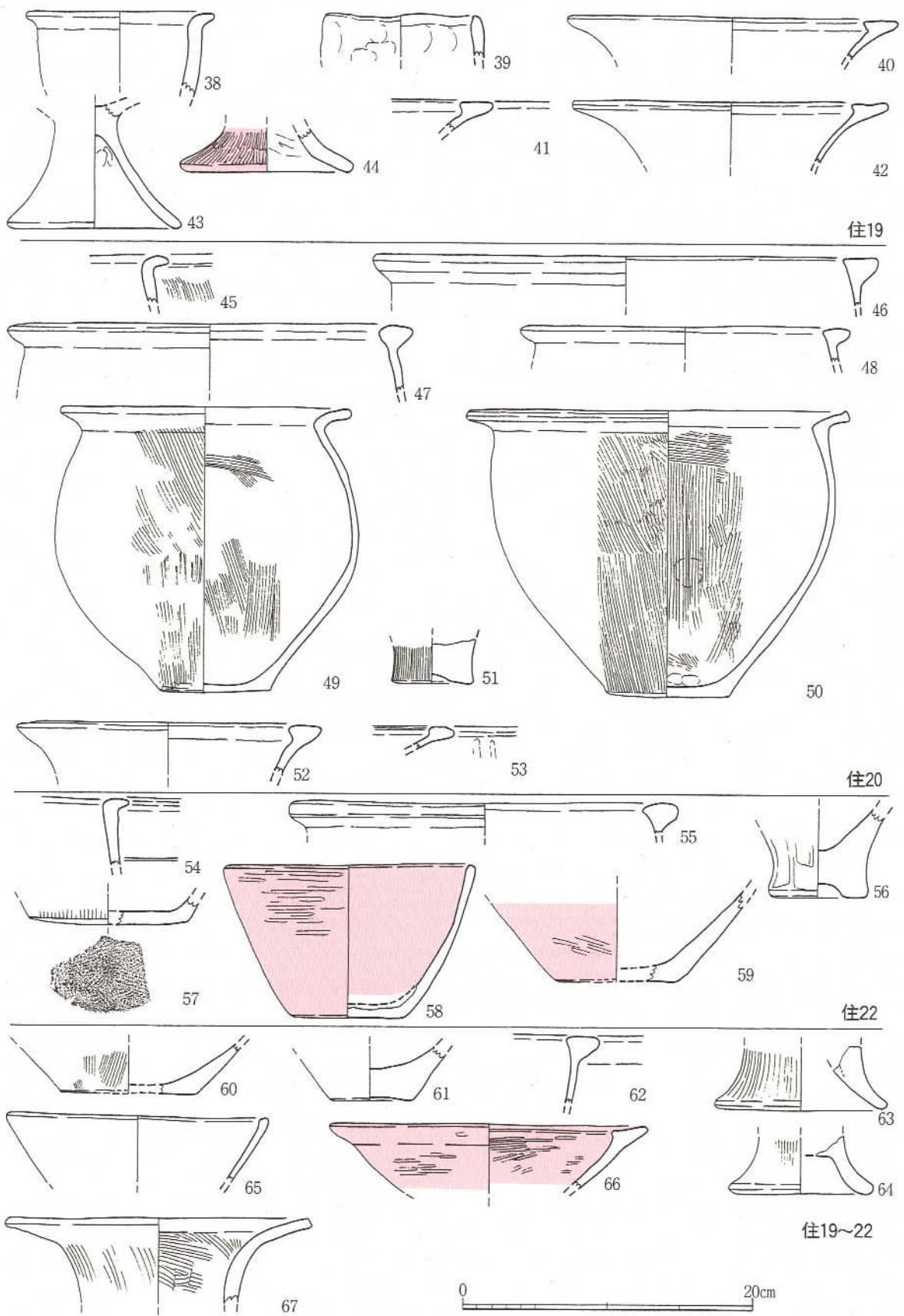
9は壺の胴部破片と思われ、大きな突帯を貼り付ける。10は広口壺で端部はナデによって窪む。11は壺の底部である。12~22は甕の口縁部で、20を除いて口縁部外面に突帯を貼り付ける。15は突帯上に刻目を施し、12・14は内面に突出する。18・21は胴部上位にも突帯を貼り付ける。20は口縁部を折り曲げていると思われ、端部は方形に収める。23~25は甕の底部で、24は中央がわずかに窪む、23は赤変が著しい。26は直口口縁の土器で内外面にハケ調整を行う。27・28は小型の鉢で、28は口縁が内



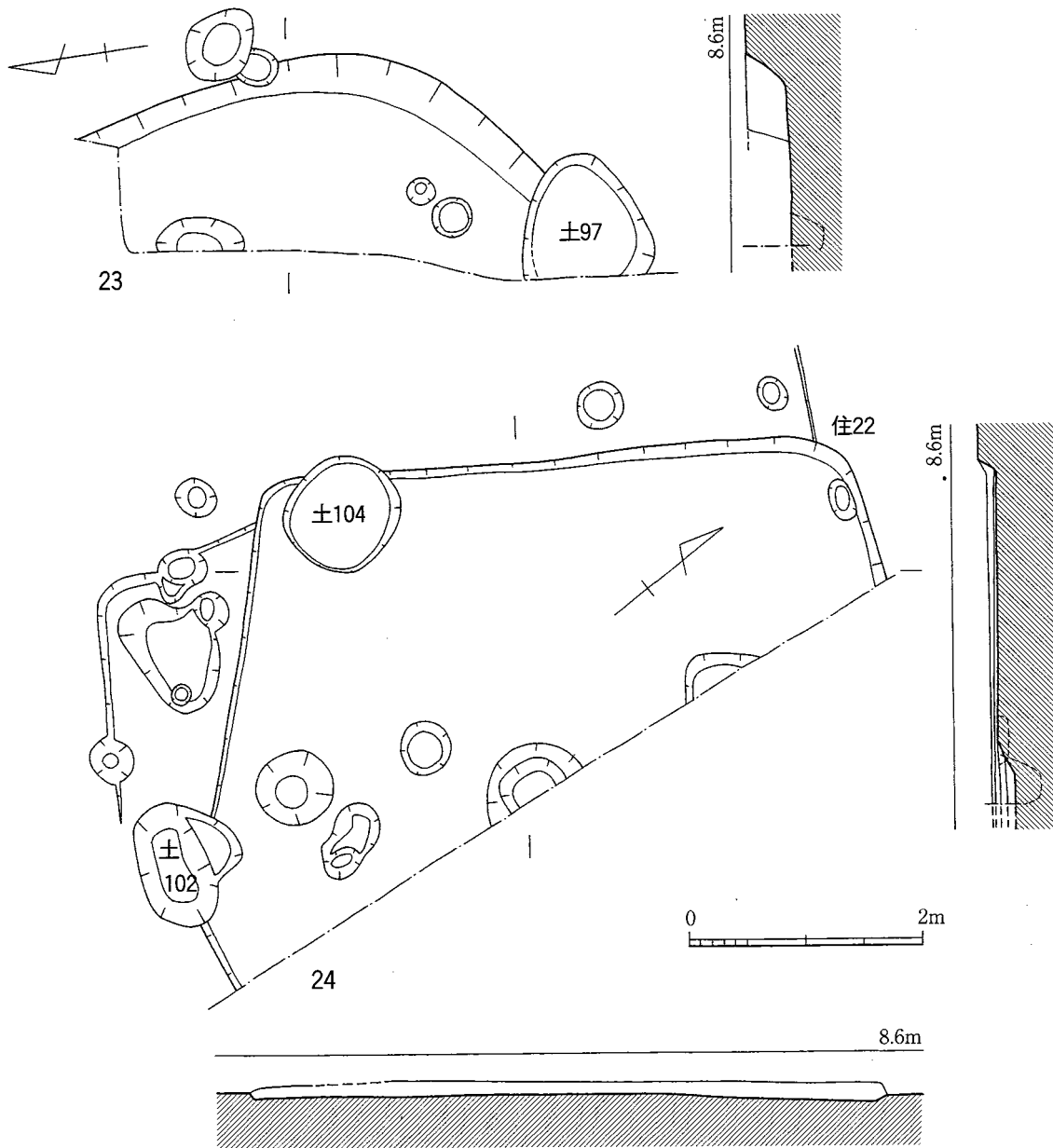
第9图 19·20·22号竖穴住居跡实测图 (1/80)



第10图 19号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/4)



第11图 19~22号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

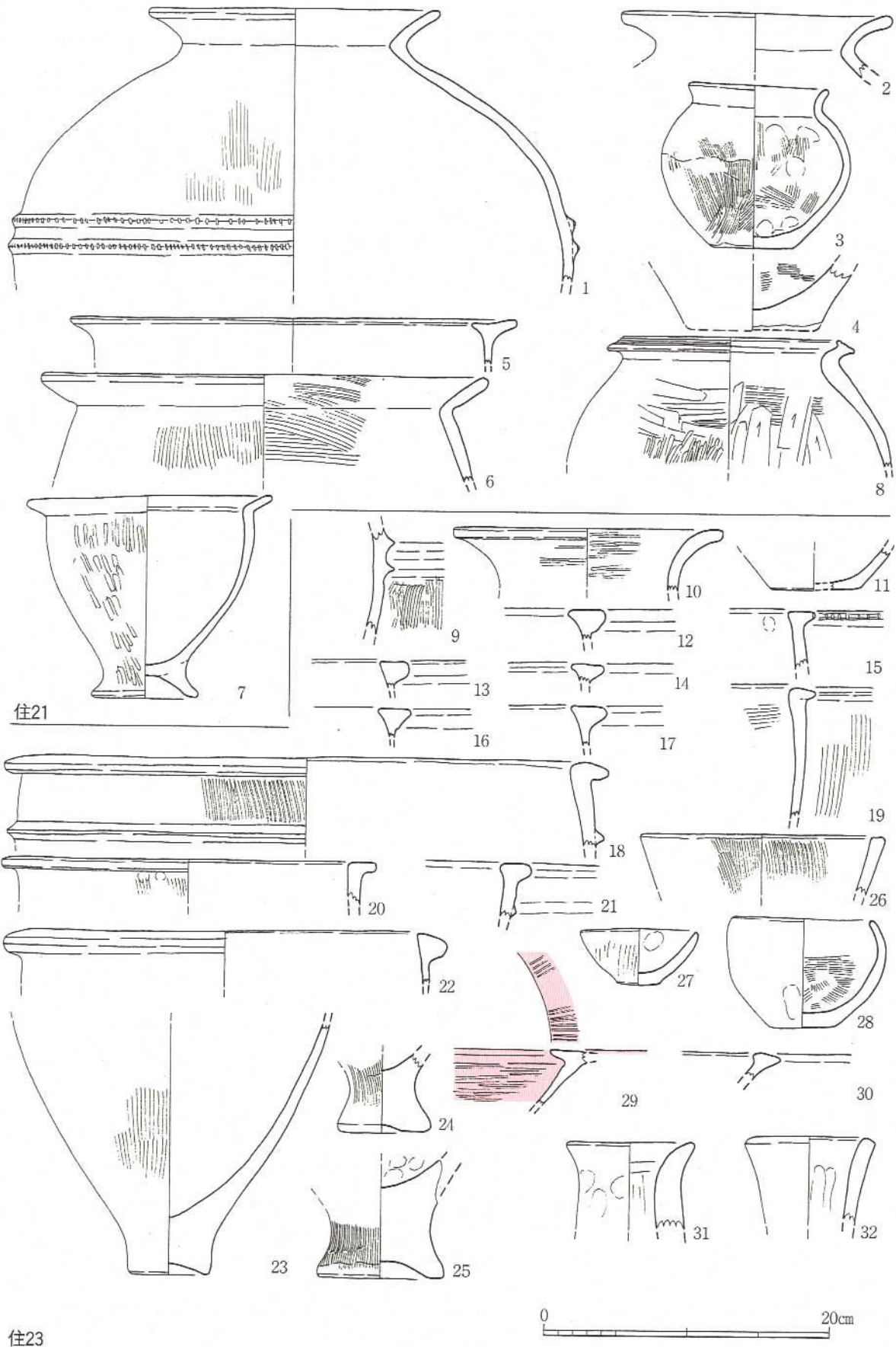


第12図 23・24号竪穴住居跡実測図 (1/60)

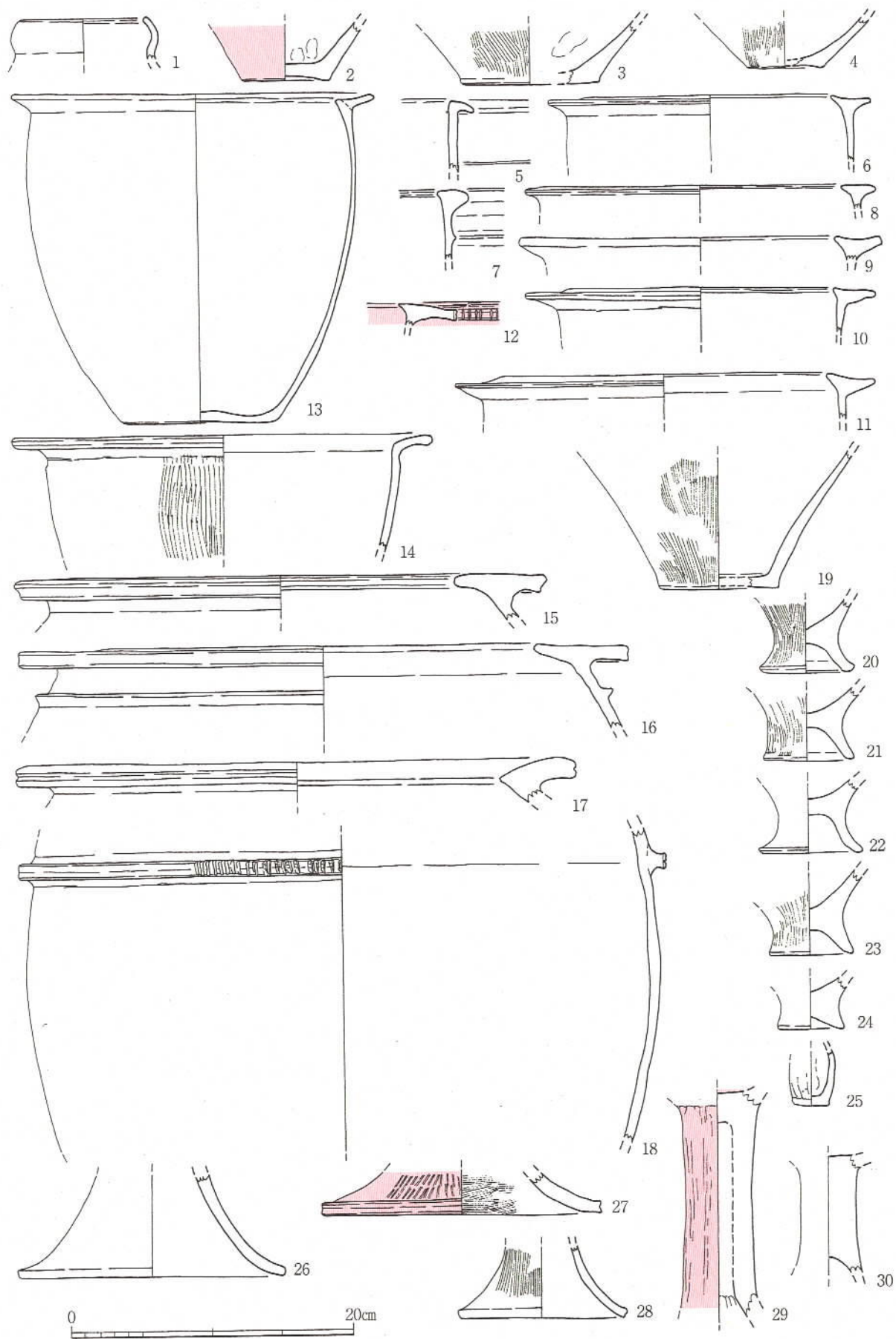
湾する。29は丹塗磨研高杯で、端部が欠損している。上面に暗文を施す。30は内面が肥厚する高杯。31・32は器台である。当住居跡は弥生時代中期初頭～前半に比定できようか。

24号竪穴住居跡 (図版5、第12図)

A区北側に位置し、東側は調査区外に延びる。22号竪穴住居跡を切り、102・104号土坑に切られる。検出当初は当住居跡の南西側にコーナーを持つ落ちが存在することから、そこまで延びるかとも思われたが、掘削を進めるうちにこの部分は浅いことが判明したため、当住居跡の範囲が確定できた。平面形態は方形で、南北軸は550cm程である。調査区東際に、位置から考えて炉跡かと思われる緩やかに落ちるピットが存在するが、床面は焼けてはいない。



第13图 21·23号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第14图 24号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/4)

出土土器（図版35、第14図）

1は複合口縁壺である。胎土はキメ細やかで精製である。2～4は壺の底部である。2は丹塗を施し底面は上げ底。5～14は甕である。5は下向きの逆L字状を呈し、胴部に沈線を施す。7は口縁に大きな突帯、胴部に小さな三角突帯を貼り付ける。12は丹塗磨研の鋤先状口縁甕で端部に刻目を施す。13は口縁が長い逆L字状を呈し、底部は薄い平底で、内面中央が盛り上がる。14は口縁が外に大きく屈曲し、端部がやや肥厚する。15～17は甕棺の口縁部で、端部はいずれも強いナデによって窪む。15・16は内側に大きく突出し、16は口縁直下に三角突帯を貼り付ける。17は強く「く」字形に屈曲する。18は甕の胴部片で、突帯を貼り付け刻目を施す。19～24は甕の底部である。19は平底で器壁が薄い。20～23は脚台状に大きく窪む。25はユビオサエが目立つミニチュア土器。26～30は高杯である。27の脚部外面は丹塗磨研で縦方向のミガキ、内面はハケ調整を行う。端部は強いナデによって窪む。29も丹塗磨研で、脚部は柱状、裾部が開く形態である。30も柱状になるが、この部分の中実である。

25号竪穴住居跡（図版5、第15図）

A区北側、20号竪穴住居跡の南に位置し、103号土坑に切られる。西側は調査区外に延びる。平面形態は方形と思われるが、103号土坑より南側では立ち上がり北側に寄った箇所があり不自然である。この部分は当住居跡とは別の落ちの可能性も捨てきれないが、調査時で埋土の差等は認識できなかった。調査区西際に方形プランの落ちが存在するが性格は不明である。

出土土器（図版35、第17図）

1は壺の口縁部か。摩滅しているが、外面にハケ調整の痕跡が残る。2は壺の底部である。摩滅が著しい。3～7は甕である。4は大きな方形の突帯を貼り付け、5～7は長い逆L字状を呈する。6は口縁下に小さな三角突帯を貼り付ける。8は高杯で、丸みを帯びる体部に外に大きく開く口縁部が取り付く。内外面とも摩滅しているが、口縁内面は横ハケの後、縦方向のミガキ調整を行う。

26号竪穴住居跡（図版6、第15図）

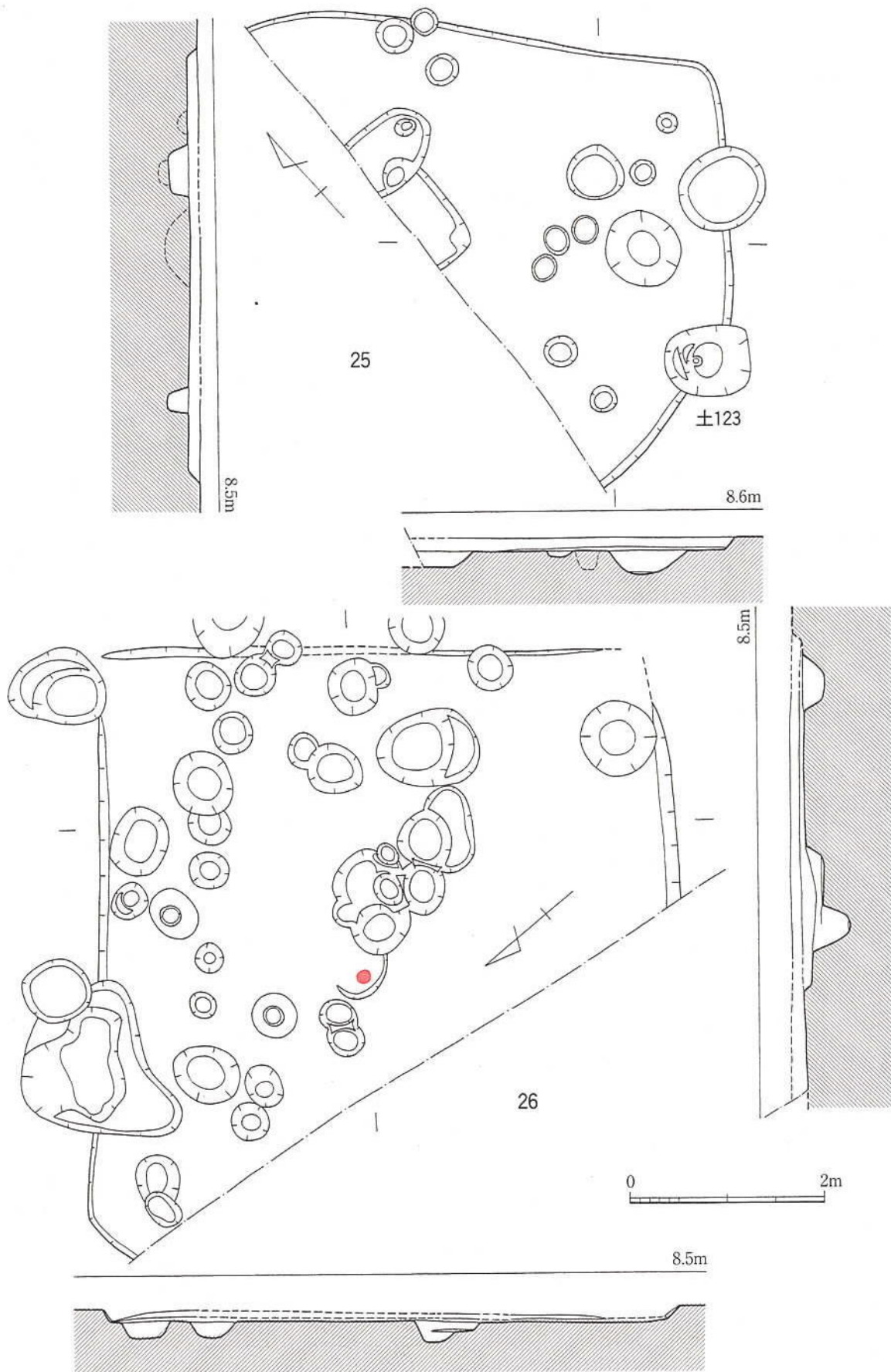
A区北側、25号竪穴住居跡の南に位置し、西側は調査区外に延びる。平面形態は方形で、北東－南西軸は600cmである。ほぼ中央に炉跡と思われる円形の落ちが存在し、床面中央が焼けている。支柱穴は判然としない。

出土土器（第17図）

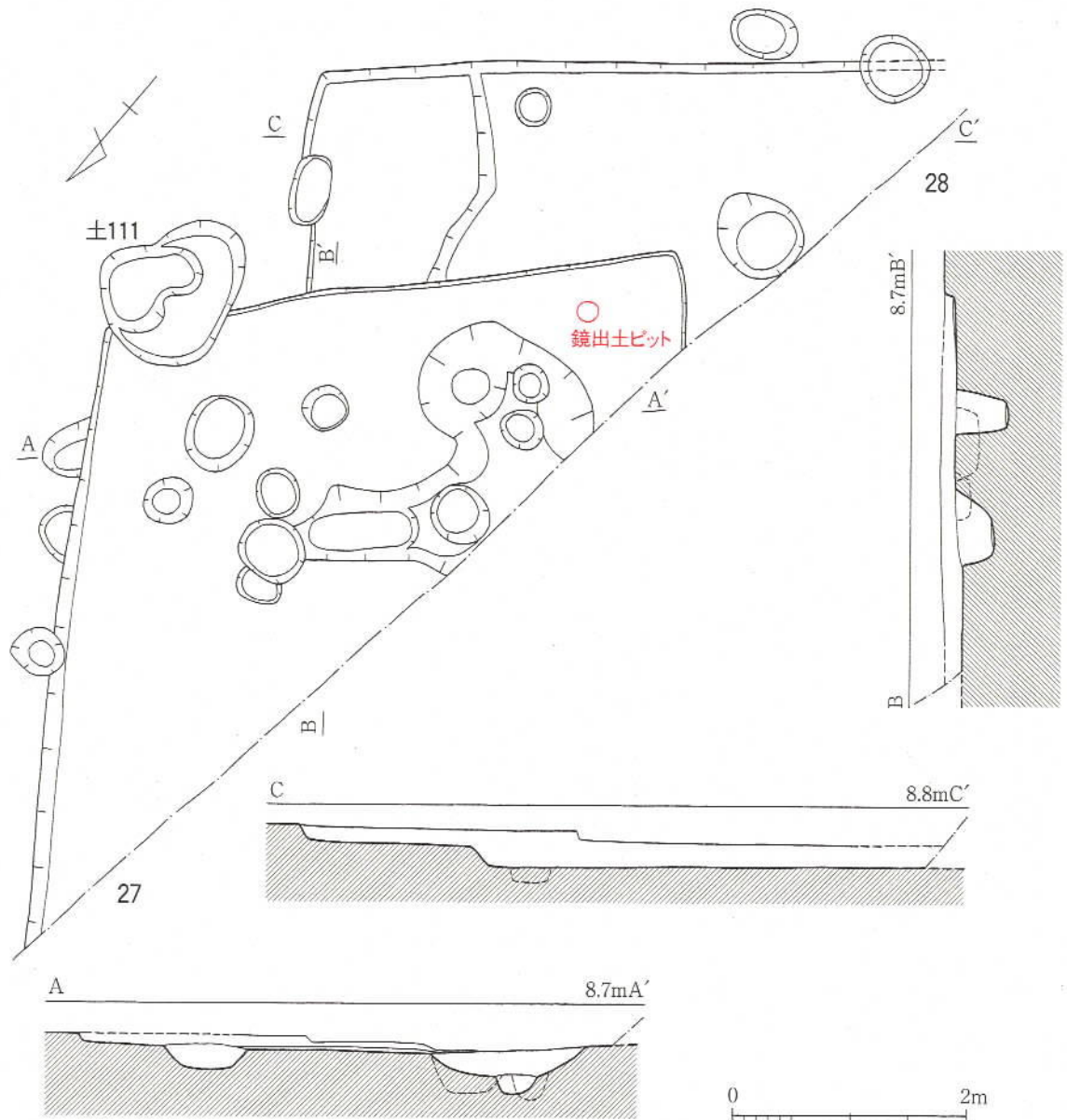
9は鋤先状の口縁部で、長く外反する壺である。10は壺の底部で横方向のミガキ調整を行う。11～16は甕の口縁部である。11は内側に大きく突出し、T字状を呈する。内外面ナデ調整で仕上げる。12～16は外面に突帯を貼り付けるが、14は特に大きく方形を呈する。17は甕の底部で高く窪む。18は器台で外面は細かいハケ調整を行う。

27号竪穴住居跡（図版6、第16図）

A区中程に位置し、28・29号竪穴住居跡を切る。東側では111号土坑に切られ、西側を調査区外に延びる。平面形態は方形で、北東－南西軸は500cmである。支柱穴や炉跡などは判然としない。ほぼ中央に北東－南西軸の楕円形の落ちが存在するが、確実に当住居跡に伴うとは言い難い。



第15图 25·26号竖穴住居跡实测图 (1/60)



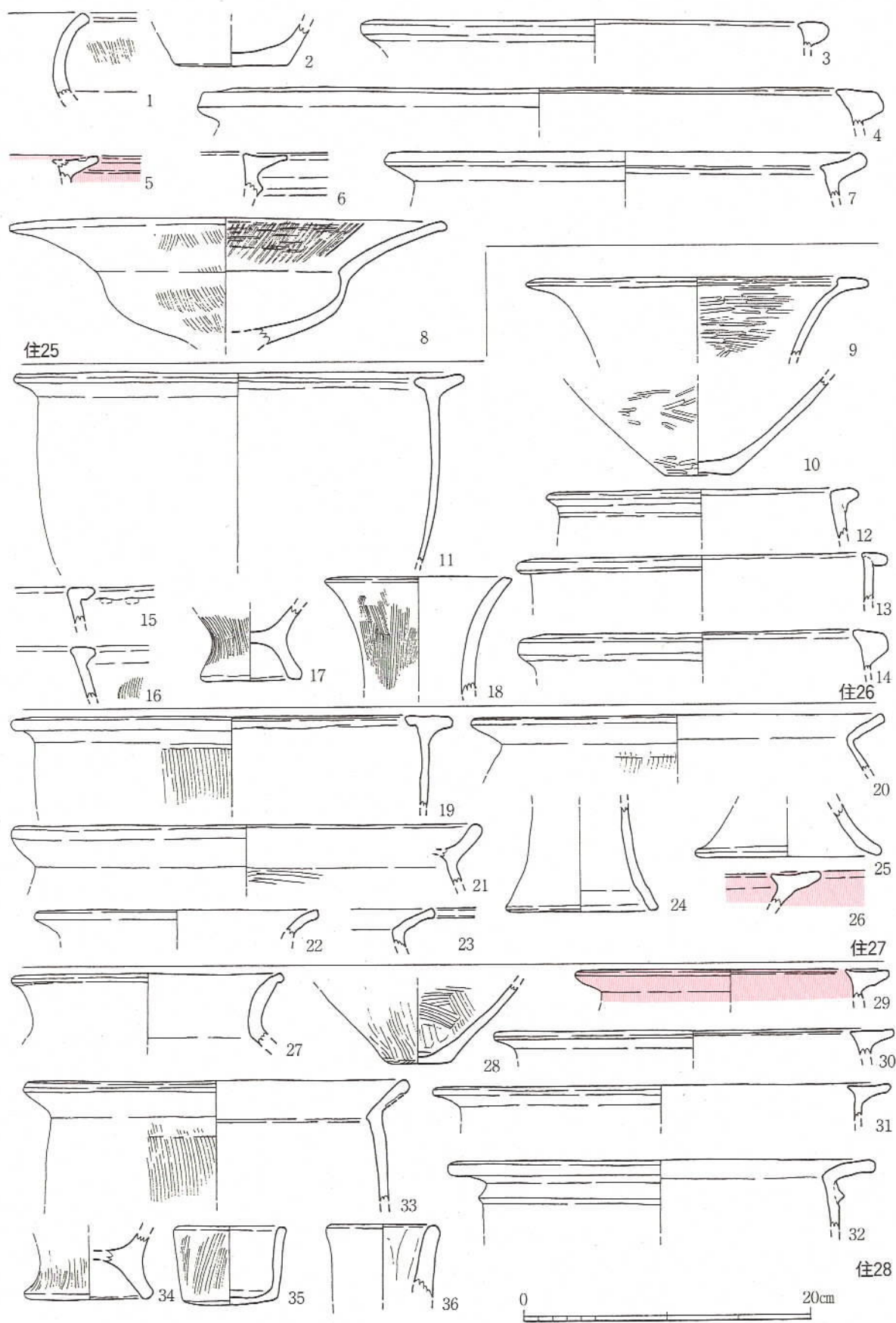
第16図 27・28号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土土器 (第17図)

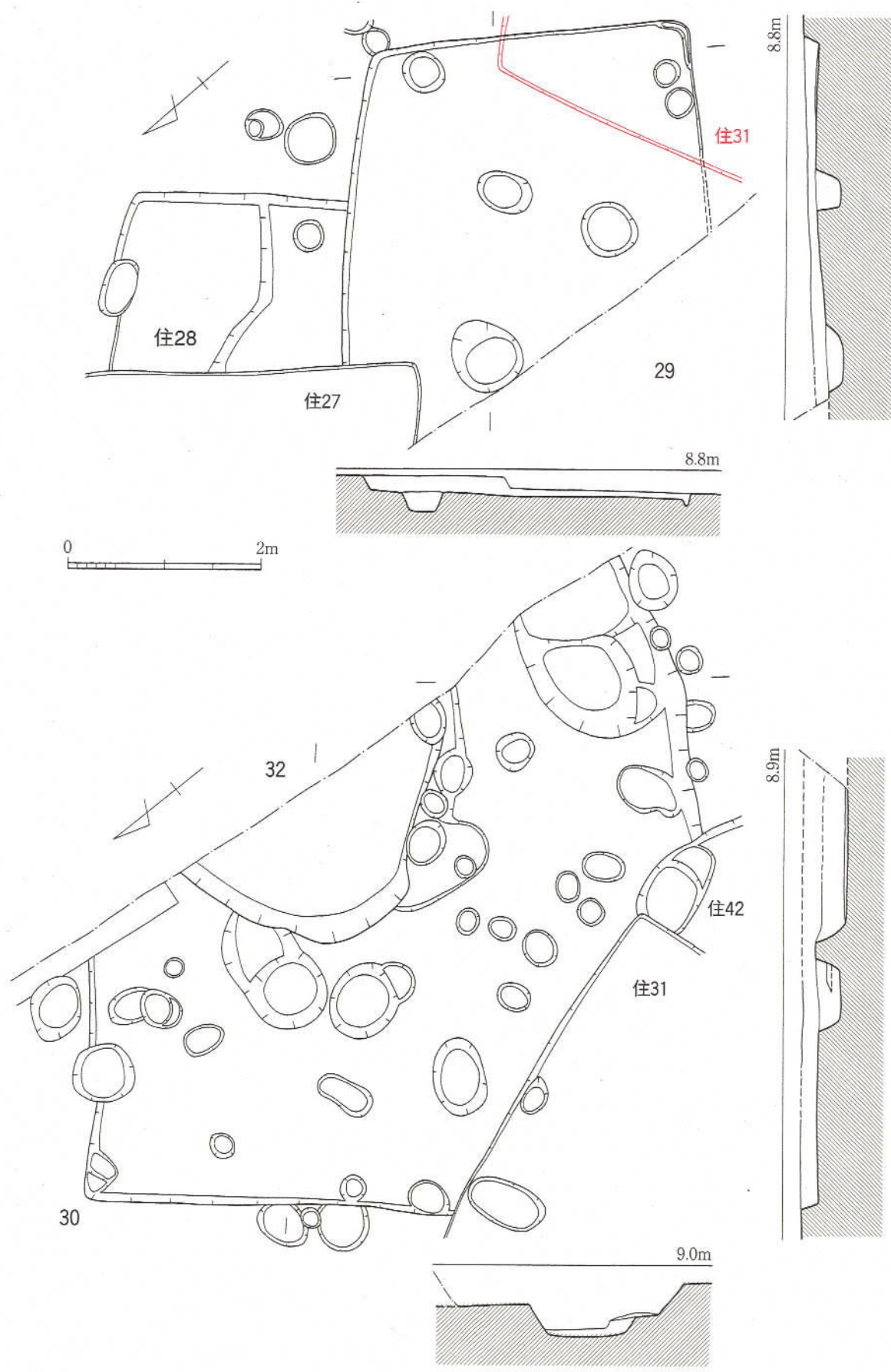
19~23は甕である。19は内面に大きく突出し、外面ハケ調整を行う。21は口縁がやや内湾ぎみになり、内側は鋭く突出する。胴部内面は粗いハケ調整を行う。20・22・23はく字形に外反する。24は器台。25は高杯脚部、26は丹塗磨研の高杯口縁部である。

28号竪穴住居跡 (図版6、第16図)

A区中程に位置し、27・29号竪穴住居跡に切られる。平面形態は方形であるが、規模は不明である。北側に幅130cm程のテラスが存在し、ベッド状遺構の可能性もあるが、段の部分がうまく認識できずに掘削してしまった。支柱穴や炉跡等は判然としない。



第17图 25~28号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)



第18图 29·30·32号竖穴住居跡実測图 (1/60)

出土土器（図版35、第17図）

27は壺で、口頸部界はく字形に屈曲し、端部は肥厚する。28は壺の可能性のある底部である。薄い平底で内外面は粗いハケ調整を行う。29～33は甕である。29は鋤先状口縁の丹塗磨研甕。32は口縁部がく字形に稜をもって屈曲し、直下に下向きの三角突帯を貼り付ける。口縁端部は肥厚する。33は口縁部がく字形に屈曲するが、屈曲部内面がやや突出する。口縁外面は剥離している。胴部は外面がハケ調整、内面はナデ調整を行う。34は甕の底部で、高い窪み底となる。35は平底からほぼ直立した体部が取り付く鉢である。外面ハケ調整、内面はナデである。36は器台で摩滅が著しい。内面にユビによるナデを施す。

29号竪穴住居跡（図版7、第18図）

A区中程に位置し、28号竪穴住居跡を切り、31号竪穴住居跡に切られる。平面形態は方形で、北東－南西軸は360cm程である。支柱穴や炉跡は判然としないが、南東隅で壁に沿って幅10cm程の浅い溝が確認できた。

出土土器（図版35、第19図）

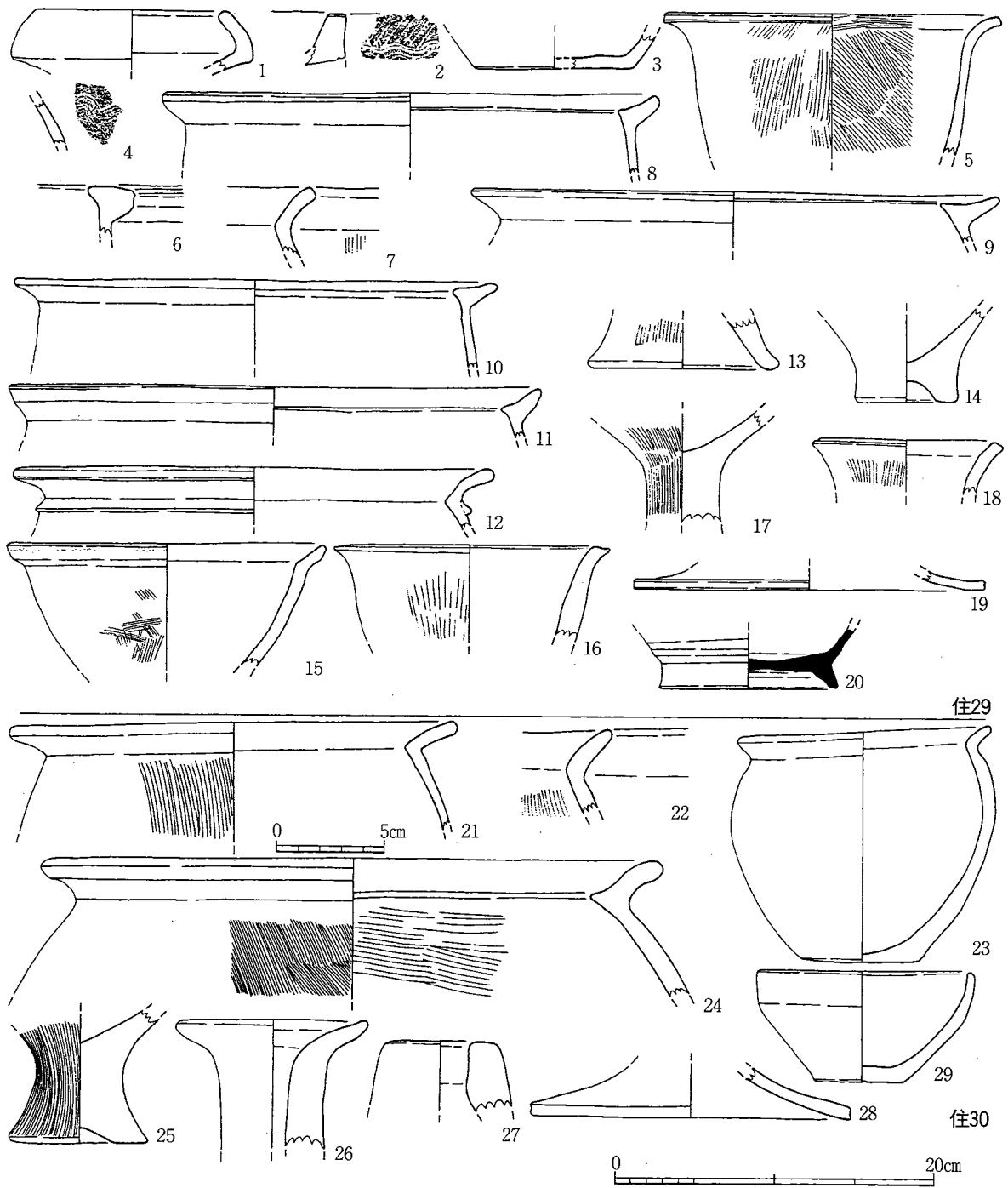
1は稜をもって屈曲する複合口縁の壺である。2は二重口縁壺の口縁部で、外面に板状工具による押圧と波状文、端部に刻目を施す。3は壺の薄い平底で、ミガキ調整の痕跡が残る。4は壺の胴部片で胴部上半に波状文を施す。5～12は甕である。5は口縁部が緩く外反し、端部はナデによって窪む。内外面ハケ調整を行う。6は端部に大きな突帯を貼り付け、突帯上はナデによって窪む。内側に若干突出する。7は内面にしっかりした稜をもってく字形に屈曲する。8は口縁部がやや上向きの長い逆L字状を呈し、内面に少し突出する。9～11は鋤先状の口縁。器面はいずれも摩滅している。12は口縁部がしっかりした稜をもってく字形に屈曲し、直下に下向きの突帯を貼り付ける。13・14は甕の底部である。13は高い窪み底、14は底面中央のみが窪む。15・16は鉢である。15は口縁部外面に稜をもち、やや上方へ立ち上がる。胴部はハケ調整を行う。16は摩滅が激しいが、外面にハケ調整が確認できる。17は高杯で脚部上部は中実、外面は摩滅しているがハケ調整が確認できる。18は器台口縁部、19は器台の脚部か。19の端部はナデによって窪む。20は須恵器の杯身で高台部が高く八字状を呈する。混入と思われる。

30・32号竪穴住居跡（図版7・8、第18図）

A区中程に位置し、31・42号竪穴住居跡に切られる。東側は調査区外に延びる。30号竪穴住居跡の平面形態は方形で、北東－南西軸は630cm程に復元できる。南東部に壁に沿って幅140cm程の落ち込みが存在し、屋内土坑の可能性が考えられる。その他支柱穴や炉跡等は判然としない。掘削中に東側調査区際に大きな隅丸方形の落ち込みが存在することが分かっていたが、床面が平坦であること、また壁面の立ち上がりがしっかりしていることが判明した。30号竪穴住居跡に伴うものではなく、より古い住居跡と判断し、これを32号竪穴住居跡とした。

出土土器（図版35・36、第19・21図）

第19図21～29は30号竪穴住居跡に帰属すると考えられる土器である。21～23はく字形に屈曲する甕である。23は胴部が短く、薄い平底をもつ。器面は摩滅している。24は大型甕で、口縁部屈曲部は内側に突出する。端部は外側に肥厚する。25は甕の底部で中実部分が高い。底面は中央のみが窪む。26



第19図 29・30号竪穴住居跡出土土器実測図 (20は1/3、他は1/4)

は器台で筒部が細い。27は口縁部付近で器壁が薄くなる。器台の一種であろうか。28は器台か高杯の脚部。29は鉢で、胴部上半部に弱い稜を有する。底部は平底である。当住居跡は弥生時代後期に比定できよう。

第21図23～25は32号竪穴住居跡に帰属すると考えられる土器である。23は鋤先状口縁の甕で外面はハケ調整を行う。24は丹塗磨研のく字形に屈曲する甕か。端部はナデによって窪む。25は高い脚台状の甕の底部。

31号竪穴住居跡（図版7、第20図）

A区中程に位置し、29・30・42号竪穴住居跡を切る。平面形態は長方形で、南北軸は440cmである。西側は調査区外にさらに延びるようである。主柱穴や炉跡等は判然としない。北側は29号竪穴住居跡が切り合っているため、埋土の識別がうまくできず、床面を少し掘りすぎてしまった。

出土土器（図版36、第21図）

1は緩く外反し大きく口縁が開く壺。ハケ調整が確認できる。2はく字形に強く屈曲する壺で、ハケ調整が確認できる。3は胴部が球形状を呈し、最大径の位置に2条の突帯を貼り付ける。外面胴部下半は器面が柔らかい段階でハケ調整を行ったためか、ハケ目がはっきりしない。4・5は壺の底部である。6～9はく字形に屈曲する甕である。6の端部にはナデの際であろうか、スジがつく。10・11は高い脚台状の甕の底部で、10は内面にユビオサエを施す。12・13は口縁部がく字形に屈曲する鉢。12は粗いハケ調整、13は内面に板ナデを行う。14は精製の内湾する鉢であろうか、底部は薄い平底である。摩滅しているが口縁部にミガキ調整が確認できる。内面はハケ調整や工具の圧痕が確認できる。15は器種はよくわからないが、丹塗磨研で突起があるが先端を欠損している。16～19は器台で、17の器壁は特に厚い。20はユビオサエで仕上げたミニチュア土器である。21・22は土師器の杯で摩滅が激しい。

33号竪穴住居跡（図版8、第20図）

A区南端に位置し、南側は調査区外に延びる。平面形態は方形だが、南西部はうまく壁が検出できず、いびつな形状としてしか認識できなかった。おそらく本来の壁面は北東部隅からまっすぐ南に延びるものと思われる。当住居跡は当初住居跡と気づかなかったため、北壁の一部についても掘りすぎてしまった。規模は東西軸で440cm程である。主柱穴は判然としない。

出土土器（第21図）

26は外面に突帯を貼り付けた甕で、内面に若干突出する。27・28は壺の底部か。29は高杯か器台の脚部でナデ調整で仕上げる。

34号竪穴住居跡（図版8、第22図）

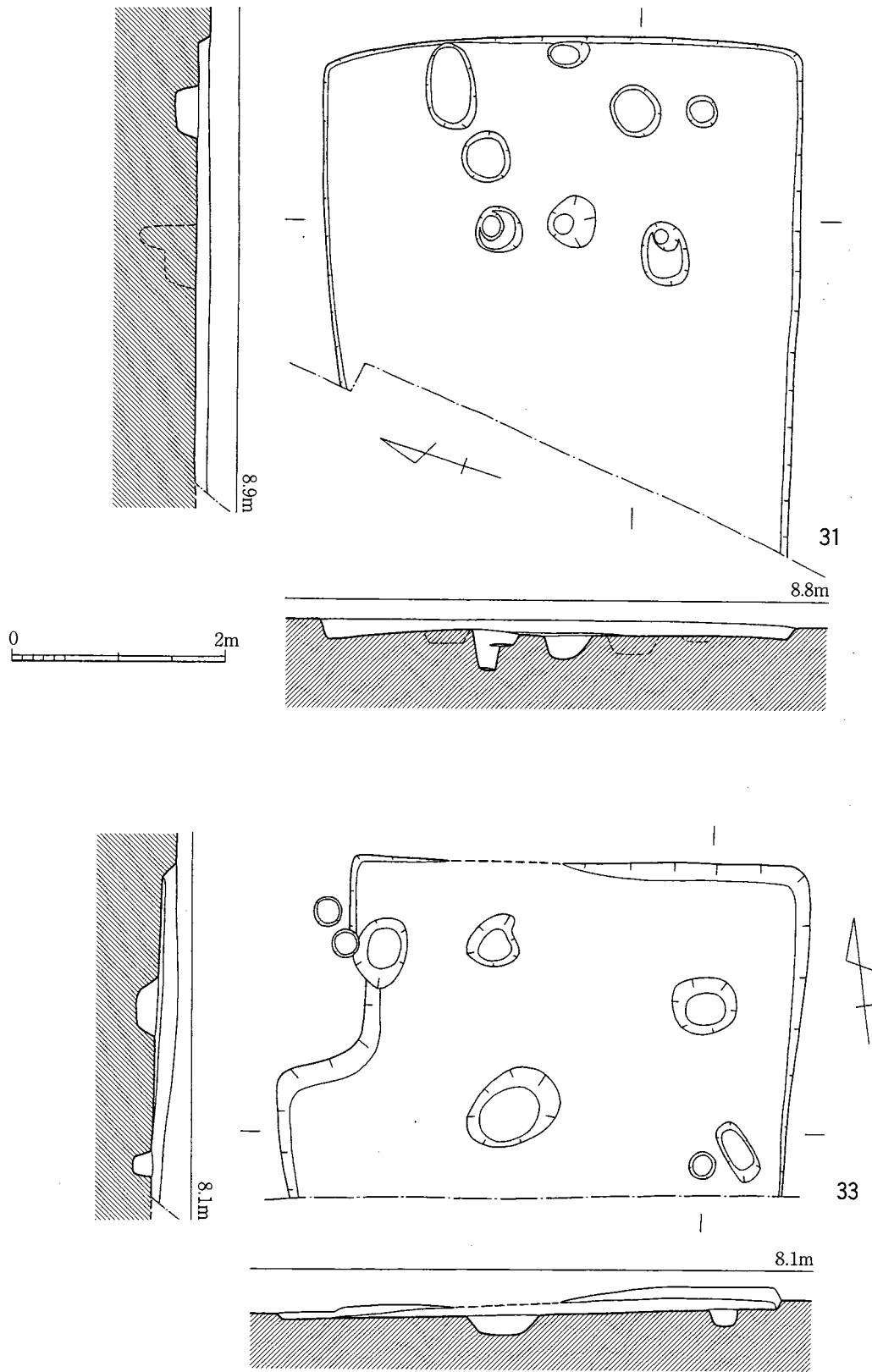
A区南側、33号竪穴住居跡の北に位置する。平面形態は方形である。西側は落ち込みによって壁面が壊されており、南西から南東側にかけても広い範囲で落ち込みが存在していたためうまく壁面を検出できなかった。主柱穴は2本で北東―南西に軸をとる。炉跡は判然としない。

出土土器（第23図）

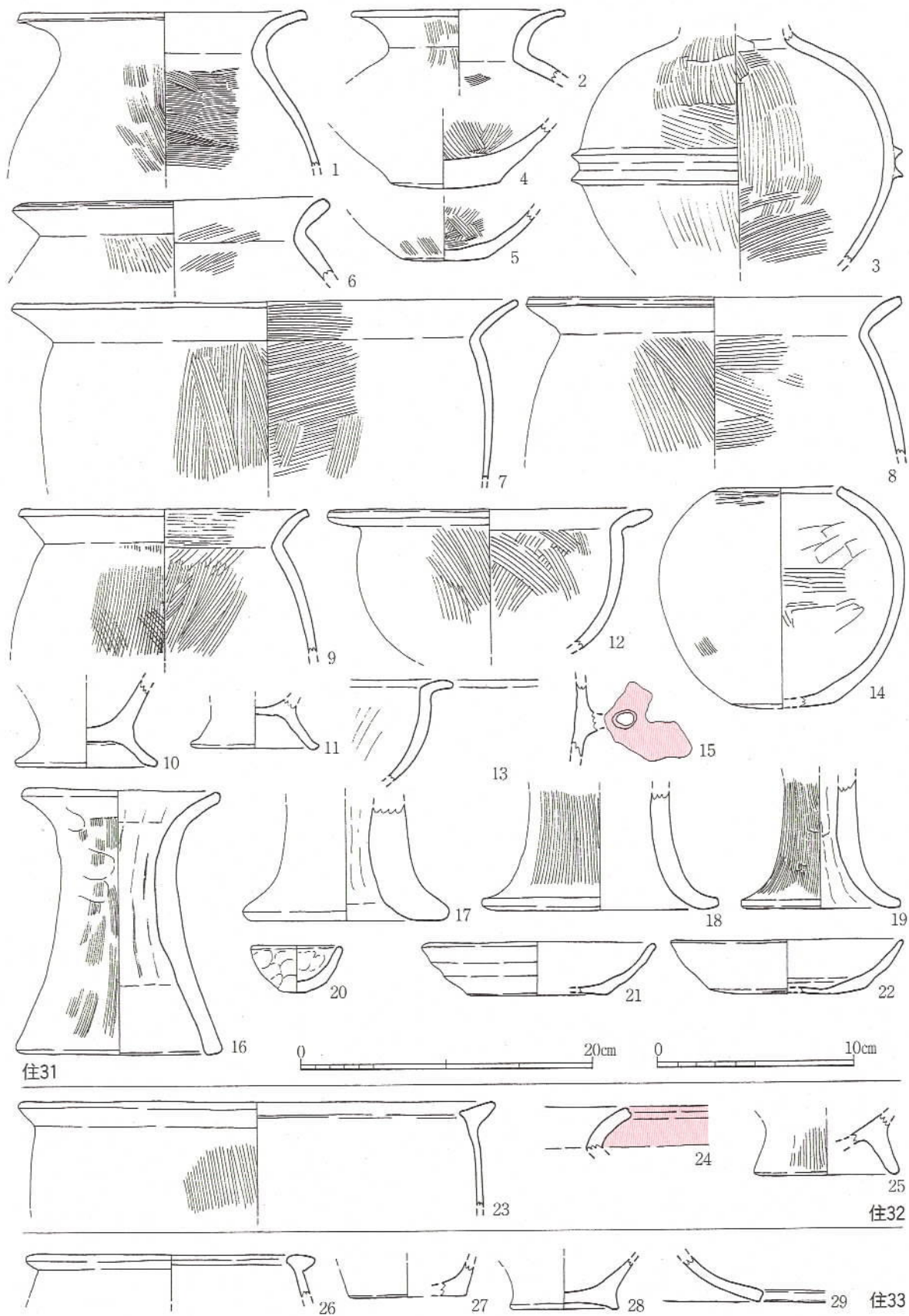
1は壺の頸胴部片で、頸胴部界屈曲部外面に突帯を貼り付ける。内面は突出する。2は壺の底部で器壁の薄い平底である。3・4は甕で、く字形に屈曲する。土器の出土量が少ないが、当住居跡は弥生時代後期に比定できよう。

35号竪穴住居跡（図版9、第22図）

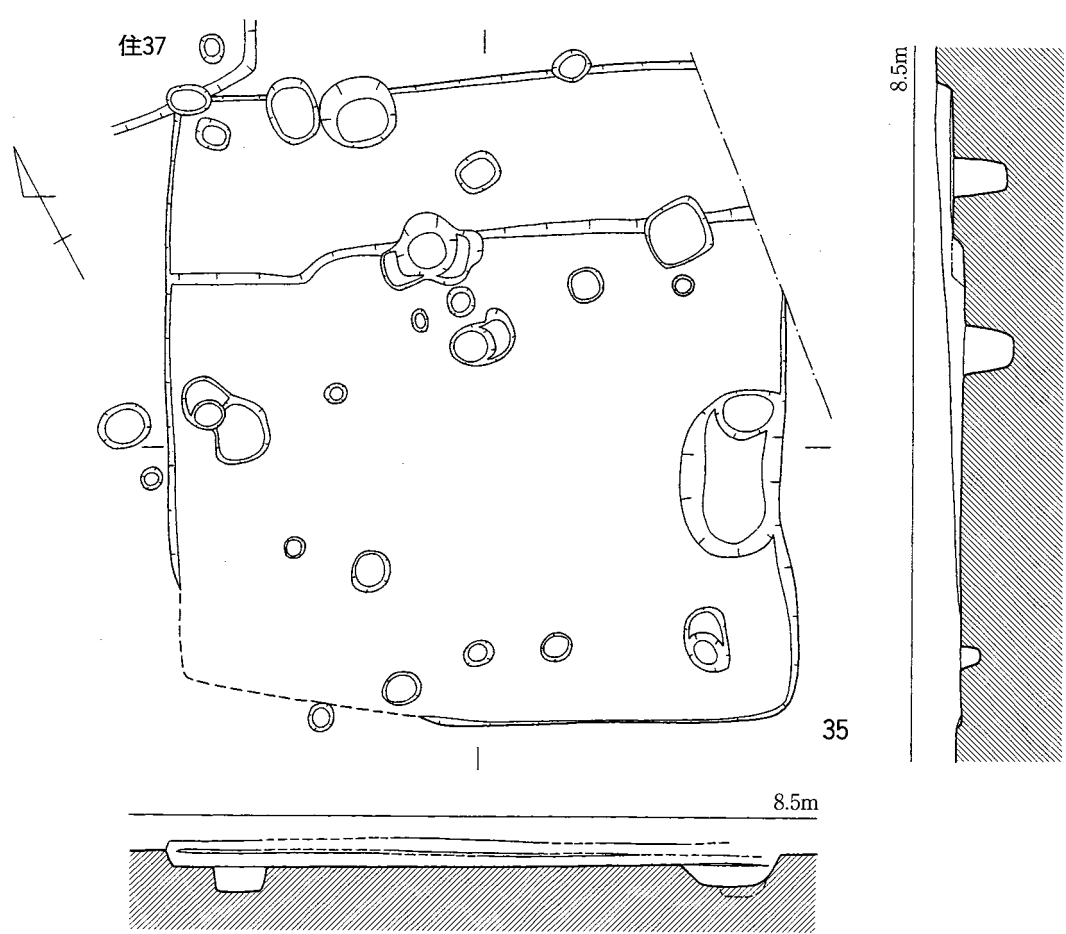
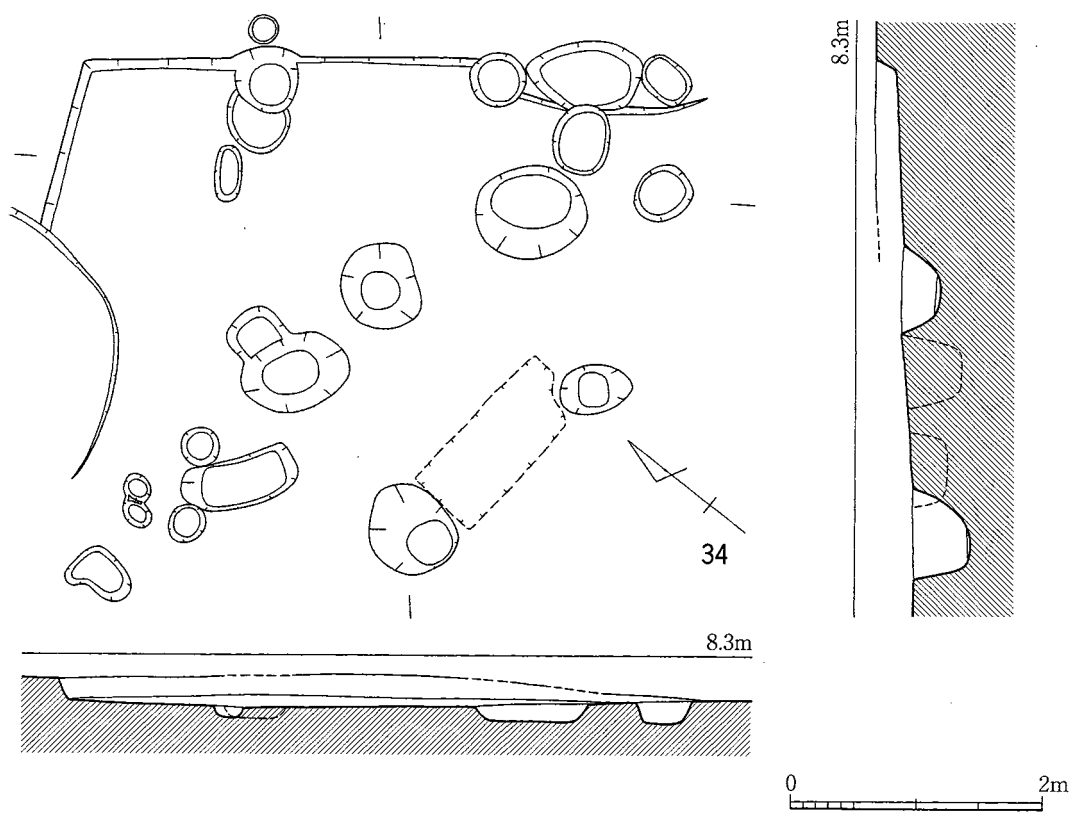
A区南側、34号竪穴住居跡の北に位置する。平面形態は方形で、北東―南西軸が520cm、北西―南東軸が490cmである。残りが悪く南西部分の壁面はうまく検出できなかった。北側では幅120～130cm程の浅いテラスが存在し、ベッド状遺構かと思われる。ただし段差が小さくいびつである。主柱穴は



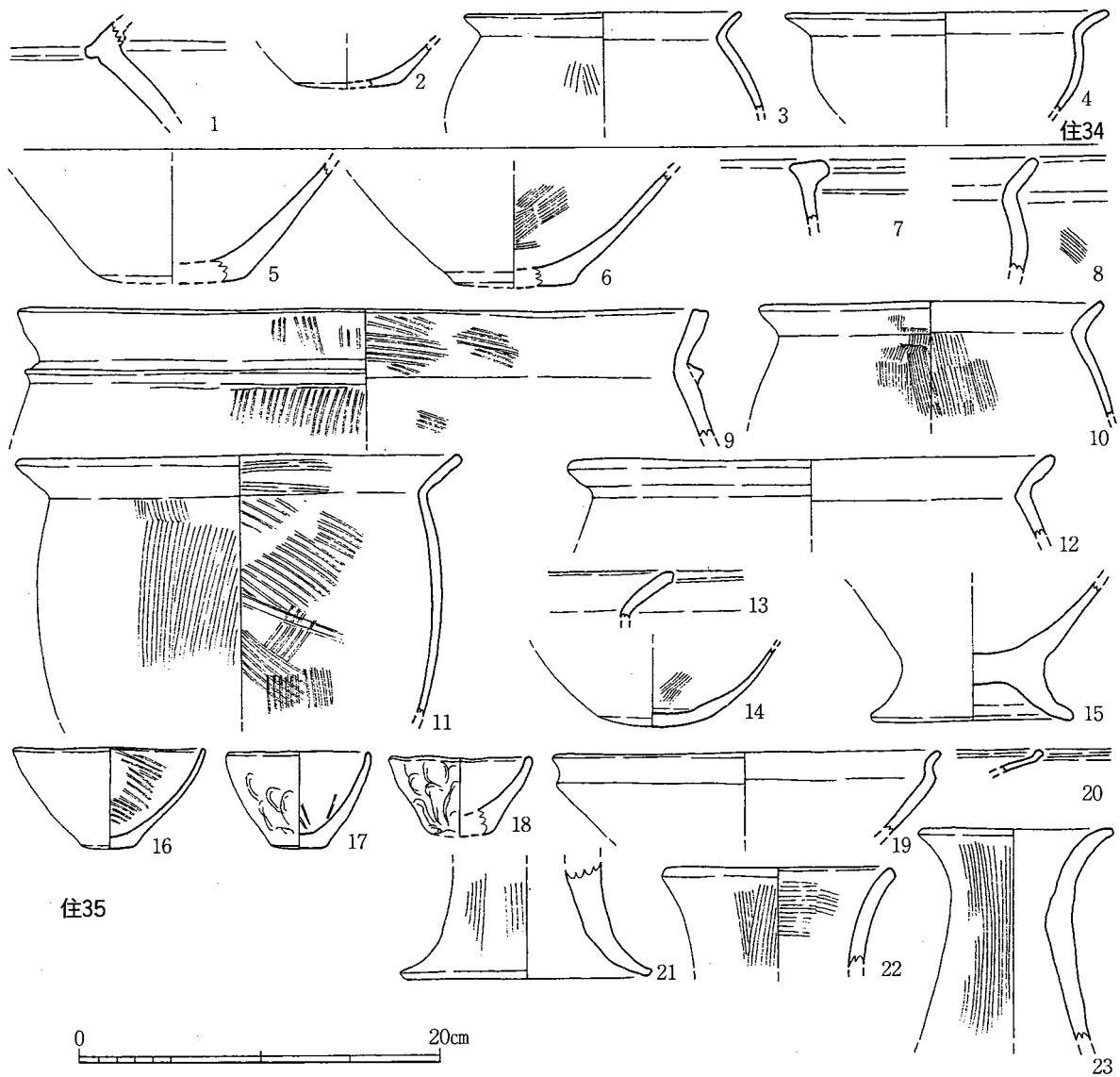
第20図 31・33号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第21図 31~33号竪穴住居跡出土土器実測図 (21・22は1/3、他は1/4)



第22図 34・35号竖穴住居跡実測図 (1/60)

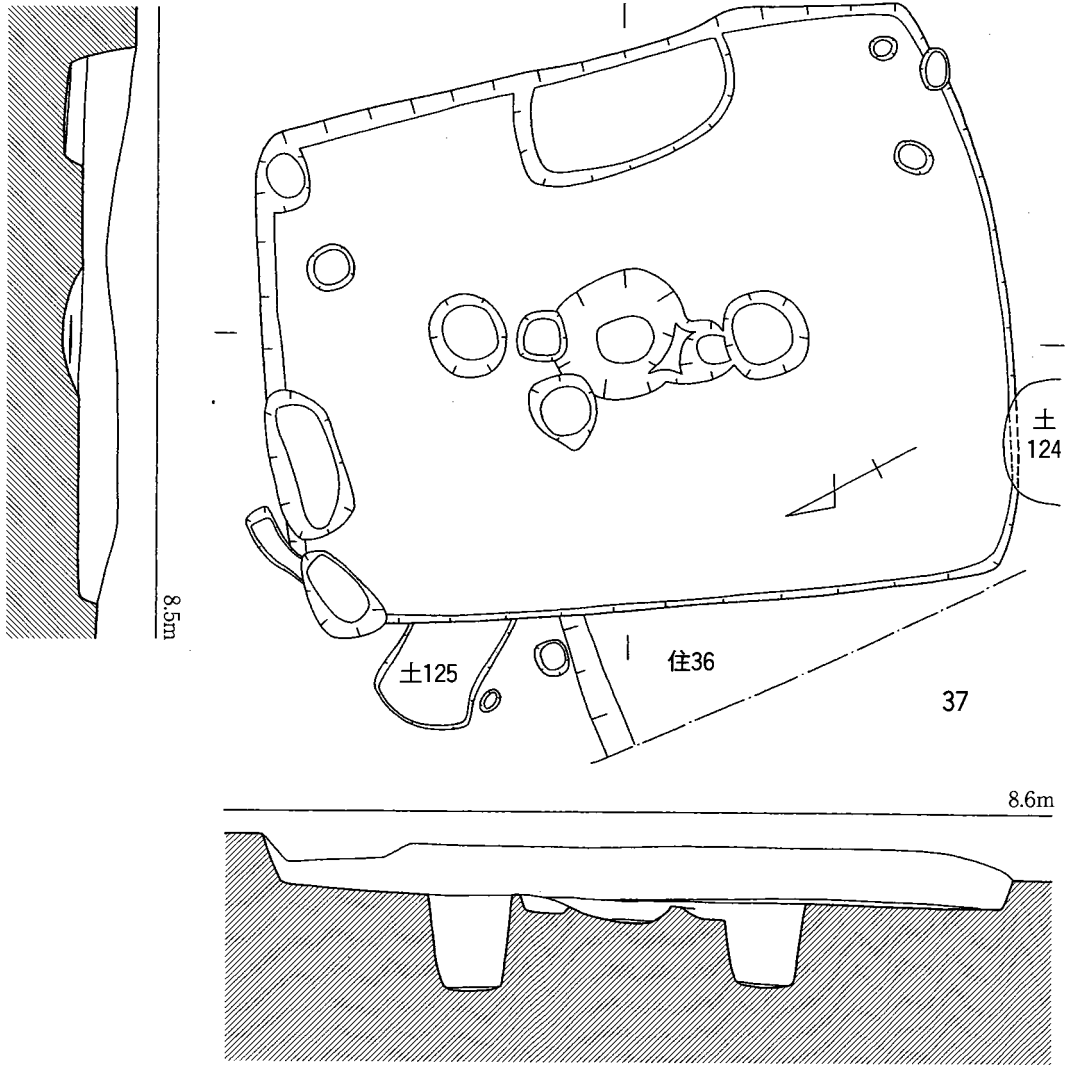
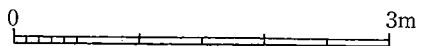
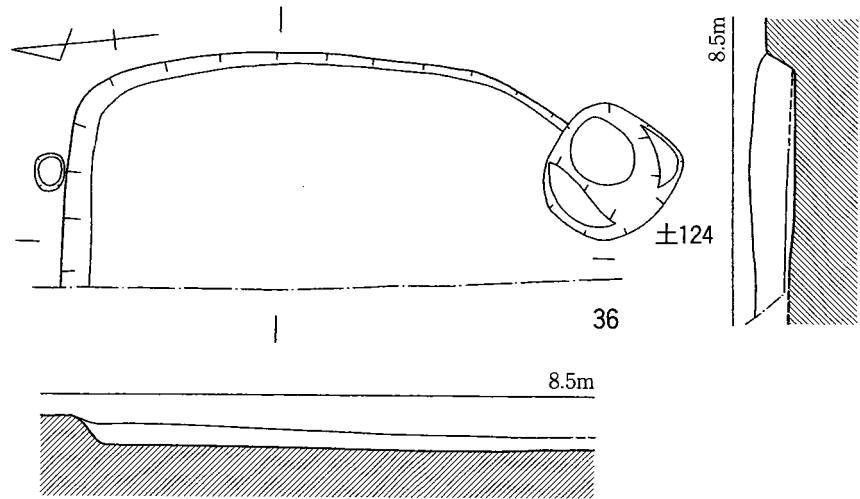


第23図 34・35号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

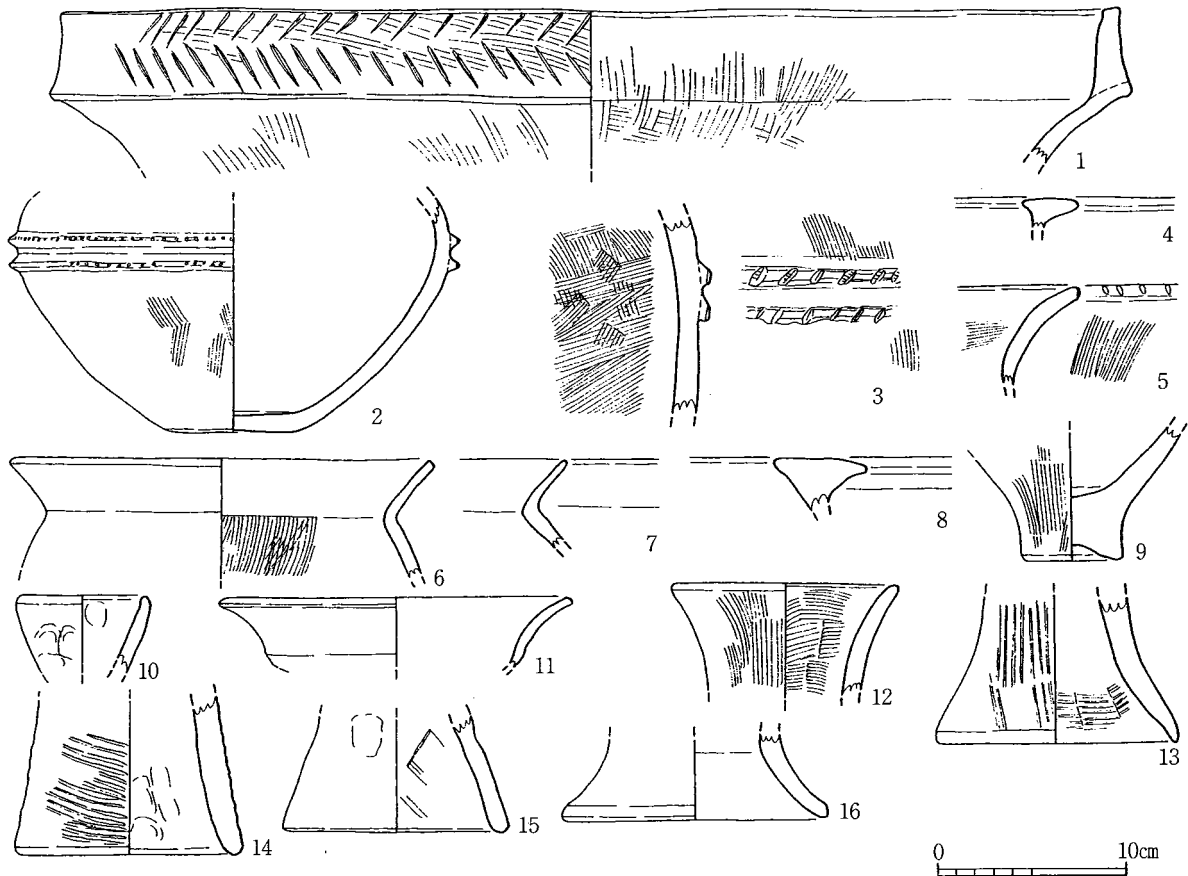
中央やや北寄りに1箇所確認できた。おそらく2本柱の構造になると思われるが、対になる柱穴は精査を試みたものの確認することができなかった。東壁沿いには長軸140cm、短軸80cm程の屋内土坑が存在する。

出土土器 (図版36、第23図)

5・6は壺の底部で、平底を呈する。7～13は甕である。7は外面に突帯を貼り付け、その下側に小さな段を形成している。8は雑なつくりで口縁部はく字形に屈曲する。9は口縁部がく字形に屈曲し、屈曲部外面に突帯を貼り付ける。口縁端部はナデにより窪む。調整は粗いハケ調整である。10～13はく字形に屈曲し、内面に稜を形成する。11の内面調整は粗いハケ調整である。14・15は甕の底部で、14は丸底、15は高い窪み底となる。16～18は小型鉢で、16は外面は摩滅しているが、内面はハケ調整が確認できる。17は外面はユビオサエ、内面は工具の圧痕が残る。18は外面ユビオサエ、内面ナデで仕上げる。19・20は高杯である。19はく字形に屈曲し、口縁は緩やかに外反する。20は口縁部が短く立ち上がる。21～23は器台である。出土土器に時間幅があるが、当住居跡は弥生時代後期に比定できよう。



第24図 36・37号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第25図 36号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

36号竪穴住居跡 (図版9、第24図)

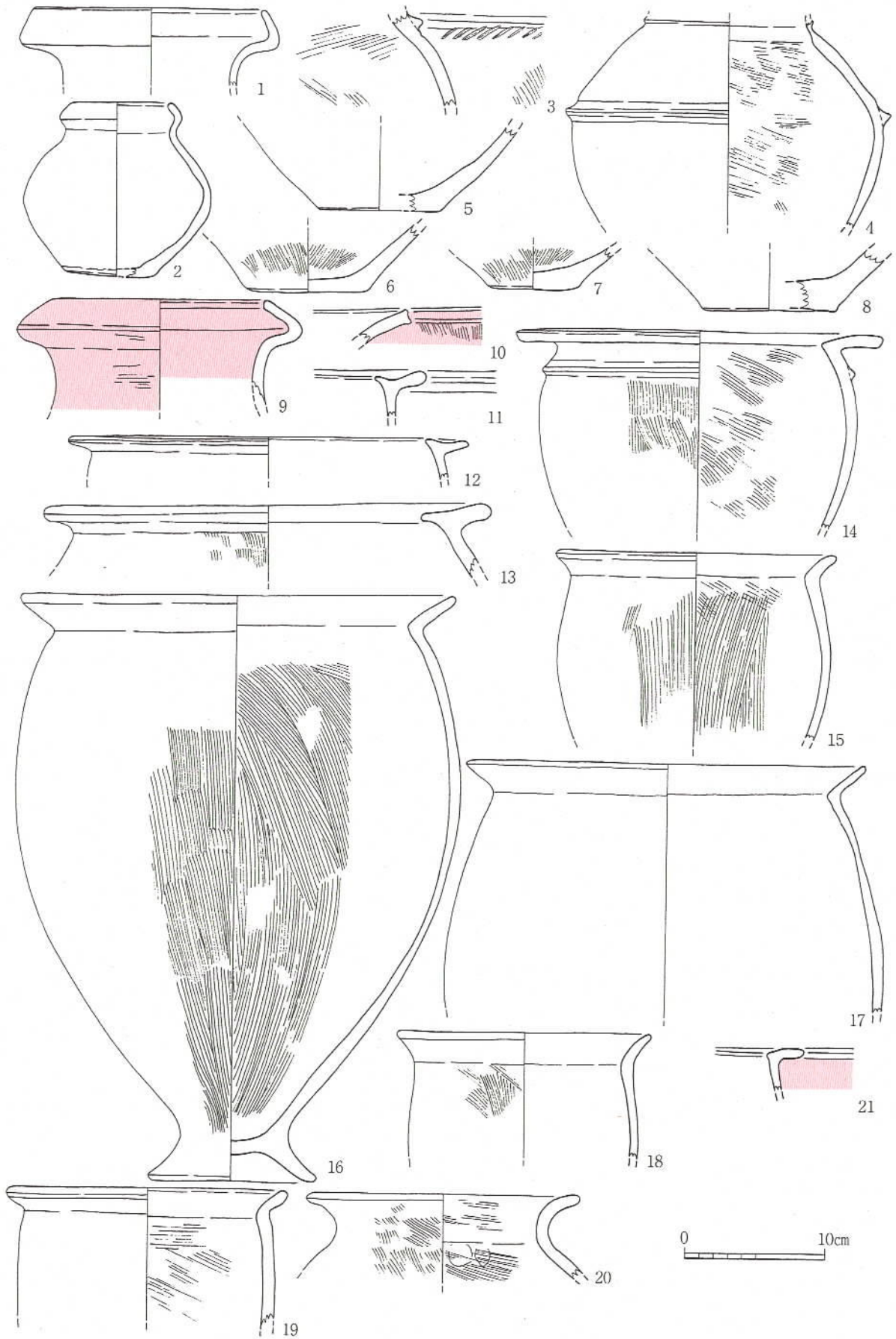
A区南側、35号竪穴住居跡の北西に位置する。37号竪穴住居跡を切り、124号土坑に切られる。西側は調査区外に延びる。平面形態は方形と思われる。床面は東側では37号竪穴住居跡の埋土との峻別がつかず掘りすぎてしまった。主柱穴や炉跡は判然としない。

出土土器 (第25図)

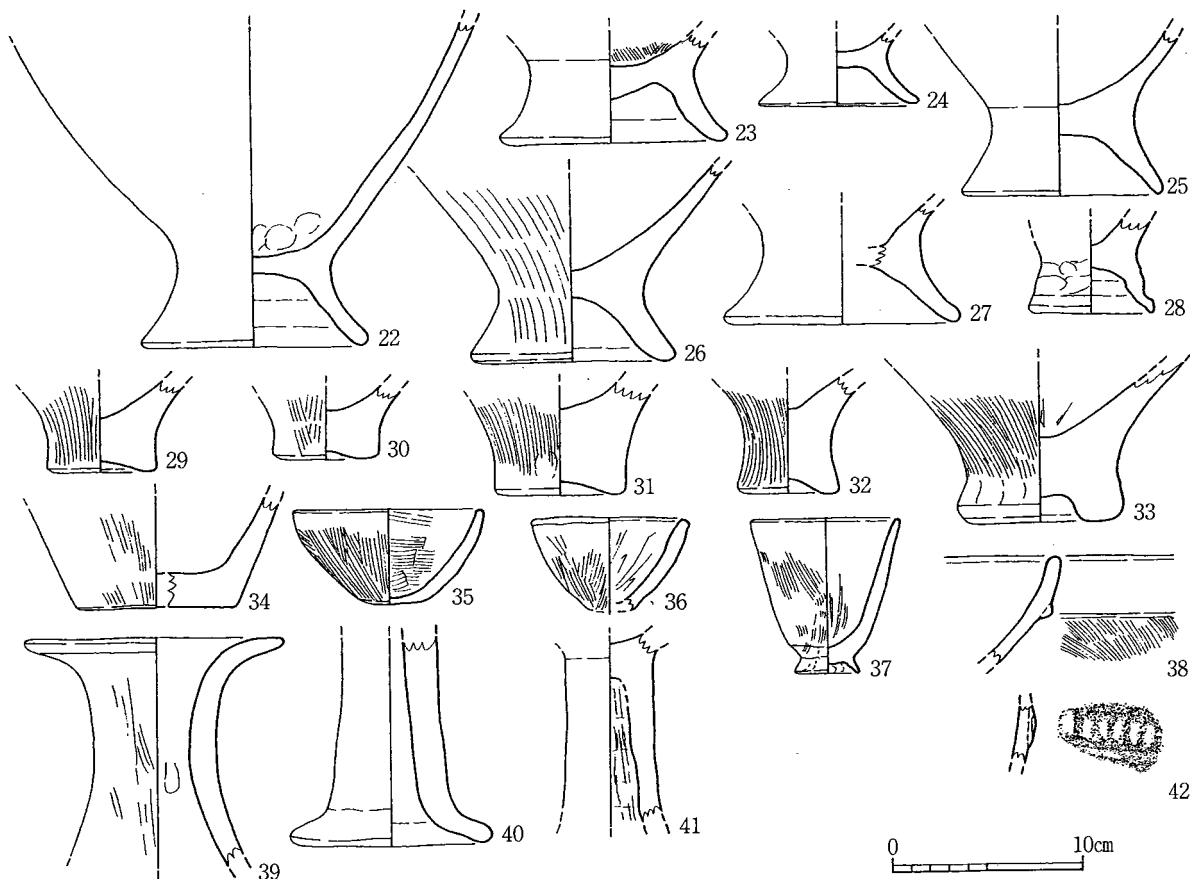
1は大型の複合口縁壺である。口縁部外面にヘラによる矢羽状の文様を展開する。調整はハケ調整を行う。2・3は胴部最大径の位置に2条の刻目突帯を持つ壺である。3は板状工具によって刻目を施す。4～7は甕である。4は鋤先口縁を呈する。5は緩くく字形に屈曲し、端部に刻目を施す。6・7はく字形に屈曲し、内面に稜を形成する。8は甕棺の口縁部になろうか。9は甕の底部で底面は中央が小さく窪む。10は小型の鉢で、ユビオサエによって仕上げる。11は高杯で口縁部は緩く外反する。12～16は器台である。12・13はハケ調整で仕上げる。14は外面はタタキ調整、内面はユビオサエを施す。15は外面にユビオサエ、内面は板状工具の圧痕が残る。

37号竪穴住居跡 (図版9、第24図)

A区南側、35号竪穴住居跡の北に位置し、36号竪穴住居跡に切られる。平面形態は長方形で、長軸590cm、短軸450cmである。中央に浅い播り鉢状の土坑が存在する。この土坑の埋土は粘性が高く、炭を多く含んでいる。炉跡と思われるが床面は焼けていない。主柱穴は南北軸に2本配され、東壁中央付近には隅丸方形の屋内土坑を設けている。



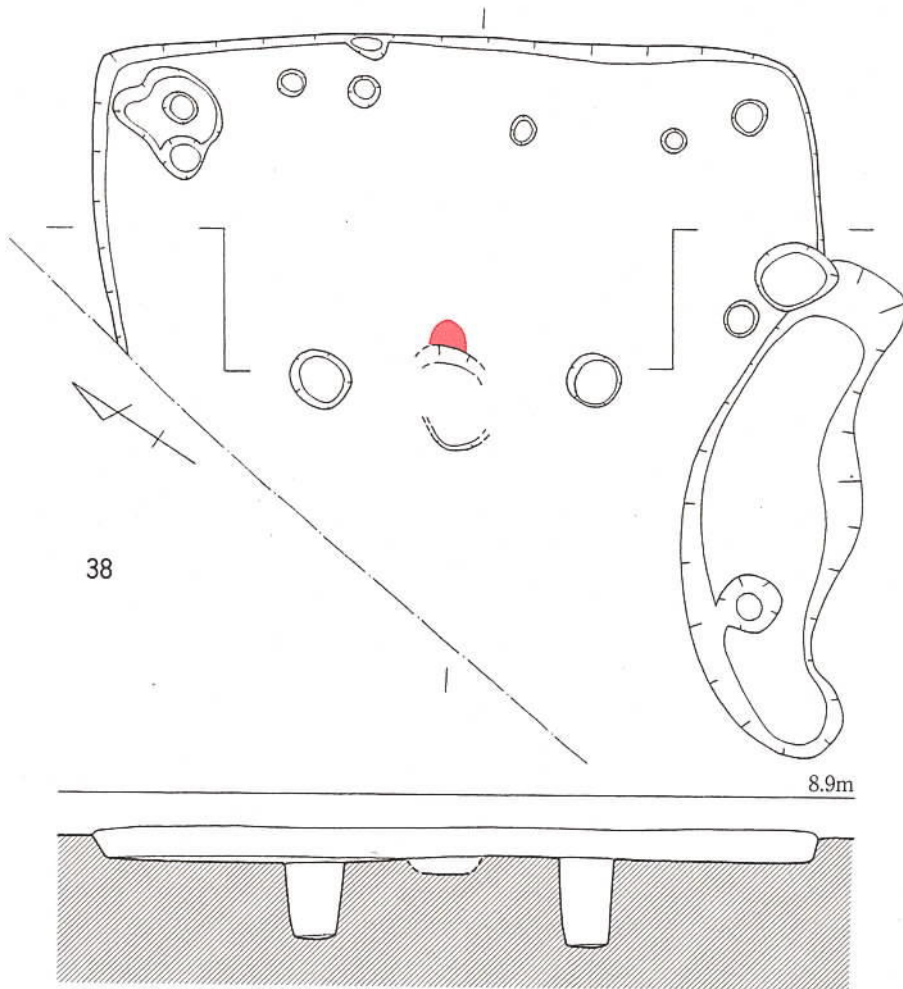
第26图 37号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/4)



第27図 37号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)

出土土器 (図版36、第26・27図)

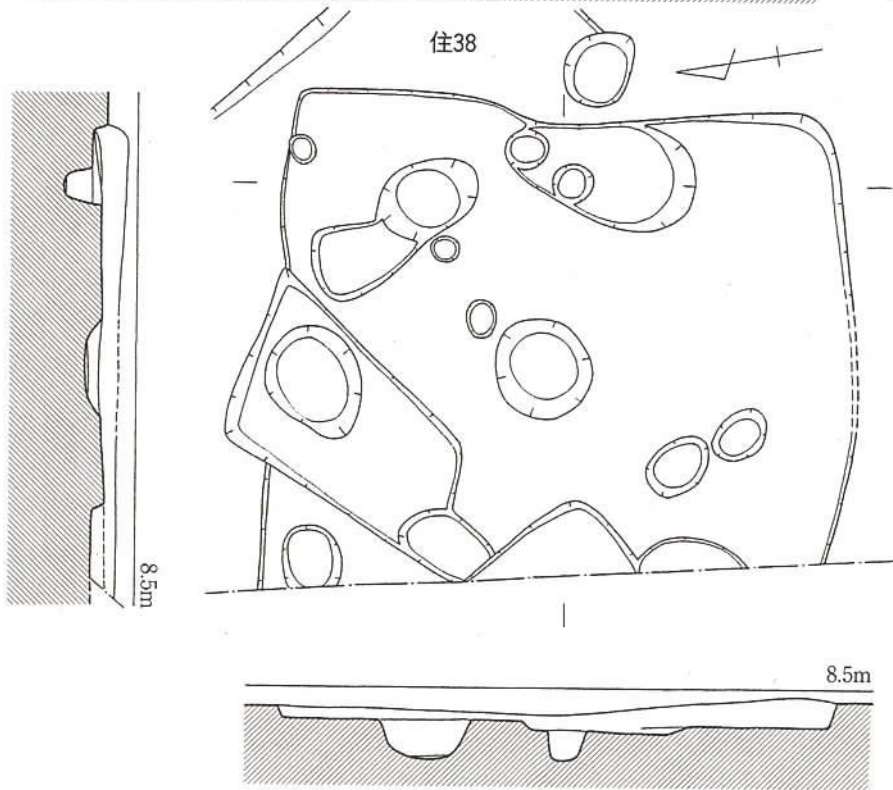
1・2は複合口縁壺である。2は頸部が短く底部は平底を呈する。1・2とも摩滅が激しい。3は壺の胴部片で、頸胴部界に1条の突帯を持つ。突帯下は工具による押し付けで斜線文様を展開する。内外面ハケ調整の痕跡が残る。4は胴部最大径の位置と頸胴部界に突帯を持つ壺である。頸胴部界内面はナデによって窪む。内面にハケ調整の痕跡が残る。5～8は壺の底部である。いずれも平底で、6・7はハケ調整である。9・10は丹塗磨研壺である。9は複合口縁で逆く字形に強く屈曲する。10は広口壺の口縁部で端部はナデによって窪む。11～20は甕である。11～13は鋤先口縁で、13は大型甕棺の口縁部である可能性がある。14は鋤先口縁の名残を残した甕で、口縁部下に1条の突帯を有する。内外面ハケ調整を行う。15～17はく字形口縁で、屈曲部内面は明瞭な稜を有する。16の底部は高い脚台状を呈する。18・19は緩やかに外反する甕でハケ調整の痕跡が残る。20は胴部が大きく張り、口縁部が外反するものでハケ調整を行う。21は丹塗磨研甕で、鋤先口縁を呈する。22～34は甕の底部である。22～28は高い脚台状を呈し、脚部は大きく開く。28は雑なつくりである。29～32は軽い上げ底で、33は底面中央のみが窪む。34は平底で胴部の立ち上がり角度がきつい。35・36は小型鉢で、外面ハケ調整、内面は36は板状工具によるナデによって仕上げる。37は脚付の鉢で、胴部は垂直気味に立ち上がりそのまま口縁部となる。38は内湾気味の口縁部外面に突帯を貼り付ける。外面突帯下はハケ調整の痕跡が残る。39は器台で外面ハケ調整、内面ユビオサエによって仕上げる。40は端部付近で急に開く高杯脚部であろうか。41は高杯脚部で脚部内面にシボリ痕が残る。42は薄い扁平な突帯に刺突を施すもので縄文土器の可能性はある。当住居跡は18～20が新しい時期の可能性のあるものの、概ね弥生



38

8.9m

1. 暗褐色粘質土(新しいピット)2よりやや暗い
2. 暗褐色粘質土(住38埋土)
3. 黒褐色粘質土と暗褐色粘質土の混合(住38の貼り床)
4. 暗褐色強粘質土炭を多く含む
5. 褐色粘質土と黄褐色粘質土の混合(住39埋土)
6. 黄褐色小礫(地山)



住38

39

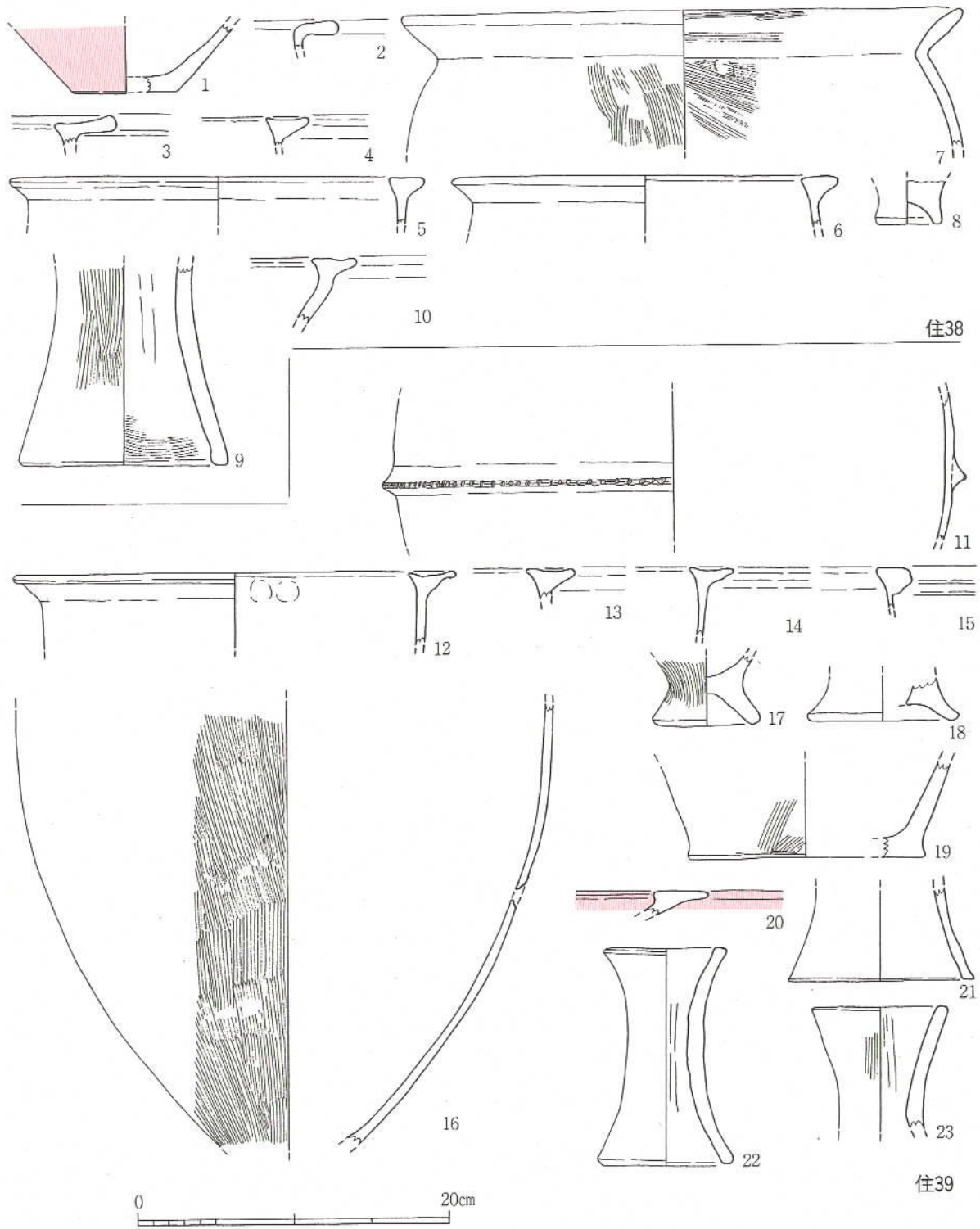
8.5m

第28図 38・39号竪穴住居跡実測図 (1/60)

時代後期に比定できよう。

38号竪穴住居跡 (図版10、第28図)

A区南寄りに位置し、39号竪穴住居跡とほぼ重なる。南東側は新しい落ち込みによって立ち上がりの壁が確認できないが、平面形態は方形で、北東-南西軸は580cm程である。中央に落ち込みが見ら

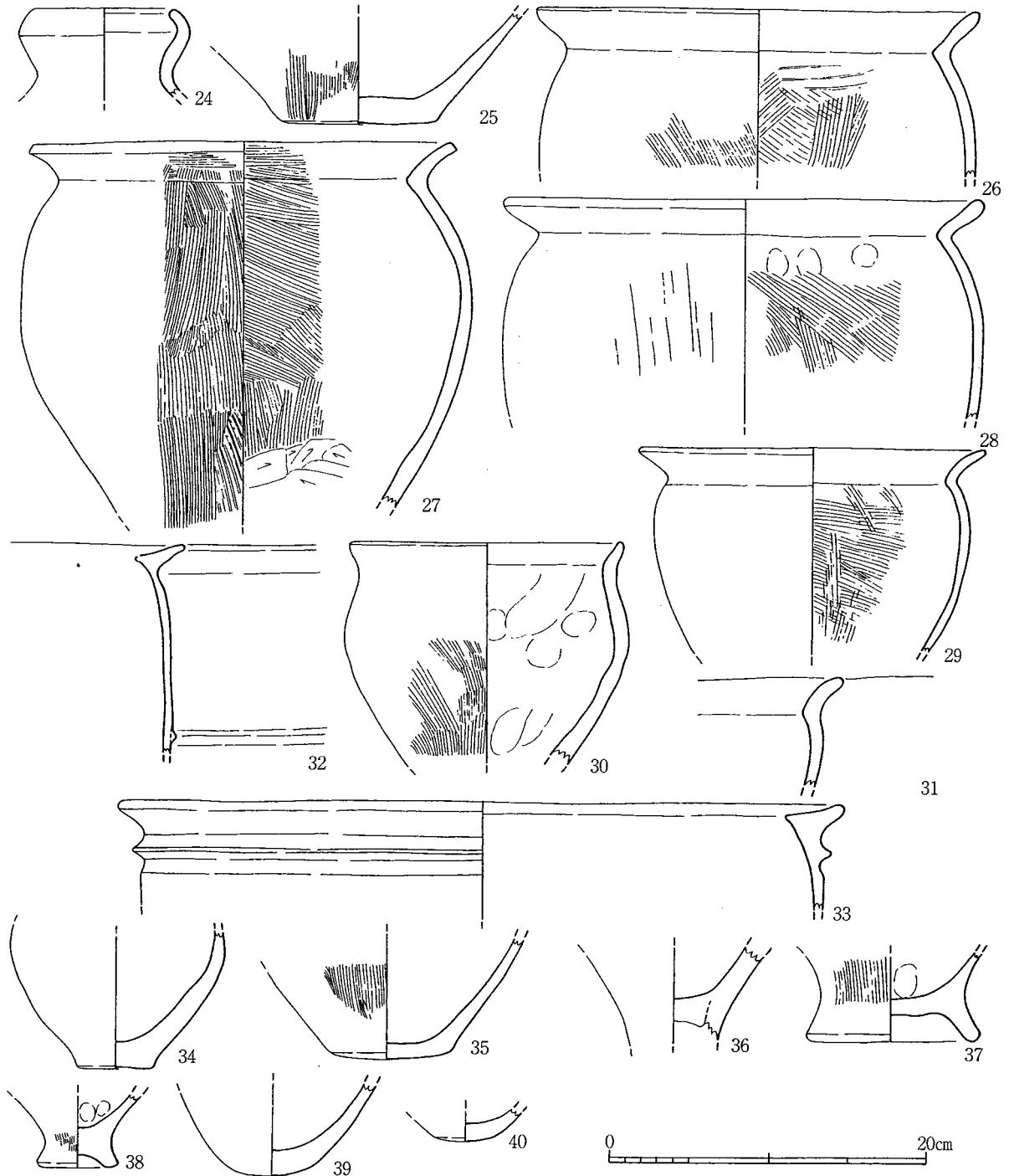


第29図 38・39号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/4)

れ、この部分の埋土は多くの炭を含むことから炉跡と思われる。しかし実際に赤変しているのは、この落ち込みの北側であり、落ち込みが切る状況である。炉の作り替えも想定すべきであろうか。支柱穴は2本であり、北東-南西に軸をとる。

出土土器 (図版36、第29~31図)

1は丹塗磨研壺の底部である。2~7は甕である。2・3は長い逆L字状を呈し端部が肥厚する。3は内面に少し突出する。4~6はやや長い三角突帯を貼り付ける。7はく字形口縁で、口縁部中程が肥厚する。内面は明瞭な稜を形成する。8は甕の底部で小さく窪む。9は器台でハケ調整で仕上げ



第30図 38・39号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)

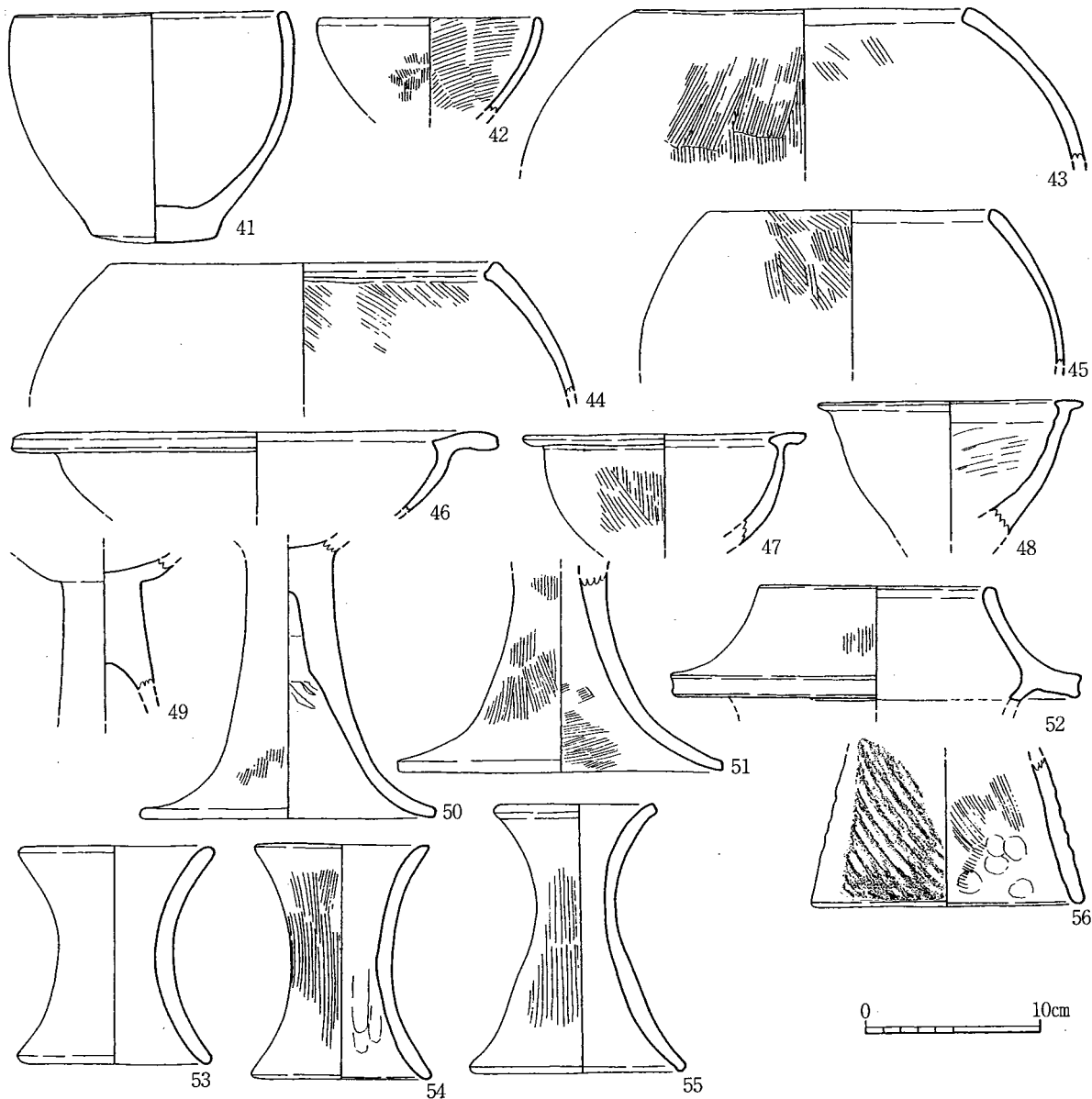
る。脚部内面端部は横方向のハケ調整を行う。10は鋤先口縁の高杯で上面はナデによって窪む。

39号竪穴住居跡 (図版10、第28図)

A区南寄りに位置し、38号竪穴住居跡とほぼ重なり切られる。西側は調査区外に延びる。平面形態は方形で、南北軸は450cm程である。北壁の一部は新しい落ち込みによって立ち上がりの壁が確認できない。また調査区西際の落ち込みも新しいものであり、当住居跡には伴わないものである。支柱穴は判然としない。中央には炉跡かと思われる浅い窪みがあるものの赤変はしていない。東壁中央では浅い落ち込みが存在し、あるいは屋内土坑かとも思われる。

出土土器 (図版36、第29~31図)

11は胴部最大径の位置に刻目突帯を持つ。壺になる可能性がある。突帯は上側を強くナデる。12~15は甕である。12~14は上向きの長い三角突帯を貼り付け、上面を強くナデる。口縁内面の突出も大



第31図 38・39号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/4)

きい。15は丸い大きな突帯を貼り付ける。16は甕の胴部で外面はハケ調整、内面はナデによって仕上げる。17～19は甕の底部である。17・18は高い脚台状のもので、18は擬口縁が確認でき粘土を上側から充填し成形したことが分かる。19は底径が大きく平底を呈する。20は鋤先口縁の丹塗磨研高杯である。21～23は器台である。

以下は38・39号竪穴住居跡切りあい部分からの出土であり、どちらに帰属するかは判別しかねるものである。

24は複合口縁壺であるが、つくりが雑で粗製である。25は壺の底部である。26～33は甕である。26～29はく字形口縁で、屈曲部内面に稜を形成する。27の内面下部は少しケズリが見られる。28の口縁端部は若干肥厚する。29は強い火を受けているためか、器面が剥れる。32は鋤先口縁の甕で胴部に1条突帯を貼り付ける。30は胴部が屈曲しながら張り、口縁部は短く弱いく字形を呈する。器壁が厚く粗製である。31も弱いく字形を呈する。33はやや長い逆L字状の大型甕で、口縁内面は少し突出する。口縁部下に1条突帯を貼り付ける。34～40は甕の底部である。34・35は平底。36・37は高い脚台状を呈する。36は擬口縁が確認できる。38は底面中央が窪む。39・40は丸底である。41・42は鉢である。41は口縁がやや内湾し、底部は分厚い平底を呈する。器面は摩滅している。42は外面ハケ調整の後ナデを行い、内面は横方向のハケ調整を行う。43～45は口縁が大きく内湾する鉢になろうか。44は口縁端部を強くナデることにより窪み、内側に粘土がはみ出る。46～48は鋤先口縁の高杯杯部である。46は端部にかけて肥厚し、強いナデによって窪む。47は杯部が深く、摩滅が激しい。ハケ調整が確認できる。48は器壁が厚く粗い作りであり、しかも赤変している。内面は原体は不明ながら粗いスジのつく調整を行う。49～51は高杯脚部である。いずれも摩滅が激しいが、50・51はハケ調整の痕跡が確認できる。50は脚部内面に工具の圧痕が残る。52は装飾器台の受部である。罌部端部は強いナデによって窪む。器面は摩滅しているがハケ調整の痕跡は残る。53～55は器台である。56は直線的に開く器形で、外面を粗いタタキ調整、内面を細かいハケ調整とユビオサエにより仕上げる。器台になろうか。

40号竪穴住居跡（図版10、第32図）

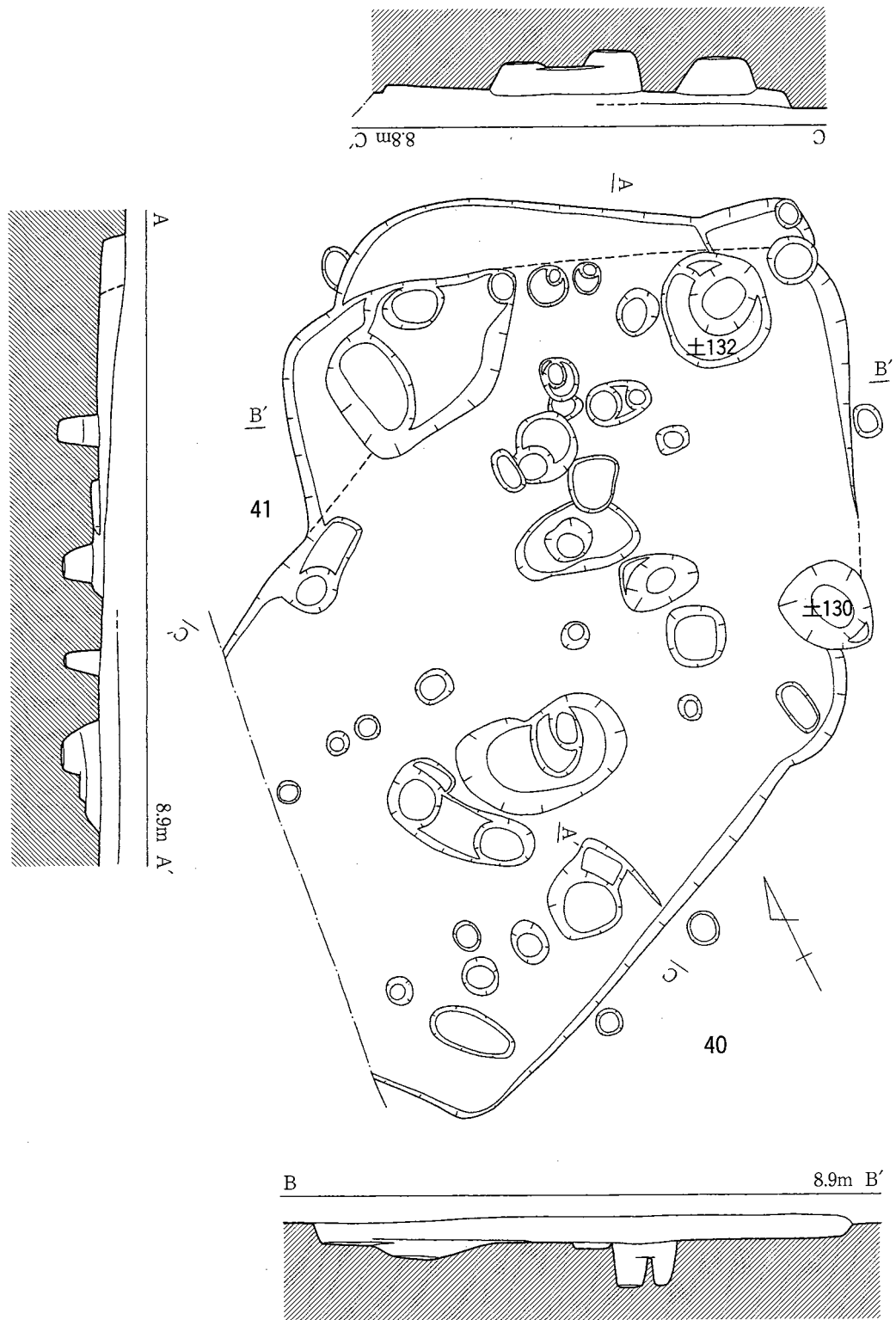
A区中央に位置し、西側は調査区外に延びる。北東側で41号竪穴住居跡と切り合うが、切り合い関係は不明。平面形態は方形で、北西－南東軸は480cm程である。ほぼ中央付近に長楕円形で両端が深いピットとなる落ち込みが存在するが、この落ち込みの埋土に炭が多く見られることから炉跡と思われる。床面は赤変はしていない。支柱穴は不明である。

出土土器（図版36、第33・34図）

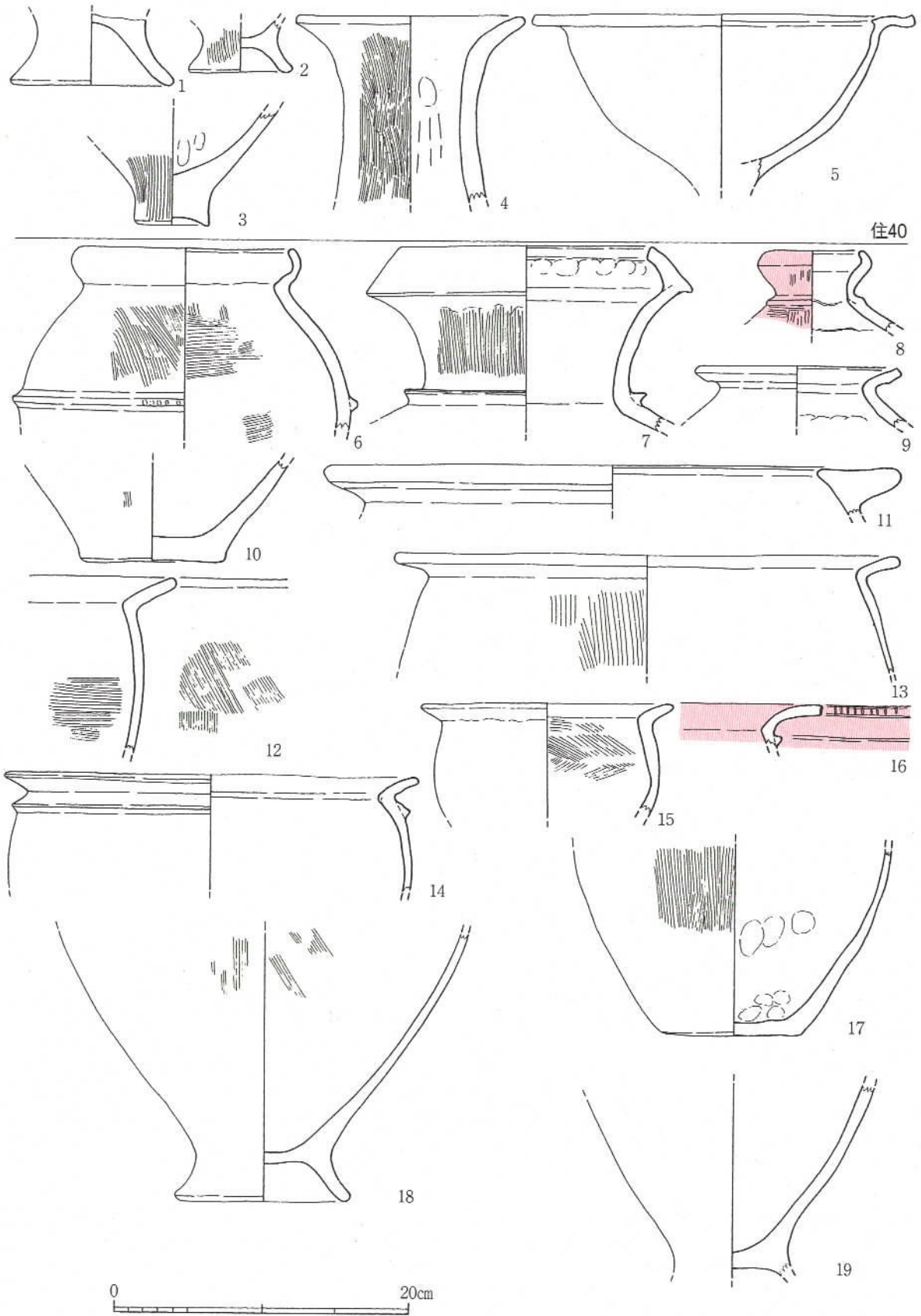
1・2は高く脚台状を呈する甕の底部である。3は軽い上げ底の甕の底部で外面ハケ調整、内面はユビオサエを施す。4は器台で外面ハケ調整、内面はユビオサエを施す。5は杯部が深い鋤先口縁の高杯で、全面摩滅している。

41号竪穴住居跡（図版11、第32図）

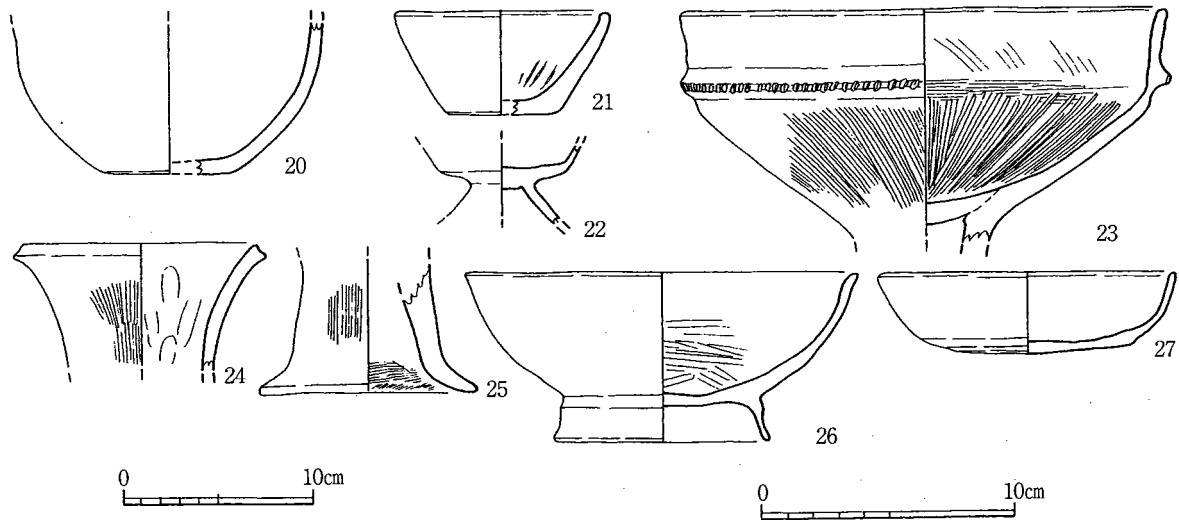
A区中央に位置し、南西側では40号竪穴住居跡と切り合う。平面形態は方形で、東西軸は520cmである。北壁は張り出す箇所が存在するが、これは当住居跡とは関係なく、図の破線部分が北壁になると思われる。北西隅付近には落ち込みが存在し、浅いきらいはあるがその位置から屋内土坑の可能性も考えられる。中央付近と思われる箇所には楕円形の炭を多く含んだ浅い落ち込みが存在し、炉跡と



第32图 40·41号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第33图 40·41号竖穴住居跡出土土器実測図① (1/4)



第34図 40・41号竪穴住居跡出土土器実測図② (26・27は1/3、他は1/4)

思われる。この炉跡と北壁との距離を反転させた箇所、40号竪穴住居跡の炉跡の北東側に土坑が存在し、これが41号竪穴住居跡南壁際の屋内土坑になる可能性が高い。

出土土器 (図版36、第33・34図)

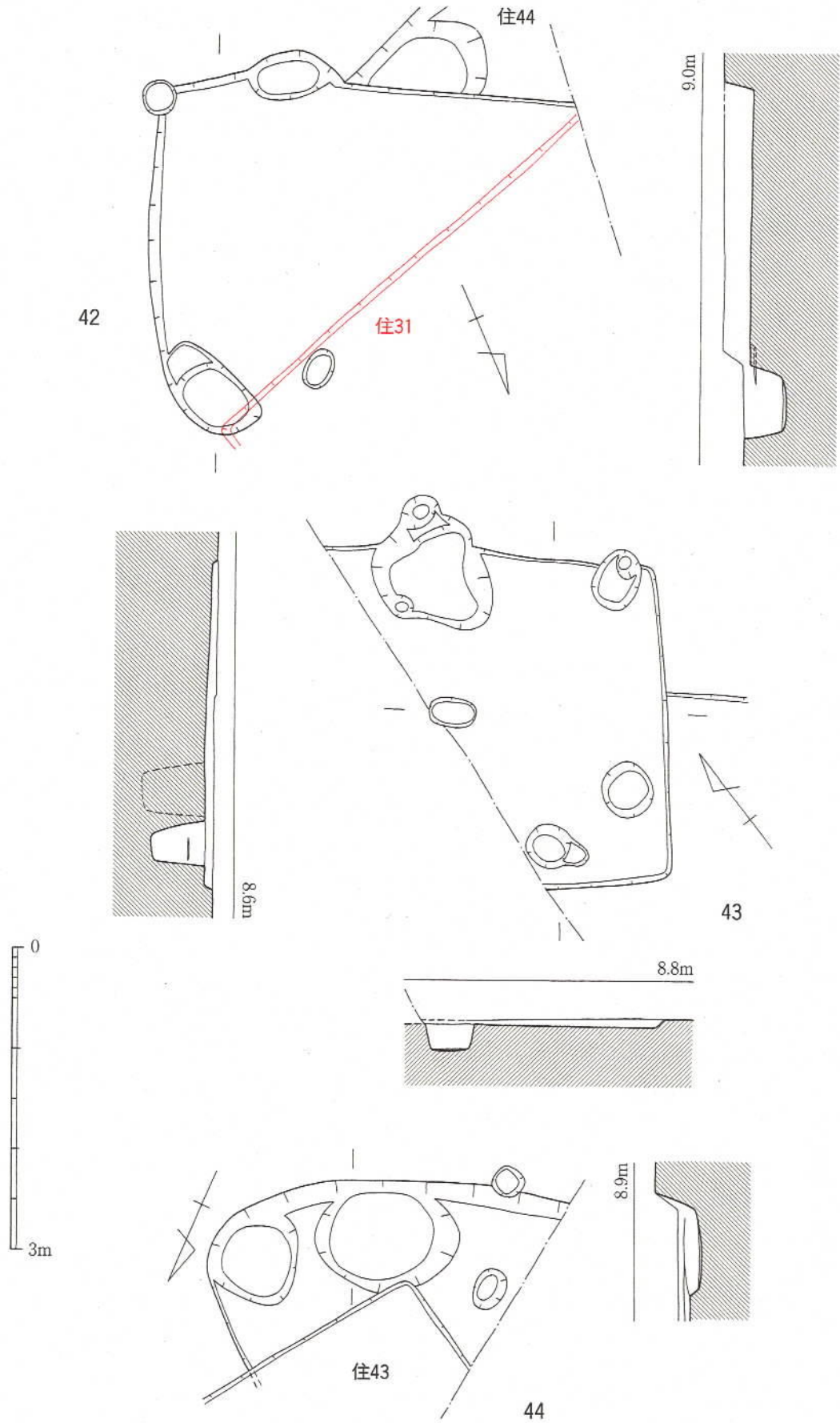
以下は、40・41号切り合い部分からの出土である。6～8は複合口縁壺である。6は胴部最大径の位置に1条突帯を貼り付ける。口縁部はく字形に屈曲し、端部にかけて丸味をもって内湾する。7は頸胴部界に突帯を貼り付ける。口縁屈曲部外面は突出する。頸部外面は細かいハケ調整を行い、口縁内面はユビオサエを施す。8は丹塗磨研を施す。頸胴部界に突帯を貼り付け、口縁部は軽い稜を有し内湾する。9は頸部がしまるため壺にならうか。口縁端部は少し跳ね上げ気味に収める。10は壺の底部で平底である。11～16は甕である。12・13はく字形口縁で、13は端部にかけて肥厚する。14は屈曲部内面が突出し、屈曲部下に1条突帯を貼り付ける。16は丹塗磨研を施し、屈曲部下に突帯を貼り付ける。屈曲部内面は突出気味に稜を持ち、口縁端部は刻目を施す。17～19は甕の底部である。17は平底を呈し、外面ハケ調整、内面にユビオサエを施す。18・19は高い脚台状を呈する。20・21は鉢である。21は摩滅が激しいが、内面に工具の圧痕が残る。22・23は高杯である。23は口縁部が弱く屈曲して立ち上がり、屈曲部直上に刻目突帯を貼り付ける。杯部外面はハケ調整、内面は縦方向のミガキ調整が確認できる。杯部底面は粘土を充填している。24・25は器台である。26・27は土師器杯である。26は高い高台を有し、内面はミガキ調整を行う。27の底面はヘラ切りの痕跡が確認できる。

42号竪穴住居跡 (図版11、第35図)

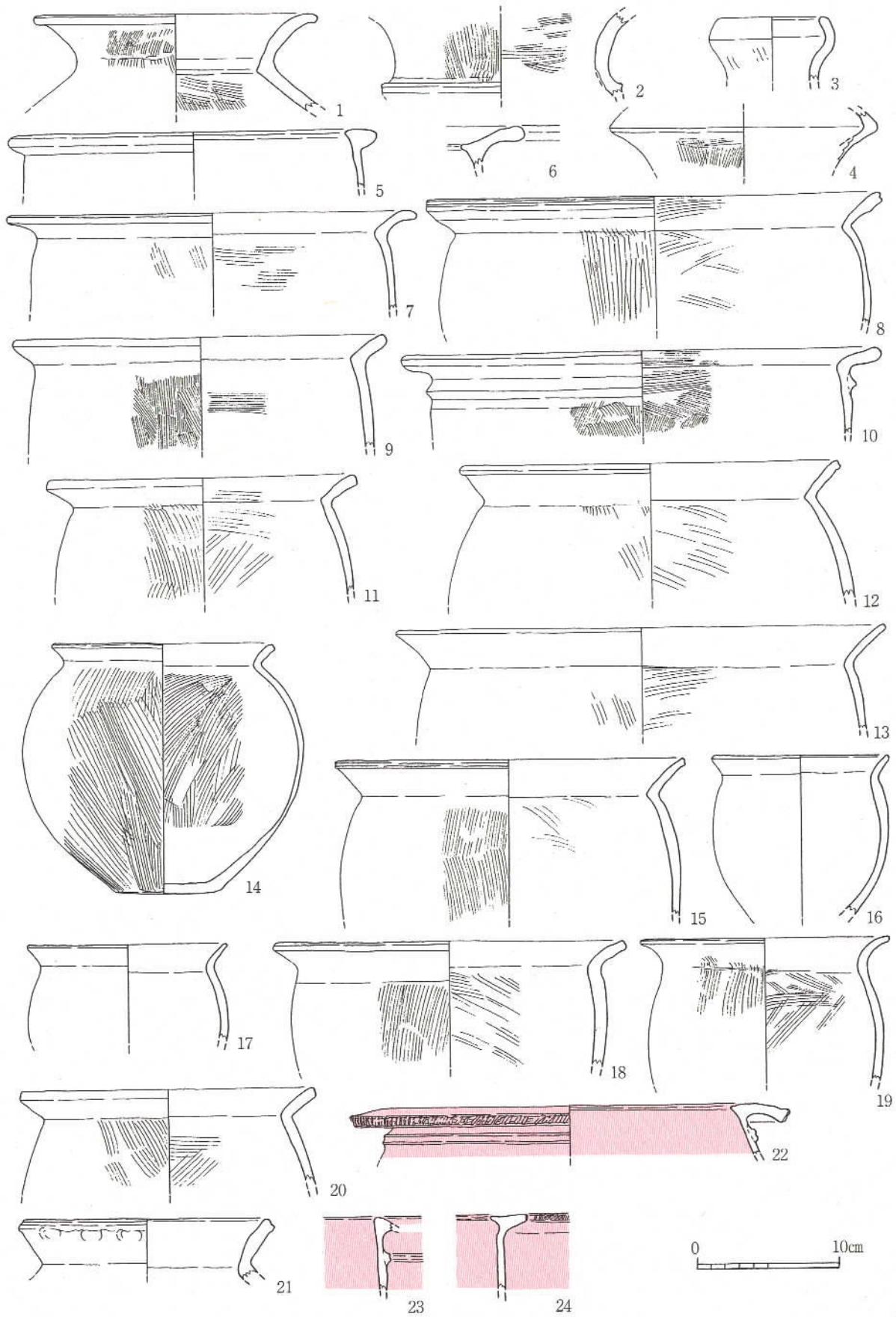
A区中央に位置する。44号竪穴住居跡に切り、31号竪穴住居跡に切られる。平面形態は方形であるが、北側を31号竪穴住居跡によって壊されており詳細は不明である。東壁際に土坑が存在するが、当住居跡よりも新しい可能性もある。東側は44号竪穴住居跡と切り合っているために床面の検出に苦慮し掘りすぎてしまった。支柱穴等は判然としない。

出土土器 (図版36、第36・37図)

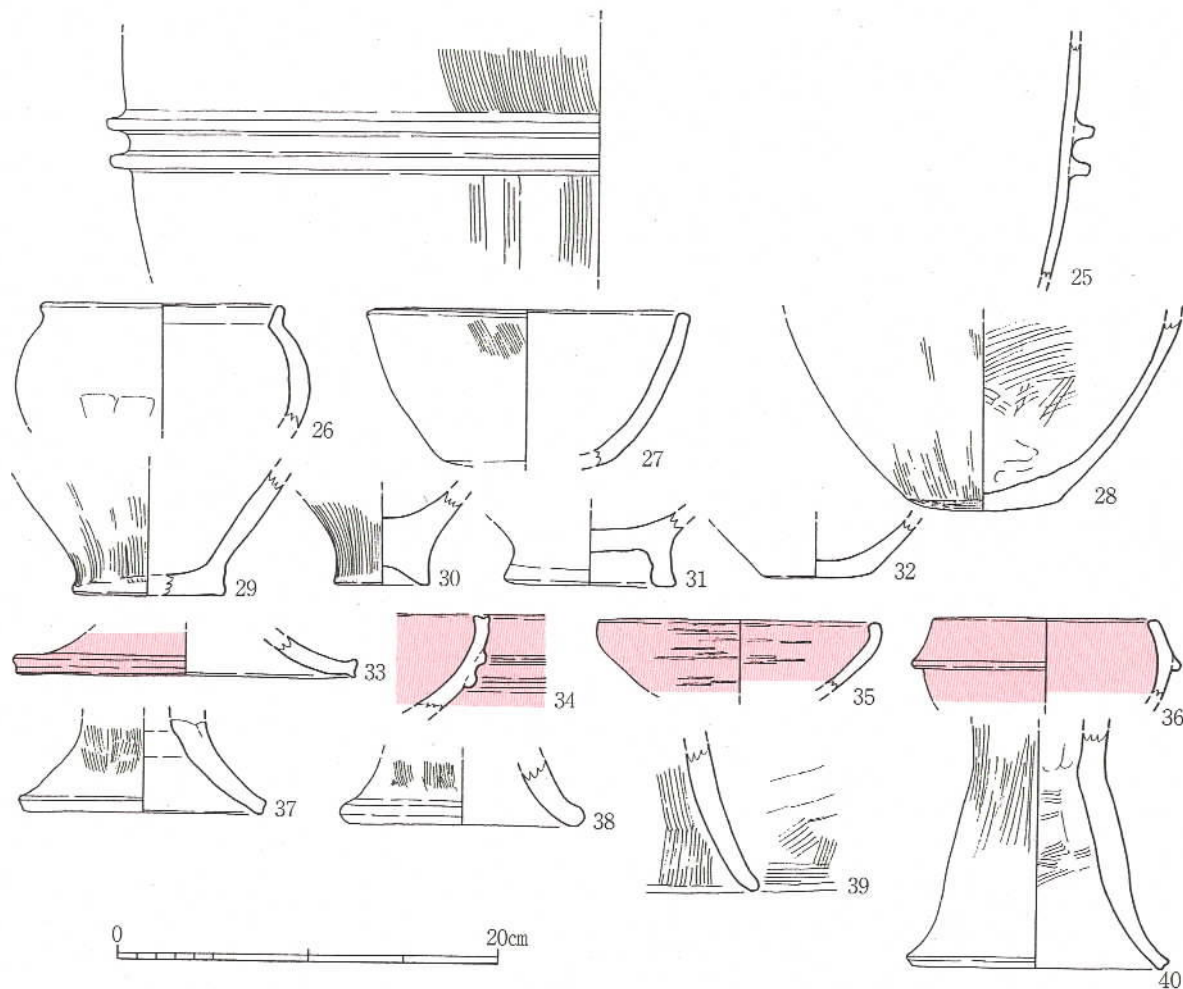
1・2は広口壺である。1はく字形に屈曲し、内外面ハケ調整が確認できる。2は頸胴部界に1条



第35図 42~44号竖穴住居跡実測図 (1/60)

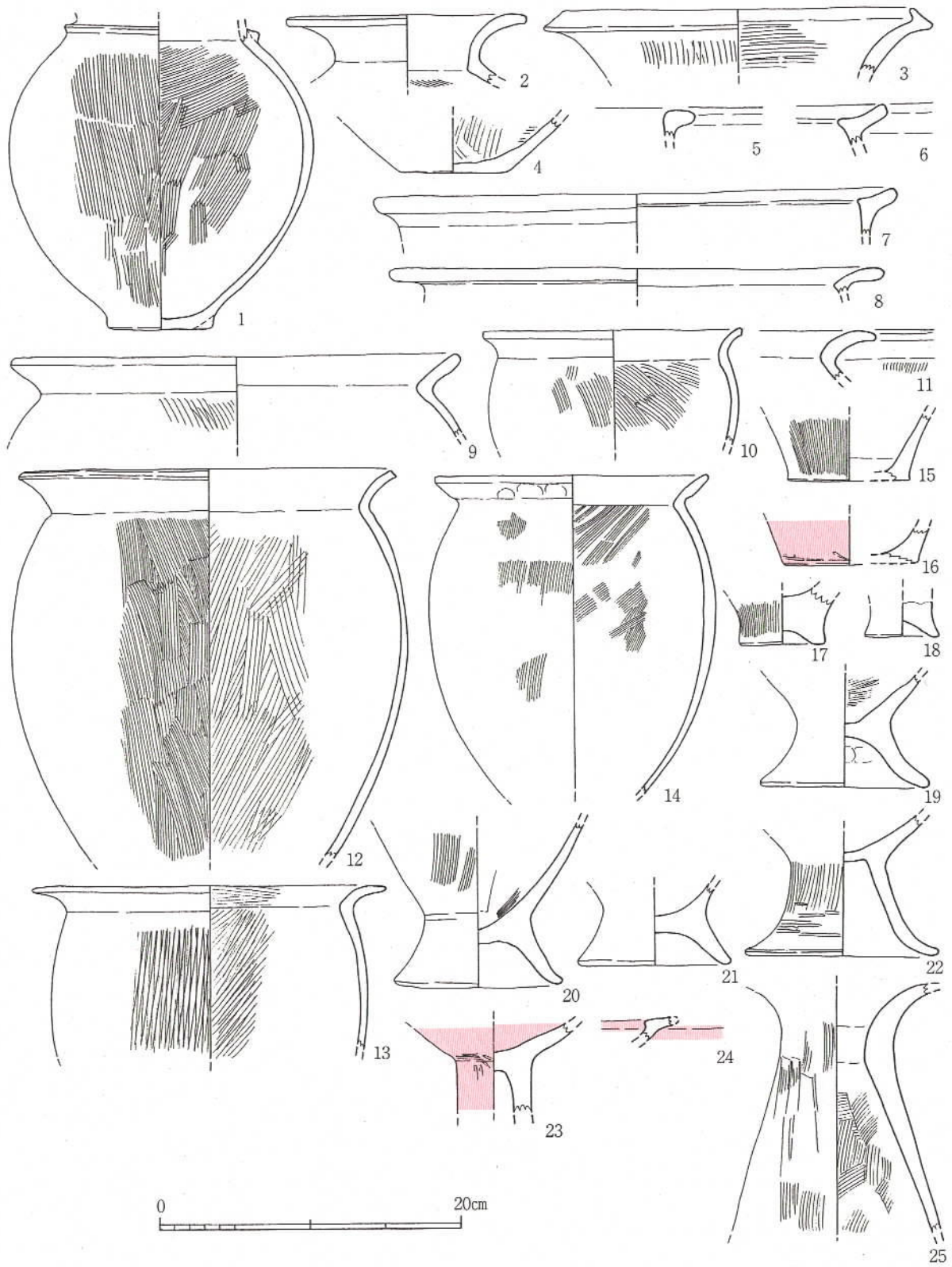


第36图 42号竖穴住居跡出土土器实测图① (1/4)

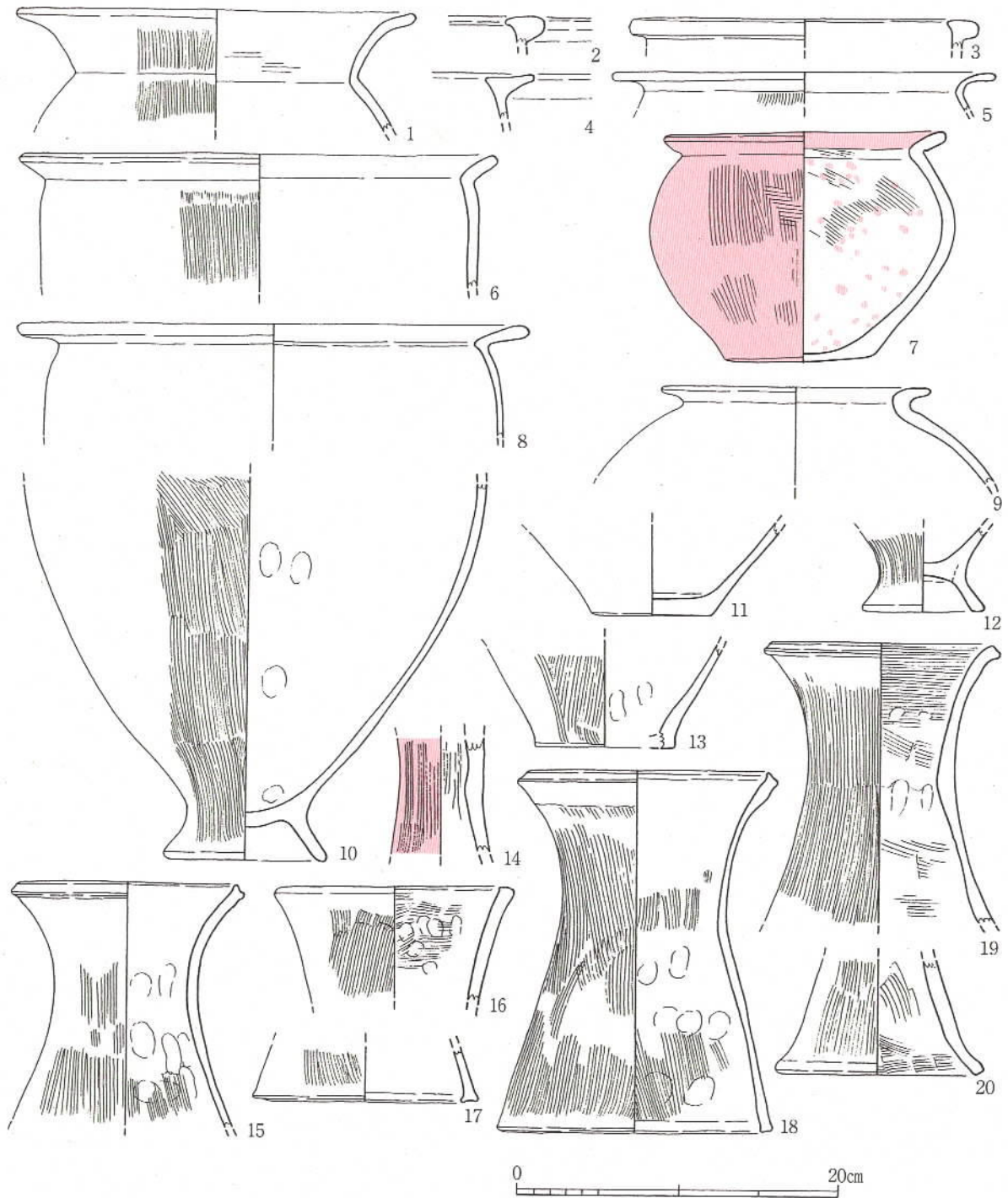


第37図 42号竪穴住居跡出土土器実測図② (1/4)

突帯を貼り付ける。3・4は複合口縁壺である。器面は摩滅しているが、頸部外面にハケ調整の痕跡が確認できる。5～21は甕である。5は外面に大きな突帯を貼り付ける。6は鋤先口縁を呈し、端部は丸味を帯びて肥厚する。10は屈曲部下に突帯を貼り付け、口縁端部は肥厚し丸く収める。7～9、11～16、20・21はく字形口縁を呈しハケ調整を行う。8のハケ調整は粗い。17～19は稜を持たず、口縁部はやや外反して開く。22～24は丹塗磨研甕である。22は鋤先口縁を呈し、端部は肥厚し刻目を施す。屈曲部下にM字形突帯を貼り付ける。23の口縁端部は欠損している。胴部上位にM字形突帯を貼り付ける。24は鋤先口縁で端部に刻目を施す。25は甕の胴部破片である。高い突帯を2条貼り付ける。26は胴部が丸く張り、口縁部は短く、く字形を呈する。胴部下位はケズリを施す。鉢になろうか。27は鉢で口縁端部はナデによって窪む。28～32は甕の底部である。29は平底で外にやや張り出す。胎土にカクセン石を多く含み特徴的である。31は垂直気味に立ち上がる脚台状の底部。32は壺の可能性もあるが小さな平底を呈する。33～36は丹塗磨研土器である。33は高杯脚部と思われ、端部は強いナデによって窪み上下に拡張する。34～35は高杯杯部片で、34の口縁端部は強いナデによって窪み、胴部は2条の突帯を貼り付ける。36は高杯か器台になろうか。屈曲部は丸味を帯び、外面に突帯を貼り付ける。37～40は器台である。37・40は脚部端部がナデによって窪む。当住居跡は出土土器に時間幅があるが、く字形口縁の甕から概ね弥生時代後期に比定できよう。



第38图 43号竖穴住居出土土器实测图 (1/4)



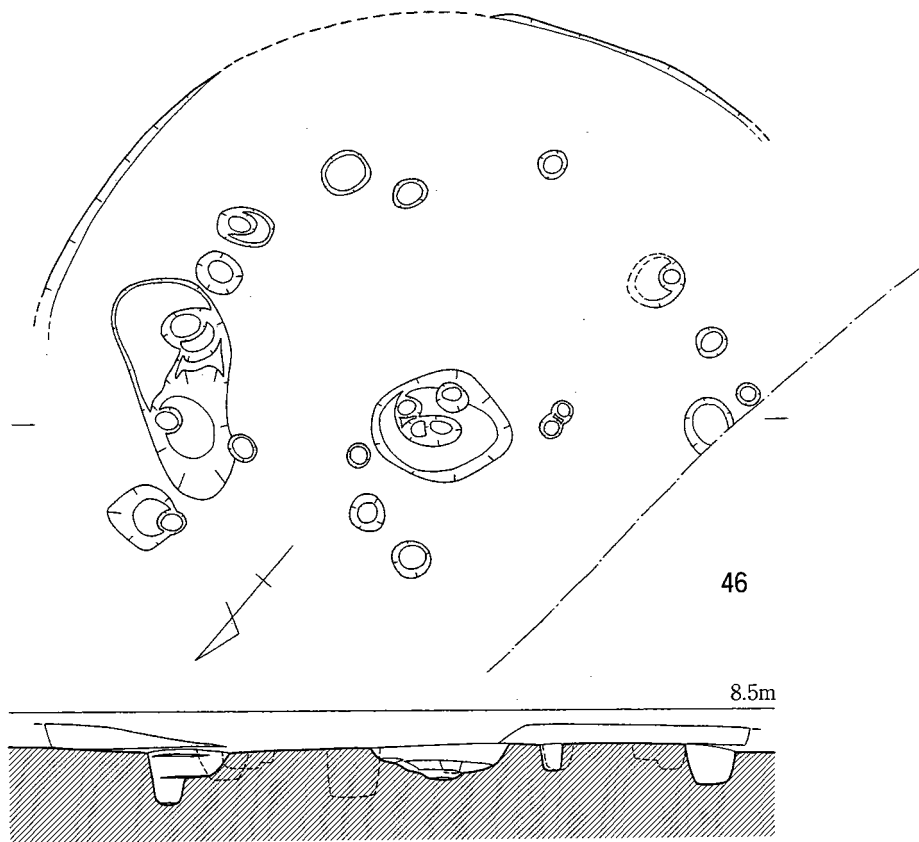
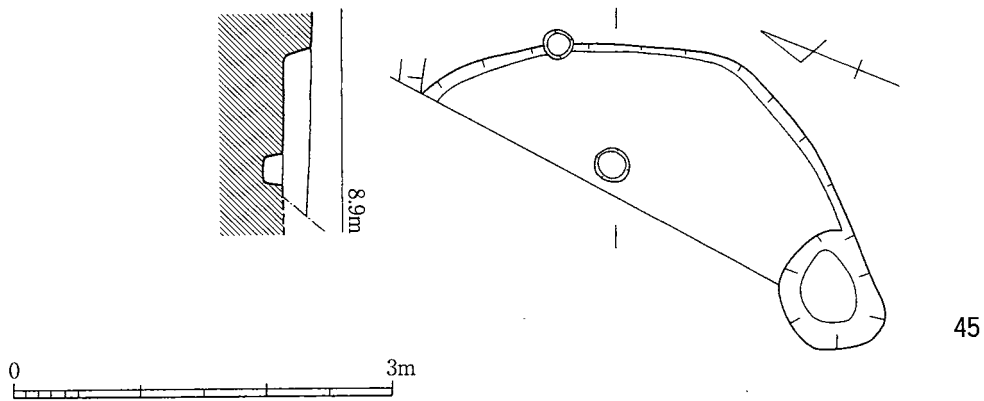
第39図 44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

43号竪穴住居跡 (図版11、第35図)

A区中央に位置し、44号竪穴住居跡を切り、31号竪穴住居跡に切られる。平面形態は方形で、北東-南西軸は330cmである。西側は調査区外に延びる。北壁は当住居跡よりも新しい土坑によって壊されている。支柱穴および炉跡は判然としない。

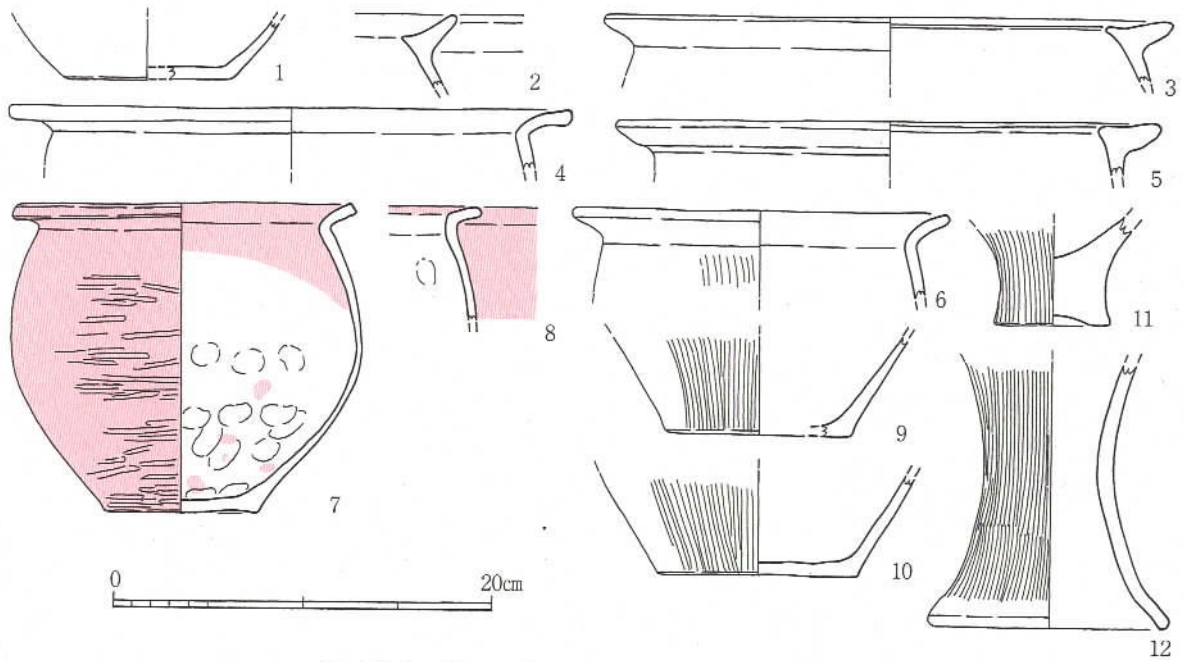
出土土器 (図版37、第38図)

1~3は壺である。1は長胴で、頸胴部界に突帯を貼り付ける。内外面ハケ調整を行う。2はく字形に屈曲する広口壺である。屈曲部は内面に稜を形成する。3は広口壺の口縁部が上方に拡張する。



第40図 45・46号竪穴住居跡実測図 (1/60)

頸部内外面は粗いハケ調整を行う。4は壺の底部で内面は粗いハケ調整を行う。5～14は甕である。5は外面に大きな突帯を貼り付ける。6・7は鋤先口縁を呈する。8は鋤先口縁の名残りを残し、内面に小さく突出する。口縁端部は肥厚し丸く収める。9～14はく字形を呈し、ハケ調整を行う。15～21は甕の底部である。15・16は平底で16は丹塗磨研のものである。17・18は軽い上げ底である。19～21は脚台状を呈する。22～24は高杯である。22は脚部が短くハケ調整、裾部は横方向のミガキ調整を行う。23・24は丹塗磨研のもので、24は鋤先口縁を呈するが端部は欠損する。25は器台である。当住居跡は出土土器に時間幅があるが、く字形口縁の甕から概ね弥生時代後期に比定できよう。



第41図 45号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

44号竪穴住居跡 (図版11、第35図)

A区中央に位置し、31・42・43号竪穴住居跡に切られる。平面形態は方形をなすと思われるが西側は調査区外に延び詳細は不明である。壁際に屋内土坑かと思われるものが存在する。

出土土器 (図版37、第39図)

1は広口壺でハケ調整が確認できる。2～10は甕である。2・3は外面に突帯を貼り付ける。4は長い三角形の口縁を呈する。5～9はく字形口縁のものである。5は口縁端部が肥厚する。7は器高が低く、内面は部分的に丹が付着する。8は鋤先口縁の名残りを残し、端部は肥厚し丸く収める。9は胴部が大きく張り出し、口縁部は短いが外に強く開く。10～13は甕の底部である。10・12は脚台状のもので、12は内面から粘土を充填した痕跡が確認できる。11・13は平底である。14は丹塗磨研高杯の脚柱部で、内面にシボリ痕が確認できる。15～20は器台である。外面はハケ調整、内面はハケ調整とユビオサエで仕上げ、端部はナデにより窪むものが多い。当住居跡は出土土器に時間幅があるが、く字形口縁の甕から概ね弥生時代後期に比定できよう。

45号竪穴住居跡 (図版12、第40図)

A区中央、44号竪穴住居跡の南に位置する。平面形態は隅丸方形と思われるが、西側が調査区外に延びるため詳細は不明である。南壁際に径45cm程の落ち込みが存在するが、これは当住居跡よりも新しい可能性が高い。

出土土器 (図版37、第41図)

1は壺の底部である。2～6は甕である。2・3・5は鋤先状を呈し、4・6はく字形を呈する。4の口縁端部は肥厚する。7・8は丹塗磨研甕である。7は内面の丹塗りは口縁部付近のみであるが、底部付近に丹がたれている。内面はユビオサエを施す。8も内面の丹塗部分は口縁内面に限られている。9・10は甕の底部で平底である。11は甕の底部で軽い上げ底を呈する。12は器台である。当住居跡は出土土器に時間幅があるが、く字形口縁の甕から概ね弥生時代後期に比定できよう。

46号竪穴住居跡 (図版12、第40図)

A区北側に位置し、20・24・25号竪穴住居跡に切られる。平面形態は円形で径は復元で650~660cm程になると思われる。かなりの部分が削られており、わずかに東壁の一部と床面のピット等を確認したにすぎない。中央には楕円形の落ち込みが存在し、炉跡になるかと思われる。支柱穴は特定できないが、炉を中心に求心状に配置されるようである。埋土は他の住居跡とは異なり、橙色の強い粘質土である。当住居跡からは図化する土器は出土していないが、形態等から弥生時代中期初頭頃に比定できると思われる。

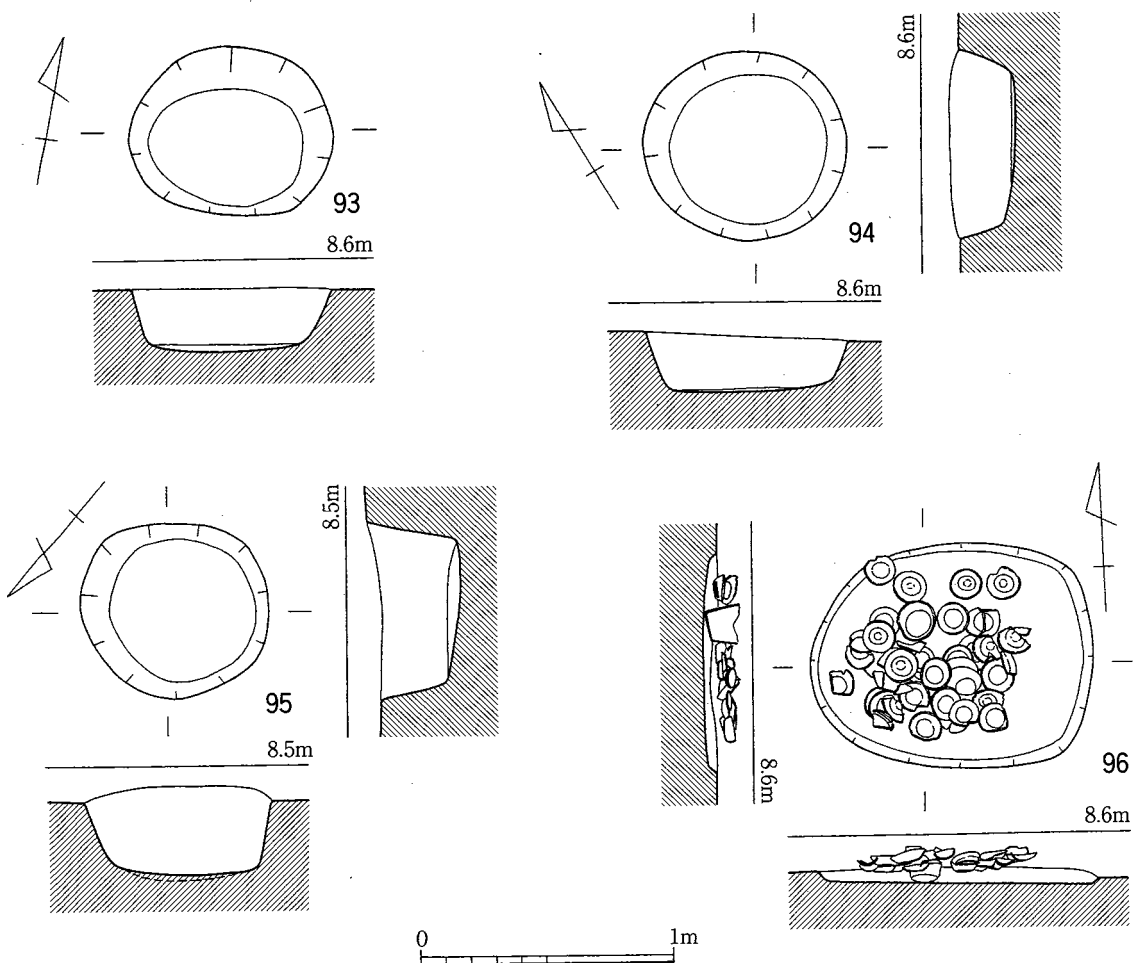
(3) 土坑

93号土坑 (図版12、第42図)

A区北側の上層において検出した。平面形態は楕円形で、長軸82cm、短軸64cmである。床面は平坦で壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器 (第43図)

1・2は土師器杯、3は土師器皿である。当土坑は中世に比定できよう。



第42図 93~96号土坑実測図 (1/30)

94号土坑（図版13、第42図）

A区北側、93号土坑の東に位置し、上層において検出した。平面形態は円形で、径80cmである。床面は平坦で壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器（図版36、第43図）

4は複合口縁壺、5は鋤先口縁の甕である。6は立ち上がる口縁部外面に3条の浅い凹線を施す。山陰系の甕であろうか。7は器台で内面はユビオサエを施す。

95号土坑（図版13、第42図）

A区北側、96号土坑の北東に位置し、上層において検出した。平面形態は円形で、径75cmである。床面は南に傾斜し、壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色土に多量の焼土と炭を含む。

出土土器（第43図）

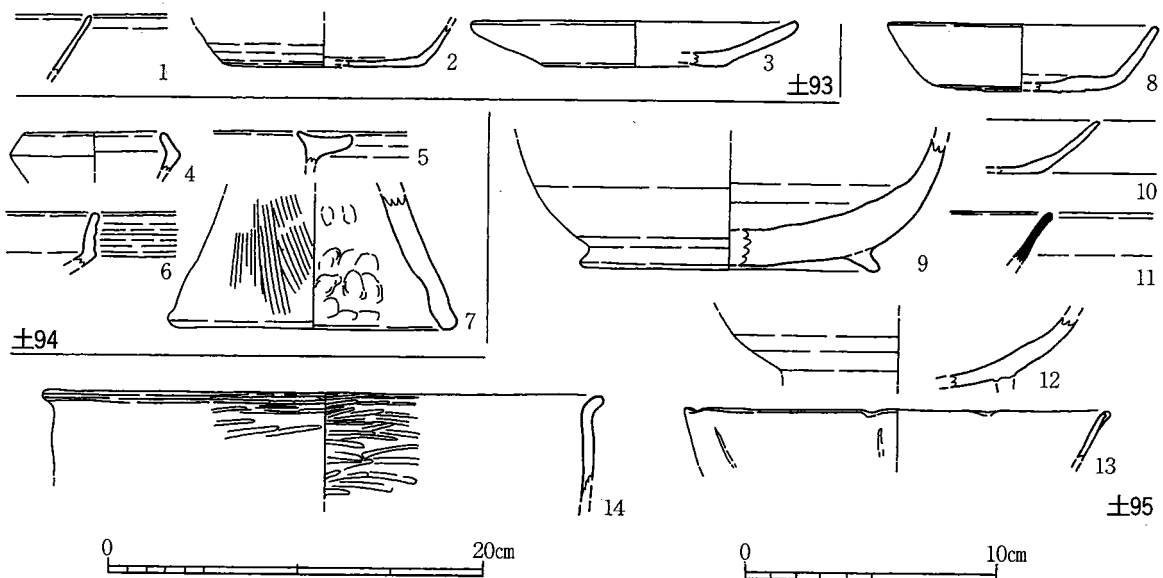
8～10は土師器杯である。9は器壁が厚く小さな高台が取り付く。11は須恵器杯、12は瓦器碗である。12は高台部分が剥れている。器面は摩滅している。13は竜泉窯の青磁である。蓮弁が描かれるが小破片のため構図はよく分からない。口縁部には切り込みが入る。14は如意状に軽く外反する弥生土器の甕で、内外面ミガキ調整を行う。当土坑は中世に比定できよう。

96号土坑（図版13、第42図）

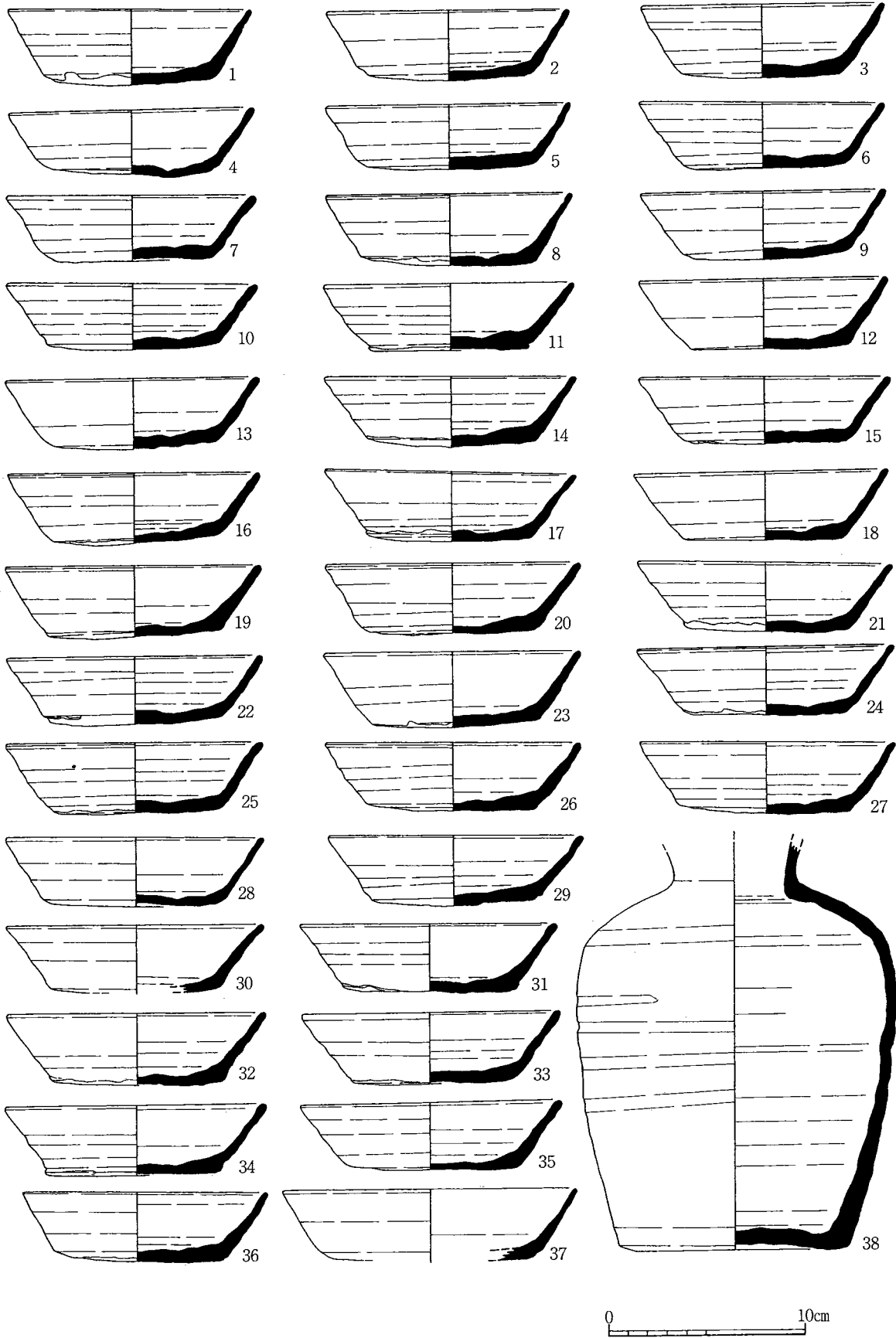
A区北側95号土坑の南西に位置し、上層において検出した。平面形態は隅丸長方形に近く、長軸112cm、短軸90cmである。当初は平面プランを確認できず、須恵器が集中している箇所であったため精査を試みたところ、包含層を切り込む格好で、若干暗い色調の土坑の輪郭を確認することができた。従って本来は土坑自体の壁面はもっと立ち上がり、深いものであったと思われる。床面は平坦で、ほぼ接する格好で須恵器が杯を中心に多量に重なり合って出土している。

出土土器（図版37・38、第44図）

1～37は須恵器杯身である。底部は粘土紐の巻上げにより成形を行い、内面は中央が盛り上がる。



第43図 93～95号土坑出土土器実測図（4～7・14は1/4、他は1/3）



第44图 96号土坑出土土器实测图 (1/3)

底面は静止ヘラ切りの痕跡が確認できる。7は中央から口縁端部にかけて外に開く。38は須恵器の壺で、頸部が細くすぼむ。当土坑は奈良時代に比定できよう。

97号土坑（図版14、第45図）

A区北側に位置し、19号・23号竪穴住居跡を切る。平面形態は楕円形を呈し、西側は調査区外に延びる。南北軸は110cm程である。床面は平坦であるがやや西側が浅くなる。壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器（第46図）

1～4は甕で口縁部外面に突帯を貼り付ける。3は胴部上位にも突帯を持つ。

98号土坑（図版14、第45図）

A区北壁に接して位置し、18号竪穴住居跡を切る。北側は調査外に延びる。平面形態は楕円形で、長軸約110cm、短軸88cmである。北側が一段楕円形に落ち、二段掘りの形態をなす。壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器（第46図）

5は壺の胴部破片である。上位にヘラ書き沈線文を展開する。6は口縁部外面に大きな突帯を貼り付ける甕である。7・8はく字形口縁の甕で端部に板状工具による刻目を施す。

99号土坑（図版14、第45図）

A区北壁に接して位置し、18号竪穴住居跡を切る。検出時は南北に長い楕円形を呈すると思われたが、掘削を進めていくうちに北側が落ち、この部分が隅丸方形を呈することから、南側は別の遺構が切り合っていると思われる。南北軸は約110cm、東西軸は90cmである。床面は平坦であり、壁面は外傾して立ち上がる。埋土は上層は地山ブロックを含み、下層は暗褐色粘質土である。

出土土器（第46図）

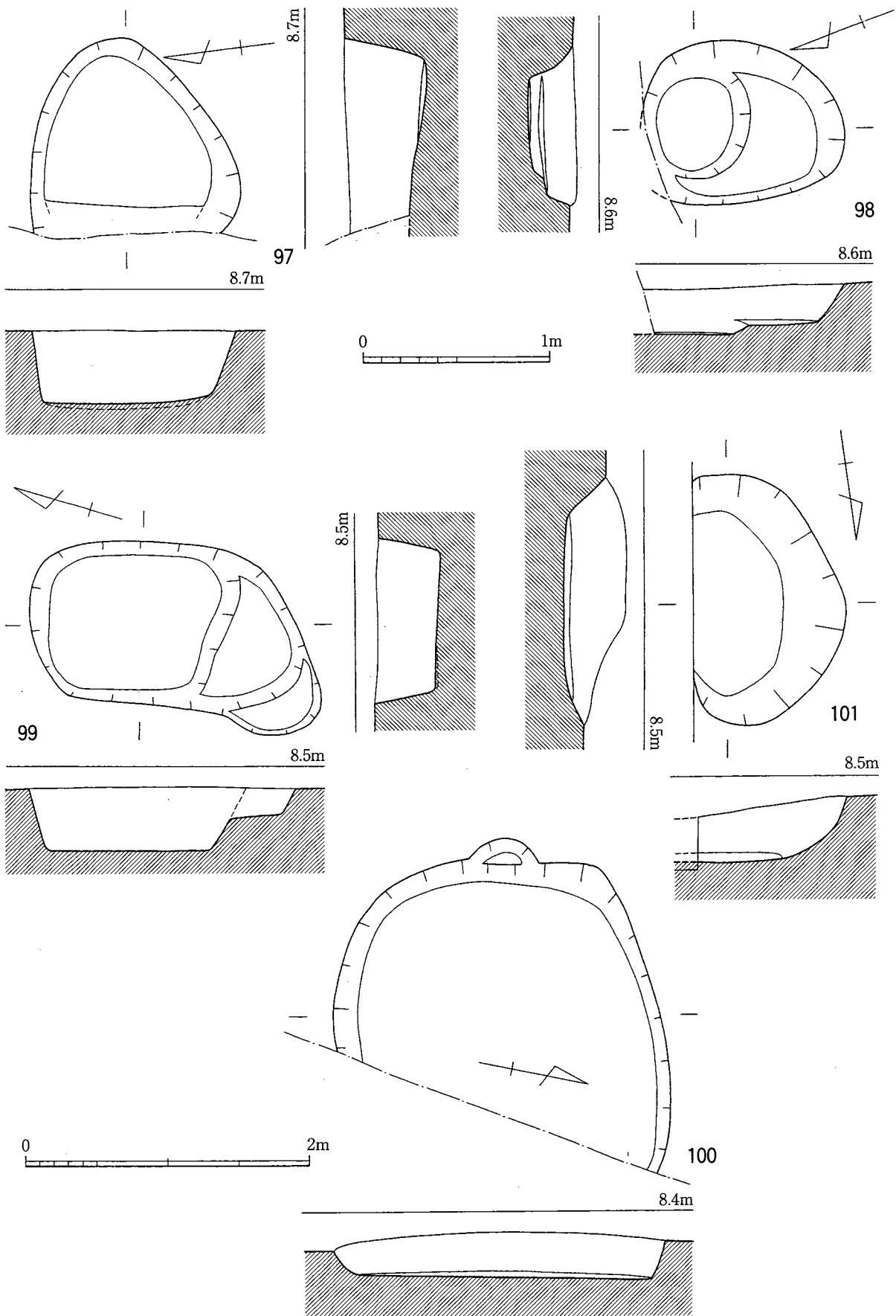
9は壺の口縁部か。端部はナデによって窪み、器面はハケ調整の後ナデによって仕上げる。10は底部で小さな平底を呈する。

100号土坑（図版15、第45図）

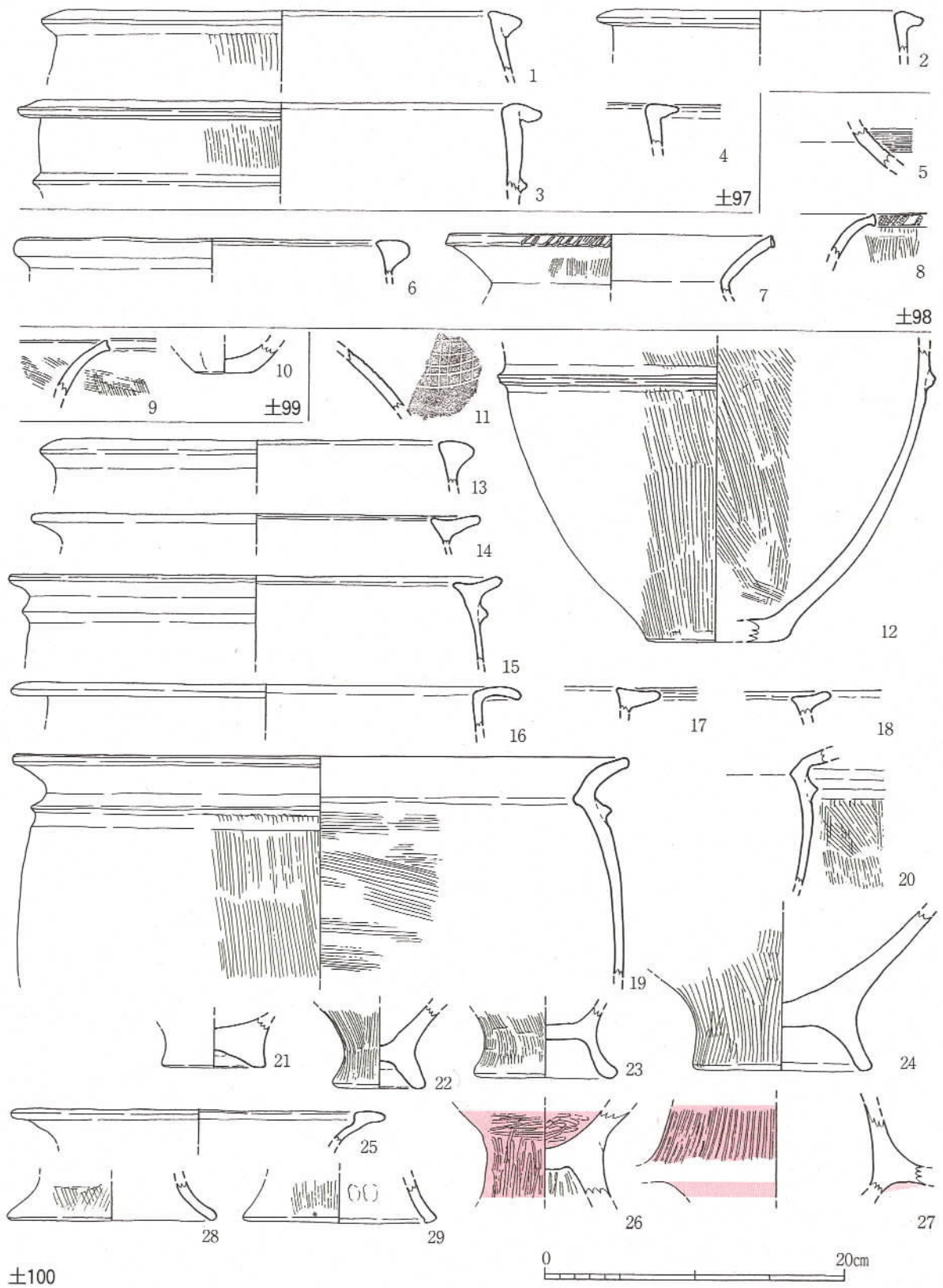
A区北側に位置し、18号竪穴住居跡を切り、118号土坑に切られる。東側は調査区外に延びる。平面形態は隅丸方形を呈し、南北軸は175cmである。床面は平坦で壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は黒褐色粘質土、下層は地山ブロックを含んだものである。

出土土器（第46図）

11は壺の胴部破片で、上位にヘラ書きによる格子文様を施す。12は壺か甕か不明であるが、胴部最大径の位置に突帯を貼り付ける。内外面ハケ調整を行う。13～20は甕である。19・20は鋤先口縁の名残りで屈曲部内面が突出する。外面に1条の突帯を貼り付ける。21～24は甕の底部である。23・24は脚台状を呈する。25・26は高杯で、26は丹塗磨研のものである。27は丹塗磨研の装飾器台で、口縁部及び鏝部は欠損している。28・29は器台裾部である。当土坑は19・20の甕から弥生時代後期初頭頃に比定できよう。



第45図 97~100号土坑実測図 (100号は1/40、その他は1/30)



第46图 97~100号土坑出土土器实测图 (1/4)

101号土坑（図版15、第45図）

A区北側、24号竪穴住居跡の南に位置する。東側は調査区外に延びる。平面形態は楕円形で、南北軸は133cmである。床面は平坦で、壁面はやや緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に黄褐色粘質土の地山ブロックが多量に含まれる。

出土土器（第49図）

1は頸部が短いが大きく開く壺である。

102号土坑（図版15・16、第47図）

A区北側、101号土坑の北西に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長軸108cm、短軸58cmである。北側に浅く張り出す箇所があるが、これは土層断面の観察からも分かるように、当土坑よりも古い落ち込みである。床面は平坦であるが、東寄りの箇所に甕が埋設されており、この部分のみ若干深くなる。壁面はやや緩やかに外傾して立ち上がる。埋土は甕の内部に砂が堆積している他は暗褐色粘質土である。

出土土器（図版38、第49図）

2は鋤先口縁の甕で器面はナデによって仕上げる。3は甕の胴部～底部で、1条の突帯を貼り付ける。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ及びユビオサエを施す。4は口縁外面に大きな突帯を貼り付ける甕である。5は鋤先口縁甕で、口縁部外面にユビオサエが確認できる。6は高杯で脚部端部はナデによって窪む。裾部は縦方向のミガキ調整を行う。7は器台である。

103号土坑（図版16、第47図）

A区北側に位置し、25号竪穴住居跡を切る。平面形態は楕円形で、長軸91cm、短軸72cmである。西壁はやや段を持ちながら床面に達し、床面中央やや西寄りで径10cm程ピット状に落ちる箇所がある。西壁以外の壁面はやや緩やかに外傾して立ち上がる。

出土土器（第49図）

8は甕の底部で高い脚台状を呈する。外面はハケ調整を行う。

104号土坑（図版16、第47図）

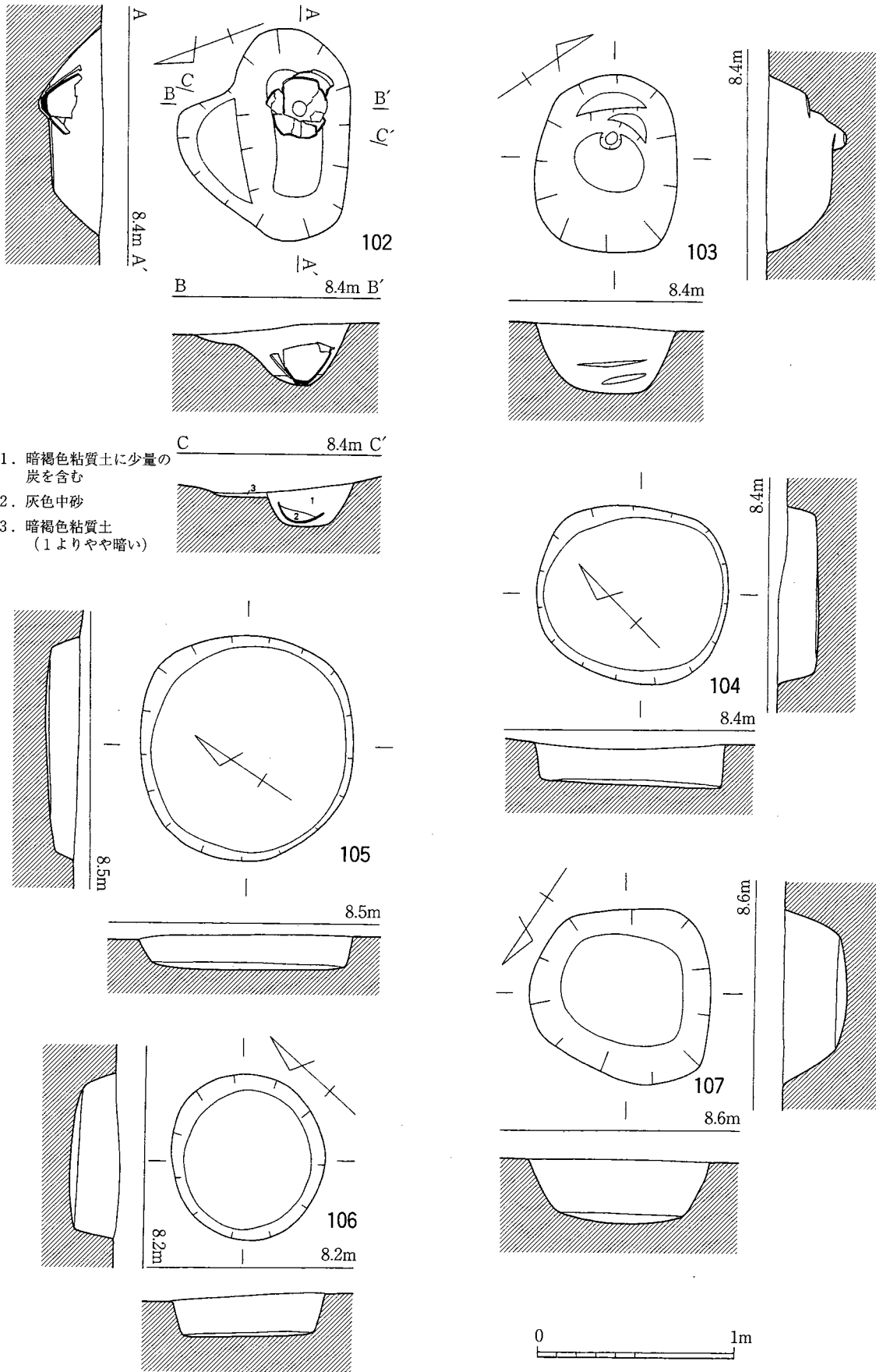
A区北側に位置し、24号竪穴住居跡を切る。平面形態は円形で、径は90～98cmである。床面は平坦で、壁面は垂直ぎみに立ち上がる。

出土土器（第49図）

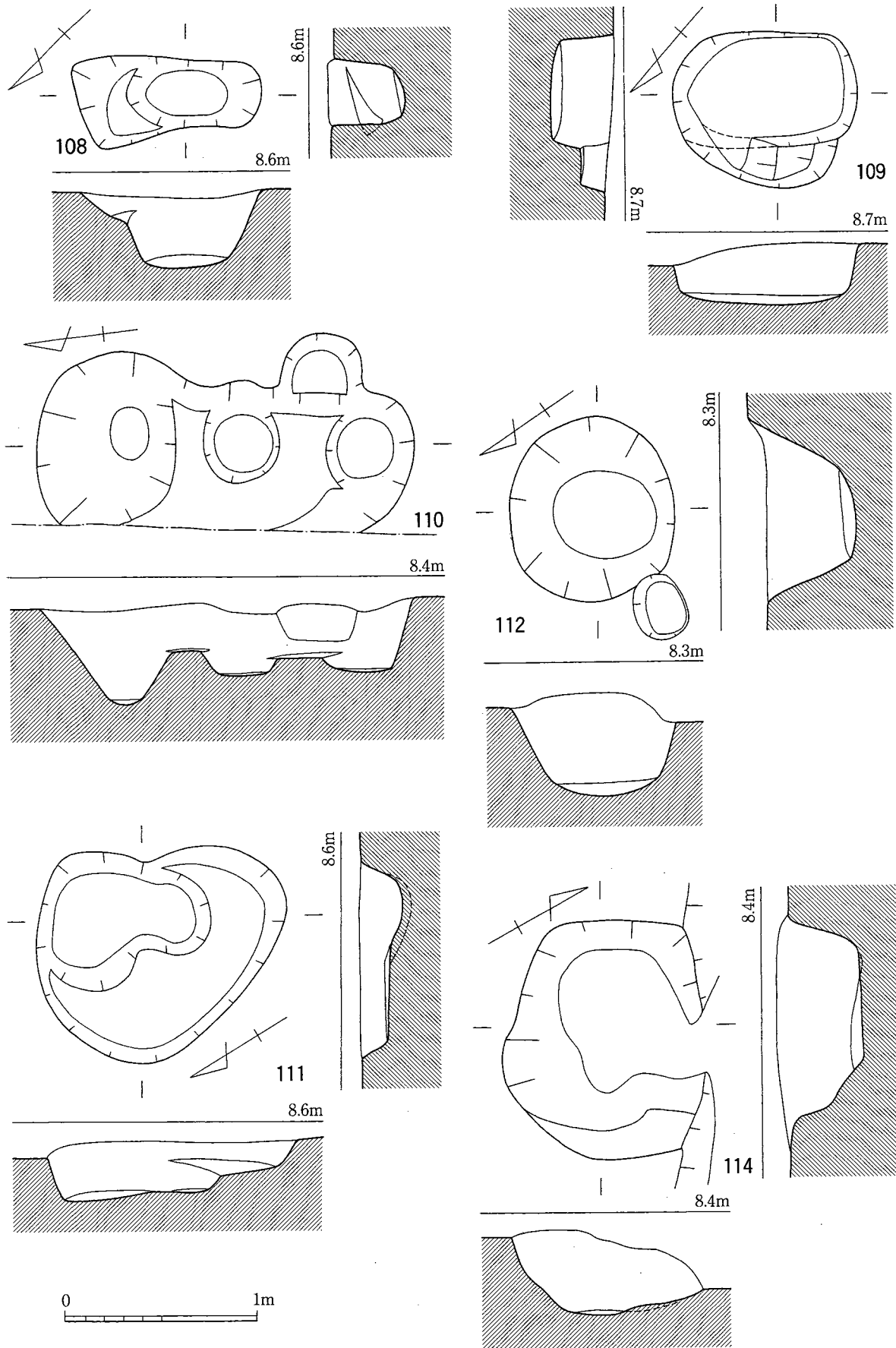
9はく字形口縁の甕で、端部に板状工具による刻目を施す。10は鋤先口縁の丹塗磨研甕で、端部に刻目を施す。11は黒色土器A類の土師器杯で、小さな高台が取り付け。12も黒色土器A類の土師器杯である。

105号土坑（図版17、第47図）

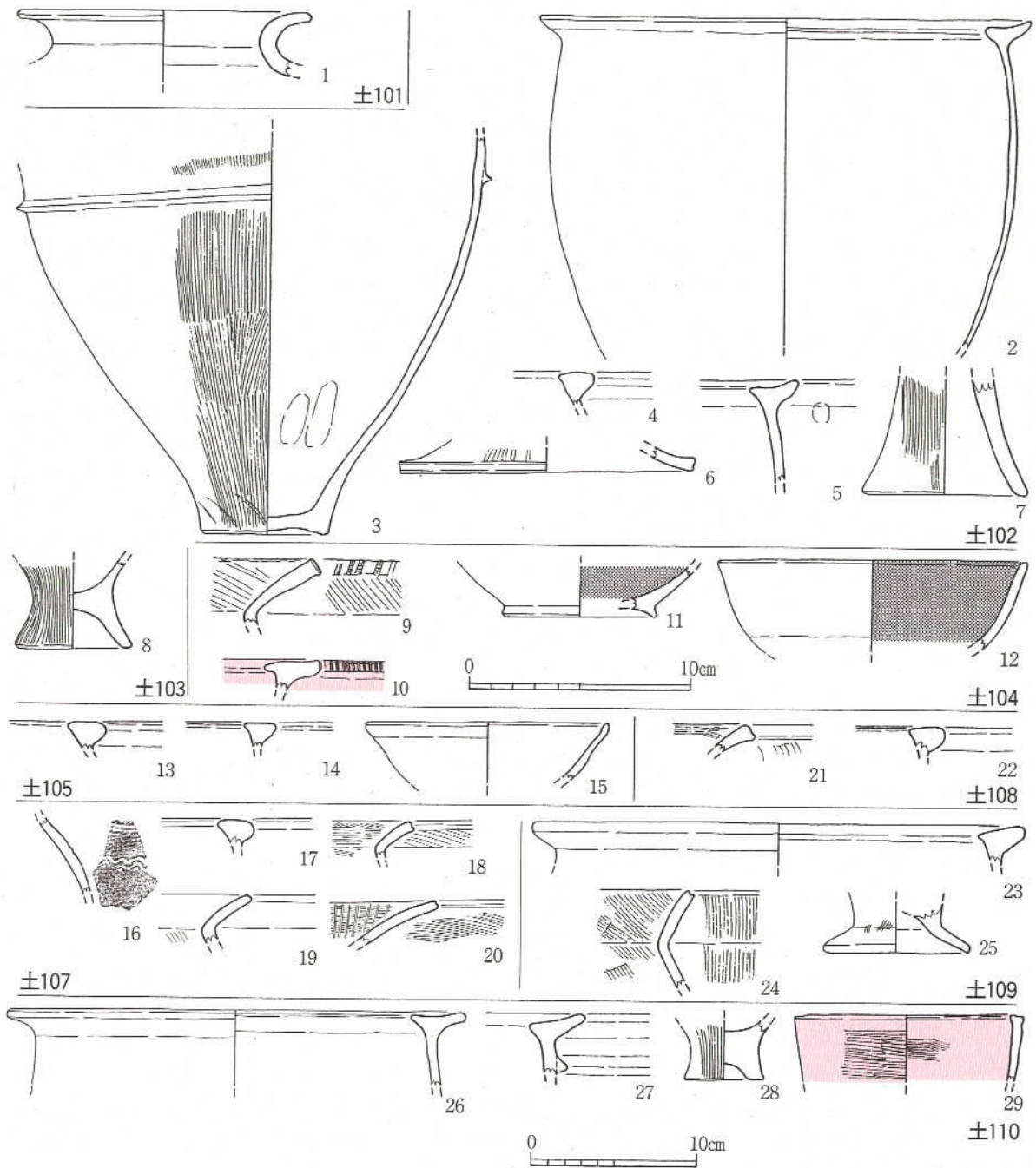
A区北側に位置し、26号竪穴住居跡の北に位置する。平面形態は円形で、径は109～115cmである。床面は平坦で、壁面は垂直ぎみに立ち上がる。



第47図 102~107号土坑実測図 (1/30)



第48图 108~112·114号土坑实测图 (1/30)



第49図 101～105、107～110号土坑出土土器実測図（11、12、15は1/3、他は1/4）

出土土器（第49図）

13・14は口縁部外面に大きな突帯を貼り付ける甕である。14は口縁内面が小さく突出する。15は土師器杯である。

106号土坑（図版17、第47図）

A区北側に位置し、26号竪穴住居跡の床面で検出した。平面形態は円形で径は71～85cmである。床面は平坦で、壁面は北側でやや外傾する他は垂直ぎみに立ち上がる。当土坑から図化する土器は出土しなかった。

107号土坑（図版17、第47図）

A区中央やや北寄りに位置する。平面形態はややいびつながらも円形で、径は85～92cmである。床面はほぼ平坦で、壁面はやや緩やかに外傾して立ち上がる。

出土土器（第49図）

16は壺の胴部破片で、上位に櫛描きによる平行沈線文と波状文を施す。17は口縁外面に大きな突帯を貼り付ける甕である。18・19はく字形口縁の甕で、18は端部がナデによって窪む。20は高杯の口縁部で、内面は暗文とハケ調整が、外面は摩滅しているがハケ調整の痕跡が確認できる。

108号土坑（図版18、第48図）

A区中央、107号土坑の南東に位置する。平面形態は楕円形を呈するが、北側では角がつく。写真では西側がふくらんでいるが、これは西壁が崩落したためであり、本来は図のようにややくびれる。長軸100cm、短軸35～45cmである。北壁についても写真撮影の際には崩落していたが、本来は図のように浅く緩やかに立ち上がる箇所がある。床面は窪み、壁面は東西では垂直に立ち上がる。

出土土器（第49図）

21は広口壺の口縁部で端部がナデによって窪む。22は口縁外面に大きな突帯を持つ甕である。

109号土坑（図版18、第48図）

A区中央、108号土坑の南に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。北西側は別の遺構が切り合っており、当初は気づかずこの部分も一緒に掘削してしまった。本来は図の破線のように壁面がめぐる。長軸は97cm、短軸は61cmである。床面は平坦で壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第49図）

23は甕で口縁部がやや長く伸び、内面が小さく突出する。24はく字形口縁の甕で端部がナデにより窪む。25は裾部が屈曲して開くもので器台になろうか。外面はハケ調整の後ナデによって仕上げる。

110号土坑（図版18、第48図）

A区中央、27号竪穴住居跡の床面で検出した。検出当時は大きな楕円形を呈すると思われたが、掘削を進めていくにつれ本来は3つの遺構が切り合っていることが判明した。一番北側の土坑の平面形態は楕円形で、長軸95cm程、短軸72cmである。床から壁面にかけて揃り鉢状に立ち上がる。

出土土器（第49図）

26は鋤先口縁の甕で内外面ナデによって仕上げる。27は口縁部がやや長く伸び、口縁部下に1条突帯を貼り付ける。28は甕の底部で底面中央が窪む。29は丹塗磨研の鉢になろうか。外面は横方向のミガキ調整、内面は横方向のハケ調整の痕跡が確認できる。

111号土坑（図版19、第48図）

A区中央に位置し、27号竪穴住居跡を切る。平面形態は円形を呈するが、東側で若干くびれる箇所があり、この部分のみ楕円形に一段落ちることから、本来は2つの土坑が切りあっていることが分かる。北東側の土坑は床面が緩やかに窪み、西側の大きな土坑の床面は平坦で、壁面はやや外傾して立ち上がる。当土坑からは図化しうる土器は出土していない。

112号土坑（図版19、第48図）

A区北側、26号竪穴住居跡の南西に位置する。平面形態は円形で径は88～97cmである。西側はピットに切られている。床面は窪み、壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

出土土器（第51図）

1・2は壺の胴部から底部にかけてのものである。胴部最大径の位置に1条突帯を貼り付け内外面ともミガキ調整を行う。3は甕の底部でわずかに窪む。4は口縁部外面に大きな突帯を貼り付け、内面は突出する。

113号土坑（図版19、第50図）

A区北側、112号土坑の南東に位置する。平面形態は北側でややふくらみを持つものの、長方形と思われる。東側は調査区外に延びるが、長軸240cm、短軸120cm程に復原できる。床面は長軸方向には平坦であるが、短軸方向では若干窪む。壁面は南壁は垂直ぎみなのに対し、西壁は緩やかに立ち上がる。当土坑からは図化しうる土器は出土していない。

114号土坑（図版20、第48図）

A区北側に位置し、26号竪穴住居跡と切り合う。平面形態はいびつな隅丸方形を呈し、両軸とも110cm程である。東側は浅い落ちが存在する。床面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

出土土器（第51図）

5～8は甕の口縁部である。5は逆L字状を呈する。6は大きな突帯を貼り付け内面は突出する。7・8は鋤先口縁を呈し上面がナデによって窪む。9・10は甕の底部である。9は底面全体が窪み、10はやや突状を呈する。

115号土坑（図版20、第50図）

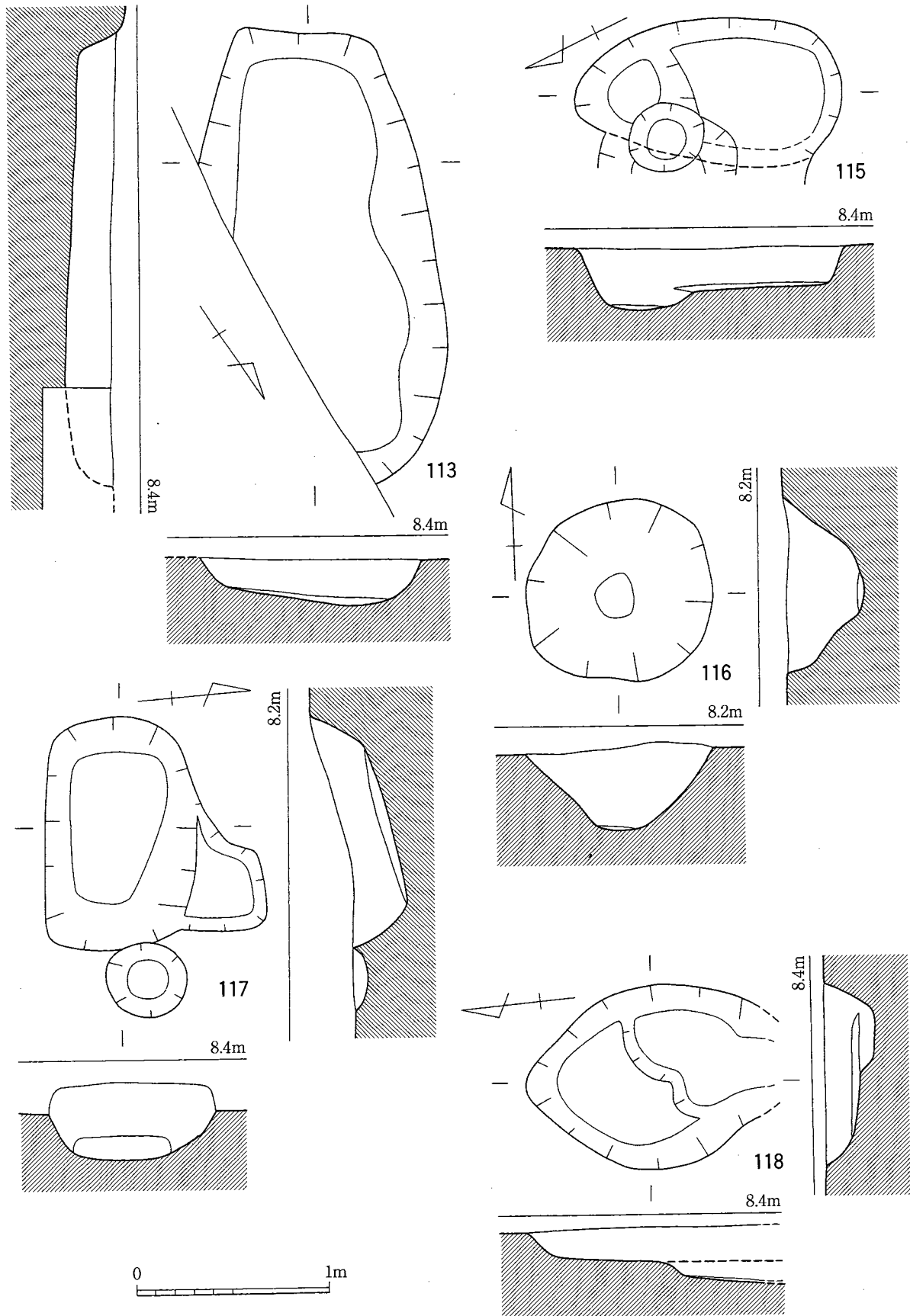
A区北側、25号竪穴住居跡の南東に位置し、103号土坑に切られる。平面形態は楕円形で、長軸140cm、短軸は復原で80cm程である。床面は平坦であるが北側で一段深くなる箇所があり、二段掘りの形態をなす。壁面はやや外傾して立ち上がる。当土坑からは図化しうる土器は出土していない。

116号土坑（図版20、第50図）

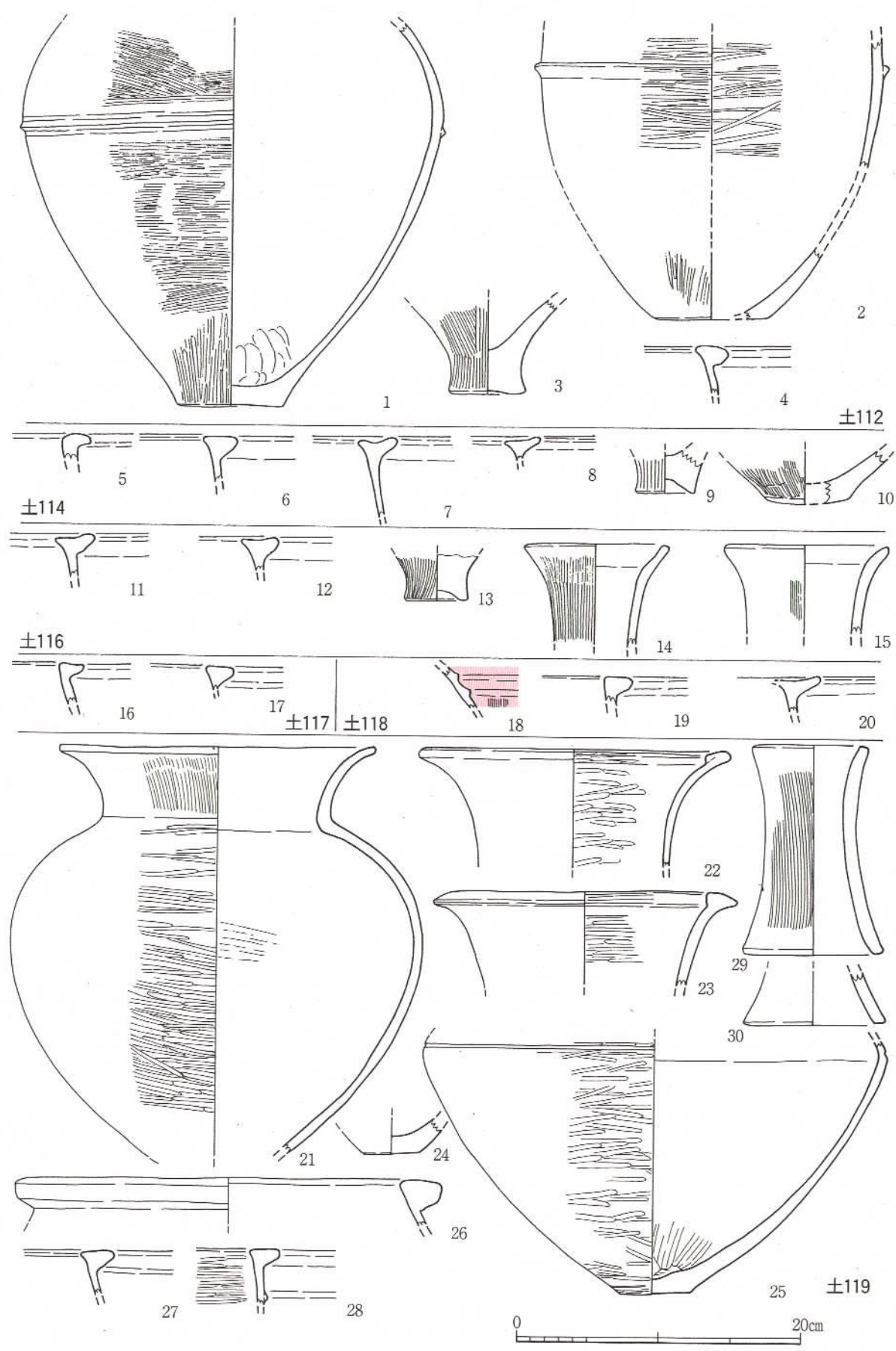
A区北側に位置し、105号土坑とほぼ重なり切られている。平面形態は円形で径95～100cmである。緩やかな播り鉢状を呈する。

出土土器（第51図）

11・12は鋤先口縁の甕である。13は甕の底部。14・15は器台である。14の口縁部内面はナデによって緩やかに窪む。



第50图 113·115~118号土坑实测图 (1/30)



第51图 112·114·116~119号土坑出土土器实测图 (1/4)

117号土坑（図版21、第50図）

A区北側に位置し、20号竪穴住居跡を切る。平面形態は隅丸長方形で、長軸122cm、短軸79cmである。北側に浅く張り出す箇所があるが、これは当土坑と切り合う別の遺構で、直接関係はない。床面は東に向かって傾斜し、壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

出土土器（第51図）

16・17は口縁外面に突帯を貼り付ける甕である。

118号土坑（図版21、第50図）

A区北側に位置し、100号土坑を切る。平面形態は楕円形を呈し、短軸は95cmである。南側はうまく検出できず壁面を壊してしまった。床面は南側では100号土坑が切り合っているため床面をうまく認識できずに掘りすぎてしまっている。本来は平坦であったと思われる。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

出土土器（第51図）

18は丹塗磨研壺の胴部破片と思われ、2条の突帯を貼り付ける。一部ハケ調整が確認できる。19・20は甕である。19は外面に突帯を貼り付ける。20は鋤先口縁を呈するが、内面突出部先端を欠損する。

119号土坑（図版21、第52図）

A区北側に位置し、26号竪穴住居跡の床面で検出した。平面形態は楕円形で、長軸100cm、短軸88cmである。床面は平坦で、やや西寄りの箇所で径20cm程のピット状の落ち込みが見られる。西壁の一部と南西壁では掘りすぎてしまった。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

出土土器（第51図）

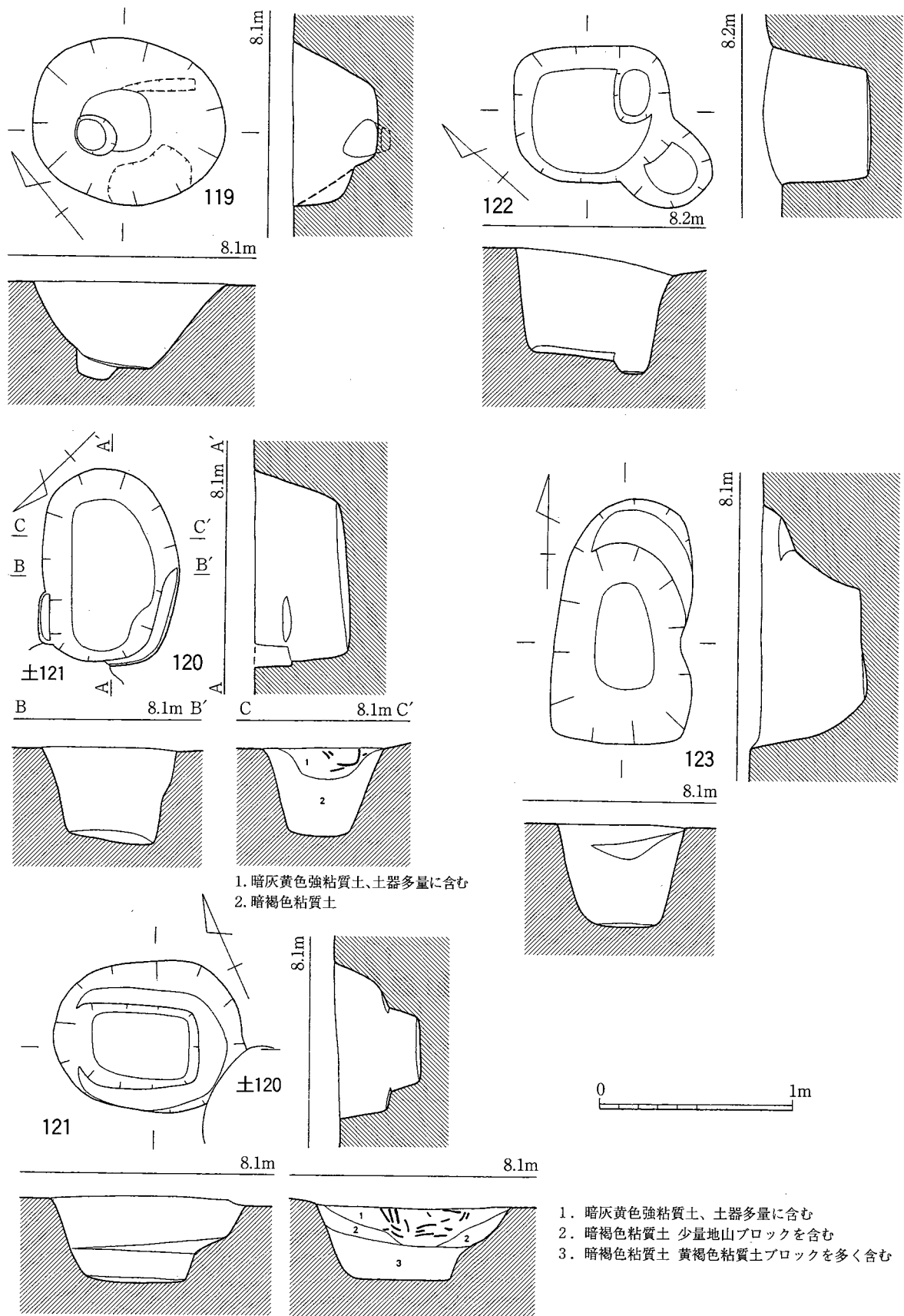
21～23は壺である。21は広口壺で、胴部外面はミガキ調整、頸部及び内面はハケ調整が確認できる。22・23は頸部が長く伸び、口縁部内面に大きな肥厚を持つ。24・25は壺の底部である。いずれも平底で、25は胴部最大径の位置に1条沈線を巡らす。26～28は甕である。いずれも口縁外面に大きな突帯を貼り付ける。28は胴部上位にも小さな突帯を貼り付け、ミガキ調整を行う。29・30は器台である。

120号土坑（図版22、第52図）

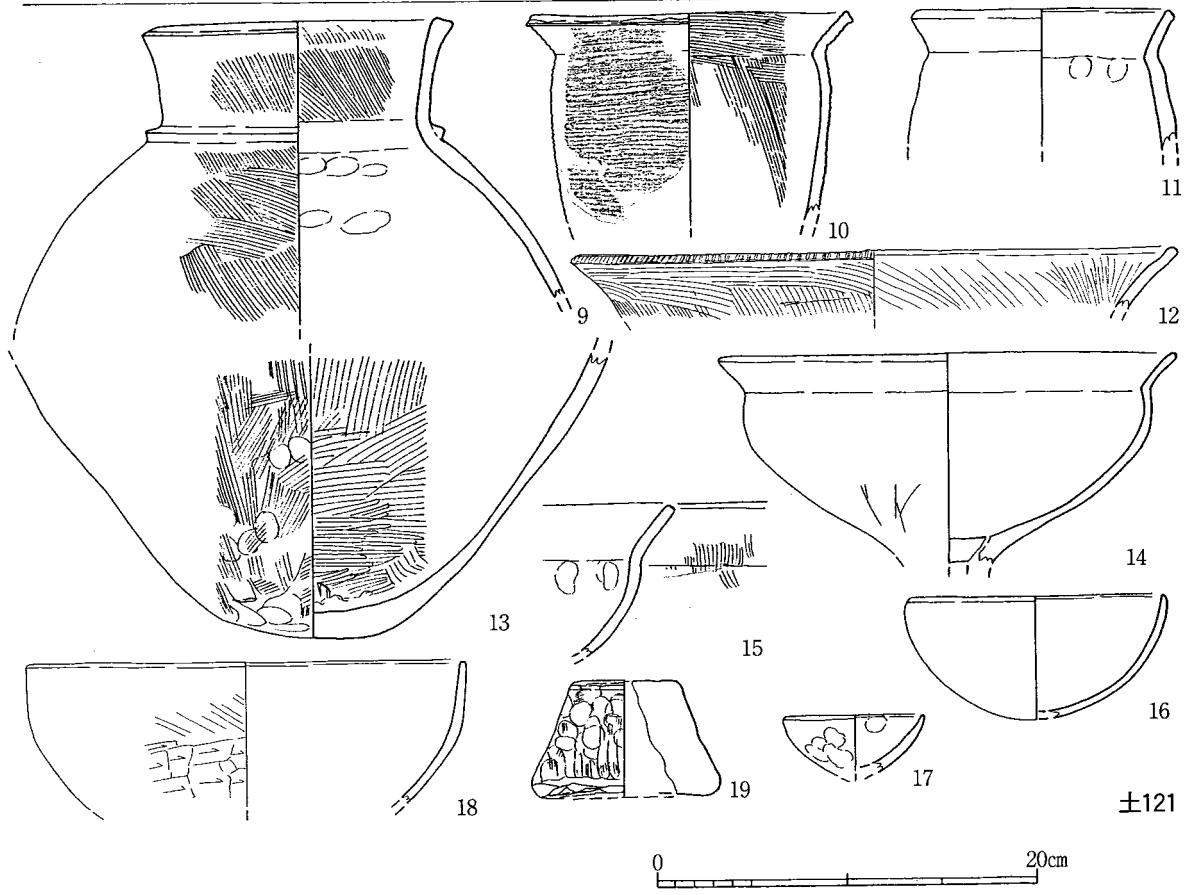
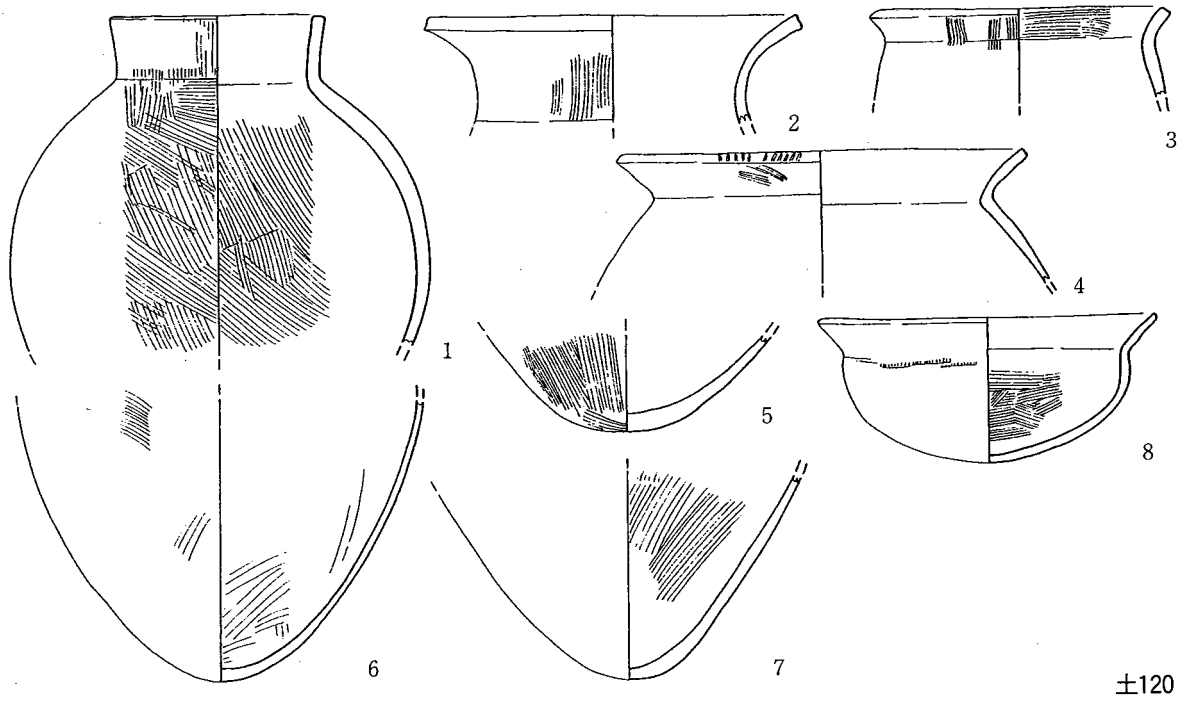
A区南側に位置し、121号土坑を切る。平面形態は楕円形で、長軸100cm、短軸70cmである。床面は北西側に向かって傾斜する。壁面はやや外傾して立ち上がり、南西壁では壁面中央付近で軽く段が生じる。埋土は暗褐色粘質土であるが、上層は当土坑よりも新しい土器溜まりの土が入る。完全に埋没してしまう前に付近に土器が廃棄されたものと考えられる。

出土土器（図版38、第53図）

1・2は壺である。1は口頸部が直立し、胴部は内外面ハケ調整を行う。2は広口壺で器面は摩滅しているが、一部ハケ調整の痕跡が確認できる。3・4はく字形口縁の甕で、4は端部に刻目を施す。5～8は甕の底部で丸底を呈する。5は4と同一個体である可能性が高い。8は鉢で摩滅しているがハケ調整の痕跡が確認できる。当土坑は丸底の甕の特徴から弥生時代後期終末に比定できよう。



第52図 119~123号土坑実測図 (1/30)



第53图 120·121号土坑出土土器实测图 (1/4)

121号土坑（図版22、第52図）

A区南側に位置し、120号土坑に切られる。平面形態は楕円形で、長軸102cm、短軸78cmである。床面は平坦で、壁面は中位で幅が狭く、やや傾斜するテラスを1段有する。埋土は最上層に120号土坑と同様の土器溜まりの土が入っており、窪んだ状態の段階で、付近に土器が廃棄された状況が分かる。

出土土器（図版38、第53図）

9は口頸部が直立し、頸胴部界に突帯を貼り付ける壺である。器面は摩滅しているがハケ調整が確認できる。胴部内面はユビオサエを施す。10～12はく字形口縁の甕である。10は外面タタキ調整、内面はハケ調整を行う。12は口縁端部を軽く跳ね上げ、刻目を施す。13は甕の底部でやや丸味を帯びる。14は高杯で口縁部はく字形を呈する。器面は摩滅しており、外面に一部ケズリ調整が確認できる。杯部底面は粘土を上から充填する。15はく字形に屈曲する鉢になろうか。摩滅しているが外面にハケ調整、内面にユビオサエが確認できる。16～18はボール状の鉢である。17はユビオサエを施し、18は外面下半部をケズリ調整、上半部にハケ調整が確認できる。19は台形状の全面ユビオサエによって仕上げたものである。当土坑は甕の底部の特徴から弥生時代後期終末に比定できよう。

122号土坑（図版22、第52図）

A区南側、121号土坑の北に位置する。平面形態は隅丸方形で、長軸80cm、短軸70cmである。南側でピットが切り合っているが、先後関係は定かでない。床面は南東に向かって落ち、南東隅はピット状に落ち込む。壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第56図）

1・2は甕である。3は高杯で、口縁部が短く立ち上がり、端部は外側に張り出す。4は小型の鉢で外面はユビオサエを施す。

123号土坑（図版23、第52図）

A区南側、33号竪穴住居跡の北東に位置する。平面形態は楕円形であるが、南辺は直線的で上端隅に角がつく。規模は長軸127cm、短軸73cm。壁面はやや外傾して立ち上がるが、北壁は上位でかなり緩く立ち上がる。埋土はやや明るい暗褐色粘質土である。

出土土器（第56図）

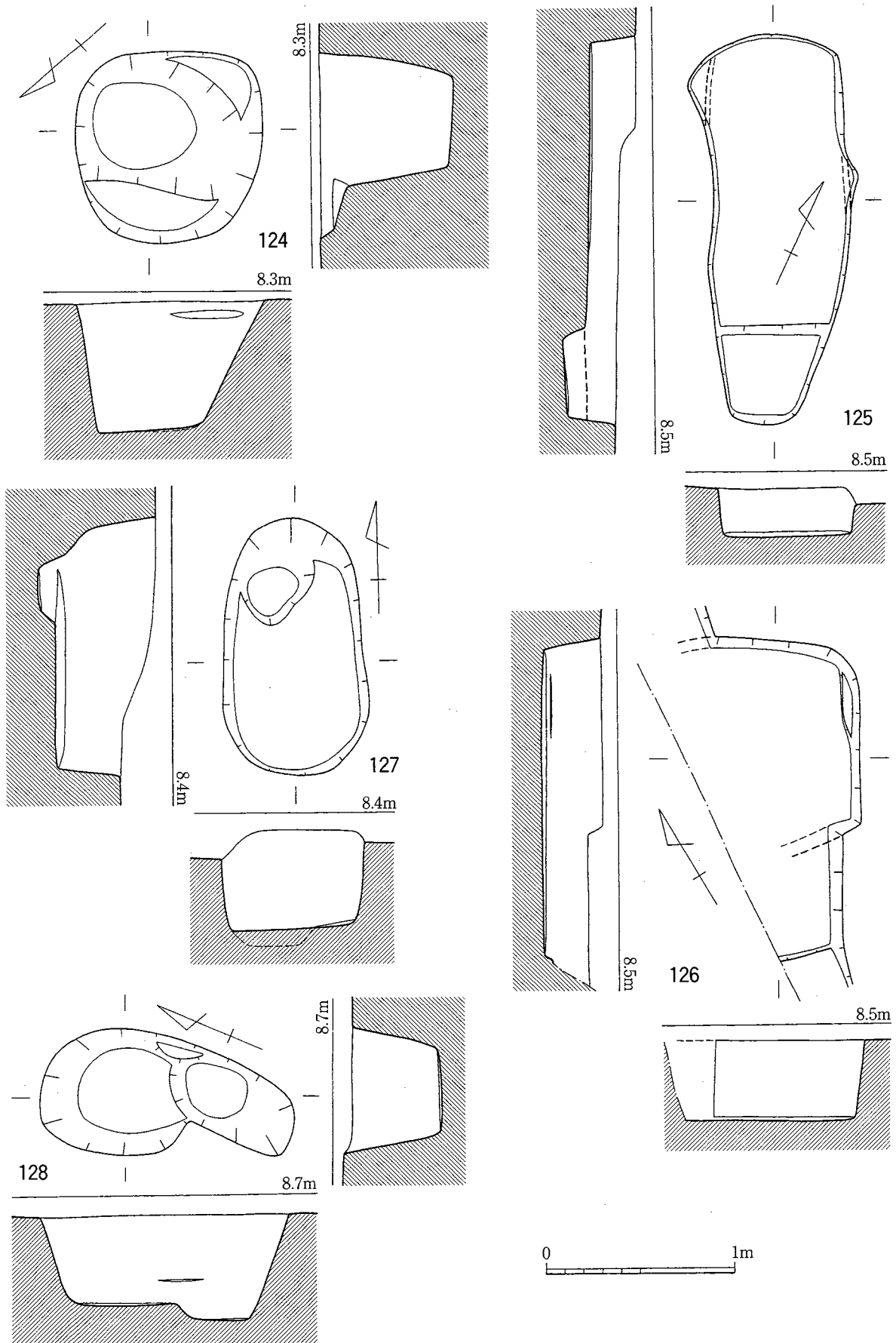
5・6は壺の底部で平底を呈し、6は外側に若干張り出す。

124号土坑（図版23、第54図）

A区南側に位置し、36・37号竪穴住居跡を切る。平面形態は円形で、径は100～110cmである。北西壁と南壁では、上位にテラス状の、立ち上がりの緩い部分が見られ、本来の本土坑のプランは楕円形を呈する可能性もある。床面は楕円形で平坦である。

出土土器（第56図）

7～10はく字形口縁の甕である。7は屈曲があまく、強く外反する格好となる。10は口縁端部に板状工具押圧による刻目を施す。



第54图 124~128号土坑实测图 (1/30)

125号土坑（図版23、第54図）

A区南側に位置し、37号竪穴住居跡を切る。平面形態は長方形を呈し、長軸205cm、短軸75cmである。東壁の一部と北西隅は掘りすぎてしまい、いびつになってしまった。床面は平坦である。南側では37号竪穴住居跡と切り合うため、当初床面を認識するのに手間取り、掘りすぎてしまった。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土土器（第56図）

11・12はく字形口縁の甕で、11は口縁端部に押圧による刻目を施す。13は鉢になろうか。先端部のみ内側に折り込む。14は高杯の脚裾部である。

126号土坑（図版24、第54図）

A区南側、125号土坑に西に位置する。西側は調査区外に延びる。平面形態は方形を呈すると思われる。検出当初は南北170cmのプランを想定していたが、掘削を進めると東壁の一部がクランク状を呈することが判明したため、南側にもう一つ方形の遺構が存在し切り合っていると考えに至った。しかし床面において特にその箇所には段差等は見られない。北側の方形土坑は南北軸110～120cm程と思われる。床面は平坦で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。当土坑からは図化しうる土器は出土していない。

127号土坑（図版24、第54図）

A区南側に位置し、37号竪穴住居跡の北東に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長軸135cm、短軸75cmである。床面は平坦であるが、北壁際ではピット状に落ちる箇所が存在する。ただ、北壁ではピットの立ち上がりとは土坑の立ち上がりが連続せず、ピットの肩が見受けられることから、ピットは時期が異なる可能性も高い。その他の壁面は垂直ぎみに立ち上がる。当土坑からは図化しうる土器は出土していない。

128号土坑（図版24、第54図）

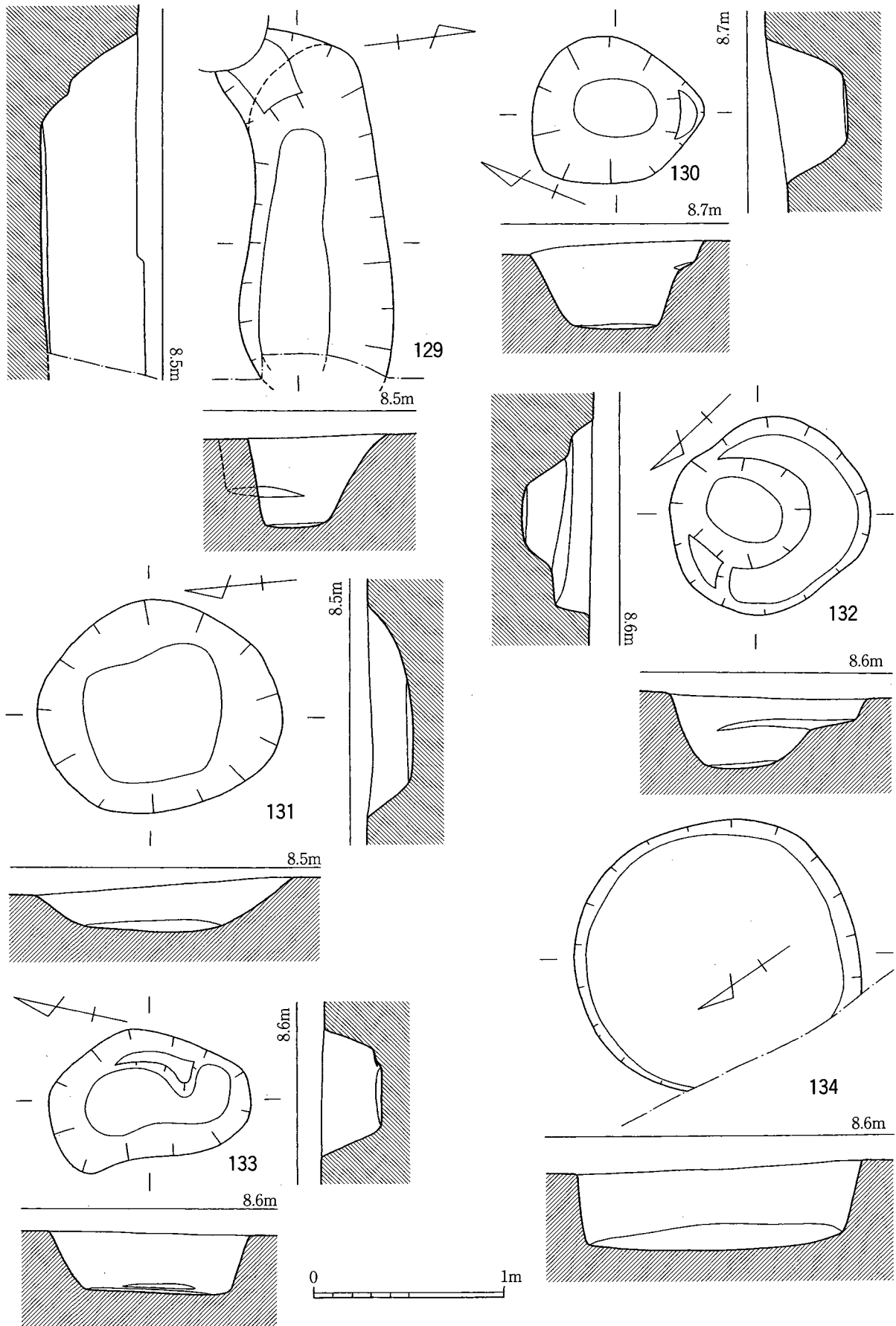
A区南側、38号竪穴住居跡の北に位置する。平面形態は瓢箪形を呈し、南北に二つの土坑が切り合っていると考えられるが、非常に似通った埋土で構成されていたため、切り合い関係を確認することはできなかった。両土坑とも平面形態は楕円形を呈し、北側は長軸80cm程、短軸65cm、南側は長軸75cm程、短軸38cmである。床面は平坦で壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第56図）

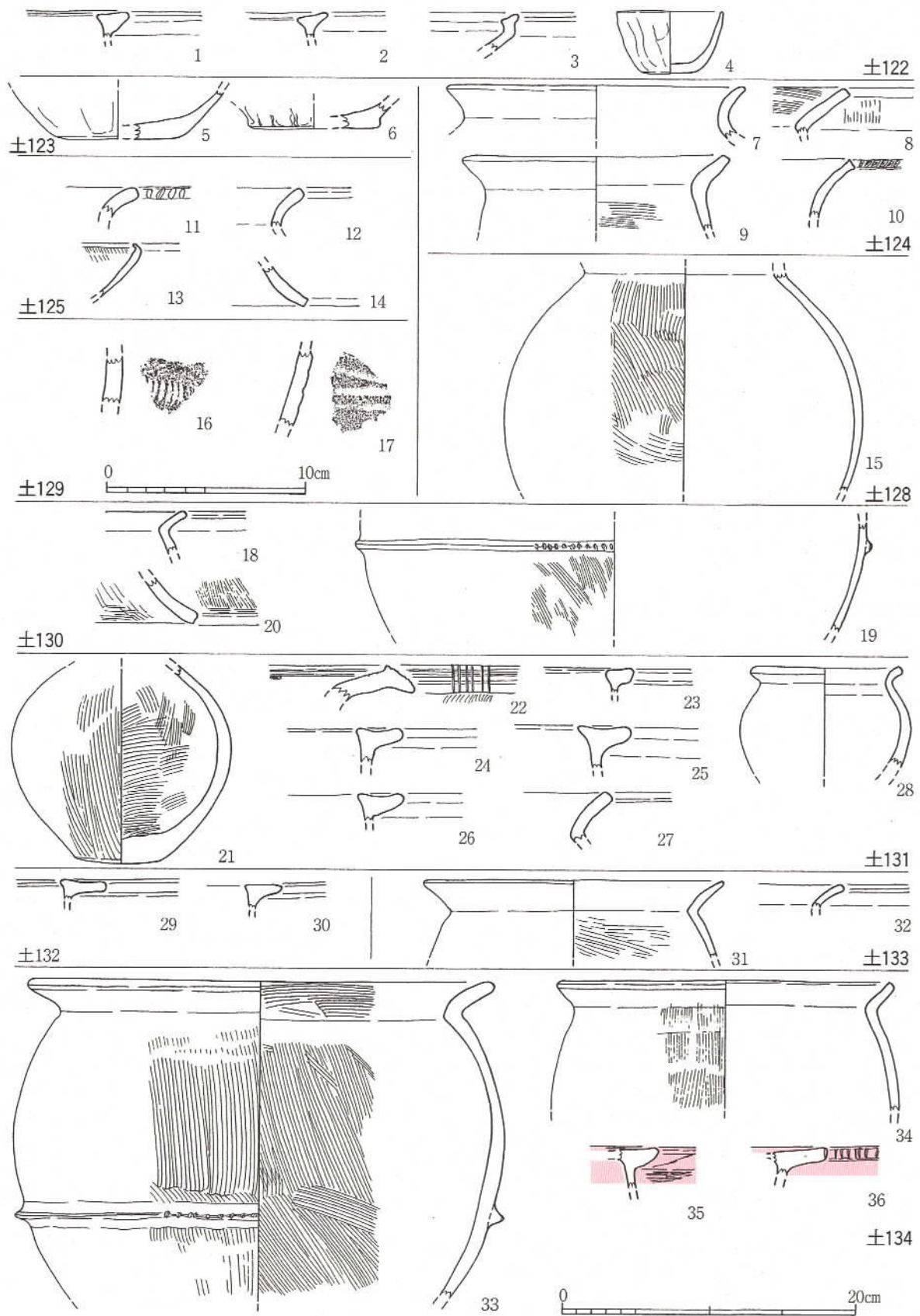
15は壺の胴部破片で外面はハケ調整を行う。

129号土坑（図版25、第55図）

A区南側、37号竪穴住居跡の東に位置する。平面形態は長楕円形を呈し、東側は調査区外に延びる。西側では南に折れ一段浅い箇所が見られるが、これは当土坑とは関係のない遺構が切り合っていると思われ、本来は破線のように丸く収まっていたと考えられる。短軸は80cmで、床面は平坦、壁面は南壁は垂直に立ち上がるのに対し、北壁は緩く立ち上がる。



第55图 129~134号土坑实测图 (1/30)



第56図 122~125、128~134号土坑出土土器実測図 (16・17は1/3、他は1/4)

出土土器（図版38、第56図）

16・17は縄文土器である。16は外面に密に半截竹管状工具による刺突を施す。17は幅広の断面U字状の沈線を巡らす。

130号土坑（図版25、第55図）

A区中央に位置し、41号竪穴住居跡の床面で検出した。平面形態は円形で、径78～90cmである。床面は平坦で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がるが、南壁は浅い箇所小さなテラスがあり、この部分のみ張り出す。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを多く含んだものである。

出土土器（第56図）

18はく字形口縁の甕である。19は甕の胴部破片で、1条の刻目突帯文を貼り付ける。ハケ調整を行う。20は高杯の脚部でハケ調整が確認できる。

131号土坑（図版25、第55図）

A区中央、130号土坑の北に位置する。41号竪穴住居跡の床面で検出した。平面形態は不整円形で、径114～127cmである。下端はいびつな隅丸方形を呈する。床面は中央が緩くくぼみ、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを多く含んだものである。

出土土器（第56図）

21は小型の壺で内外面ハケ調整を行う。22は広口壺の口縁部で、下方向に拡張した端部に凹線を施し、垂下沈線を加える。端部内面は小さく突出する。内面は沈線により渦巻き文様を入れる。23～27は甕である。28は胴部が張り、鉢になろうか。

132号土坑（図版26、第55図）

A区中央、131号土坑の北に位置する。41号竪穴住居跡の床面で検出した。平面形態は円形で、径は105cmである。北壁を除いてテラスが巡り、二段掘りの形態をなす。床面は緩く窪み、壁面はテラスより下は緩く外傾し、テラスよりも上は垂直に近く立ち上がる。北壁はやや外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを多く含んだものである。

出土土器（第56図）

29・30は鋤先口縁の甕である。

133号土坑（第55図）

A区中央、40号竪穴住居跡の床面で検出した。平面形態は楕円形で、長軸105cm、短軸69cmである。東側は床面に近い箇所一段小さなテラスが存在する。床面は平坦で壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土に地山ブロックを多く含んだものである。

出土土器（第56図）

31・32はく字形口縁の甕である。

134号土坑（図版26、第55図）

A区中央、29号竪穴住居跡の床面で検出した。西側は調査区外に延びるが、平面形態は円形で径は150cmである。床面はほぼ平坦で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。その形状から貯蔵穴かとも思われる。

出土土器（第56図）

33・34はく字形口縁の甕である。33は胴部下半部に1条の刻目突帯を貼り付ける。35・36は鋤先口縁の丹塗磨研甕である。いずれも内面突出部を欠損する。36は端部に刻目を施す。

135号土坑（図版26、第57図）

B区南側東壁際に位置する。側溝掘削の際に東半分を大きく壊してしまった。平面形態は方形で、長軸85cm程、短軸75cm程である。床面は平坦で、壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第58図）

1・2は広口壺である。いずれも口縁部は肥厚し、端部は強いナデによって窪む。2は端部に刻目を施す。1・2とも摩滅しているがハケ調整の痕跡が残る。3・4は大型甕の胴部であろうか。胴部下半部に方形の大きな刻目突帯を貼り付ける。5はく字形口縁の甕で端部はやや跳ね上げ気味となる。6は器台脚部、7は高杯と思われる。7は杯部中程で稜を持って立ち上がり、口縁端部が短く外反する。

136号土坑（図版27、第57図）

B区南側、135号土坑の南西3mに位置する。平面形態は隅丸長方形で、長軸95cm、短軸80cmである。床面は平坦で、壁面際は若干高くなる。壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器（第58図）

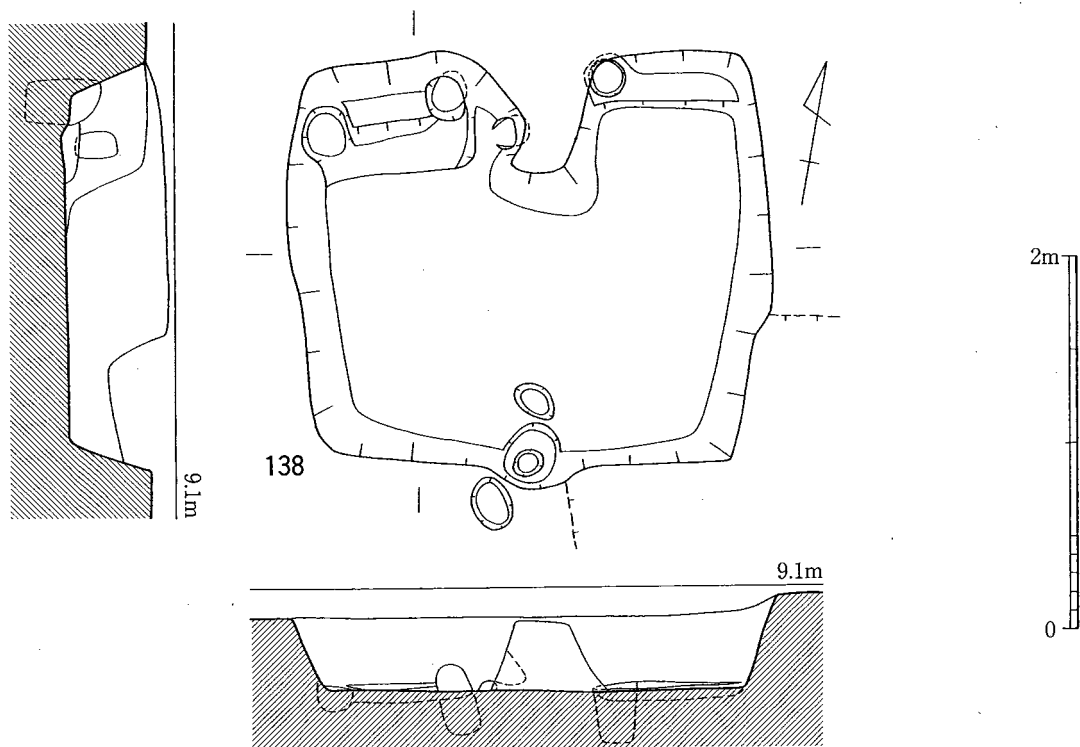
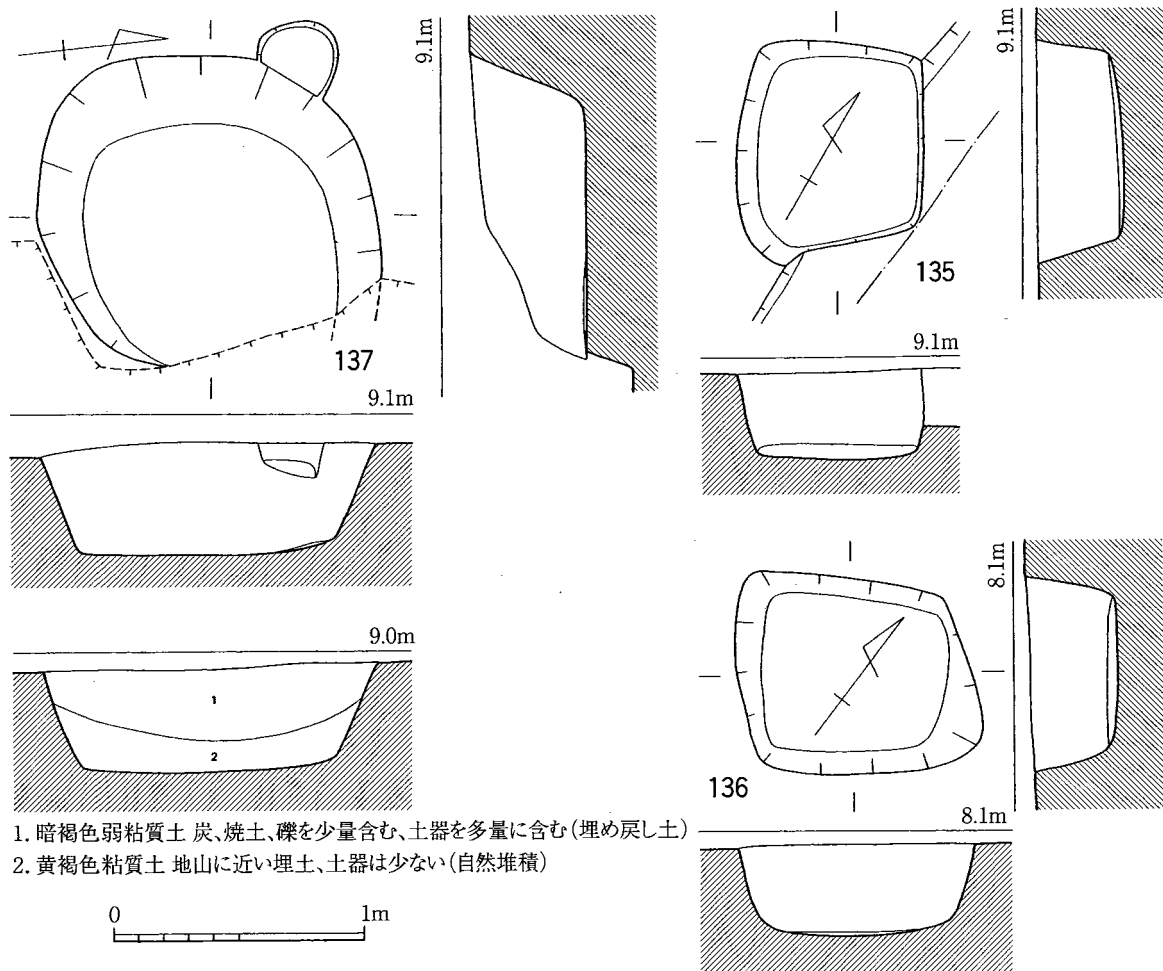
8・9は大型甕の胴部破片であろうか。8は胴部最大径の位置にM字形突帯を貼り付け刻目を施す。9は胴部下半に大きな方形の突帯を貼り付け、板状工具によって刻目を施す。ハケ調整を行うが、一部は突帯貼り付け後にも行う。10は短いく字形口縁の甕でハケ調整を行う。11～14は甕の底部である。11・14は尖り気味で、14は外面に軽いケズリとハケ調整、内面はハケ調整を行う。12は底面全体が上げ底となり、13は平底を呈する。15は高杯で口縁部は外面に軽い稜を持って立ち上がり、端部は肥厚し軽く外反する。16は精製の鉢で屈曲部外面に沈線を巡らす。摩滅が激しいがハケ調整の痕跡が残る。17は器台で内面は軽いケズリ調整を行う。

137号土坑（図版27、第57図）

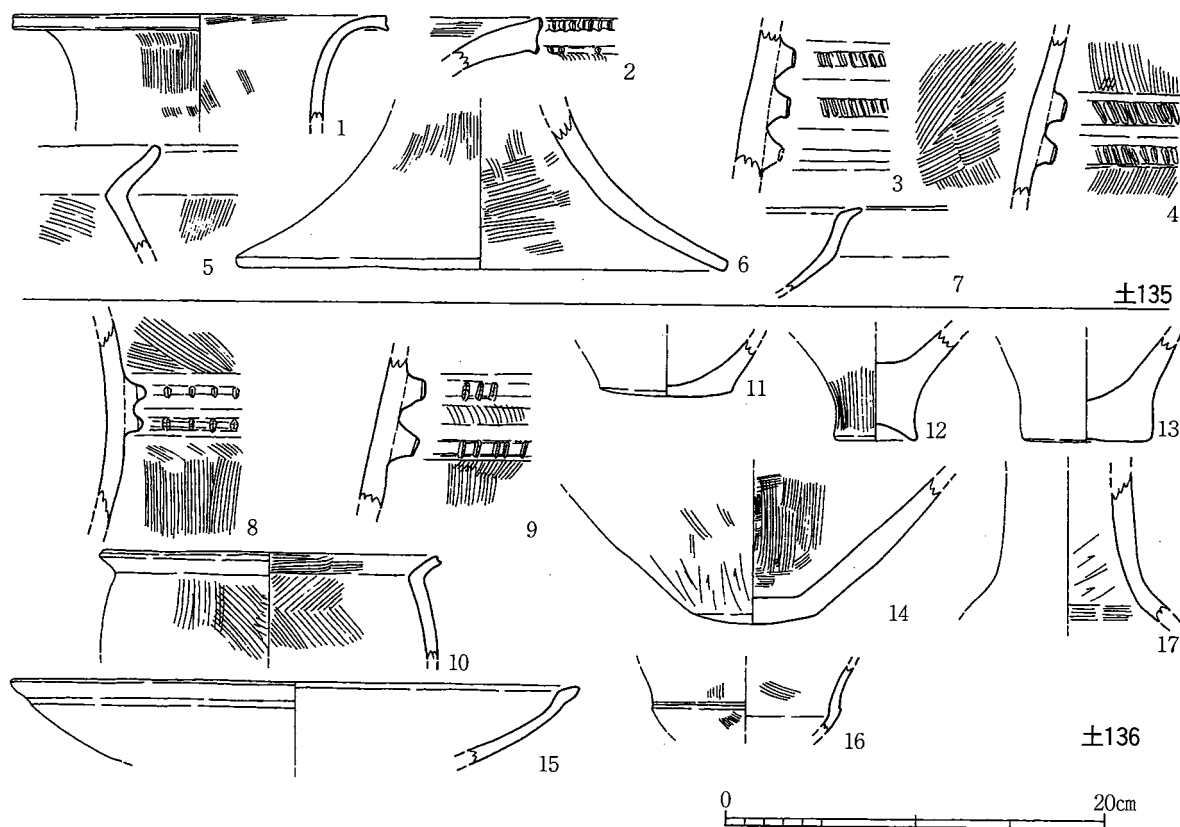
B区南側、136号土坑の南西3mに位置する。東側は攪乱によって大きく壊されている。平面形態は円形で、径は135cm程である。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。埋土は大きく2層で構成される。自然堆積土の上に土器を多量に含む暗褐色弱粘質土が見られ、これはおそらく埋め戻し土と思われる。

出土土器（図版38、第59図）

1～3は広口壺である。3は頸胴部界に突帯を貼り付け、口縁端部はナデによって窪む。4・5は壺の底部で、5は外側に少し張り出す。6～16は甕である。6は大きな突帯を貼り付け、内面も突出する。7は端部は強いナデによって大きく窪み、内面へ大きく突出する。8は長い三角形状を呈する。



第57図 135~138号土坑実測図 (138号は1/40、その他は1/30)



第58図 135・136号土坑出土土器実測図 (1/4)

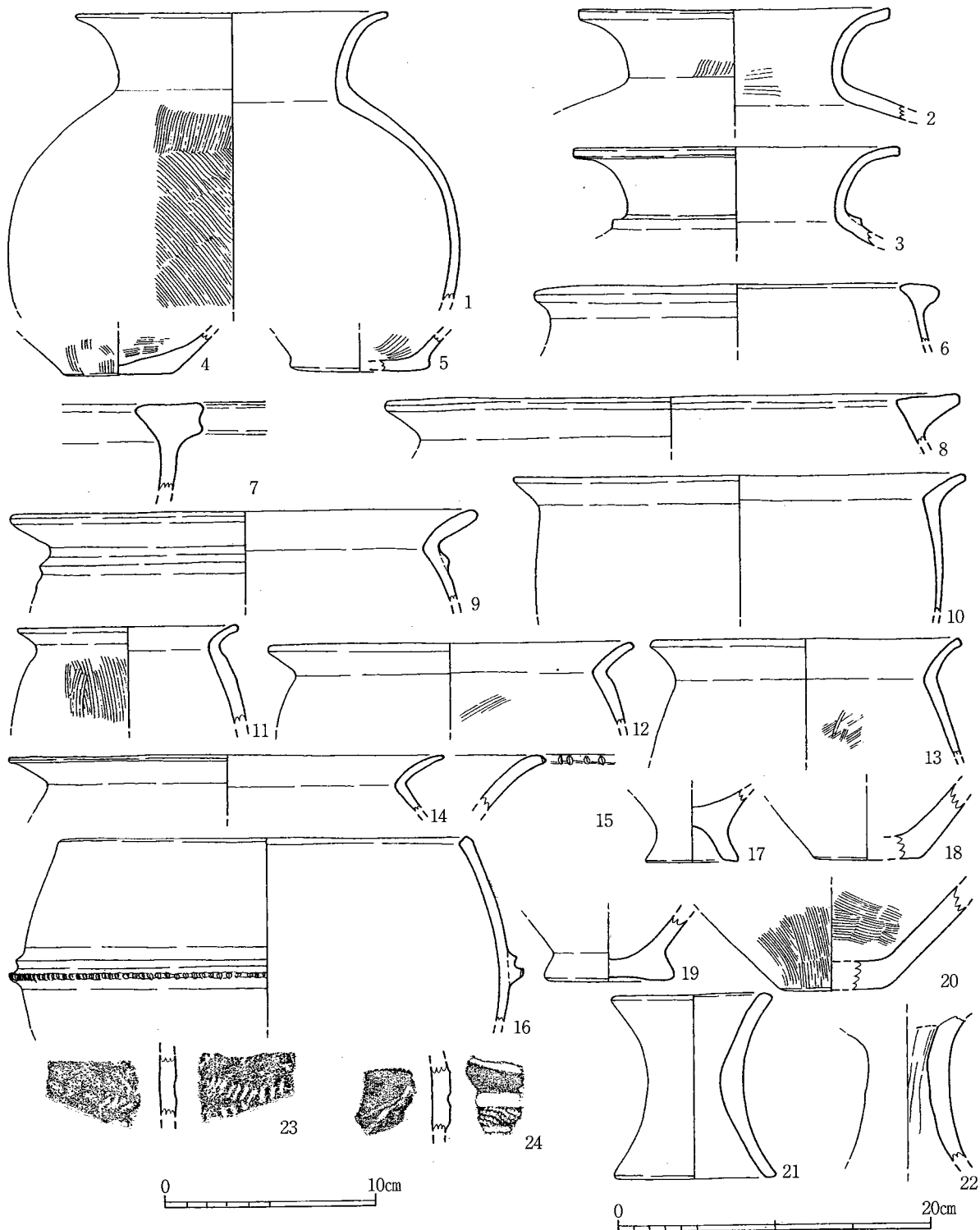
9～15はく字形口縁を呈する。9は口縁端部にかけて肥厚し丸く収める。屈曲部外面に突帯を貼り付ける。14は胴部が強く張り、屈曲部はしっかりとした稜を持つ。口縁部は薄くなりながら外反する。15は端部に刻目を施す。16は内湾する器形で口縁部は肥厚し丸く収める。胴部最大径の位置にM字形突帯を貼り付け、下側の高い部分のみに刻目を施す。17～20は甕の底部である。17は高い脚台状を呈する。19は平底で外側に大きく張り出す。20は平底であるが底面はやや膨らむ。21は器台、22は高杯脚部である。22はシボリ痕が残り、杯部の充填粘土が剥れている。23・24は縄文土器である。23は中期末頃の並木式で、刺突文を連続させ文様を展開する。24は太い沈線で区画された中を擬縄文で充填する。縄文時代後期のものである。当土坑は縄文土器の混入があるものの、く字形口縁の甕から弥生時代後期に比定できよう。

138号土坑 (図版28、第57図)

B区南西隅に位置する。平面形態は方形だが北壁は中央が大きく中央へ突出し、凹字形を呈する。長軸127cm、短軸114cmである。南西側は攪乱のため大きく壊されている。床面は平坦だが、北壁際では一段下がり、壁の立ち上がる箇所にピットを複数持つ。南壁中央の壁際にもピットを一つ穿つ。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は褐色粘質土に大きな地山ブロックや炭、焼土を多く含む。

出土土器 (図版39、第61図)

1は大型甕で口縁内面にも大きく突出する。2は厚い甕の底部で軽い上げ底となる。3～5は須恵器である。3・4は鉢で口縁部が短く立ち上がり外面が肥厚する。5は高杯で裾部は短く屈曲する。6は青磁碗で蓮弁を持つ。7は土師器皿の底部でヘラ切りを行っているようである。



第59図 137号土坑出土土器実測図 (23・24は1/3、他は1/4)

139号土坑 (図版28、第60図)

B区南東隅に位置する。平面形態は隅丸長方形で、長軸102cm、短軸75cmである。南西側は掘りすぎのため壁面を壊してしまった。床面は平坦で壁面は外傾して立ち上がる。埋土は褐色粘質土。

出土土器 (第61図)

8は小型精製壺である。口縁部は短く外反し、頸胴部界に沈線を巡らす。9は壺の底部で外面にハ

ケ調整を行う。10～12は甕である。10はく字形口縁のものと思われ、端部は外側に肥厚する。11は口縁外面に小さな刻目突帯を貼り付ける。12は短いく字形口縁を呈し、端部はナデにより窪む。13は胴部が張らず、く字形に屈曲する鉢になるうか。摩滅しているがハケ調整を行う。

140号土坑（図版28、第60図）

B区中程やや南寄りに位置する。平面形態は隅丸長方形で、長軸165cm、短軸115cmである。北側では丸く収める。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。北西壁では小さいが段を有しテラス状になる。埋土は灰褐色粘質土に炭を含む。

出土土器（図版39、第61図）

14は球形状の胴部に短く外反する口縁部が取り付く甕で、器面は摩滅しているが内面にユビオサエの痕跡が残る。15～21は土師器小皿で、糸切り痕が確認できる。22～27は土師器杯で、これも糸切り痕が確認できる。当土坑は土師器の特徴から13世紀頃に比定できよう。

141号土坑（図版29、第60図）

B区中程に位置する。平面形態は楕円形で北側は少し突出する。長軸は92cm、短軸82cmである。床面は東壁に向かって高くなり、北壁際は軽い段が生じる。壁面はやや外傾して立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器（第61図）

28は須恵器の大甕で、外面のタタキは格子タタキによっている。

142号土坑（図版29、第60図）

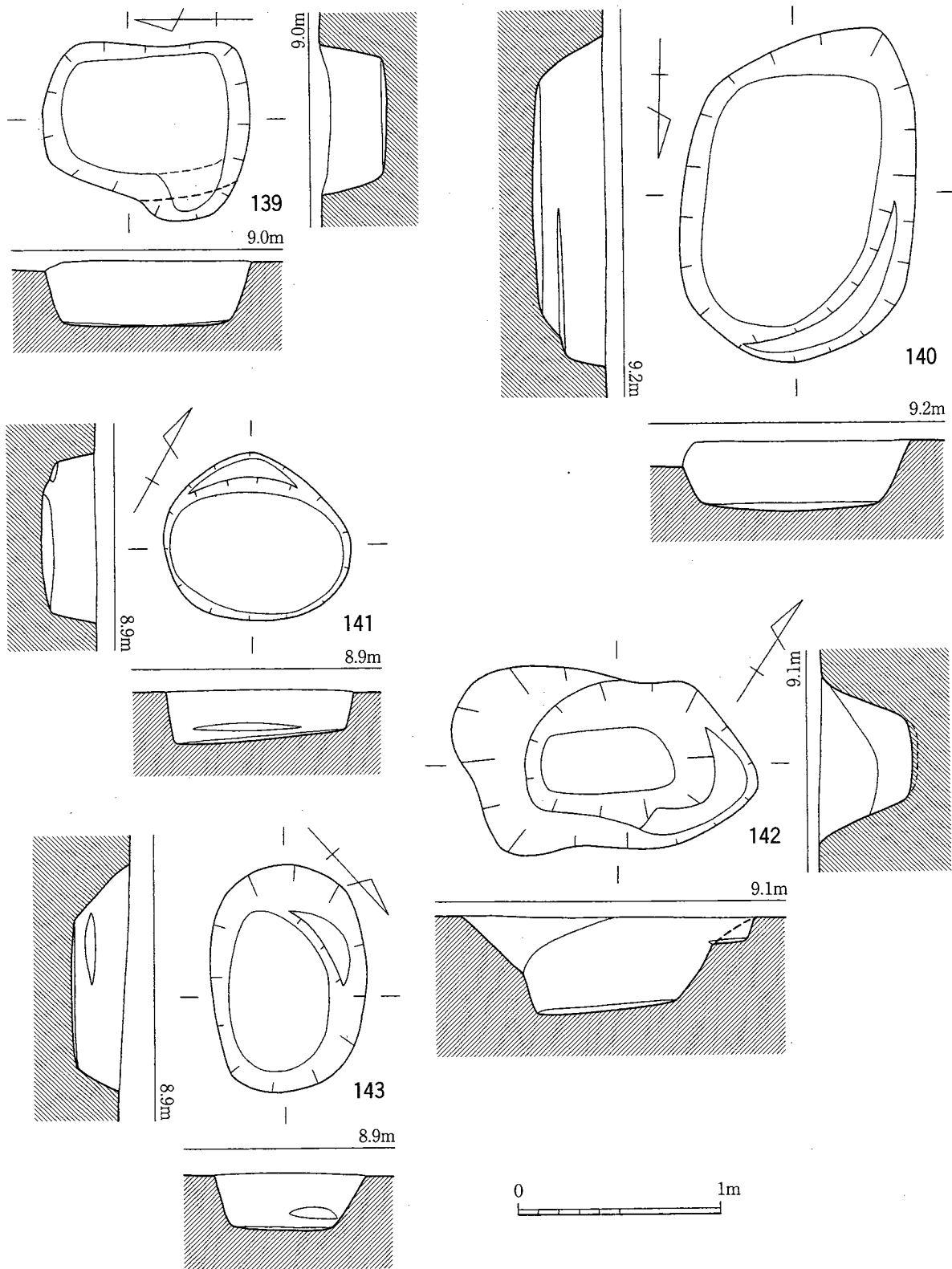
B区南側、136号土坑の北西に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長軸150cm、短軸83cmであるが、東側では浅い箇所段が生じており、違う遺構が切り合っている可能性がある。これは西側においても同様で、浅い箇所は極端に緩い傾斜になっており、本来の土坑の規模は一回り小さくなると思われる。床面は長楕円形を呈し、南西に向かってやや下がる。壁面は外に開きながら立ち上がる。136号土坑と軸を揃えるため、何かしらの関係が想定される。埋土は淡黄灰褐色粘質土である。

出土土器（図版39、第61図）

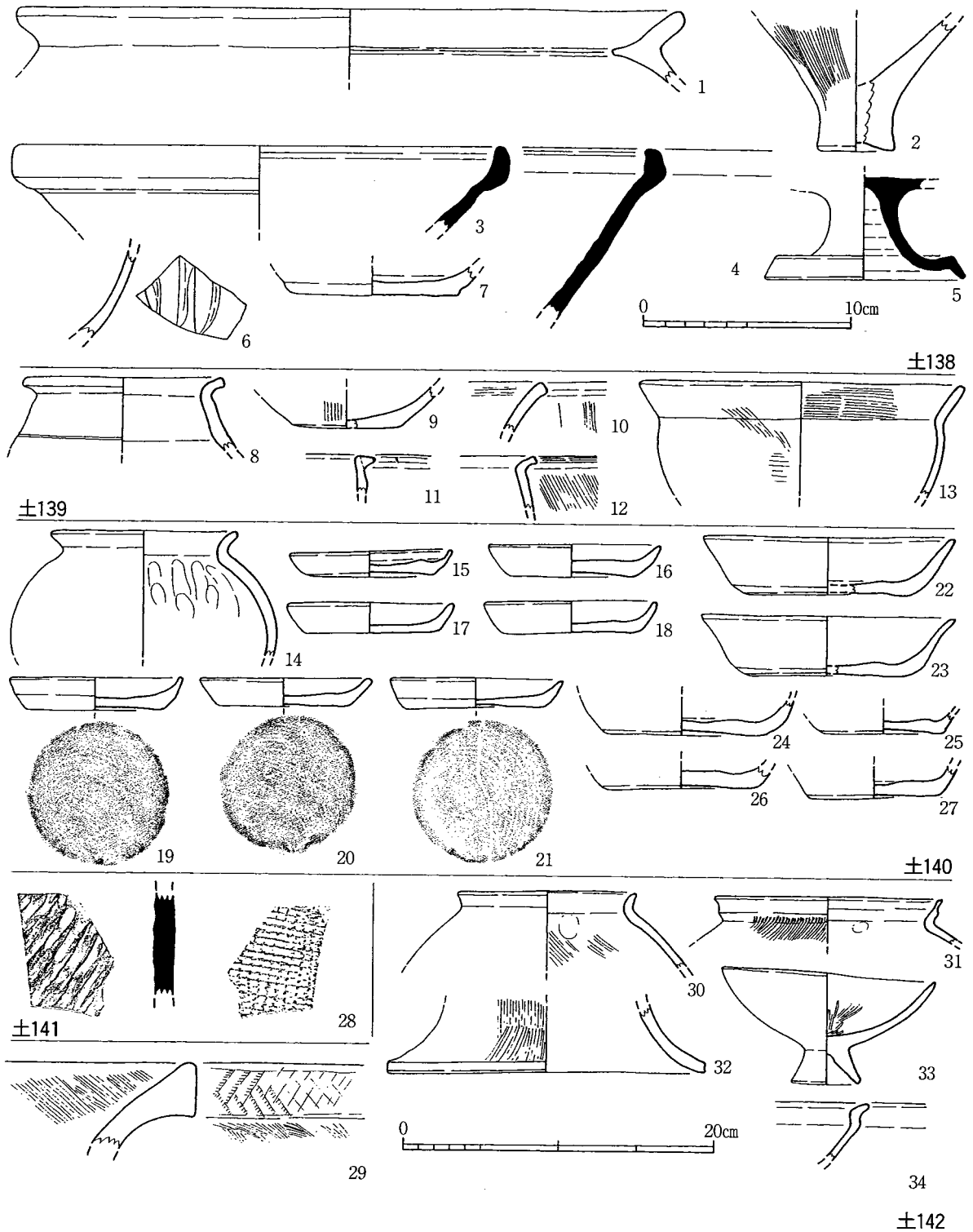
29は大型壺の口縁部で端部は肥厚し、板状工具によって交互に斜めに押し引いて文様を付ける。30・31は甕である。30は胴部が大きく張り出し、短かく外反する口縁部が取り付く。31は口縁部がいわゆるS字状を呈し、頸部に板状工具による圧痕が残る。胎土に雲母を多く含み、全体的に白っぽい色調である。32は器台脚部。33・34は高杯である。34は杯部上部で垂直気味に立ち上がり、口縁部は短く外側に屈曲する。

143号土坑（図版29、第60図）

C区に位置する。平面形態は楕円形で長軸112cm、短軸76cmである。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がるが、南西壁は緩やかに立ち上がる。西壁では軽い段が生じている。埋土は上層は褐色弱粘質土、下層は淡褐色弱粘質土である。当土坑からは図化しうる土器は出土していない。



第60图 139~143号土坑实测图 (1/30)



第61図 138～142号土坑出土土器実測図（3～7、15～28は1/3、他は1/4）

144号土坑（図版30、第62図）

D区北側に位置する。平面形態は円形で、径は105cm程である。北側は調査区外に延びる。床面は緩く窪み、壁面は緩く外傾して立ち上がる。

出土土器（第64図）

1～6は甕で口縁外面に突帯を貼り付ける。1の突帯は小さく、胴部にも貼り付ける。3は突帯が

大きい。7は甕の底部。8は丹塗磨研壺の口縁部で、端部は窪み内外端に小さな刻目を施す。本土坑は出土土器は少ないが、弥生時代中期初頭に比定できよう。

145号土坑（図版30、第62図）

D区中央、144号土坑の南西に位置する。平面形態は楕円形で、長軸150cm、短軸95cmであるが、南側は浅い位置でテラスが広がるため、別遺構が切り合っている可能性も考えられる。床面は平坦で壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第64図）

9は複合口縁壺で、頸部外面にハケ調整の痕跡が残る。10は口縁外面に突帯を貼り付ける甕。11・12は鋤先口縁、13はく字形口縁甕である。14は器台でハケ調整の痕跡が残る。

146号土坑（図版30、第62図）

D区145号土坑の西に位置し、西側は調査区外に延びる。平面形態は方形で、南北軸は87cmである。床面は平坦で壁面は垂直ぎみに立ち上がる。

出土土器（第64図）

15は丹塗磨研壺の底部。16は壺の底部でハケ調整を行う。

147号土坑（図版31、第62図）

D区146号土坑の南に位置する。平面形態は長方形で、長軸84cm、短軸65cmである。床面は平坦で壁面はやや外傾して立ち上がる。北壁は傾斜がやや緩い。

出土土器（第64図）

17は甕で、胴部は大きく張り出し口縁部端部は内側に立ち上がる。布留系と思われる。器面は摩滅しており、内面にユビオサエの痕跡が残る。18は高杯である。

148号土坑（図版31、第62図）

D区147号土坑の南に位置する。平面形態は方形で長軸102cm、短軸98cmである。床面は平坦で東側壁際には径20cm程のピットが穿たれる。壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器（第64図）

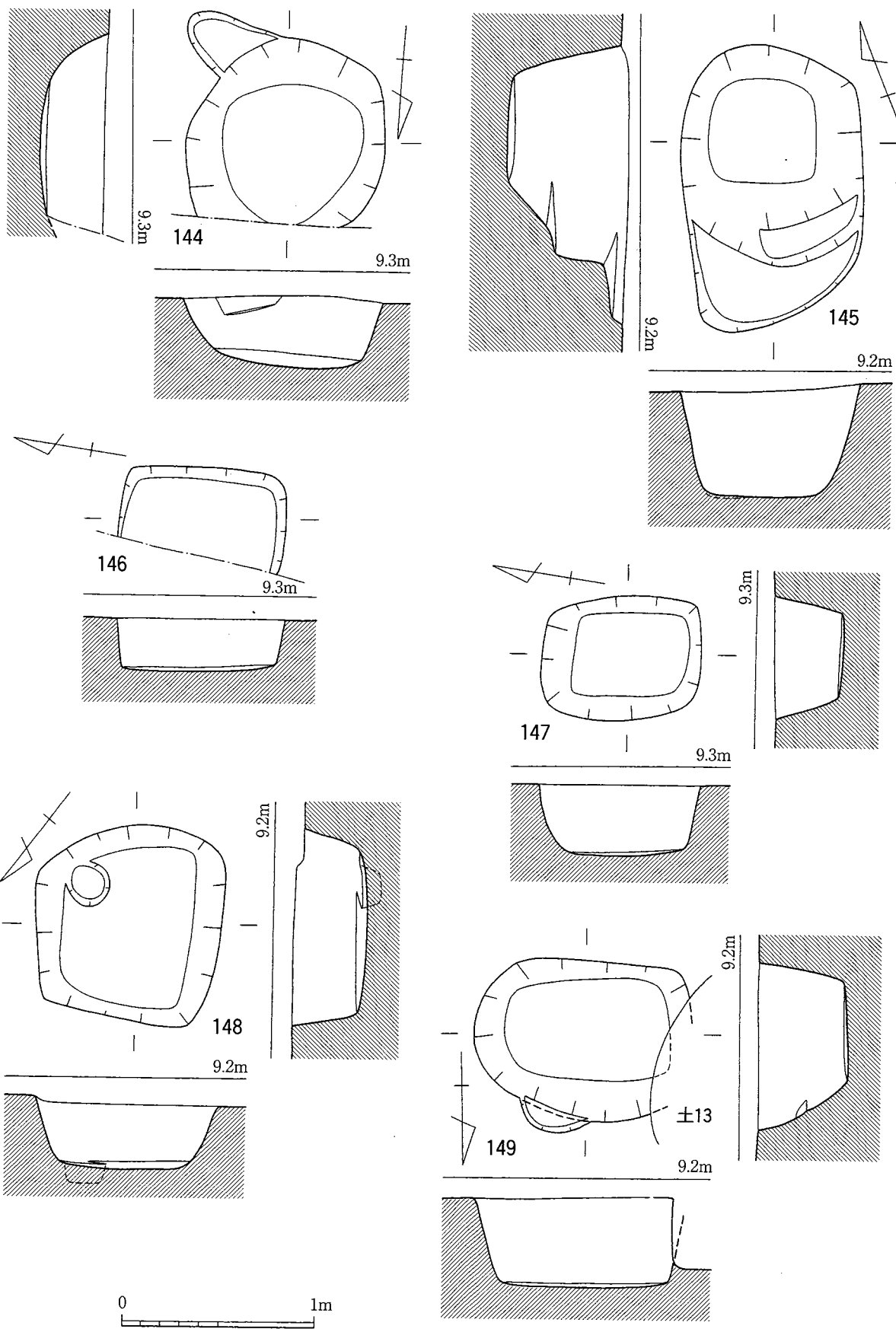
19～21は甕の口縁部、22・23は甕の底部である。23は脚台状になるものである。

149号土坑（図版31、第62図）

D区148号土坑の南東に位置し、西側を切られる。平面形態は楕円形で、長軸は復原で115cm程、短軸84cmである。北壁はピットと切り合っている。床面は隅丸長方形を呈し、平坦である。壁面はやや外傾して立ち上がる。

出土土器（第64図）

24・25は甕である。24はく字形に屈曲し、端部は薄くなりながら外反する。内外面ハケ調整を行う。26は鉢で外面ハケ調整を行う。



第62图 144~149号土坑实测图 (1/30)

150号土坑（図版32、第63図）

D区東際に位置する。平面形態は方形で、規模は77cm×73cmである。床面は東側約4分の1が一段高くなり、二段掘りの形態をなす。壁面は垂直ぎみに立ち上がる。

出土土器（第64図）

27～29は甕で、28はく字形口縁のものである。

151号土坑（図版32、第63図）

D区北側に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸135cm、短軸102cmである。南側は一部攪乱によって壊されている。床面は大きく二段掘りの形態を呈し、北西部が長方形に深くなる。また、北東部には高まりが見られる。壁面は外傾し、若干すぼまりながら立ち上がる。

出土土器（図版39、第64図）

30は壺の底部。31は壺の胴部で、最大径の位置に沈線と刻目を持ち、上半部に重弧文が展開する免田式の壺である。32～34は甕で、33・34はく字形口縁のものである。

152号土坑（図版32、第63図）

D区150号土坑の北に位置する。平面形態はやや角を有する部分があるものの、円形で径80cm程である。床面は中央がやや窪み、壁面は垂直ぎみに立ち上がる。

出土土器（第64図）

35・36は甕の口縁部で、外面に突帯を貼り付ける。37は甕の底部で平底である。

153号土坑（図版33、第63図）

D区南西隅に位置する。平面形態は長方形で、南北軸は200cmである。西側は調査区外に延びる。北東隅はプランがうまく検出できなかったが、一段下げた段階で少し弧を描くラインが観察でき、ここから床面まで一気に下がることが分かったためここを北壁とした。図の北東隅部分は掘りすぎていると思われる。床面も北側では若干弧を描く。床面は中央が窪み、壁面との境界も曖昧である。壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器（第64図）

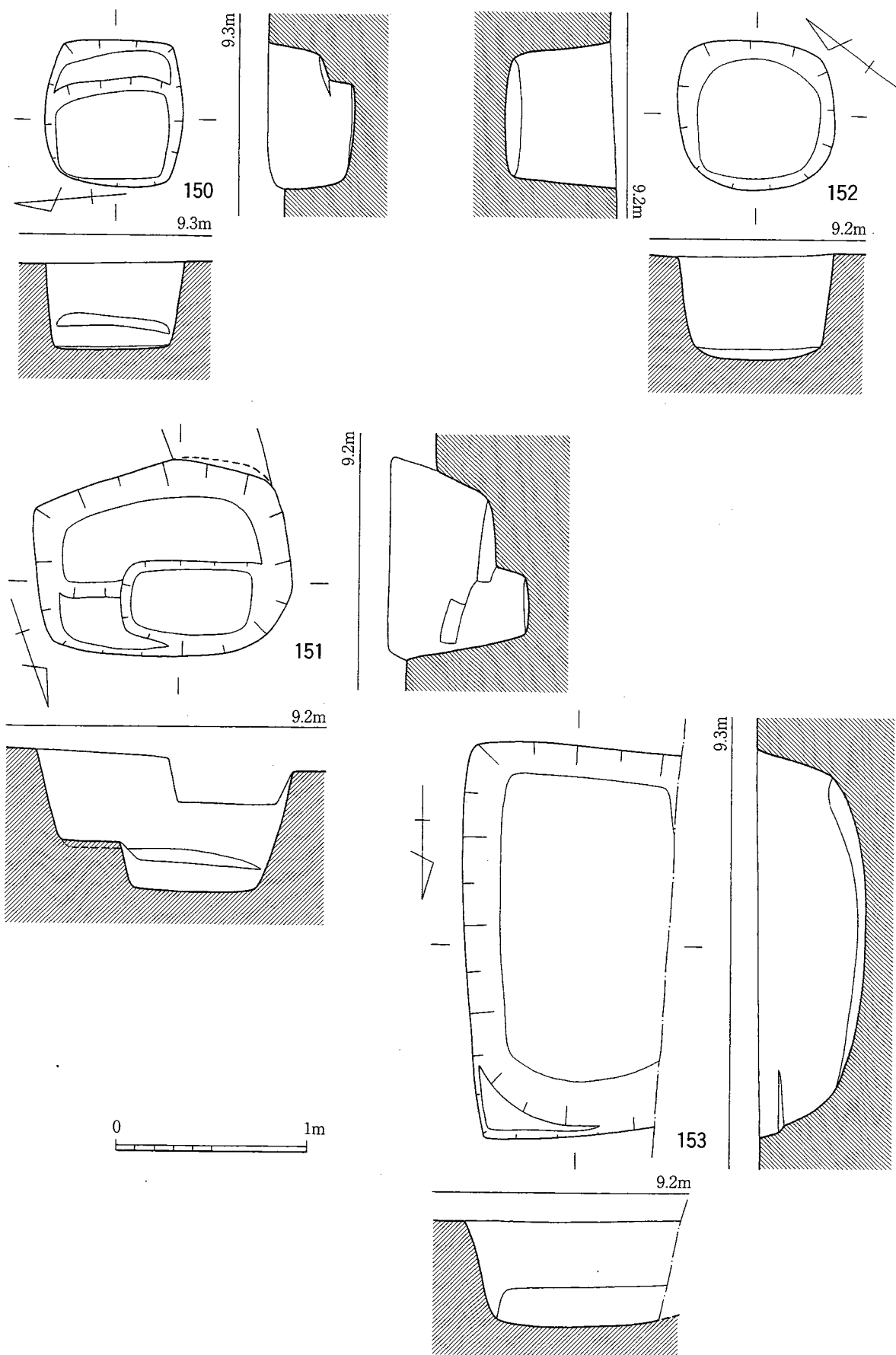
38・39は丹塗磨研壺である。39は口縁外面に突帯を貼り付け、口縁上面に穿孔を行う。40は広口壺の口縁部。41～45は甕である。

154号土坑（図版33、第65図）

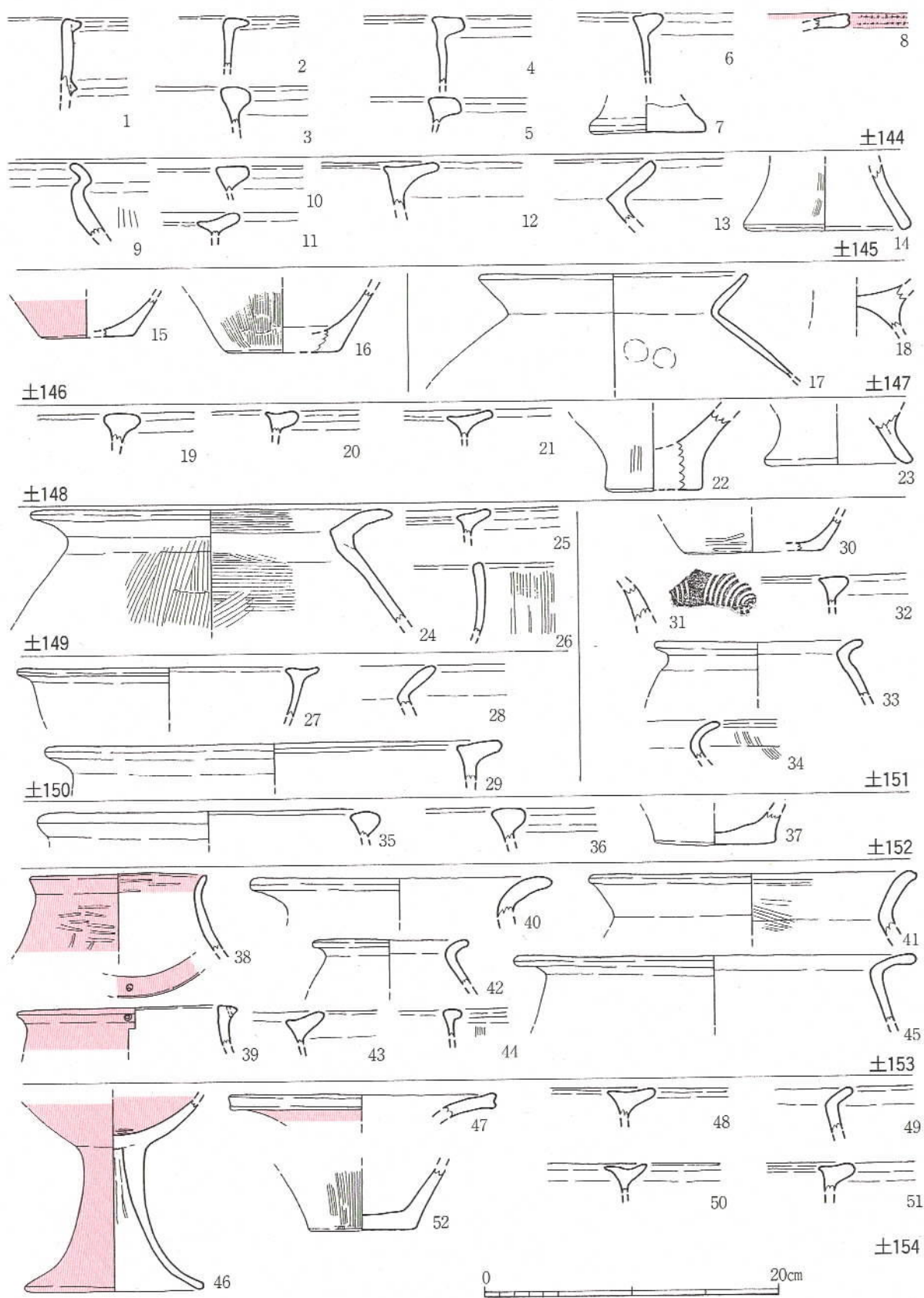
D区南端に位置し、156号土坑を切る。平面形態は隅丸長方形で長軸110cm程、短軸102cmである。検出当初は切り合い関係を間違えてしまったため、東壁は壊してしまった。床面は二段掘りの形態を呈し、東側が一段下がる。壁面は西・北・東壁は垂直ぎみに立ち上がるが、南壁は外に広がりながらやや緩く立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土で、上層に地山ブロックが含まれる。

出土土器（図版39、第64図）

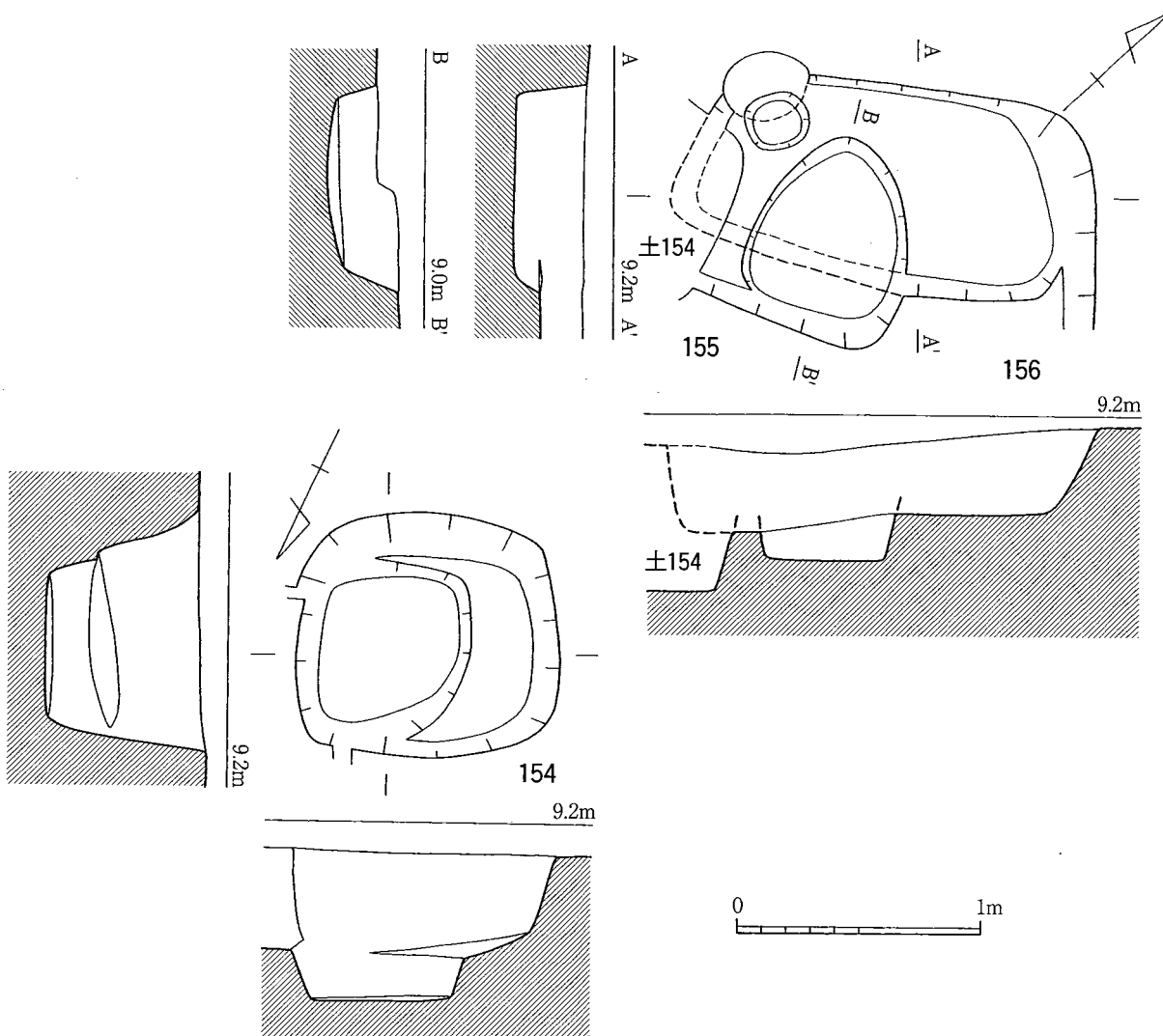
46は丹塗磨研高杯で、脚部内面上部にシボリ痕が残る。47は丹塗磨研の広口壺で、端部はナデによって窪む。48～51は甕である。50は鋤先口縁で、内面に大きく突出する。



第63图 150~153号土坑实测图 (1/30)



第64图 144~154号土坑出土土器实测图 (1/4)



第65図 154～156号土坑実測図 (1/30)

155号土坑 (図版33、第65図)

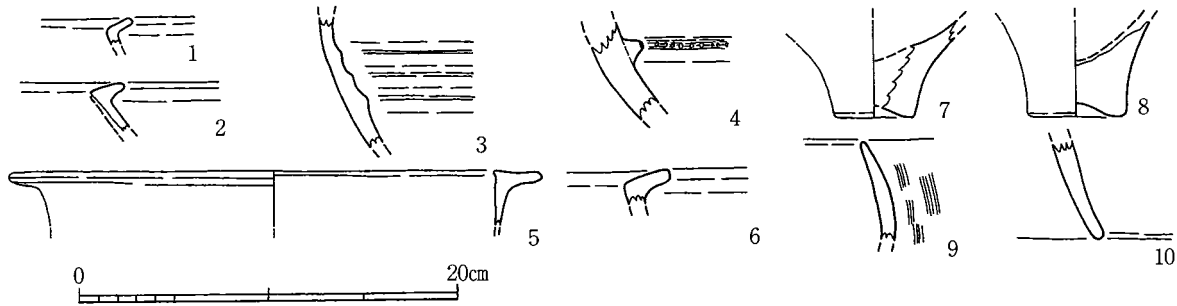
D区南東隅に位置し、156号土坑と切り合う。切り合い関係は確認することができなかった。平面形態は略楕円形で、長軸82cm、短軸68cmである。床面は中央がやや窪み、壁面は外傾して立ち上がる。出土土器は156号土坑と合わせて記述する。

156号土坑 (図版33、第65図)

D区南東隅に位置し、155号土坑と切り合う。切り合い関係は確認することができなかった。平面形態は長方形で、長軸170cm程、短軸86cmである。床面は平坦で、北西隅にピットを持つ。壁面は外傾して立ち上がる。

出土土器 (第66図)

1～10は155号、156号土坑のいずれに属するか区別できなかったため、一括して説明する。1・2は短く字形に屈曲する壺の口縁部である。3は壺の頸部で突帯を3条持つ。4も壺で、頸胴部界に



第66図 155・156号土坑出土土器実測図 (1/4)

1条の刻目突帯を貼り付ける。5・6は甕の口縁部で、長い逆L字状を呈する。7・8は甕の底部で、若干上げ底となる。9は内湾する鉢になろうか、外面はハケ調整を行う。10は器台である。

(4) 甕棺

1号甕棺 (図版34、第67図)

A区北側、93号土坑の西に位置し、上層で検出した。単棺の成人棺と思われ、ほぼ水平に据えられる。掘り方は再三の精査にも関わらず、ついに明確には確認することができなかった。棺の中から磨製石鏃が出土している。本甕棺のほかに付近に墓に関する遺構は存在せず、性格については不明な点が多い。

使用土器 (図版39、第68図)

1は胴の張る系列のもので、口縁端部はナデにより窪む。胴部に2条の突帯を貼り付け、外面縦方向のハケ調整を行う。中期後半に比定できよう。

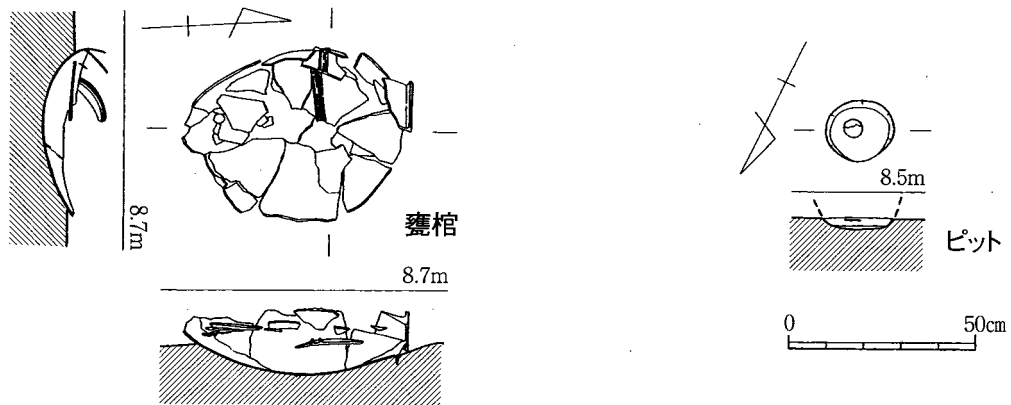
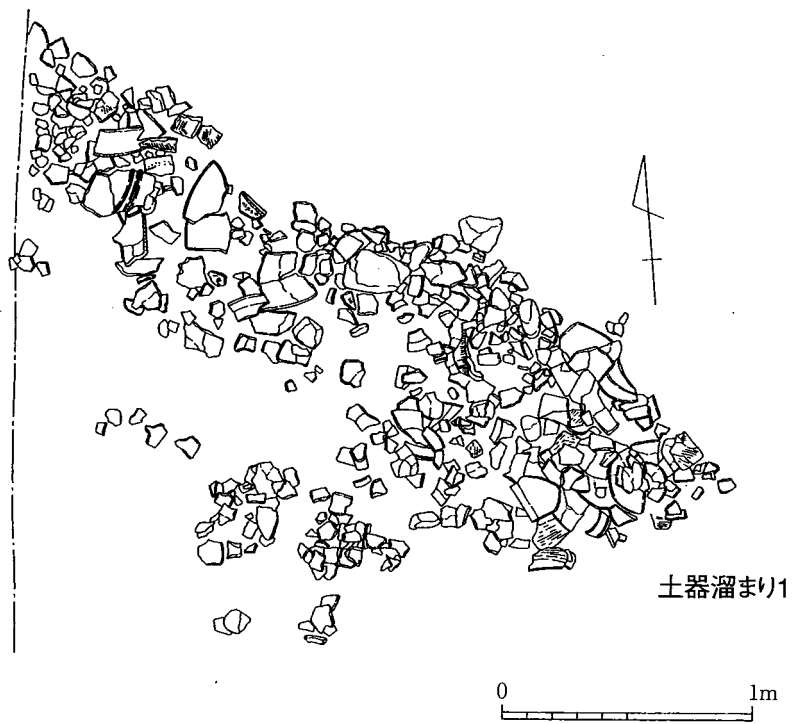
(5) 土器溜まり

土器溜まり1 (図版34、第67図)

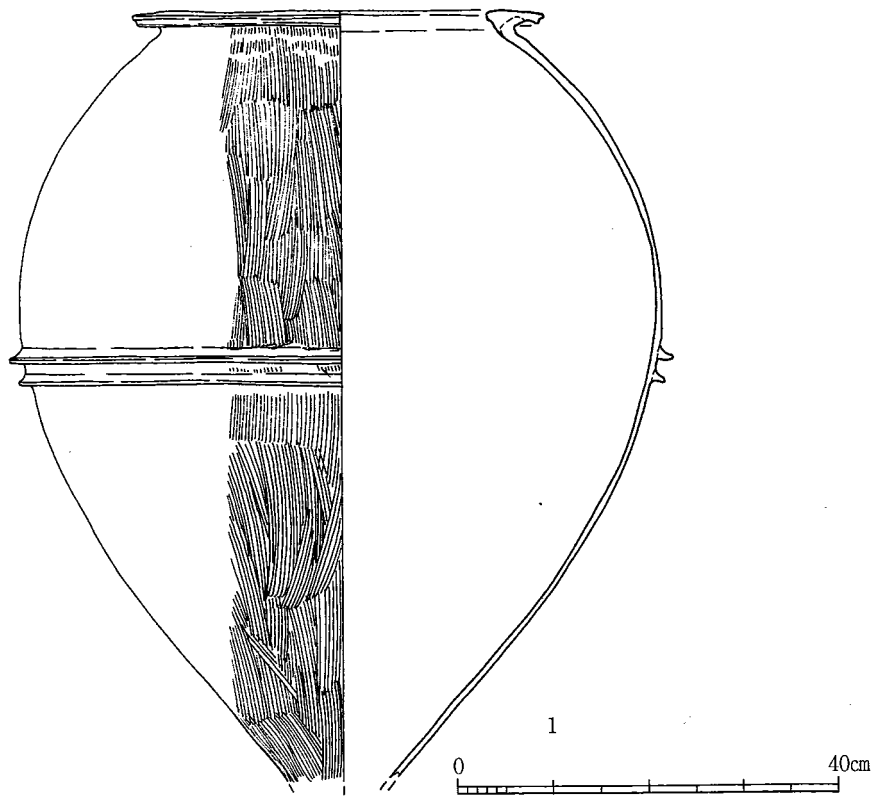
A区北側、1号甕棺の南西に位置する。上層遺構検出中に土器が集中する箇所があったため、住居跡の可能性を考え付近の精査を試みたが、結局遺構の掘り込みは確認できず、土器溜まりとして取り扱うこととなった。西側は調査区外に延びるものの、北西-南東軸に約130cm程の幅で土器が集中する範囲が300cm程つづく。土器はほぼ同一レベル (標高8.6m) で出土した。

出土土器 (図版39・40、第69・70図)

1は大型の二重口縁壺である。胴部はすぼまり、頸胴部界のくびれた箇所に1条の刻目突帯を貼り付ける。口頸部界外面は明瞭な稜を持って屈曲するかのごとくであるが、内面はなだらかである。口縁端部と口頸部界の稜に刻目を施すほか、口縁部外面に板状工具の押圧によるハ字状文様を展開する。外面はハケ調整を口縁部下端に横方向、頸部に左上がりと右上がり、胴部に左上がりで行う。胴部にはタタキ痕も確認できる。2は1と同一個体の可能性のあるもので、胴部下半部に2条の高い刻目突帯を貼り付ける。3は広口壺で、頸胴部界に1条の突帯を貼り付け、口縁端部に板状工具押圧による刻目を施す。胴部上半部に櫛状工具によって文様を施し、一部十字のヘラ記号のようなものを描く。器面にはハケ調整を行う。4は直口口縁壺で、頸胴部界に1条の突帯を貼り付ける。口縁端部に刻目を施す。器面は摩滅しているがハケ調整が確認できる。5は広口壺で頸胴部界に1条の刻目突帯を貼



第67図 土器溜まり、甕棺、鏡出土ピット実測図（ピットは1/20、その他は1/30）



第68図 1号甕棺実測図 (1/8)

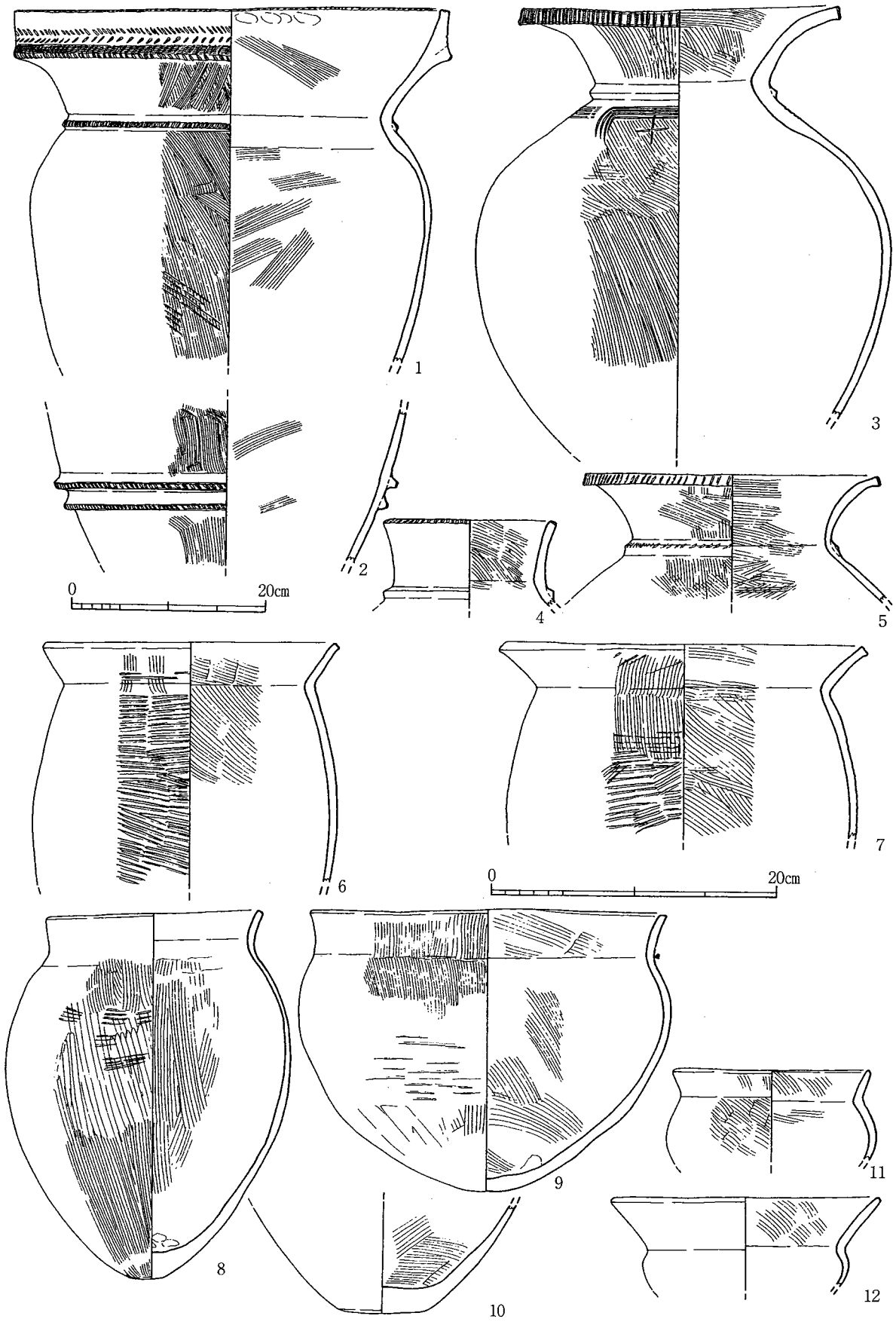
り付け、口縁端部に板状工具押圧による刻目を施す。器面はハケ調整を行う。6・7はく字形口縁の甕で、外面はタタキとハケ調整、内面はハケ調整を行う。8は屈曲部がなだらかに外反する甕で、底部は丸味を帯びた小さな平底である。外面はタタキとハケ調整、内面にハケ調整を行う。9は口縁径が大きく鉢とすべきであろうか。屈曲部は弱くく字形に屈曲し、底部は丸底を呈する。外面はハケ調整を行うが、下半部は粗いもので、一部ケズリ調整を行っている可能性もある。10は甕の底部でやや尖り気味の平底である。底面にもハケ調整を行う。11・12は鉢である。11は口縁部がく字形を呈し、ハケ調整を行う。12は長い口頸部を持つもので、大きく開く。13～15は高杯である。13は浅い椀状の杯部から屈曲して、直線的に開く口頸部が取り付く。脚部には1孔を穿つ。14・15は屈曲部内外面に段を持ち、やや外反する口頸部が取り付く。器面はハケ調整の後、内面は暗文状のミガキを行う。当土器溜まり出土土器は、底部や高杯の特徴から、弥生時代後期終末に位置づけることができよう。

土器溜まり2 (第5図)

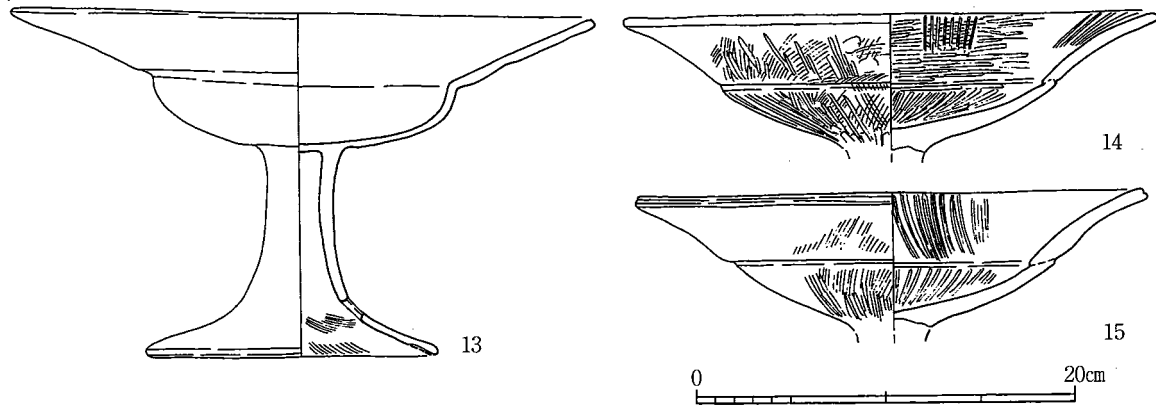
A区南側、134号竪穴住居跡を切るように浅い窪み状の土器溜まりが存在する。この浅い窪みは長径300cm、短径250cm程の楕円形で、暗灰黄色弱粘質土中に土器が多量に廃棄された状態で検出された。120号、121号土坑の上層にこの土器溜まりの土が入ることから、土坑が完全に埋没してしまう前に土器が廃棄されたものと考えられる。

出土土器 (図版40・41、第70～72図)

1は大型の二重口縁壺の口縁部。口縁部は立ち上がる箇所では剥れている。口縁外面はヘラ状工具によって文様を描く。器面はハケ調整を行う。2は大型の二重口縁壺である。胴部はすぼまり、頸部



第69図 土器溜まり1出土土器実測図① (1・2は1/6、他は1/4)

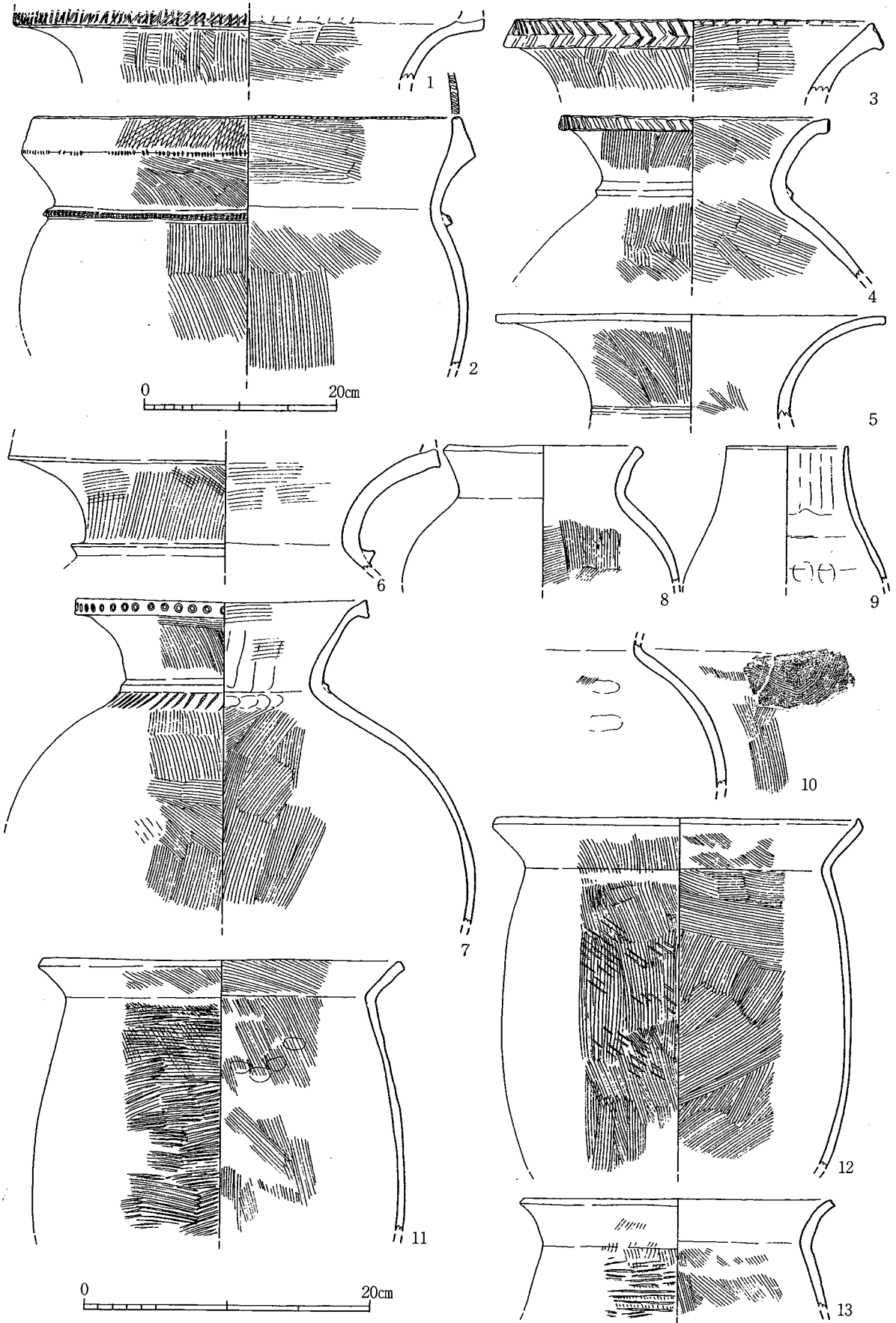


第70図 土器溜まり1出土土器実測図② (1/4)

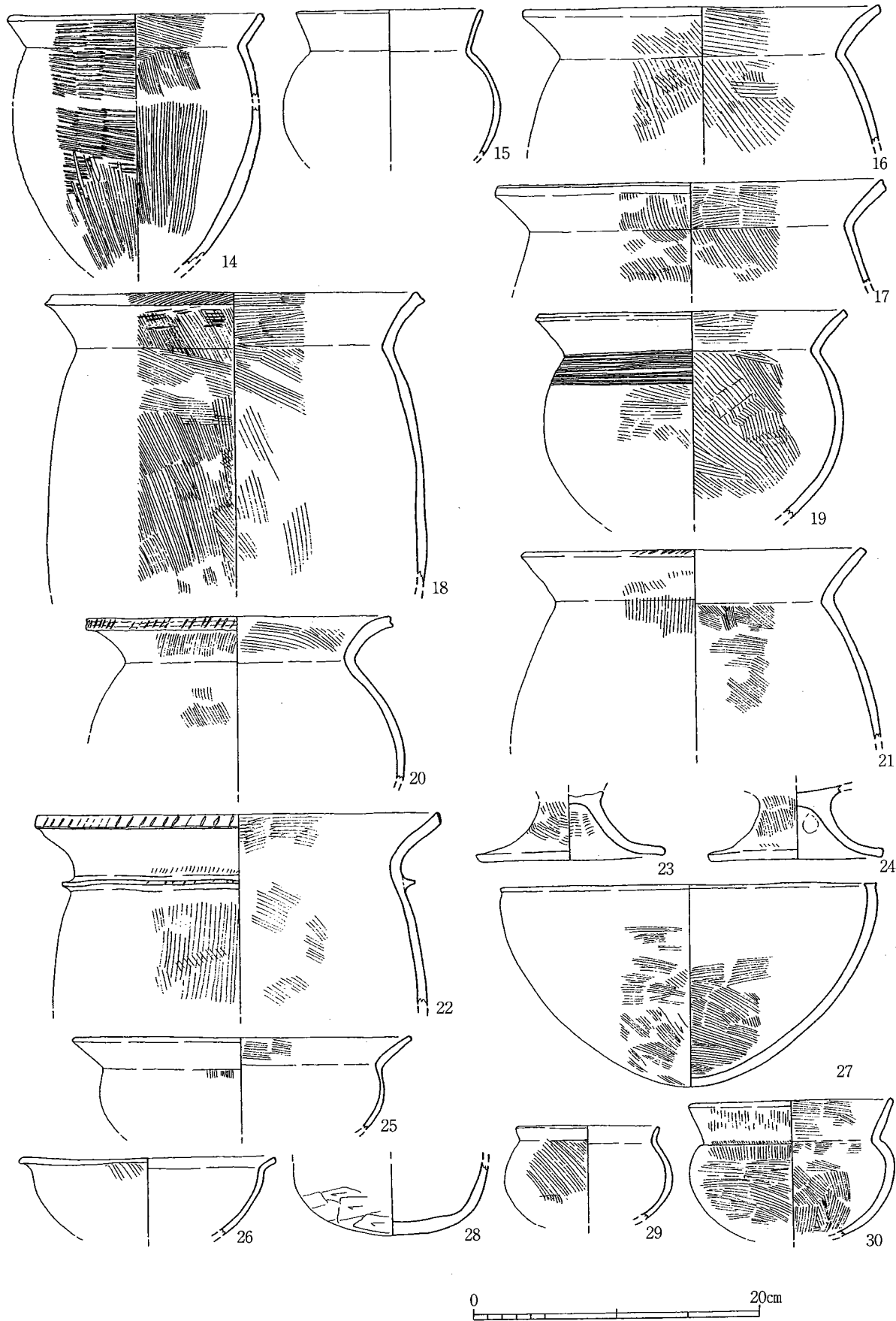
界のくびれた箇所には1条の刻目突帯を貼り付ける。口頸部界外面は明瞭な稜を持って屈曲するかのごとくであるが、内面はなだらかである。口縁端部と屈曲部に刻目を施す。口縁外面は板状工具によって右上がりの文様を2回展開させる。器面はハケ調整を行う。3～5は広口壺である。3は口縁部が拡張し、板状工具押圧による矢羽状の文様を施す。器面はハケ調整を行う。4は頸胴部界のくびれ部に突帯を貼り付け、口縁端部に刻目を施す。器面はハケ調整を行う。5は頸部にヘラ描き直線文を施す。6は二重口縁壺で、口縁部の立ち上がる箇所が剥れている。頸胴部界に突帯を貼り付ける。7は口縁端部を拡張し竹管文を施す。頸胴部界のくびれ部に突帯を貼り付け、その下に板状工具による刺突文を施す。器面はハケ調整を施す。8はさほど外反しない壺で、器面は摩滅しているが、内面はハケ調整とユビオサエを行う。9は口縁がすぼまる壺で、器面は摩滅している。内面にユビによるオサエとナデが確認できる。10は壺の胴部破片で、胴部上半部に櫛書きによる波状文を施す。11～22はく字形口縁の甕である。11～14は外面はタタキ後ハケ調整、内面はハケ調整を行う。12は口縁端部を跳ね上げ気味に収める。14は器面を一部平滑にする箇所がある。16～22は内外面ハケ調整を行う。18は口縁端部にもハケ調整を行う。19は胴部上半部に櫛書き直線文を施す。20～22は口縁端部に刻目を施す。22は屈曲部下に刻目突帯を貼り付ける。23・24は甕の底部で高い脚台状を呈する。25・26はく字形を呈する鉢である。器面はハケ調整を行う。27はボール状の鉢で内外面ハケ調整を行う。28は鉢の底部か。外面はケズリ調整を行う。29・30は胴部の張る鉢で、器面はハケ調整を行う。30は屈曲部にしっかりとした稜を形成する。31～33は高杯である。31は屈曲部内面に軽い段を持ち、口頸部は大きく外に開く。脚部内面はケズリが見られる。32は脚部に3孔を穿ち、内面にシボリ痕が残る。34は低脚高杯と思われる。35は支脚で、外面タタキ調整を行う。上部に小さな把手のようなものを作り出し、両側をユビで強くオサえる。

(6) 鏡出土ピット (図版34、第67図)

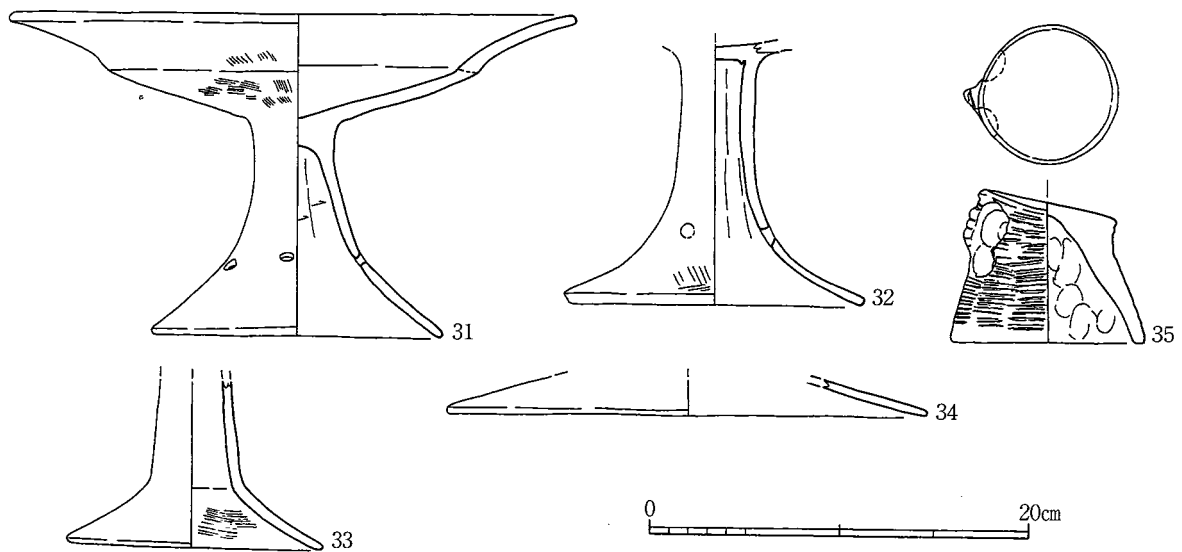
27号竪穴住居跡の埋土を切り込む径20cmのピットである。当初はピットを認識できず、27号竪穴住居掘削中に小型仿製鏡が出土したことから精査を試みたところ、住居の埋土よりも若干暗いピットのプランを確認することができた。小型仿製鏡はこのピットの床面近くで鏡面を上にした状態で埋納されていたようである。



第71図 土器溜まり2出土土器実測図① (1・2は1/6、他は1/4)



第72図 土器溜まり2出土土器実測図② (1/4)



第73図 土器溜まり2出土土器実測図③ (1/4)

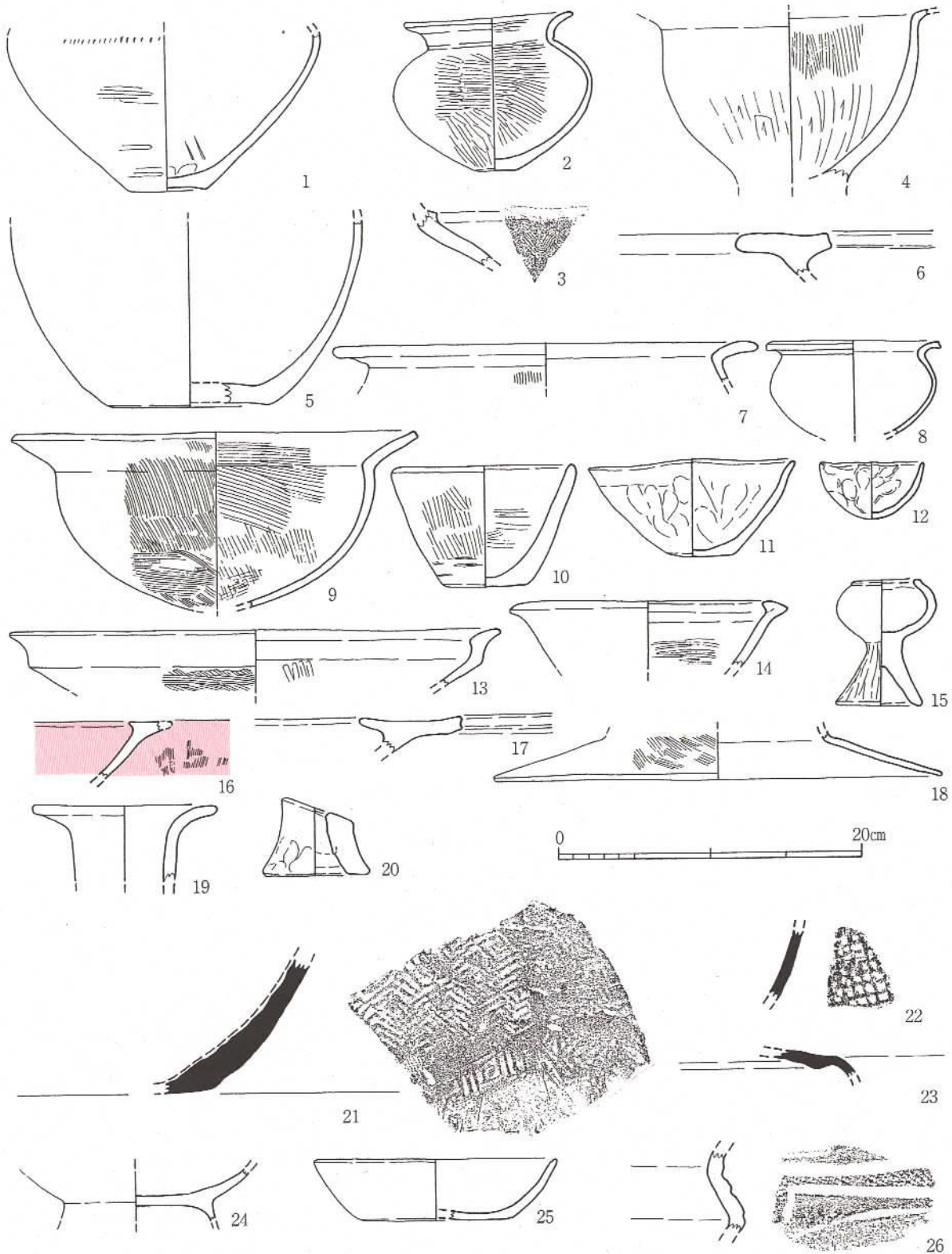
(7) ピット出土土器 (図版41、第74図)

1・2は壺である。1は胴部最大径の位置に刻目を施す。2はくびれ部に段を持ち、口縁部は強く外反する。3は壺の胴部破片で、くびれ部に突帯を貼り付け、直下に櫛書きによる波状文を施す。4～7は甕である。4は口縁端部が欠損し、胴部下半に内外面ともケズリ調整を行う。5は平底の底部で、器面は丁寧なナデによって仕上げる。6は大型で、口縁部はT字状をなす。7はく字形口縁である。8～12は鉢である。8は口縁部がく字形を呈し、端部はナデによって窪む。9はく字形口縁で、底部は丸底になると思われる。内外面ハケ調整を行う。10は直線的に外に開く器形で、内外面ハケ調整を行う。11・12はユビオサエによって仕上げるもので、11は平底、12は丸底を呈する。13～17は高杯である。13は逆く字形に屈曲し、口縁部は外に短く突出する。14は口縁内面が三角形に肥厚する。15は杯部が丸くなり、口縁端部は短く上方向に突出する。16は丹塗磨研で端部が欠損する。17は鋤先口縁を呈し、口縁端部はナデにより窪む。18は裾部にハケ調整の痕跡が残る。19は器台。20は支脚である。21・22は須恵器甕で、21は外面に山形のタタキ痕が残る。内面は器面が剥離している。22は外面に格子タタキを施す。23は須恵器の壺にならうか。24は土師器の高台の付く杯、25は土師器杯である。26は縄文土器の深鉢で、屈曲部上位に太い沈線とLR縄文を施す。

(8) 包含層出土土器

B区包含層 (図版41、第75図)

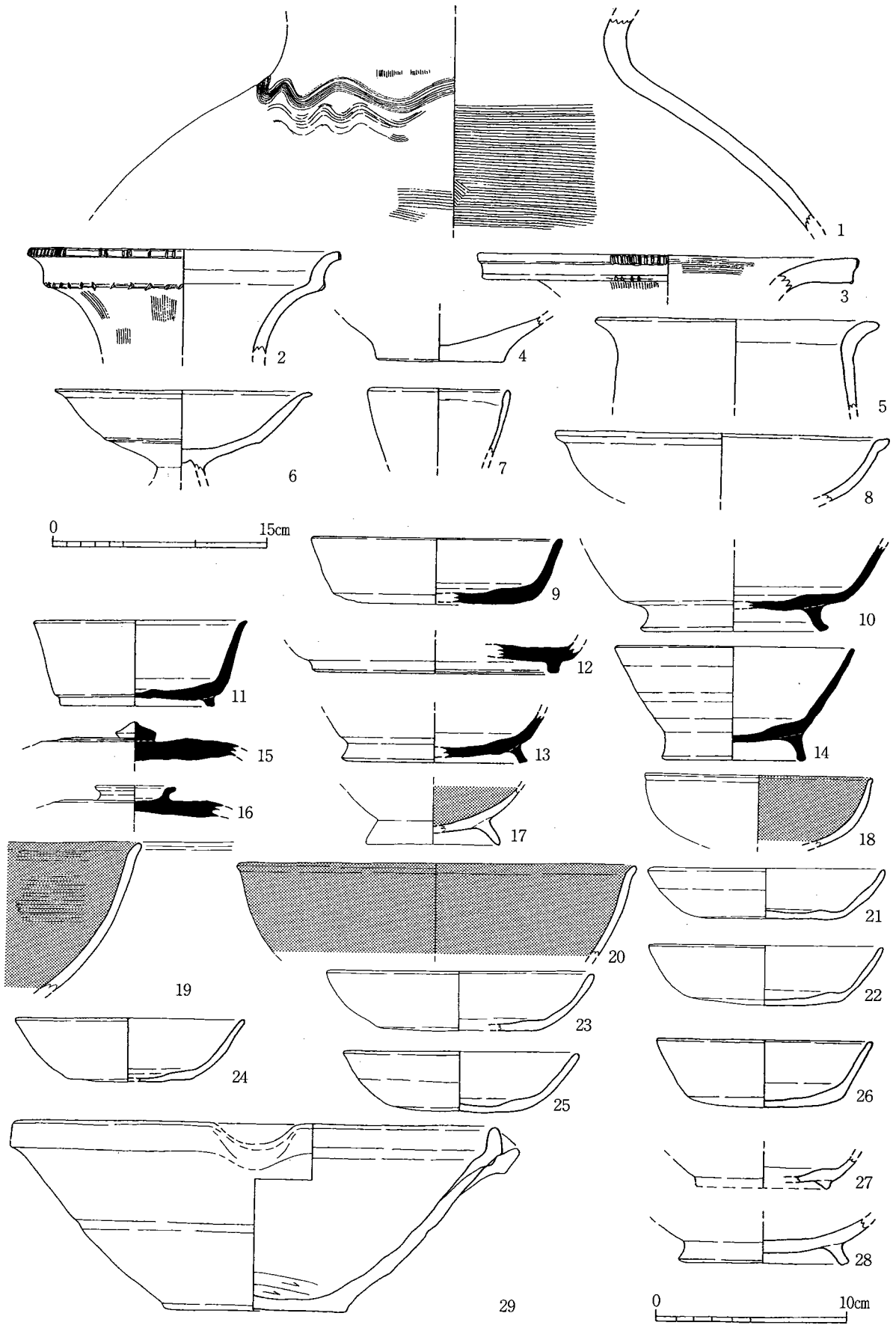
1～3は壺である。1は胴部上位に櫛書き波状文を施す。内外面は横方向のハケ調整を行う。2は二重口縁で、屈曲部と口縁端部に刻目を施す。3は広口壺で口縁端部は強いナデによって窪み、上下端に刻目を施す。4は壺の底部で厚い平底を呈する。5は甕で口縁部が厚く、緩く外反する。6は高杯で屈曲部が突出し、薄い突帯を貼り付けている可能性もある。口縁端部は短く外反する。7・8は鉢である。7は直線的に開くもので、口縁端部内面に粘土の接合痕が残る。8は口縁端部が短く外反する。9～14は須恵器杯である。10～14は高台を持ち、10・14は特に高い。11は口縁端部が短く外反



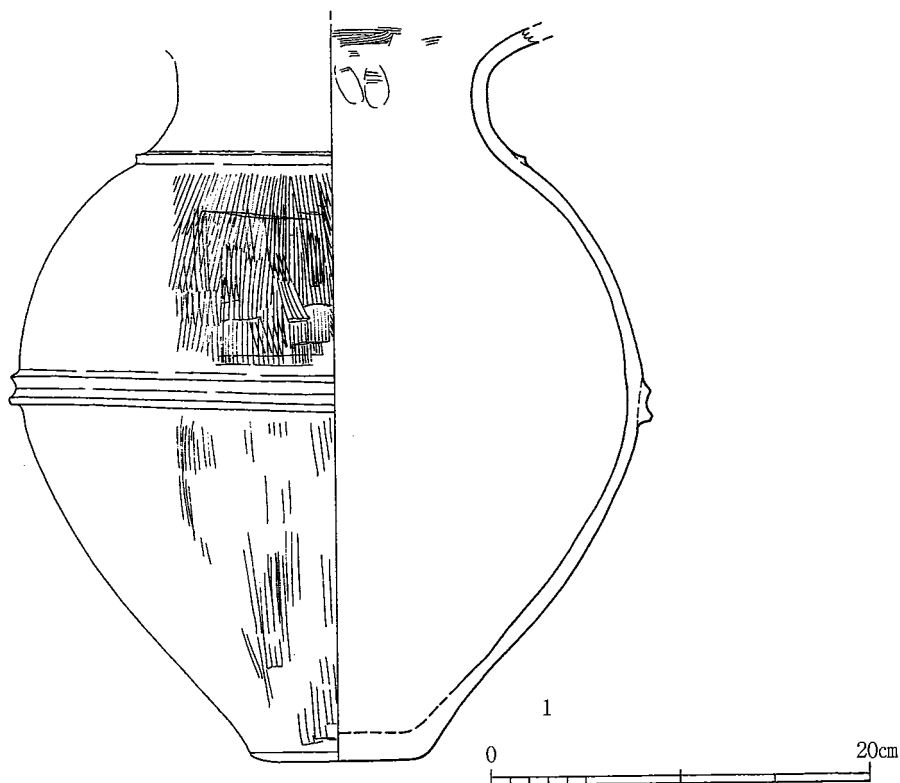
- | | | | | | | | |
|--------|------|----|------|----|------|--------|------|
| 1.2.15 | P486 | 8 | P428 | 14 | P472 | 21 | P758 |
| 3 | P417 | 9 | P578 | 16 | P459 | 22. 25 | P810 |
| 4 | P541 | 10 | P549 | 17 | P606 | 23 | P773 |
| 5 | P486 | 11 | P496 | 18 | P464 | 24 | P805 |
| 6 | P744 | 12 | P402 | 19 | P450 | 26 | P545 |
| 7 | P816 | 13 | P512 | 20 | P755 | | |

0 10cm

第74図 ピット出土土器実測図 (1~20は1/4、21~26は1/3)



第75図 B区包含層出土土器実測図 (1~8は1/4、9~29は1/3)

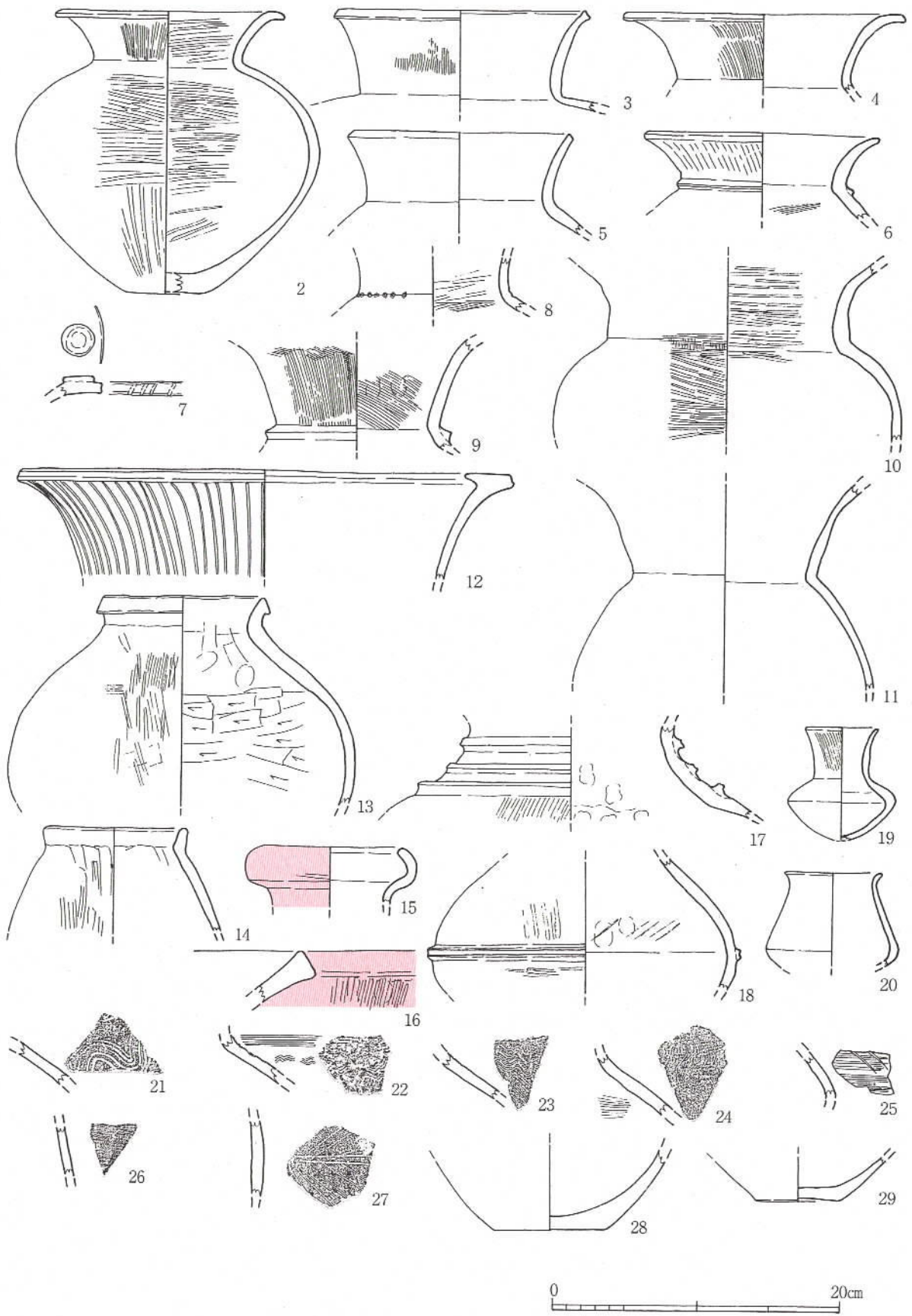


第76図 A区包含層出土土器実測図① (1/4)

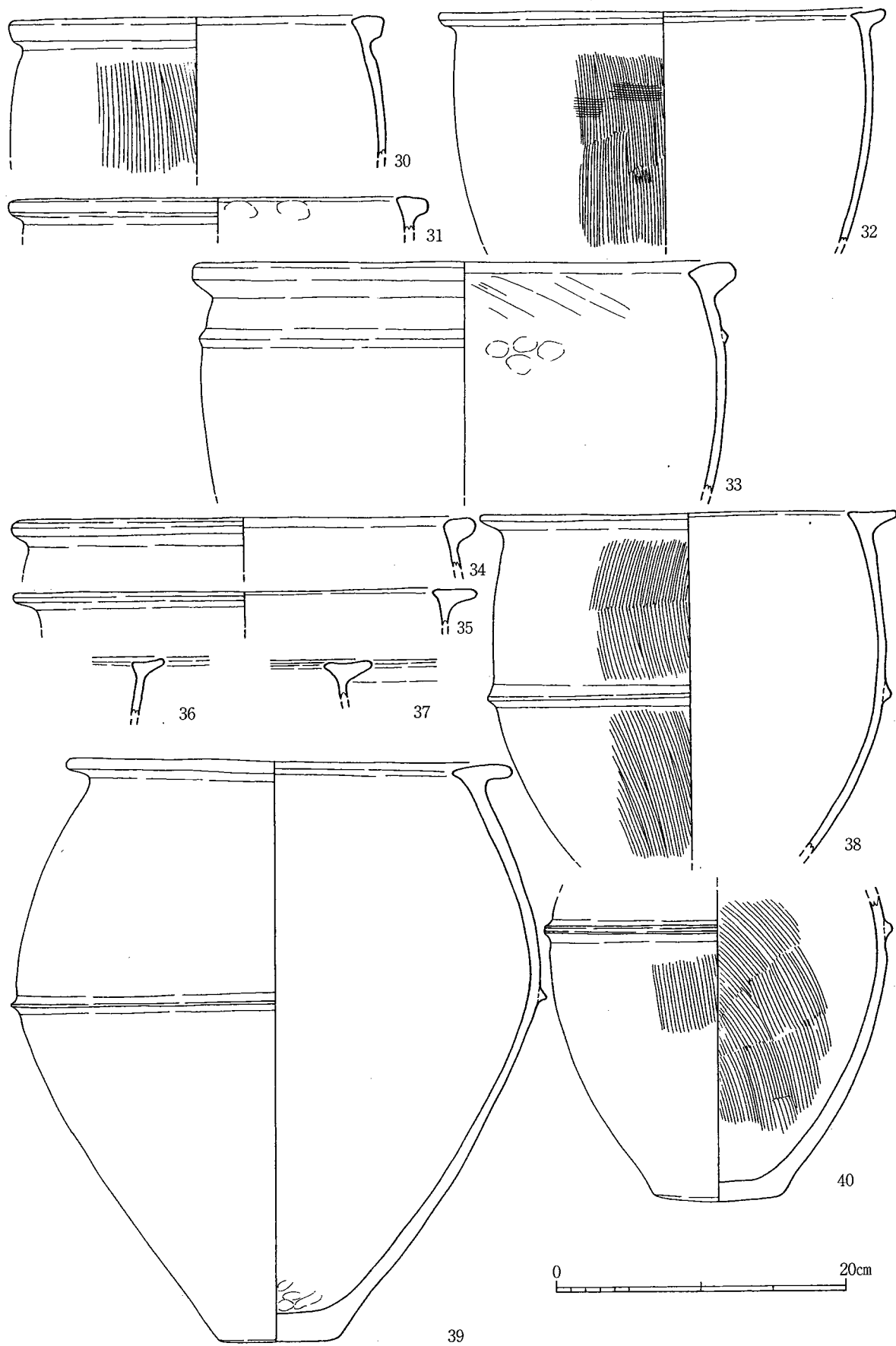
する。15・16は須恵器蓋である。17～19は黒色土器A類、20は摩滅しているが、内外面黒色処理を行う黒色土器B類の可能性ある。黒色土器はいずれも口縁端部がわずかに外反する。21～28は土師器杯である。27・28は高台が取り付け。29は片口で底面は糸切りを行う。内面底部に近い箇所ケズリ調整を行い、口縁端部は外に肥厚する。

A区包含層 (図版42・43・44、第76～85図)

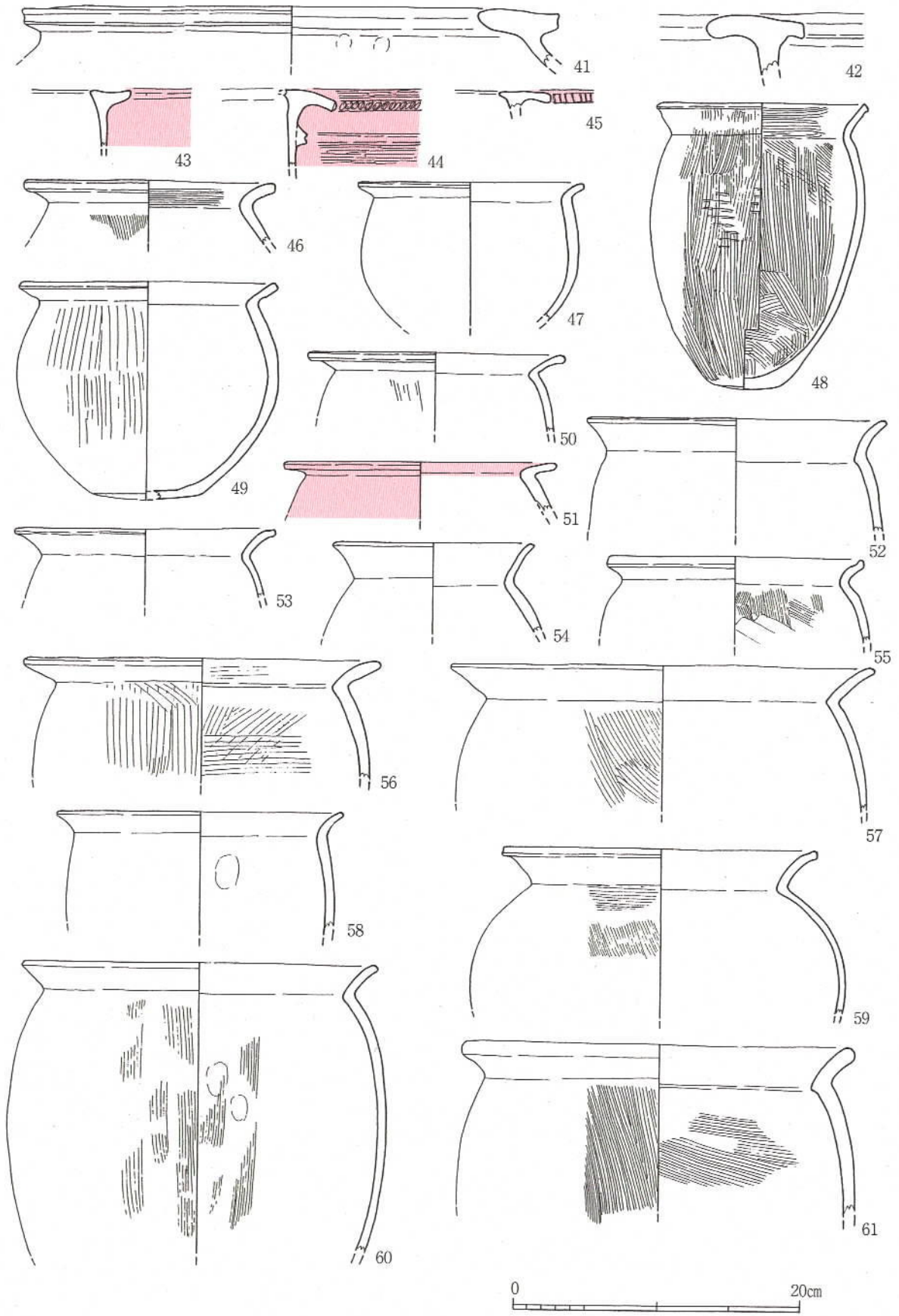
1は壺で、頸胴部界に1条の三角突帯、胴部最大径の位置にM字状突帯を貼り付ける。外面はハケ調整、内面はナデ調整で仕上げる。底部は薄い平底である。2はく字形に屈曲し、口縁端部が外反する壺である。口頸部外面はハケ調整を行うが、その他はミガキ調整を行う。3～6はく字形に屈曲する壺で、6は屈曲部に突帯を貼り付ける。頸部にハケ調整を行う。7は壺の口縁部で、内面に円形浮文を貼り付ける。口縁端部に刻目を施す。9～11は壺の頸部～胴部にかけての破片で、9は屈曲部に突帯を貼り付け、頸部にハケ調整を行う。12は長い頸部に鋤先口縁が取り付け壺で頸部に暗文を施す。13は口頸部が短くつくりの粗い壺である。口縁端部は三角形状に肥厚する。胴部外面はハケ調整、内面はケズリ調整を行う。14は胴部がすぼまり口縁部が短くく字形に外反する壺である。内外面とも板状工具によるナデを施す。15は丹塗磨研の複合口縁壺である。16は丹塗磨研の広口壺で口縁端部は肥厚する。17は壺の頸部片で3条の突帯を貼り付ける。突帯上はナデによって窪む。18は壺の胴部最大径の位置に突帯を貼り付ける。突帯上はナデによって窪む。19は頸部が長い小型壺である。摩滅しているがハケ調整の痕跡が残る。20は精製の小型壺で胴部は下膨れとなり、口縁部は弱く外反する。21～27は壺の胴部破片で、胴部上半に文様を持つ。21～24は櫛書きによる波状文を描き、22は屈曲部直下に直線文も持つ。25はヘラ書きによる文様が確認でき、26は櫛書きによる半円文様、27はヘラ書き



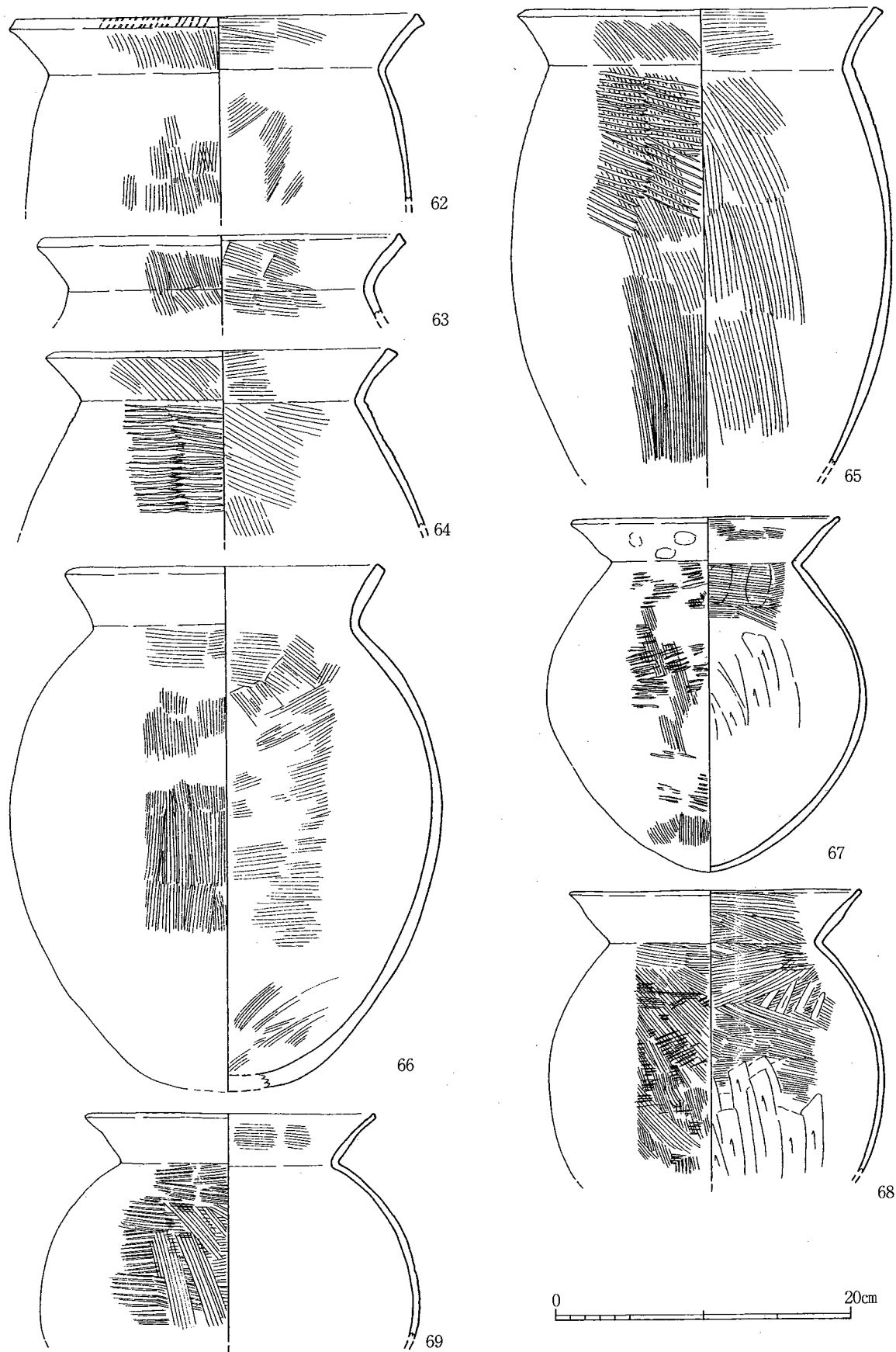
第77图 A区包含層出土土器实测图② (1/4)



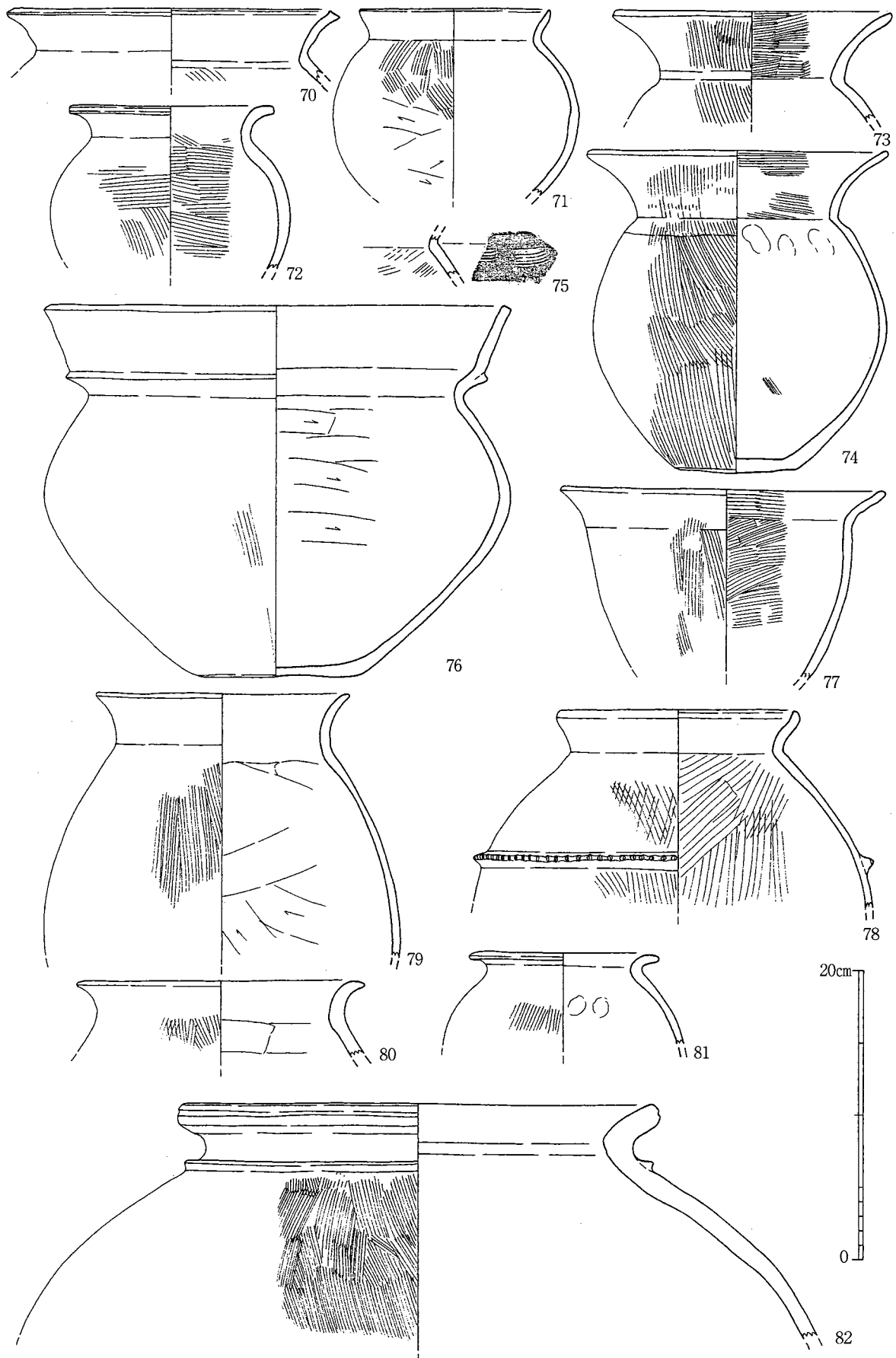
第78图 A区包含层出土土器实测图③ (1/4)



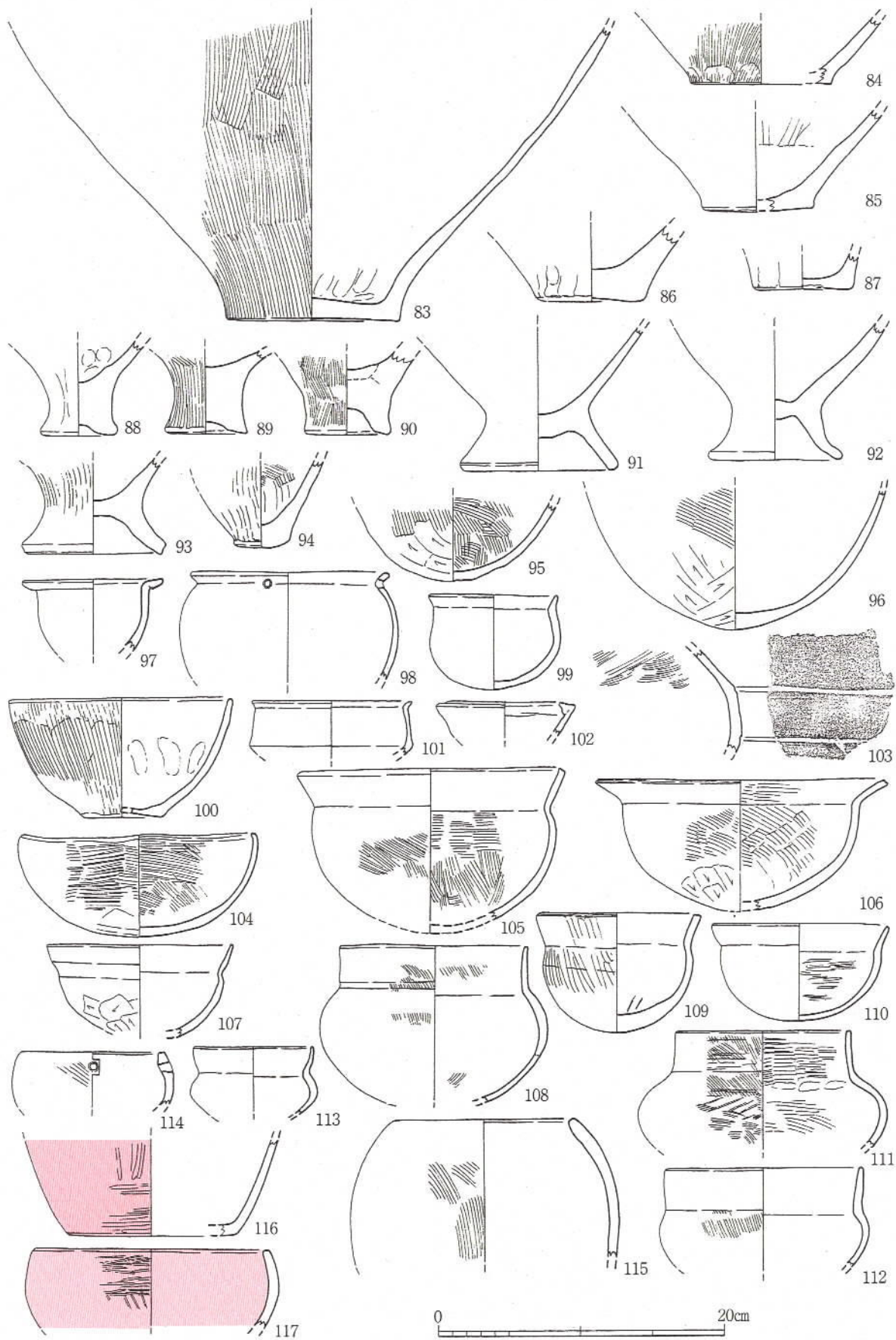
第79图 A区包含层出土土器实测图④ (1/4)



第80图 A区包含層出土土器实测图⑤ (1/4)



第81图 A区包含層出土土器実測図⑥ (1/4)



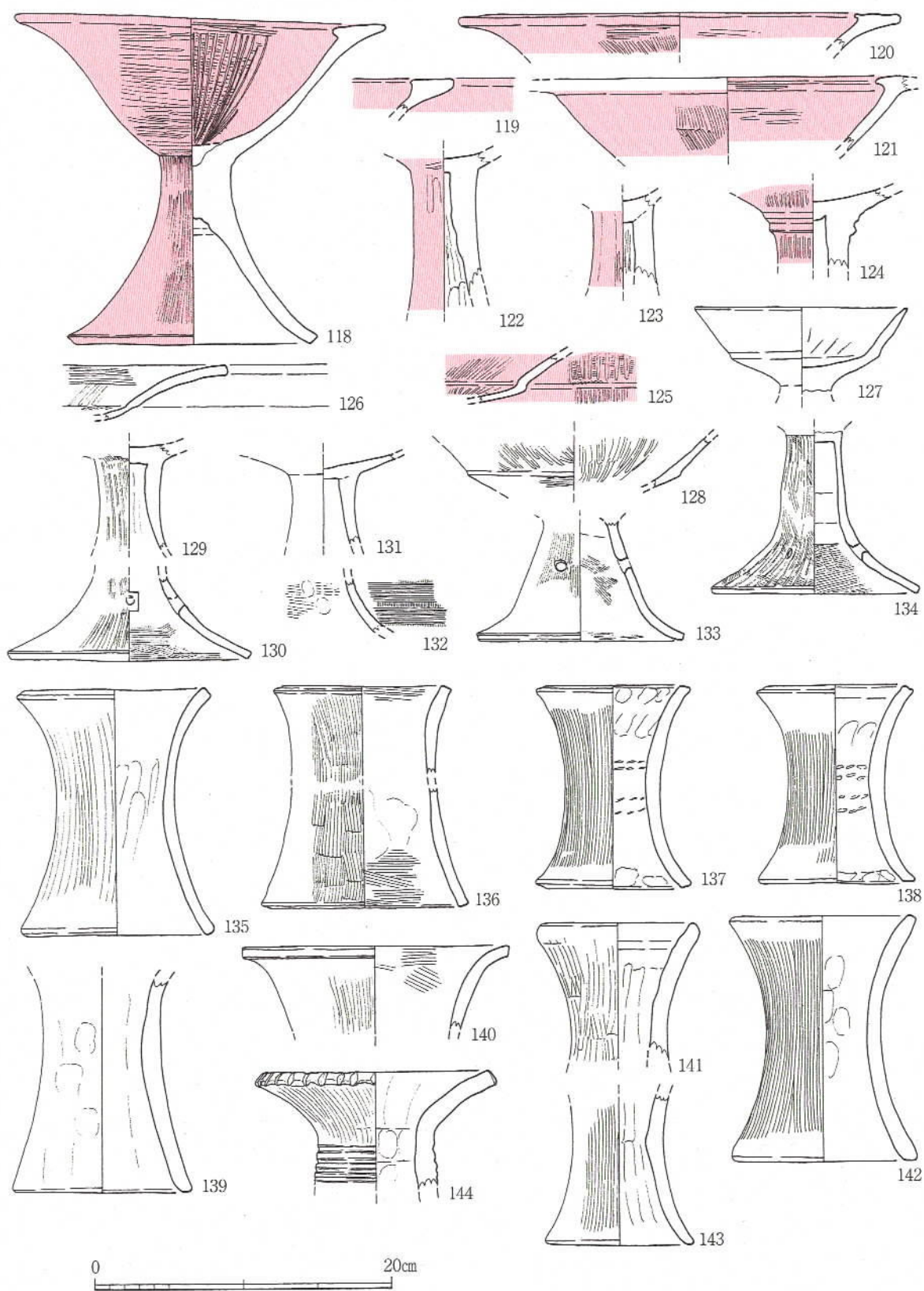
第82图 A区包含层出土土器实测图⑦ (1/4)

による文様を描く。28・29は壺の底部である。30～34は口縁外面に突帯を貼り付ける甕である。33は突帯が大きく内側は鋭く突出する。口縁部下にも小さな三角突帯を貼り付ける。35～39は鋤先口縁の甕である。38・39は胴部最大径の位置に三角突帯を貼り付ける。40は甕の胴部～底部にかけてのもので、最大径の位置に突帯を持ちハケ調整を行う。41・42は大型のT字状口縁甕で、甕棺になろうか。口縁端部はナデにより窪み、内側の突出部は丸味を帯びる。43～45は丹塗磨研の鋤先口縁甕で、44・45は口縁部が長く伸び端部に刻目を施す。44は口縁部下に突帯を貼り付け、上面はナデによって窪む。46～66はく字形口縁甕である。48は外面にタタキとハケ調整を行う。底部はやや突状になる。55は口縁端部が上部に拡張する。56は粗いハケ調整を行う。61は鋤先口縁の名残りか、内面屈曲部が突出する。62は口縁端部が肥厚し刻目を施す。64・65はタタキとハケ調整を行う。67～69は庄内系甕である。稜を持ってく字状に屈曲し、口縁部はやや外反する。口縁端部は上方向に跳ね上げる。外面は細かいタタキとハケ調整、67・68は内面にケズリとハケ調整を行う。70～74は胴部が丸く張る甕である。70は口縁端部内面が肥厚する。71は胴部下半はケズリ調整、72は粗いハケ調整を行う。73・74は口縁部が長く外反し、73は屈曲部外面を強くナデる。74の底部は平底である。75は壺の胴部上半に工具による文様をつける。76は二重口縁甕で底部は平底を呈する。胴部内面はケズリ調整を行う。77は外反する口縁部を持つ甕で内外面ハケ調整を行う。78は胴部に刻目突帯を持ち、口縁部はく字形に屈曲する。口縁端部はやや立ち上げ気味に収める。79・80は緩く外反する甕で、内面はケズリ調整を行う。81は短く強く外反する甕で、外面はハケ調整で仕上げる。82は大型甕で口縁部は短くく字形に屈曲し、屈曲部直下に突帯を貼り付ける。外面はハケ調整を行う。83～87は平底の甕底部である。83は内面にユビオサエを、85は内面に粗いハケ調整の痕跡が残る。86はミガキも施しており壺の底部の可能性が有る。88～90は窪み底、91～93は脚台状を呈する甕底部である。94は尖り気味の甕底部で外面は粗いハケ調整を行う。95・96は丸底の甕底部で、底面はケズリを施す。

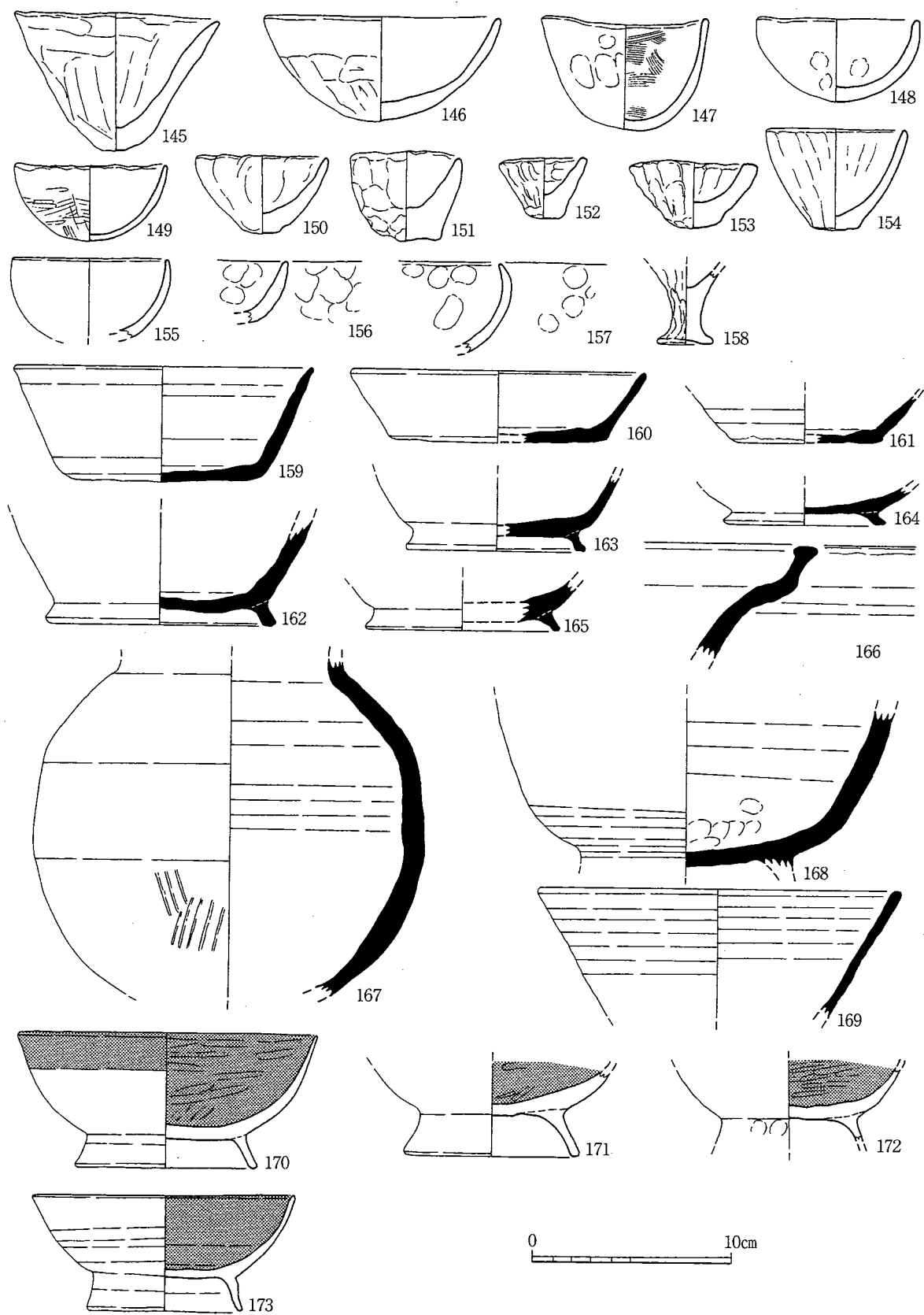
97～115は鉢である。97～99は口縁がく字形に屈曲し、97は口縁部を貼り付けている可能性がある。98は屈曲部に穿孔を行う。100の底部は上げ底となる。101は胴部で稜を持って屈曲し、口縁端部が短く外反する。102は内面を三角形状に肥厚させる。103は大きく胴部が張り出し、最大径の位置に太い沈線を2条施す。内面はハケ調整、外面はミガキを施す。104は浅いボール状を呈し、口縁端部は内側へ小さく突出する。ハケ調整で仕上げるが、底部付近は外面に軽いケズリを施す。105～107はく字形に屈曲し、ハケ調整を行う。106・107は底部付近にケズリを施す。108～113はく字形に屈曲し、胴部が張るものである。111はハケ調整を行うが、タタキの痕跡も残る。114・115は内湾する器形で、114は穿孔を行う。116・117は丹塗磨研土器である。

118～125は丹塗磨研の高杯である。118は鋤先口縁のもので、杯部内面は横方向のミガキの後に暗文を施し、脚部外面はハケ調整の後にタテ方向のミガキ調整を行う。底面は擬口縁が確認できる。119～121は鋤先口縁を呈するもので、120・121はハケ調整の痕跡も残る。122～124は脚部から杯部にかけてのもので、122・123はシボリ痕が明瞭に残る。124は付け根に突帯を貼り付けるようである。125は外面にハケ調整の後に暗文を施す。126～134は高杯である。129・130・134はハケ調整の後ミガキ調整を行う。132は脚部外面に櫛書き直線文を施す。133は脚部に穿孔を2ヶ所施す。

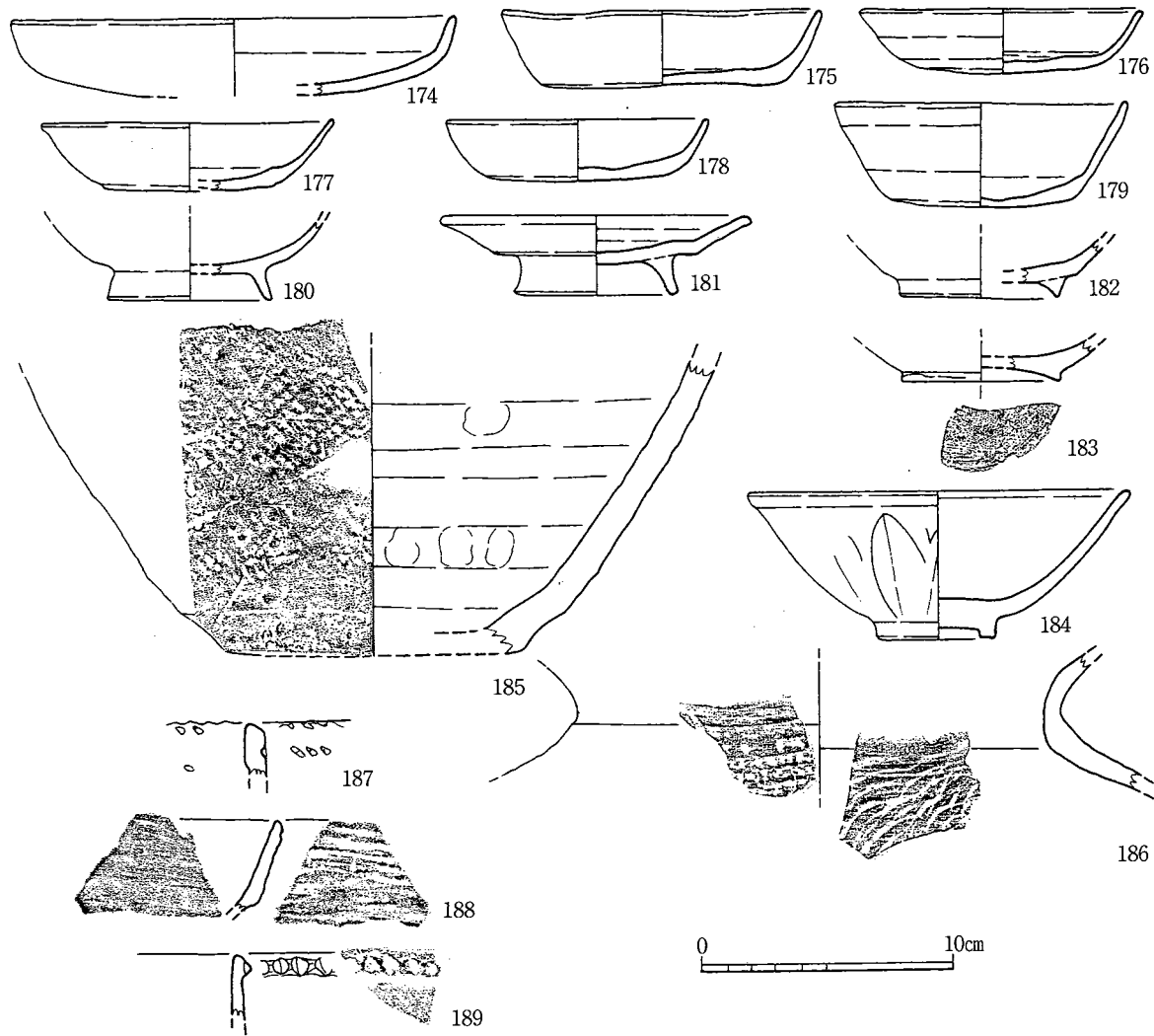
135～143は器台である。136は端部付近内面に横方向のハケ調整を行う。137・138は内面に2列ずつの工具の圧痕が巡る。144は口縁端部に刻目を施し、括れ部に数条の平行沈線文を施す。特異なものであるが径が小さいことから器台の可能性が有る。



第83图 A区包含层出土土器实测图⑧ (1/4)



第84图 A区包含層出土土器实测图⑨ (1/3)



第85図 A区包含層出土土器実測図⑩ (1/3)

145～157はボール状の小型土器である。146は外面下半部にケズリを施す。147は内面に、149は外面にハケ調整を行う。その他はユビオサエ及びナデによって仕上げる。158は脚部が高く、端部が外側に張り出すもので外面ケズリ調整の後ナデによって仕上げる。

159～165は須恵器杯身である。162～165は高台を持ち、163・164は高台の端部が外側に張り出す。166は須恵器で甕になるうか。口縁部は外に内湾しながら張り出し、端部内面は肥厚する。頸部はナデで仕上がるが、外面にタタキの痕跡が残る。167・168は須恵器の壺である。167は胴部下半にタタキの痕跡が残る。168は高台を持ち、底面にユビオサエを施す。170～173は黒色土器B類である。高台は直線的で高く、内面にミガキを施す。172は高台との付け根部分にユビオサエを施す。

174は土師器皿、175～182は土師器杯である。178・179は底面にヘラ切りの痕跡が残る。180～182は高台を持つ。181は高い高台で、杯部は稜を持って浅く立ち上がる。183～186は陶器である。183は底面に糸切り痕が見られる。184は青磁で蓮弁を持つ。口縁端部外面は若干稜を持って肥厚する。畳付け及び高台内面は無釉である。185は甕と思われる。外面に格子タタキ、内面はユビオサエを施す。186も甕で、外面に格子タタキ、内面は青海波文の当て具痕が見られる。

187～189は縄文土器である。187は口縁内外面に刺突文を施し、端部に刻目を施す。188は深鉢口縁

部で、外面が肥厚し条痕を施す。晩期古閉式のものと思われる。189は刻目突帯文土器で、口縁端部よりやや下がった位置に突帯を貼り付ける。調整はナデにより仕上げる。

(9) 石器 (図版45~47、第図86~90)

1~14は黒曜石製の石鏃である。1~9は凹基式で、5は特に窪みが大きい。9は主要剥離面を多く残し、基部はわずかに窪ませる。10はアメリカ式石鏃である。11~14は平基式である。12は薄く、縁辺部に細かい調整剥離を行う。13は短く、作り直しを行っている可能性がある。15~30は安山岩製の石鏃である。26は平基式であるが非常に長く、石鏃ではないかもしれない。同じく27も長く、また先端を尖らしているため石鏃以外を想定した方が良いかもしれない。28はアメリカ式石鏃である。29は剥離面を多く残す。30は自然面が残り、未成品の可能性が高い。

31~33は剥片石器である。31黒曜石の剥片で側縁に微細剥離が見られる。32はチャート製で、同じく微細剥離が見られる。33は大型剥片で、基部側縁に抉りを入れる。刃部は大きな調整剥離で仕上げる。基部に自然面が残る。34は縦型の石匙になろうか。主要剥離面を多く残し、側縁に調整剥離が見られる。35は横型の石匙か。36は石錐のようなものか。37は石錐で基部と先端部は欠損する。

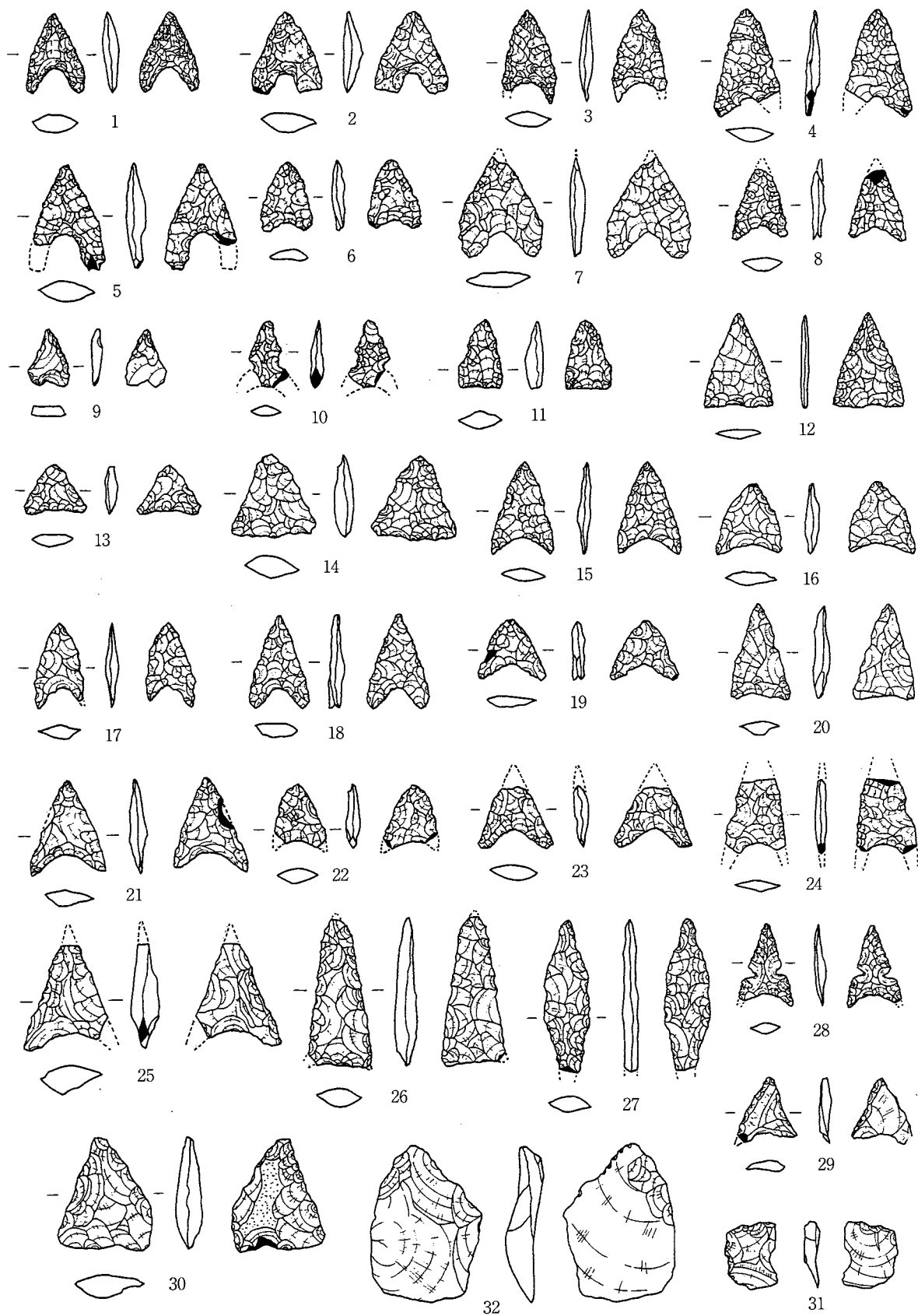
38~43は磨製石斧である。40・41は片刃ぎみである。43は頂部に使用痕の細かいでこぼこが見られる。44は薄く、石包丁を再利用した可能性も考えられる。46は扁平片刃石斧の破片である。47は1号甕棺出土の磨製石鏃である。全面に研磨痕が確認できる。48~50は磨製石剣であるが、48・49はいずれも半分が剥れており、表面の残りも悪い。48は稜が基部まで通り、基部の側辺の抉りもしっかりしている。49は稜は見られず、基部側辺の抉りはしっかりしているもののなだらかである。50は先端付近であるが、前後が欠損している。51は片岩製の紡錘車である。

52~58は石包丁である。52~56は曲刃、57・58は直刃の形態を呈する。

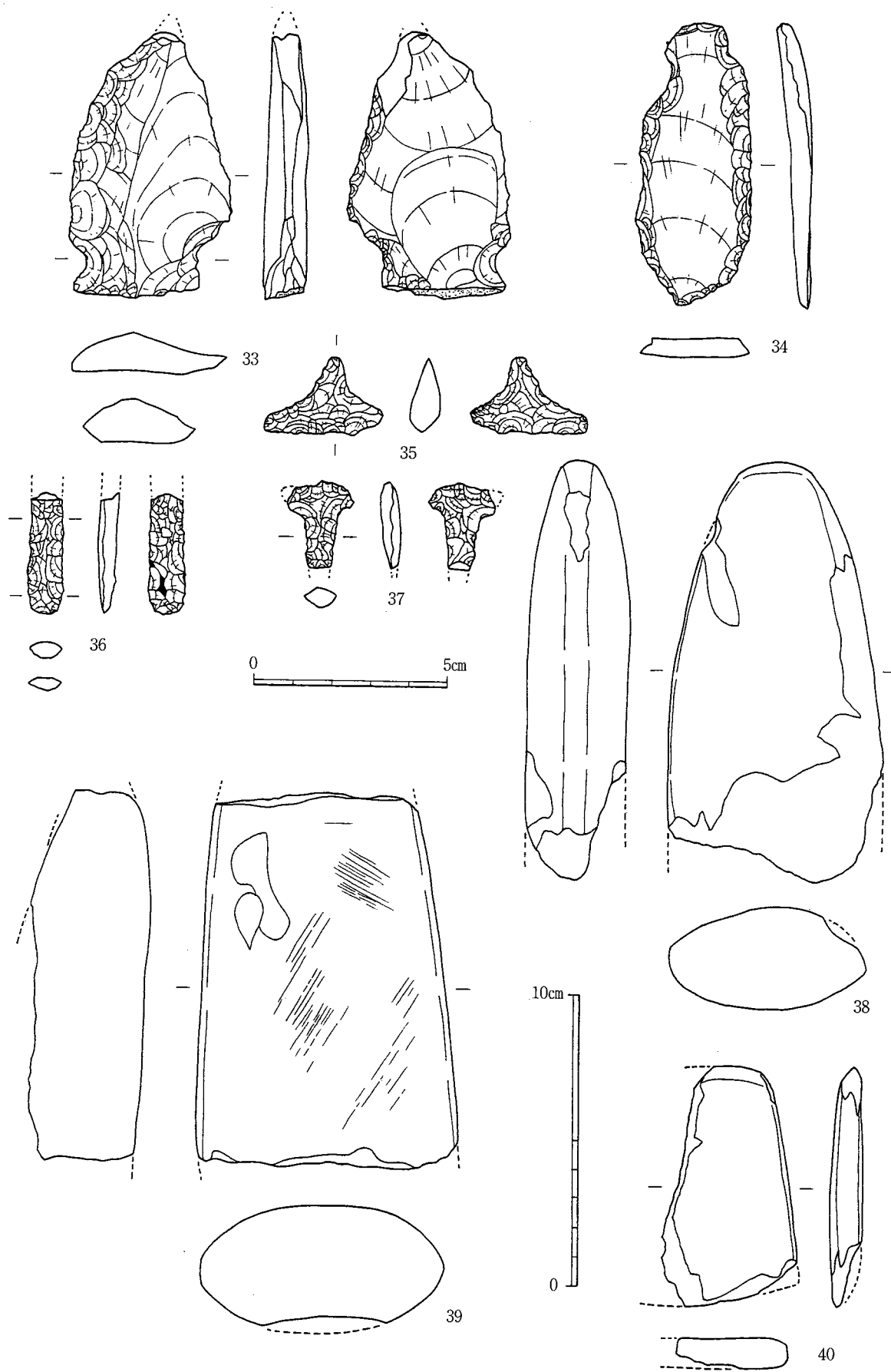
59~67は砥石である。59は研面は4面で、表面に3mm幅程の溝が見られる。一部窪む箇所があり、何かに使用したためか少しでこぼこが見られる。60は小型のもので研面は4面。61も研面は4面で緩やかに窪む。62は半分が割れているが本来は4面の研面を持っていると思われる。63も小型のもので、研面は4面であるが、一部砥面がやや突出する箇所がある。64は柱状片刃石斧を転用したものか。研面は4面でうち1面は大きく窪む。65は欠損しているが、非常に小型のものである。研面は2面のみである。66は中程がよく使用され断面三角形を呈する。67も研面は4面で大きく窪む。

68~74は凹石である。表裏と中央に1カ所ずつ使用痕の窪みが見られるが、74は断面形態が略三角形を呈し使用面は1カ所のみで、側面に大きな切込みが見られる。

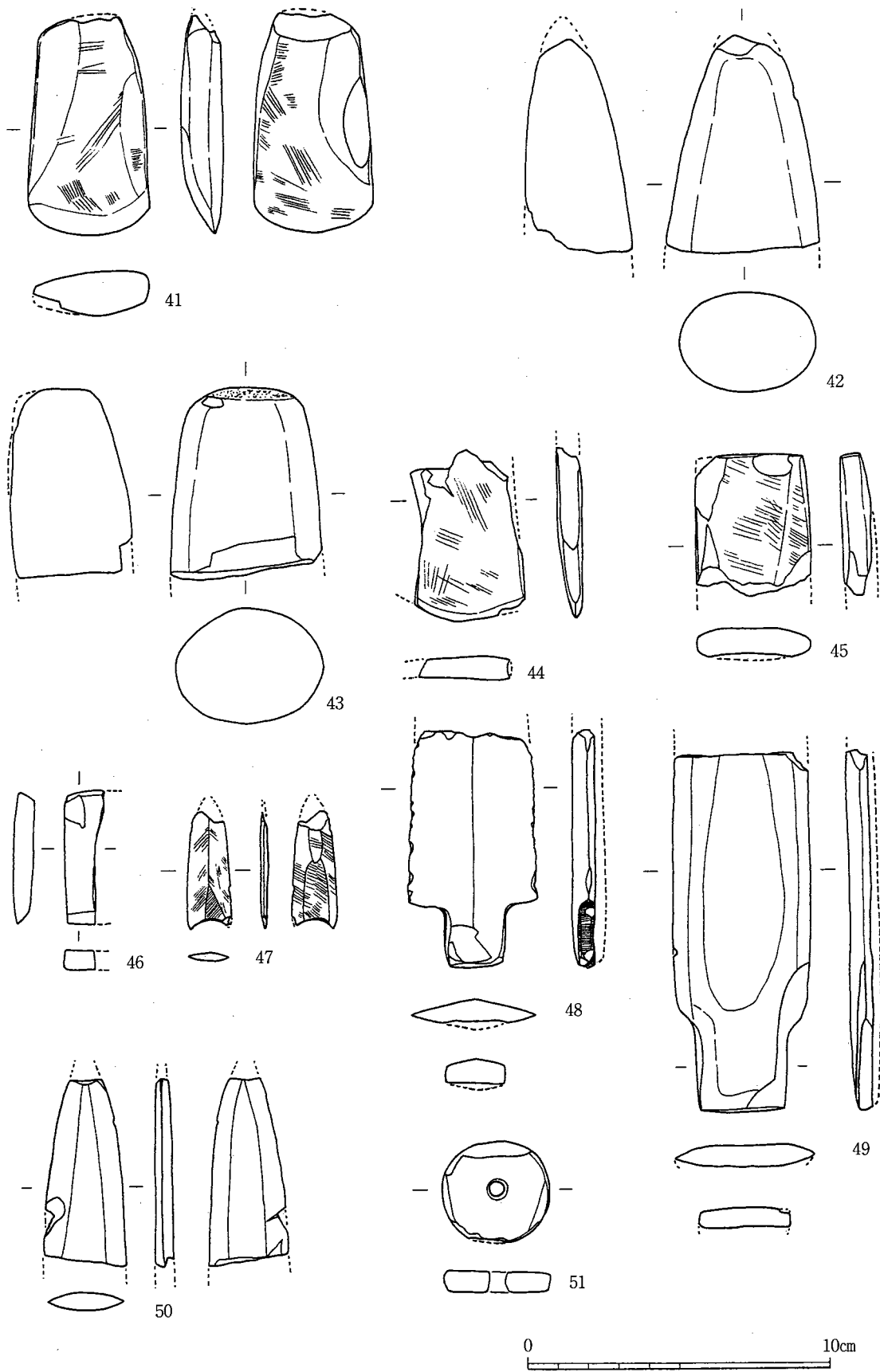
75~77は滑石製品である。75は平たく、欠損部分が多いが形態は隅丸方形を呈すると思われる。76・77は石鍋である。表面に加工痕が残る。



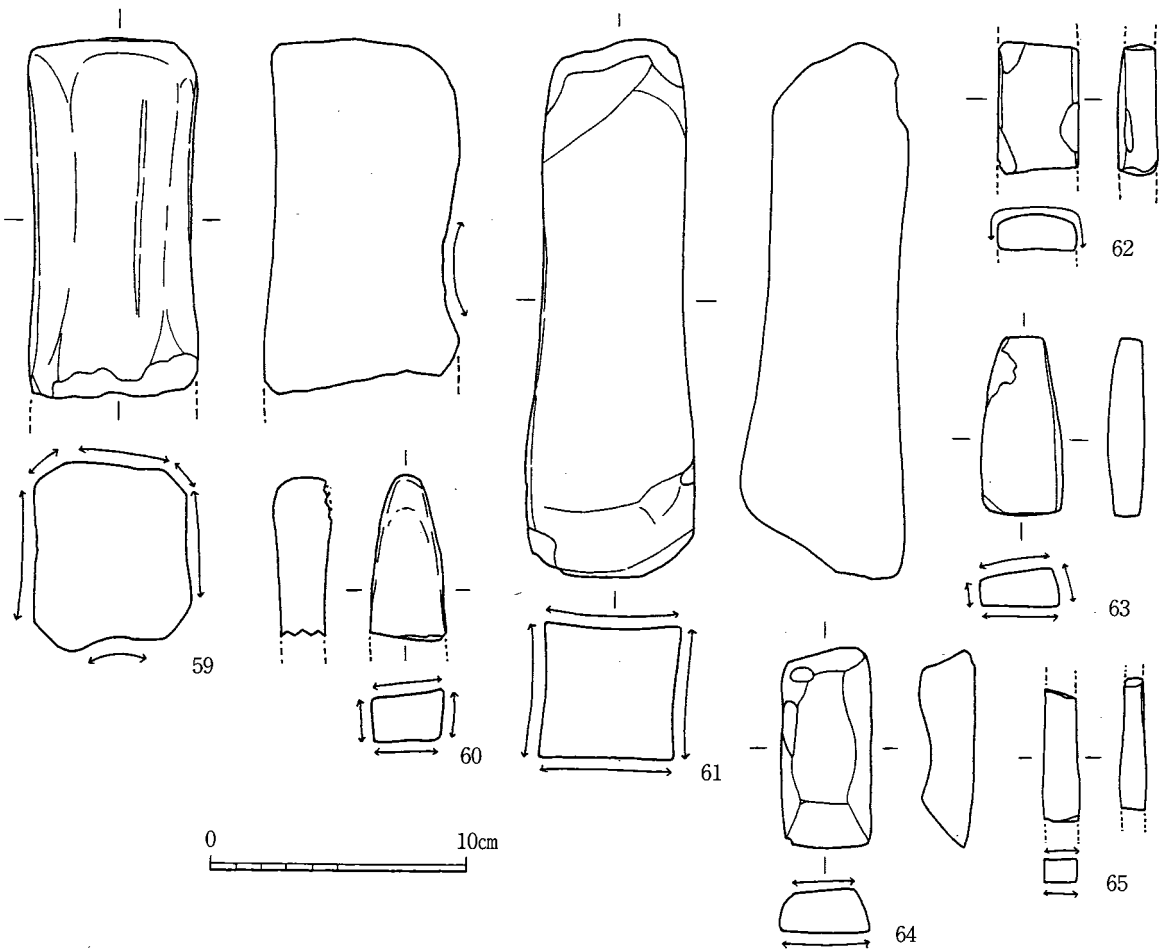
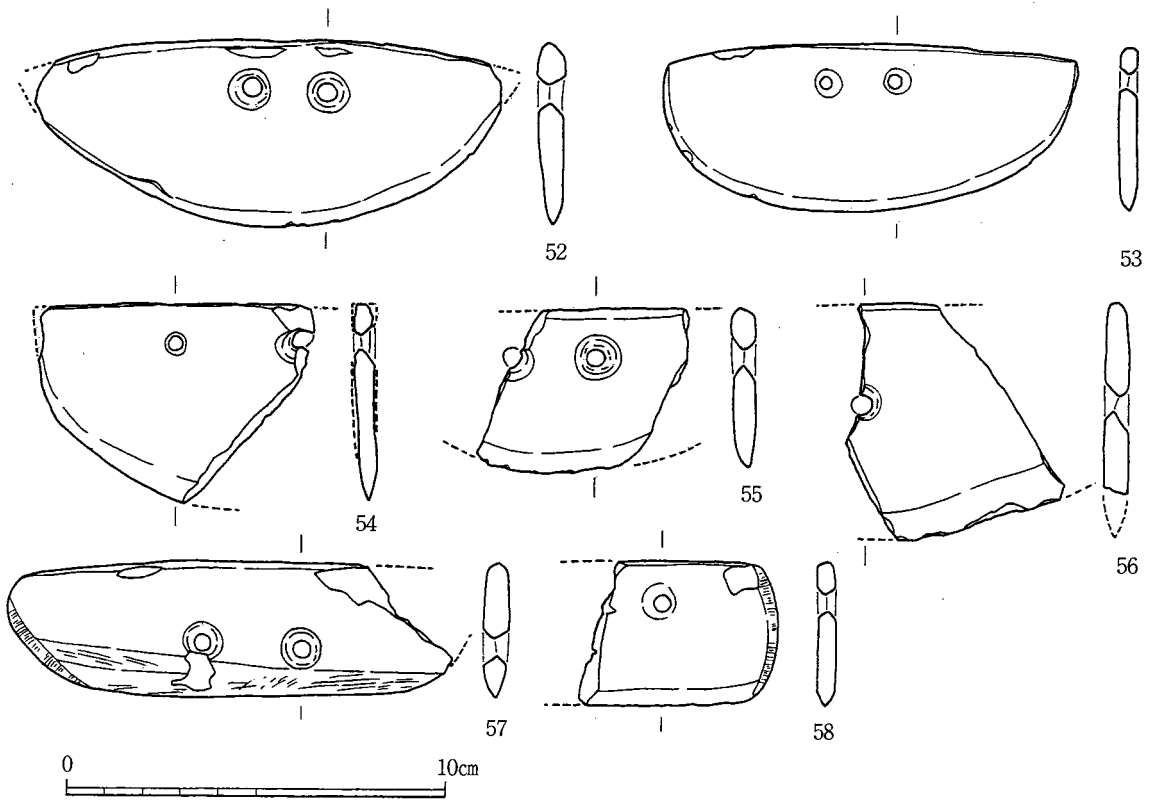
第86图 出土石器实测图① (2/3)



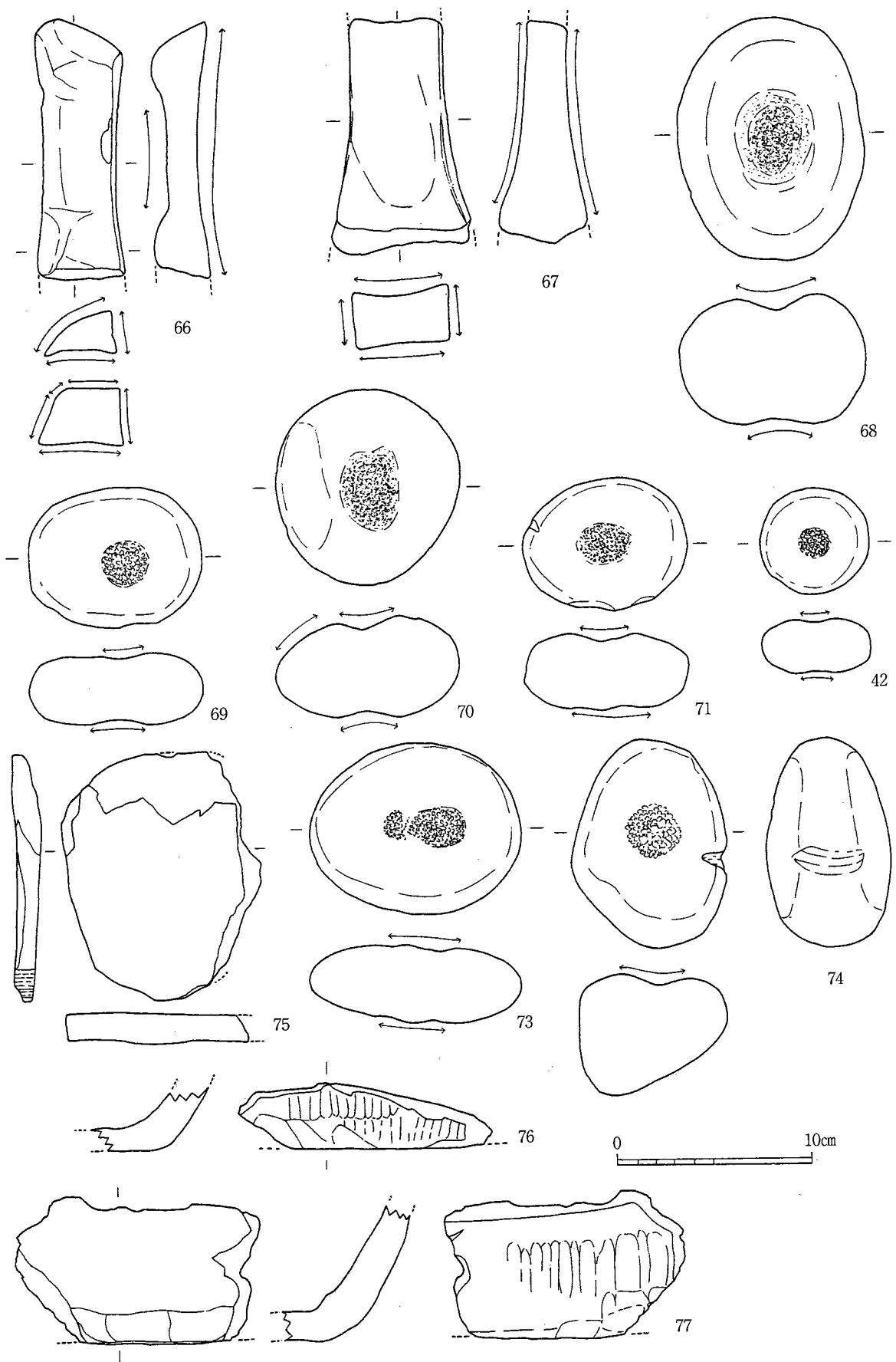
第87図 出土石器実測図② (33~37は2/3、他は1/2)



第88图 出土石器实测图③ (1/2)



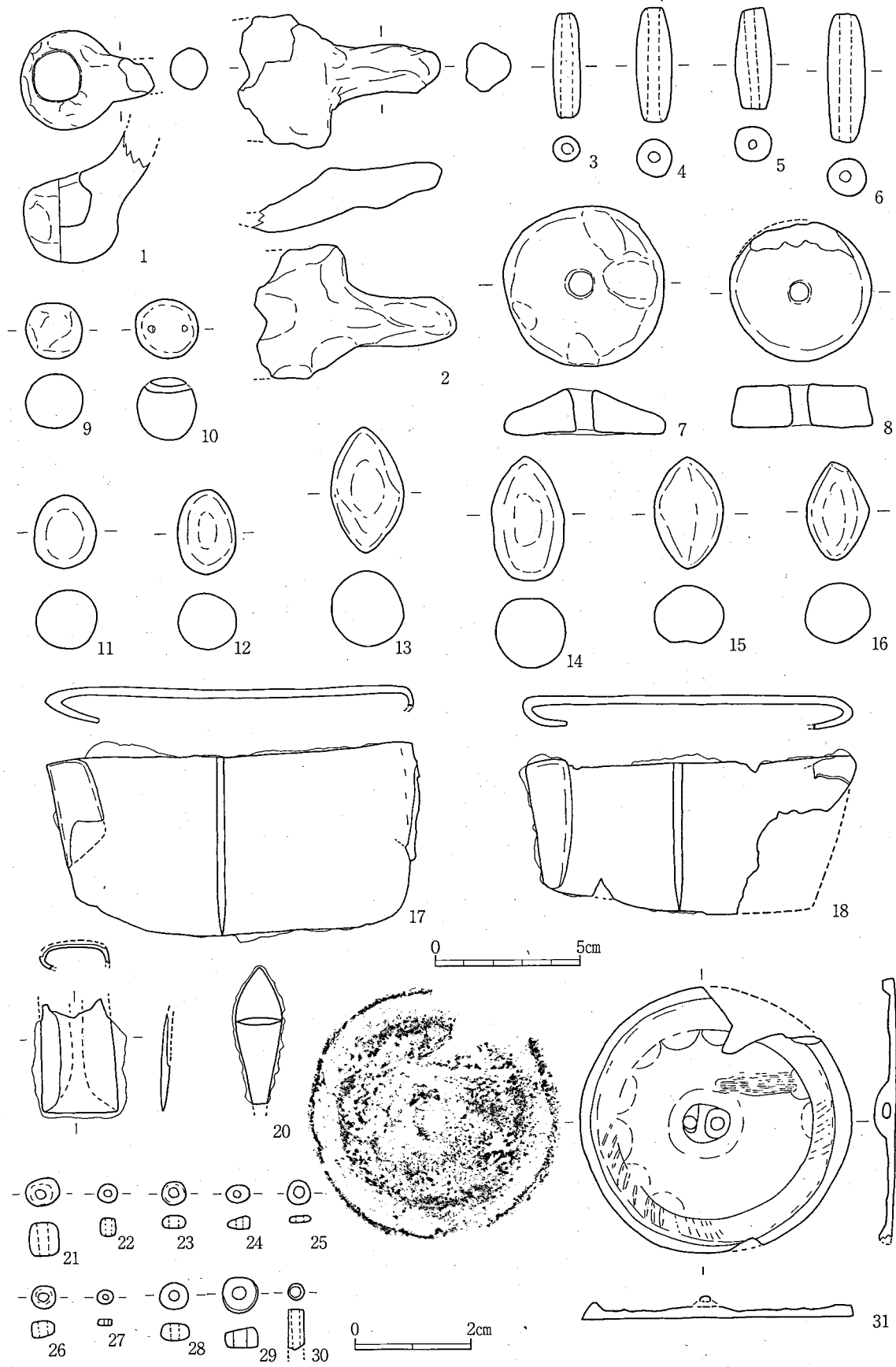
第89図 出土石器実測図④ (52~58は1/2、その他は1/3)



第90图 出土石器实测图⑤ (1/3)

第1表 出土石器観察表

番号	種類	出土位置	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	石鏃	包含層	黒曜石	2.1	1.5	0.4	0.9	
2	石鏃	包含層	黒曜石	2.1	1.8	0.5	1.3	
3	石鏃	包含層	黒曜石	2.9	1.4	0.4	0.8	
4	石鏃	150号土抗	黒曜石	2.7	1.7	0.40	1.2	脚部一部欠損
5	石鏃	B区遺構面	黒曜石	2.7	1.7	0.50	1.6	脚部一部欠損
6	石鏃	34号竪穴住居跡	黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.6	
7	石鏃	包含層	黒曜石	(2.6)	2.2	0.40	1.7	先端部欠損
8	石鏃	19~22号竪穴住居跡	黒曜石	(1.9)	1.5	0.40	0.6	先端部、脚部一部欠損
9	石鏃	包含層	黒曜石	1.5	1.1	0.3	0.4	
10	石鏃	包含層	黒曜石	(1.7)	(0.7)	0.3	0.4	脚部欠損
11	石鏃	包含層	黒曜石	1.8	1.2	0.5	0.8	
12	石鏃	P-670	黒曜石	2.4	1.9	0.40	0.9	
13	石鏃	P-618	黒曜石	1.3	1.6	0.40	0.5	
14	石鏃	包含層	黒曜石	2.1	2.2	0.5	1.7	
15	石鏃	13号土抗	安山岩	2.1	1.5	0.4	0.7	
16	石鏃	包含層	安山岩	1.8	1.7	0.4	0.8	
17	石鏃	包含層	安山岩	2.2	1.2	0.4	0.6	脚部一部欠損
18	石鏃	包含層	安山岩	2.4	1.6	0.4	1	
19	石鏃	3号土抗	安山岩	1.5	1.7	0.3	0.6	脚部一部欠損
20	石鏃	包含層	安山岩	2.4	1.5	0.4	1.1	
21	石鏃	包含層	安山岩	2.4	1.9	0.5	1.1	側縁部一部欠損
22	石鏃	包含層	安山岩	(1.6)	(1.3)	0.40	0.7	脚部一部欠損
23	石鏃	B区遺構面	安山岩	(1.5)	1.9	0.4	0.8	先端部欠損
24	石鏃	包含層	安山岩	(2.1)	(1.4)	0.4	0.8	先端部、脚部欠損
25	石鏃	包含層	安山岩	(2.7)	(2.1)	0.7	2.6	先端部、脚部一部欠損
26	石鏃	27号竪穴住居跡	安山岩	3.8	1.6	0.50	2.8	
27	石鏃	包含層	安山岩	2.1	1.4	0.30	1.9	脚部一部欠損
28	石鏃	包含層	安山岩	(3.9)	1.2	0.40	0.4	基部欠損
29	石鏃	包含層	安山岩	(1.7)	(1.5)	0.30	0.6	脚部一部欠損
30	石鏃	31・42号竪穴住居跡切り合い部分	安山岩	2.9	2.3	0.70	3.7	
31	剥片石器	包含層	安山岩	1.7	1.3	0.40	0.8	
32	剥片石器	包含層	チャート	4.0	2.8	0.7	8.6	
33	剥片石器	31・42号竪穴住居跡切り合い部分	安山岩	(6.8)	4.1	1.1	33.3	先端部欠損
34	石匙	包含層	安山岩	7.4	2.9	0.5	16.9	
35	石匙	26号竪穴住居跡	安山岩	2.0	3.0	0.8	3.1	
36	石錐	包含層	安山岩	(3.2)	(1.0)	0.5	1.7	欠損
37	石錐	包含層	黒曜石	(2.3)	(1.7)	0.5	1.4	基部、先端部欠損
38	磨製石斧	138号土抗	蛇紋岩	(14.5)	(7.5)	3.50	457.6	刃部欠損
39	磨製石斧	27号竪穴住居跡	玄武岩	(13.0)	(9.0)	(3.9)	947.6	基部一部、刃部欠損
40	磨製石斧	包含層	蛇紋岩	8.3	(4.6)	1.1	60.2	刃部一部欠損
41	磨製石斧	P-751	凝灰岩	(7.2)	4.0	1.40	57.3	基部欠損
42	磨製石斧	包含層	花崗岩	(7.2)	(5.1)	(3.4)	176.1	下半部欠損
43	磨製石斧	31・42号竪穴住居跡切り合い部分	凝灰岩	(6.3)	(5.1)	(4.0)	219.5	下半部欠損
44	扁平片刃石斧	包含層	粘板岩	(5.7)	(3.7)	0.8	22	半分欠損
45	扁平片刃石斧	包含層	凝灰岩	(4.7)	3.9	1.0	29.9	下半部欠損
46	扁平片刃石斧	20号竪穴住居跡	粘板岩	4.5	(1.4)	0.7	7	半分欠損
47	磨製石鏃	1号葬棺	真岩	(3.9)	1.5	0.3	2.1	先端部欠損
48	磨製石剣	包含層	真岩	(7.9)	3.3	(0.8)	36.2	基部半分のみ
49	磨製石剣	20号竪穴住居跡	真岩	(11.9)	4.6	(0.7)	68.5	基部半分のみ
50	磨製石剣	20号竪穴住居跡	真岩	(6.2)	(2.7)	0.6	14.2	一部のみ
51	紡錘車	100号土抗	片岩	径3.6		0.8	16.3	一部欠損
52	石庖丁	包含層	片岩	(12.3)	4.9	0.7	66	一部欠損
53	石庖丁	包含層	片岩	11.0	3.4	0.5	38.6	
54	石庖丁	37号竪穴住居跡	片岩	(7.1)	(5.3)	0.5	26.2	半分欠損
55	石庖丁	包含層	片岩	(4.3)	4.4	0.7	24	一部のみ
56	石庖丁	25号竪穴住居跡	砂岩	(5.8)	6.3	0.7	37.1	一部のみ
57	石庖丁	包含層	凝灰岩	(11.8)	3.6	0.7	39.9	一部欠損
58	石庖丁	包含層	片岩	(5.3)	3.8	0.5	19.2	半分欠損
59	砥石	25号竪穴住居跡	砂岩	(14.2)	6.6	7.7	1317.9	一部欠損
60	砥石	包含層	砂岩	(6.5)	(3.1)	2.0	64.2	半分欠損
61	砥石	20号竪穴住居	砂岩	21.3	6.6	5.9	1388.6	一部欠損
62	砥石	B区遺構面	砂岩	(5.2)	3.2	(1.40)	33.9	一部のみ
63	砥石	包含層	砂岩	7.0	3.2	1.5	49.9	
64	砥石	102号土抗	砂岩	7.9	3.6	2.2	107	
65	砥石	26号竪穴住居跡	砂岩	(5.2)	1.5	0.9	12.4	一部欠損
66	砥石	P-496	砂岩	(13.4)	4.4	2.8	194.3	一部欠損
67	砥石	44号竪穴住居跡	砂岩	(12.2)	7.2	4.6	436.1	半分欠損
68	凹石	21号竪穴住居跡	玄武岩	12.5	9.6	6.7	1255.3	
69	凹石	B区遺構面	玄武岩	8.8	7.2	3.7	320.1	
70	凹石	38・39号竪穴住居跡切り合い部分	玄武岩	10.1	9.5	5.2	674.1	
71	凹石	B区遺構面	玄武岩	8.5	6.8	4.0	326.4	
72	凹石	包含層	玄武岩	径5.5		2.8	125.6	
73	凹石	包含層	玄武岩	11.0	8.8	4.0	524.3	
74	凹石	P-641	玄武岩	10.7	7.8	6.2	612.3	
75	滑石製品	土器溜まり2	滑石	12.8	10.0	1.5	280.2	一部欠損
76	石鍋	P-569	滑石	-	-	-	269.4	一部のみ
77	石鍋	包含層	滑石	-	-	-	470.9	一部のみ



第91図 出土土製品、鉄製品、玉類、小型仿製鏡実測図 (1~20は1/2、21~30は1/3)

第2表 出土土製品、鉄製品、玉類、小型仿製鏡観察表

番号	種類	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	柄杓形土製品	包含層	—	—	—	30.7	柄部分欠損
2	柄杓形土製品	24号竪穴住居跡	—	—	—	33.3	半分欠損
3	棒状土錘	B区遺構面	3.6	1.0	—	2.4	
4	棒状土錘	B区遺構面	4.0	1.2	—	5.0	
5	棒状土錘	B区遺構面	3.5	1.2	—	4.2	
6	棒状土錘	B区遺構面	4.5	1.3	—	2.1	
7	紡錘車	100号土抗	—	4.9	1.4	42.0	
8	紡錘車	包含層	—	5.6	1.5	37.2	一部欠損
9	土製丸玉	包含層	—	2.0	—	6.1	
10	土製丸玉	包含層	—	2.1	—	8.1	
11	投弾	包含層	2.6	2.1	—	9.7	
12	投弾	包含層	3.0	2.0	—	12.2	
13	投弾	包含層	4.4	2.5	—	22.7	
14	投弾	包含層	4.3	2.4	—	25.4	
15	投弾	包含層	3.9	2.4	—	15.8	一部欠損
16	投弾	P-526	3.4	2.3	—	11.5	
17	鉄製鋤先	包含層	12.9	6.1	0.3	94.4	一部欠損
18	鉄製鋤先	包含層	11.5	5.2	0.3	70.6	一部欠損
19	袋状鉄斧	包含層	(4.0)	2.4	0.3	22.1	半分欠損
20	鉄鏃	包含層	(4.7)	1.6	0.3	9.4	茎部欠損
21	ガラス製白玉	37号竪穴住居跡	—	0.5	0.5	0.3	
22	ガラス製白玉	25号竪穴住居跡	—	0.3	0.3	0.1	
23	ガラス製白玉	包含層	—	0.4	0.2	0.1	
24	ガラス製白玉	包含層	—	0.4	0.2	0.1	
25	ガラス製白玉	100号土抗	—	0.4	0.15	0.1	
26	ガラス製白玉	27号竪穴住居跡	—	0.3	0.3	0.1	
27	ガラス製白玉	包含層	—	0.25	0.1	0.1	
28	ガラス製白玉	包含層	—	0.5	0.3	0.1	
29	碧玉製白玉	包含層	—	0.6	0.3	0.4	
30	碧玉製管玉	包含層	0.7	0.3	—	0.1	
31	小型仿製鏡	ピット	径4.7	—	0.1	7.8	一部欠損

(10) 土製品・鉄製品・玉類・小型仿製鏡 (巻頭図版2、図版48、第91図)

1・2は柄杓形土製品である。1は球形を呈し、2は浅い皿形を呈すると思われる。両者とも全面ユビによるナデで仕上げる。3～6は棒状土錘である。5の端部はカットされたため平坦な面を持つ。7・8は紡錘車である。7は片側のみ中央にかけて盛り上がる。8は断面台形を呈し端部は面を持つ。9・10は丸玉で、10は孔を穿つ。11～16は投弾である。17・18は鉄製鋤先である。19は袋状鉄斧と思われるが、欠損部分及び鉄膨れ部分が多く詳細は不明。20は鉄鏃である。21～28はガラス製の白玉で、21は緑がかった青色、22～24は薄い青色、25～28は紺色の透明なものである。いずれも形態がややいびつで、厚さも一定でない。29は碧玉製の白玉、30は碧玉製の管玉である。

31は27号竪穴住居跡を切るピットから出土した青銅製の小型仿製鏡である。27号竪穴住居跡は出土土器の少なさから細かな時期比定はできないが、出土土器及び住居形態等から弥生時代後期の所産である可能性が高い。この小型仿製鏡はそれ以後のものと考えられる。もともと完形であったが、取り上げ時に一部破損してしまった。面径は4.7cmと小さく、鏡面はわずかに凸面状を呈する。縁は幅狭のしっかりと立ち上がるが、部分的に幅広で低くなる箇所もある。鈕孔は丸いが現状では中

を確認できない。全体に鑄上がりが悪く、また残り具合も悪いため文様の詳細は不明である。縁の内側は櫛歯文帯が巡るようであり、その内側は小さな内行花文帯が巡る。鈕と内行花文帯との間は特に鑄上がりが悪いが、盛り上がりが見られることから、擬銘帯が存在すると思われる。表面は一部赤色顔料の他、紐かと思われる繊維痕が見られる。

(11) まとめ

以上報告したように、今回の調査では弥生時代の竪穴住居跡、土坑の他、奈良時代や中世の土坑を確認した。遺構密度が極めて高く切り合いも多い上、埋土の識別も困難であったことから、十分な情報が引き出せなかったのは残念である。調査担当者の力量不足ではあるが、最後にまとめを行ってみたい。

竪穴住居跡で最も古いものは23・46号の弥生時代中期初頭のもので、該期は大型の円形プランを呈し、支柱穴が放射状に配され、明るい色調の埋土が特徴である。弥生時代中期中頃～後半にかけては様相が不明であるが、弥生時代中期末～後期に方形プランで2本柱のものが相次いで構築される。屋内土坑はいずれの住居跡でも持つようであるが、時期的に存在が予想されるベット状遺構は、第2次調査同様明確にすることはできなかった。住居跡内の埋土の識別が難しかったため、認識できなかった可能性が高い。

土坑も弥生時代中期初頭のものから確認できるが、特筆すべき点は第2次調査でも確認した整った方形プランの土坑の存在である。これは3次調査ではD区に集中し、この付近一帯にのみ見られるものである。第2次調査同様、出土土器が少なく時期を決めかねる状態であるが、弥生時代後期の土器も見られることから、それ以降のものと想定しておきたい。掘立柱建物跡の柱掘り方の可能性も考えたが、やはり柱筋が通らず否定せざるを得ない状況である。

その他上層遺構面で確認した弥生時代中期後半の甕棺も興味深い。1基のみの検出であり、甕棺として考えて良いものかの議論もあろうが、中からは磨製石鏃が出土している。

弥生時代の遺物では小型仿製鏡の出土が特筆されよう。弥生時代後期と思われる27号竪穴住居跡を切るピットの底面から出土したものであるが、他の遺構とこのピットとの有機的な関係は明らかにできなかった。鏡の文様等は極めて不鮮明であるため、残念ながら詳細は不明である。

土器では他地域系の土器が散見される。弥生時代後期には免田式の他、21号竪穴住居跡からは吉備系甕、142号土坑からは東海系のS字状口縁甕が出土している。在地の土器では肥後方面の黒髪式に影響を受けたと思われる脚台状の甕底部が席卷する。これは弥生時代中期末～後期の南筑後地方の地域性になろう。

奈良時代の遺構では96号土坑の須恵器の集積が注目される。一つの土坑から30個体程の杯がまとめて出土したもので、ここ海津の地に狩路駅を比定する説との関係が気になるところである。

その他の時代では縄文土器が散見できる。決して量を多くはないが、付近の遺跡の調査成果も参考にすると、早期～晩期と断続的ながらこの扇状台地を利用していった様子が窺える。

さて3年度に及び、ここ海津横馬場遺跡を調査してきたわけであるが、筑肥山地より西に延びる扇状台地上に、南北に横断する長大なトレンチを設定した格好となった。この扇状台地上には多くの遺跡が存在し、立地の観点からも付近一帯の拠点集落を形成していたものと想定される。調査区は西側に標高が下がった突端付近に位置することから、集落の中心部はもっと東側であることが想定される

にもかかわらず、これまでの報告のとおり遺構密度を考えると往時の繁栄ぶりがしのばれる。

これまでの調査で我々を悩ましつづけたのは台地上にもかかわらず、多量の遺物を含む堅くしまった包含層の存在であり、遺構の埋土との区別に困難を極めた。第3次調査で検出した甕棺はこの包含層の性格を考える上で極めて示唆的なもので、実際の遺構の掘りこみ面はずっと上であり、この包含層と呼んでいるものは、実は無数の遺構の切り合い、及び土壌化の結果形成された可能性が高いこと、調査の結果検出できた遺構の数よりも実際はもっと多いことが想定されるに至った。

集落のはじまりは弥生時代前期後半に求められる。前期後半～中期初頭は円形住居跡と土坑が確認でき、多くの剥片石器を伴うのが特徴である。その後、中期中葉に遺構の数が減る傾向にあるが、中期後半より後期にかけて集落の最盛期を迎える。あくまで台地上の一部を調査した結果にすぎないが、おおよそこのような傾向が窺える。集落の中心部はもっと東側で、まとまった墓域もそちらに形成されたことだろう。弥生時代後期終末～古墳時代前期にかけても集落は継続し、小型仿製鏡や巴形銅器を保持することは、その拠点性を考える上で興味深いものである。

IV.自然科学的分析

海津横馬場遺跡からは第1次調査で巴形銅器や銅鏃、第3次調査で小型仿製鏡等の青銅器が出土している。資料の重要性に鑑み、以下に(財)元興寺文化財研究所に依頼した青銅器の鉛同位体比分析について、その結果報告を収録する(宮地)。

1. 分析対象

福岡県三池郡高田町 海津横馬場遺跡出土 巴形銅器・銅鏃・小型仿製鏡各1点、計3点

2. 分析内容

含まれる成分の調査及び鉛同位体比測定に必要な鉛の有無の確認のため、ケイ光X線分析(以下XRF)による表面からの非破壊分析を行った。次いで、遺物の分析箇所を中心とした部分をサンプリングし、鉛同位体比測定用試料とした。鉛同位体比測定は別府大学文学部平尾良光教授らによる。

3. XRFによる分析

①使用機器及び測定条件

・エネルギー分散型ケイ光X線分析装置(セイコーインスツルメンツ株式会社製SEA5230)
試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。
モリブデン管球使用、大気条件下、管電圧45kV(コリメータφ1.8mm)、測定時間300秒
ここではカリウム(K)よりも重い元素を検出することのできる条件に設定している。

②分析結果

・巴形銅器

銅(Cu)、スズ(Sn)、鉛(Pb)を主成分とし、同時に銀(Ag)、ヒ素(As)が検出された。カルシウム(Ca)は土壌成分であると思われる(チャート1、表1)。

・銅鏃

銅、スズ、鉛を主成分とし、同時に銀、ヒ素、アンチモン(Sb)が検出された。鉄(Fe)、カルシウムは土壌成分であると思われる(チャート2、表2)。

・小型仿製鏡

銅、スズ、鉛を主成分とし、同時に銀、ヒ素が検出された。鉄、カルシウムは土壌成分であると思われる(チャート3、表3)。

以上、これら巴形銅器・銅鏃・小型仿製鏡は何れも青銅製であり、鉛を十分に含むため、鉛同位体比測定に適する。

③分析データ

巴形銅器

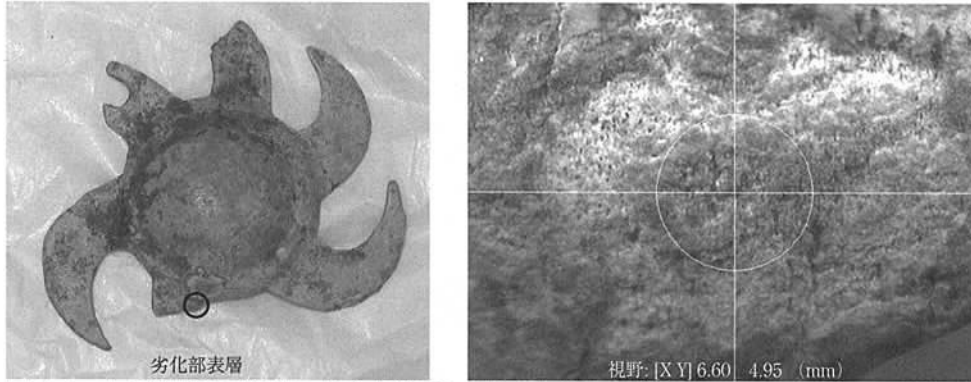


写真1. 巴形銅器の蛍光X線分析箇所(鉛同位体比測定のためのサンプリング箇所)

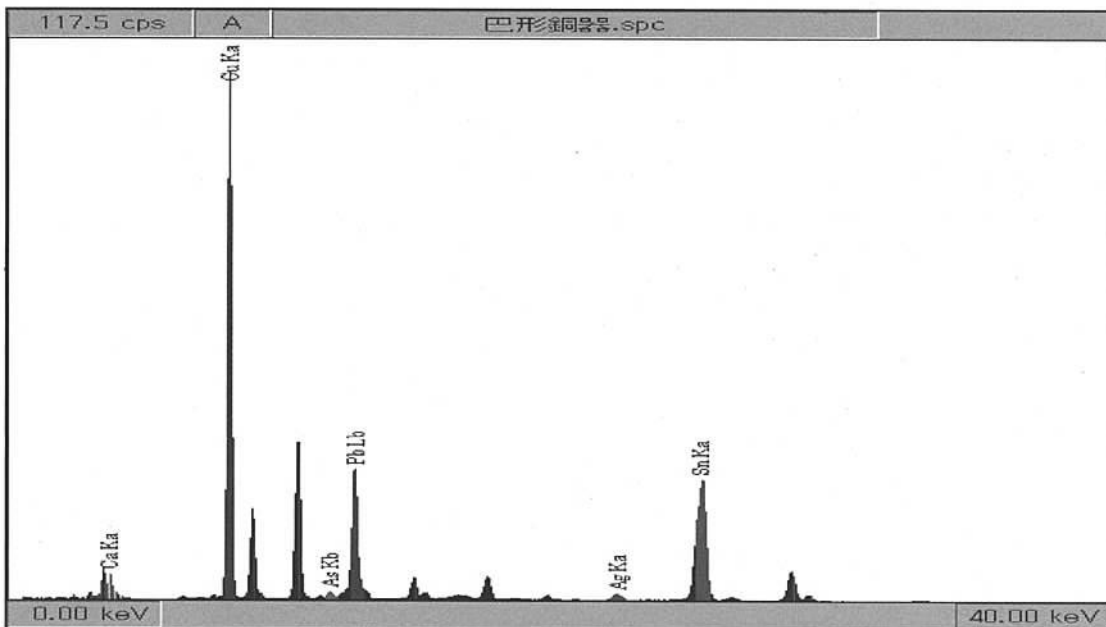


チャート1. 巴形銅器の蛍光X線分析チャート

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
20	Ca	カルシウム	K α	50.046	3.54—3.84
29	Cu	銅	K α	997.952	7.86—8.22
33	As	ヒ素	K β	21.651	11.52—11.93
47	Ag	銀	K α	22.773	21.84—22.36
50	Sn	スズ	K α	473.226	24.92—25.47
82	Pb	鉛	L β	311.369	12.42—12.84

表1. 巴形銅器の蛍光X線分析結果

銅鑞

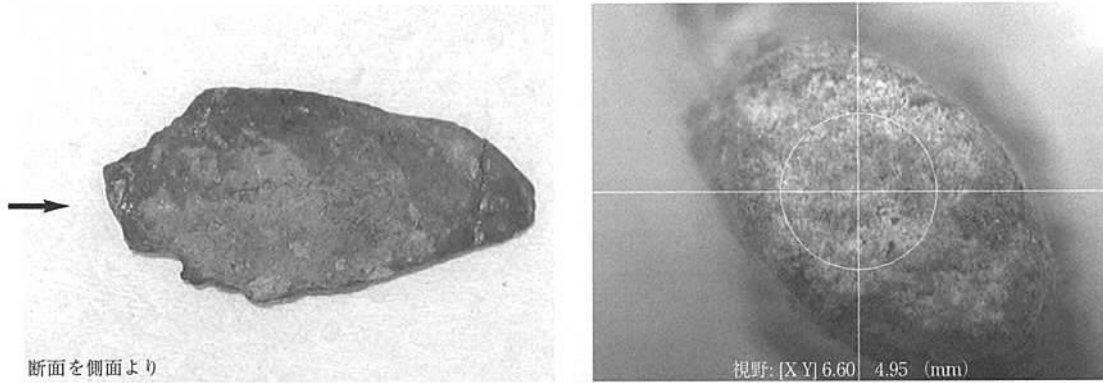


写真2. 銅鑞の蛍光X線分析箇所（鉛同位体比測定のためのサンプリング箇所）

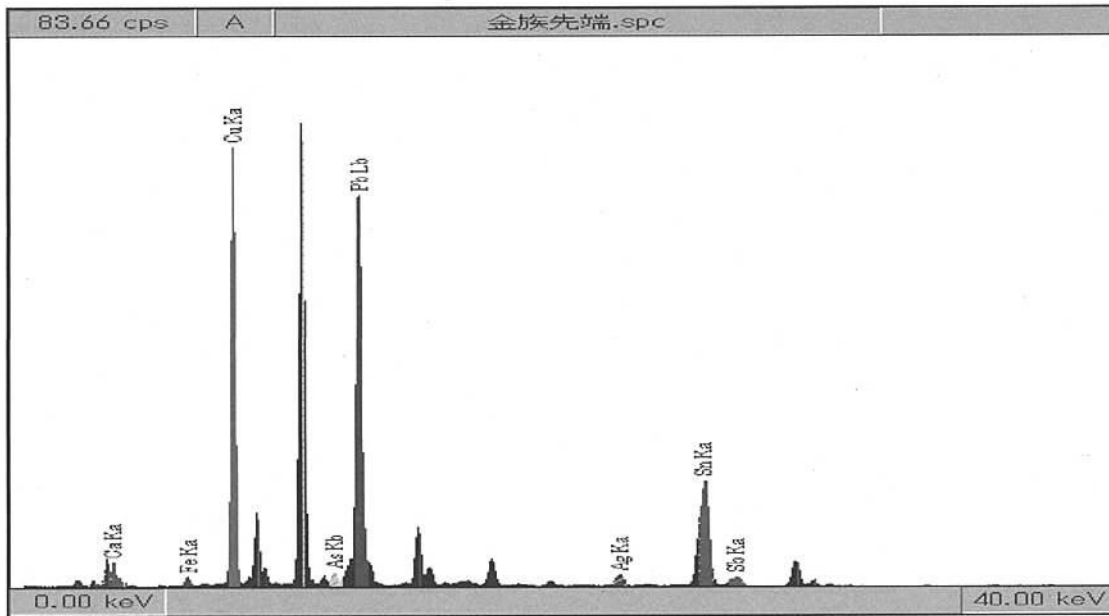


チャート2. 銅鑞の蛍光X線分析チャート

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	35.512	3.54—3.84
26	Fe	鉄	K α	15.060	6.23—6.57
29	Cu	銅	K α	601.668	7.86—8.22
33	As	ヒ素	K β	28.746	11.52—11.93
47	Ag	銀	K α	28.549	21.84—22.36
50	Sn	スズ	K α	300.291	24.92—25.47
51	Sb	アンチモン	K α	26.949	25.99—26.55
82	Pb	鉛	L β	667.970	12.42—12.84

表2. 銅鑞の蛍光X線分析結果

小型仿製鏡

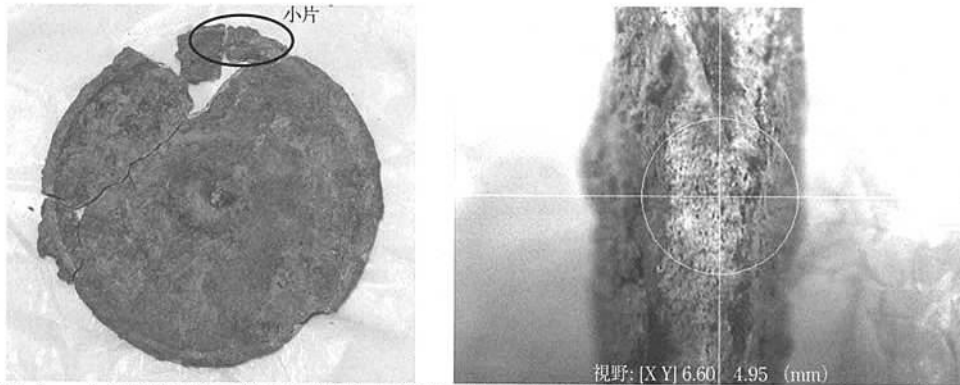


写真 3. 小型仿製鏡の蛍光 X 線分析箇所 (鉛同位体比測定のためのサンプリング箇所)

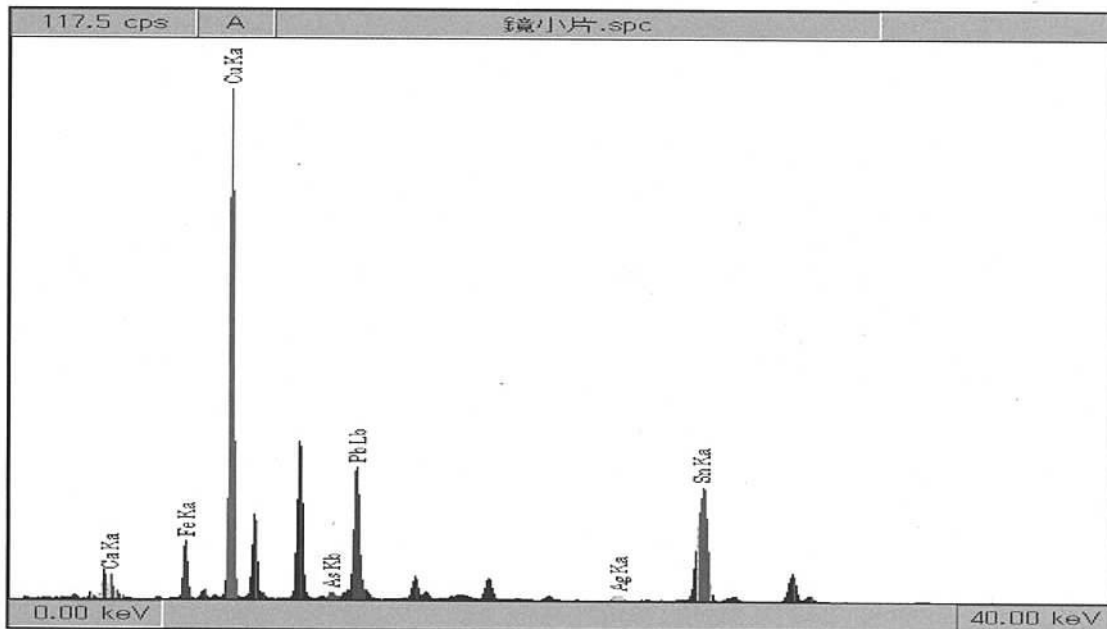


チャート 3. 小型仿製鏡の蛍光 X 線分析チャート

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
20	Ca	カルシウム	K α	47.931	3.54—3.84
26	Fe	鉄	K α	103.761	6.23—6.57
29	Cu	銅	K α	955.447	7.86—8.22
33	As	ヒ素	K β	19.443	11.52—11.93
47	Ag	銀	K α	18.347	21.84—22.36
50	Sn	スズ	K α	439.243	24.92—25.47
82	Pb	鉛	L β	310.868	12.42—12.84

表 3. 小型仿製鏡の蛍光 X 線分析結果

(以上の分析および考察 川本耕三)

4. 鉛同位体比測定

青銅器片全量を鉛同位体比測定用試料とし、別府大学文学部平尾良光教授に調査を依頼した。以下にその報告を示す。

福岡県海津横馬場遺跡から出土した青銅製品の鉛同位体比

別府大学 文学部 原 彰吾、平尾 良光

1. はじめに

福岡県海津横馬場遺跡から出土した青銅製品に関する鉛同位体比の調査の依頼が(財)元興寺文化財研究所からあった。そこで、資料の鉛同位体比を測定し、材料の産地に関する調査を行った。

2. 資料

海津横馬場遺跡は福岡県三池郡高田町(熊本県との県境、大牟田市の北)にあり、飯江川右岸、筑肥山地より西に派生する舌状低丘陵の先端部に位置している。この遺跡は弥生時代中期から同後期、古墳時代、奈良時代の遺物を主体とした遺跡である。遺構には竪穴住居跡、土坑、ピットが多く発見されている。遺物には土器(須恵器を含む)、青銅製品、鉄器などが出土している⁽¹⁾⁽²⁾。これらの出土品の中で青銅製品として巴形銅器、銅鏃、小型仿製鏡、不明青銅製品があった。今回鉛同位体比調査の依頼を受けた資料は巴形銅器1点、銅鏃1点、小型仿製鏡1点の計3点である。

巴形銅器は第1次調査時の1号土坑から出土した。この遺物は用途不明であるが飾り金具と推定されており、半球形の中心から鉤状の突起が6脚時計回りに配され、うち1脚はかなり古い段階で欠落していた。脚の裏面には1条の突線が確認でき、弥生時代後期の遺物と推定される⁽¹⁾。鉛同位体比測定用の試料は劣化部表層の鏽をメスなどで微量掻き取るようにして採取した(写真1)。

銅鏃は第1遺構面の調査終了後、包含層の掘削中に出土した。この遺物は考古学的見解から弥生時代後期に見られる形態である⁽¹⁾。鉛同位体比測定用の試料は柄の断面部を側面から、メスを用いて採取した(写真2)。

小型仿製鏡は第3次調査、弥生時代後期の27号住居跡を切るピットから出土した⁽²⁾。鉛同位体比測定用の試料は鏡縁の小片から一部を採取して用いた(写真3)。

3. 鉛同位体比法

3-1 鉛同位体比法の原理⁽³⁾

鉛には²⁰⁴Pb、²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pbの同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた²³⁸Uは²⁰⁶Pbに、²³⁵Uは²⁰⁷Pbに、²³²Thは²⁰⁸Pbに放射能を出しながら自然に変化(壊変)する。ウラン(U)とトリウム(Th)が減少した量だけ鉛の量は増える。これら鉛の量は岩石中のU、Th、Pbの量と、岩石中でPbとU、Thが共存していた時間の長さによってそれぞれの鉛同位体比が違う。

この岩石から鉛が地殻変動などで抽出され、鉛の鉱山を形成する。この鉱山に含まれる²⁰⁴Pb量と²⁰⁶Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pbの量比はそれぞれの鉛鉱山ごとに独自の経歴があるため、異なった鉛同位体比値となることが知られている。そして産地によって特徴のある同位体比を示すため、鉛同位体比の違いは鉛の産地を示すことになる。

3-2 測定方法

鉛同位体比の測定は本学に設置されているサーモエレクトロン社製全自動表面電離型質量分析計MAT262で行った。

採取した試料を石英製ピーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液に白金電極を用い、直流2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から0.1 μ gの鉛を採取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメントに載せ、質量分析計にセットした。分析計の条件を整え、測定温度を1200 $^{\circ}$ Cに設定し、鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

3-3 測定値の表し方

鉛同位体比の測定値を表す方法として、縦軸が²⁰⁸Pb/²⁰⁶Pbの値、横軸が²⁰⁷Pb/²⁰⁶Pbの値である図と、縦軸が²⁰⁷Pb/²⁰⁴Pbの値、横軸が²⁰⁶Pb/²⁰⁴Pbの値である図を利用する。前者の図をA式図、後者の図をB式図とする。これらの図において、中国前漢鏡が主として分布する領域を中国華北産鉛の領域、中国後漢鏡及び三国時代の銅鏡が分布する領域を中国華南産鉛の領域と仮定する。現代日本産の主要鉛鉱石が集中する領域を日本産鉛の領域とする。そして多鈕細文鏡が分布する領域を朝鮮半島産鉛の領域と仮定する。a領域は弥生時代後期の銅鐸が集中して分布する領域である。

今までの弥生時代青銅製品の鉛同位体比に関する研究から、青銅器が用いられ始めた頃（弥生時代前期末～中期初頭）には朝鮮半島産の材料、弥生時代中期には中国華北産の材料が用いられた。そして弥生時代後期になると中国華北産のある特定範囲（a領域）の材料が用いられたとされている。

4. 測定結果

測定した鉛同位体比を表4に示した。

表4 福岡県海津横馬場遺跡から出土した青銅製品の鉛同位体比値

番号	資料名	²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁴ Pb	²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁴ Pb	²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁴ Pb	²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁶ Pb	²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb	測定番号
1	巴形銅器	17.701	15.527	38.367	0.8772	2.1675	BP3045
2	銅鏃	17.735	15.546	38.415	0.8766	2.1660	BP3046
3	小型仿製鏡	17.895	15.552	38.515	0.8691	2.1523	BP3047
	測定誤差	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

この測定結果を縦軸が²⁰⁸Pb/²⁰⁶Pbの値、横軸が²⁰⁷Pb/²⁰⁶Pbの値である図（A式図）、縦軸が²⁰⁷Pb/²⁰⁴Pbの値、横軸が²⁰⁶Pb/²⁰⁴Pbの値である図（B式図）に示した。また比較資料として、これまでに鉛同位体比が測定されている巴形銅器、銅鏃、小型仿製鏡の鉛同位体比をそれぞれ図に示した。比較した資料のそれぞれの出土地、所蔵者、測定値は文献に依存する⁽⁴⁾。

5. 考察

5-1 巴形銅器

測定された巴形銅器の鉛同位体比は図1・2および図3・4から中国華北領域の中でa領域には含まれないが、この領域近くにプロットされた。そして図5・6および図7・8にはこの巴形銅器とこれまでに測定された巴形銅器の分布を示した。今回測定した巴形銅器はこれまでに測定された巴形銅器の主分布領域に含まれたので、これらと似たような材料が用いられたと考えられる。それでも巴形銅器全体に鉛同位体比にバラツキが見られる故に、弥生時代の巴形銅器には主として中国華北の複数の鉱山材料が用いられたと推定される。

5-2 銅鏃

測定された銅鏃の鉛同位体比は図1・2および図3・4から中国華北領域の中でもa領域内にプロットされた。そして図9・10および図11・12にはこの銅鏃とこれまでに測定された銅鏃の分布を示した。今回測定した銅鏃はこれまでに測定された銅鏃の主分布領域に含まれたので、これらと似たような材料が用いられたと考えられる。故に、弥生時代の銅鏃には主として中国華北産の特定地域（a領域）の材料が用いられたと推定される。

5-3 小型仿製鏡

測定された小型仿製鏡の鉛同位体比は図1・2から中国華北領域内の左下付近にプロットされた。そして図13・14にはこの小型仿製鏡とこれまでに測定された小型仿製鏡の分布を示した。弥生時代の小型仿製鏡には主として中国華北産の特定地域（a領域）の材料が用いられた。故に、今回測定した小型仿製鏡はこれまでに測定された小型仿製鏡と少し異なった値を示したと言えよう。

6. まとめ

今回測定した福岡県海津横馬場遺跡から出土した青銅製品の鉛同位体比測定の結果から、巴形銅器と銅鏃はこれまでに測定された資料の結果と類似していた。またこの結果は巴形銅器と銅鏃の出土状況および層位からみた考古学的知見に矛盾しない。しかし今回測定した小型仿製鏡はこれまでに測定された資料分布の主領域には位置せず、この領域から少々離れて位置した。これまでに測定された小型仿製鏡58面のうち、55面は中国華北産の特定地域（a領域）内に位置し、残り3面が朝鮮半島方向へ分布した。今回測定した資料もa領域から朝鮮半島方向へずれて位置した。したがって、この鏡は大部分の小型仿製鏡とは違った材料を用いて作成されていることを示唆する。そのため、福岡県海津横馬場遺跡から出土した小型仿製鏡は他の資料とでは、時期的な違いや鑄造過程・流通経路の違いの結果かもしれない。

小型仿製鏡に関する研究が進むと他の出土地域との関連性、流通経路が今後の焦点となっていくであろう。

引用・参考文献

- (1) 福岡県教育委員会：『海津横馬場遺跡Ⅰ』（九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第1集）（2005）
- (2) 福岡県教育委員会：「海津横馬場遺跡3次調査」『福岡県埋蔵文化財発掘調査年報－平成15年度－』（2004）
- (3) 平尾良光編：古代日本青銅器の鉛同位体比，『古代青銅の流通と鑄造』，平尾良光編，（鶴山堂），p31-39，（1999）
- (4) 平尾良光：鉛同位体比の測定と分析，『考古資料大観6 弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品』，井上洋一・森田稔編，（小学館），p350-367，（2003）

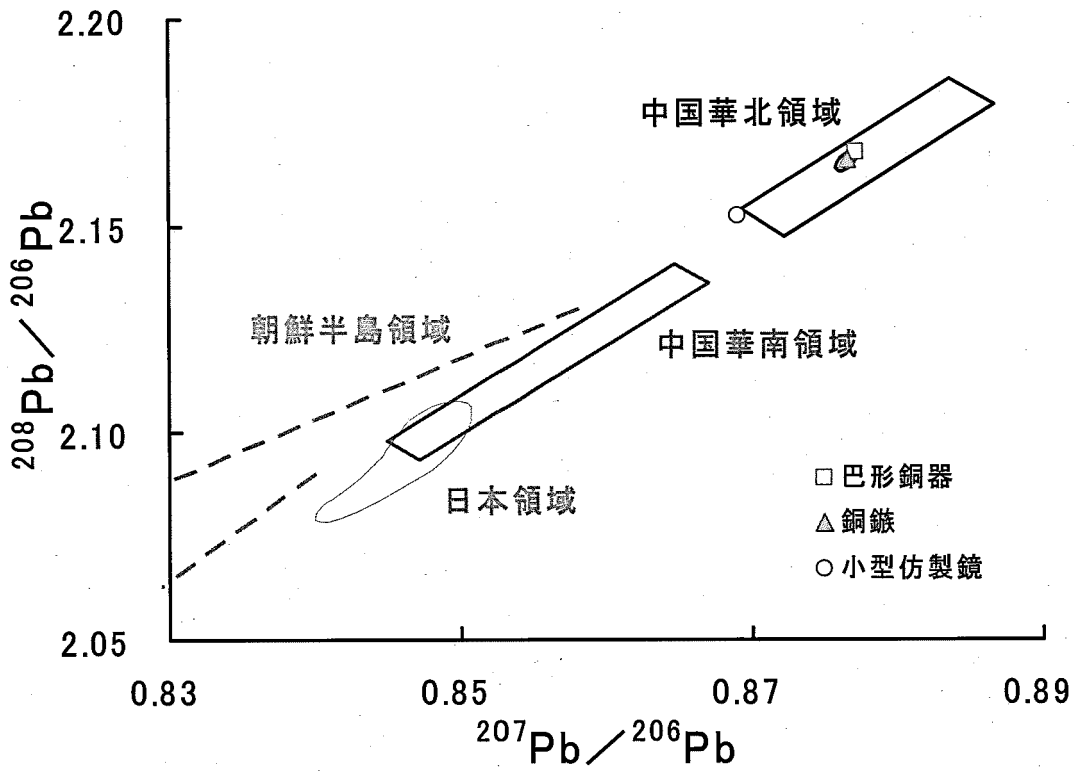


図1 海津横馬場遺跡出土青銅製品が示す鉛同位体比分布 - A式図

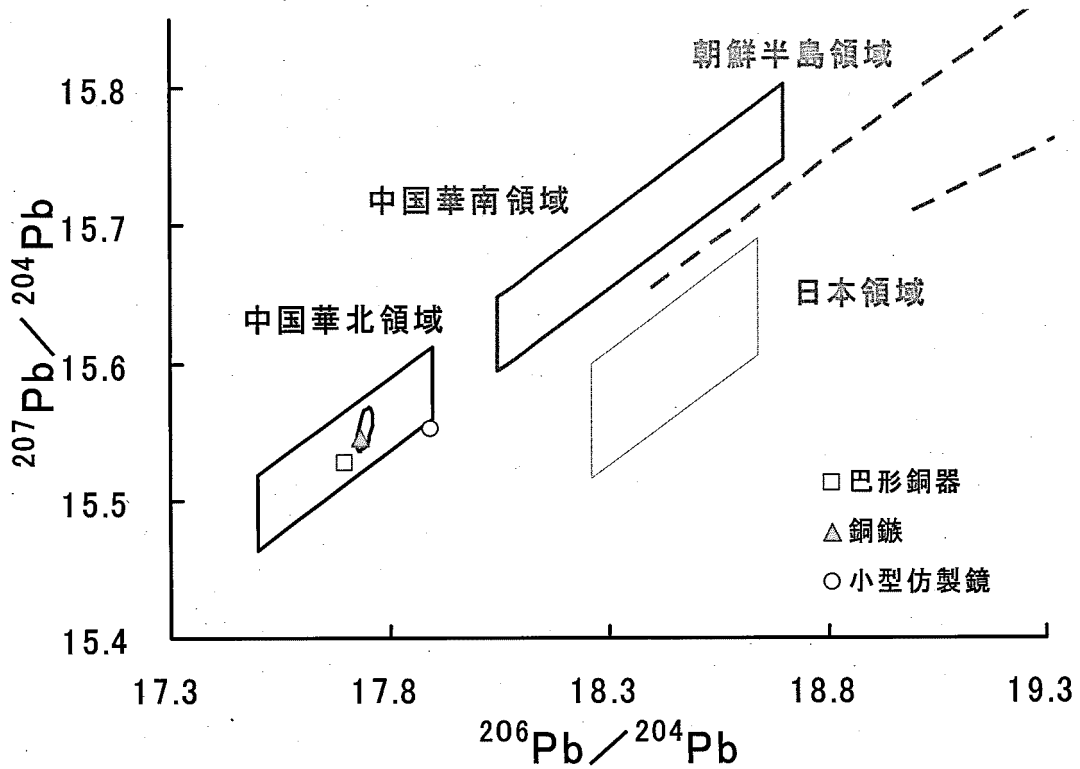


図2 海津横馬場遺跡出土青銅製品が示す鉛同位体比分布 - B式図

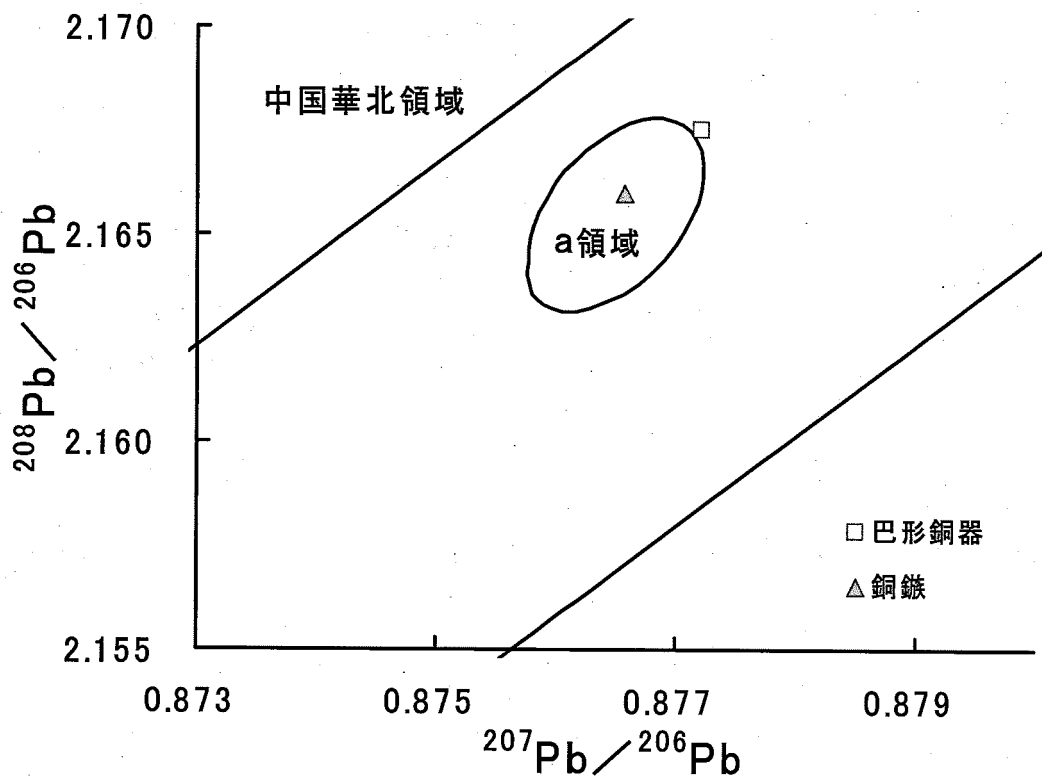


図3 海津横馬場遺跡出土青銅製品が示す鉛同位体比分布拡大 - A式図

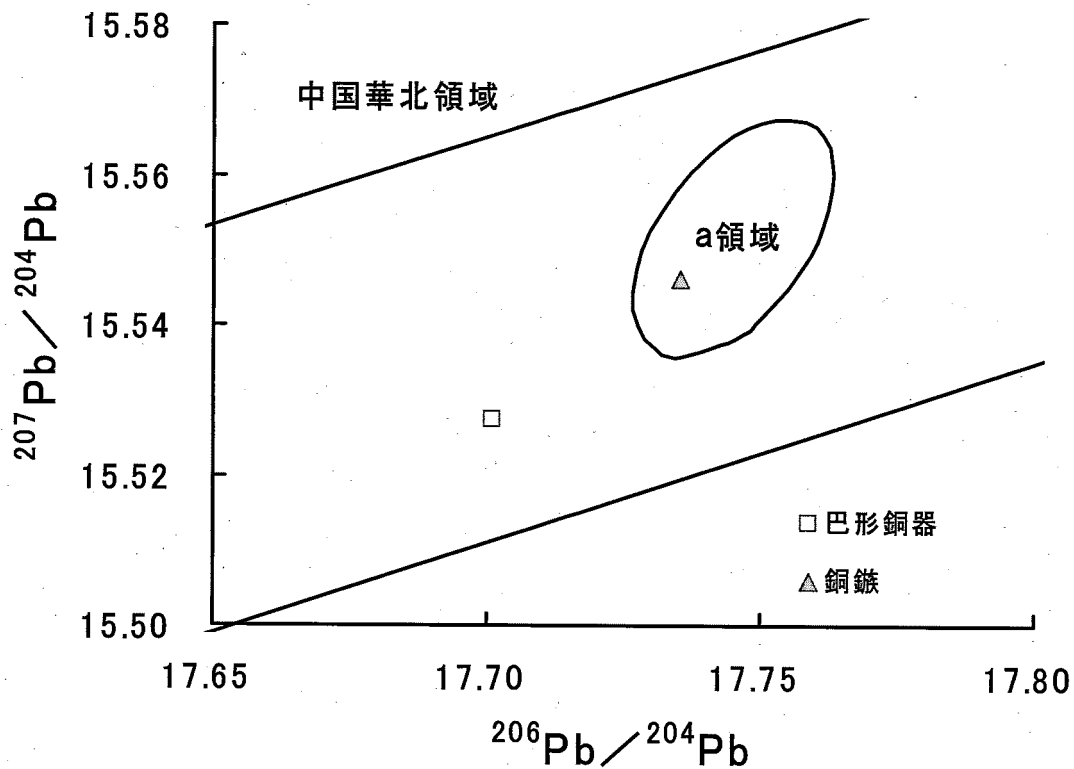


図4 海津横馬場遺跡出土青銅製品が示す鉛同位体比分布拡大 - B式図

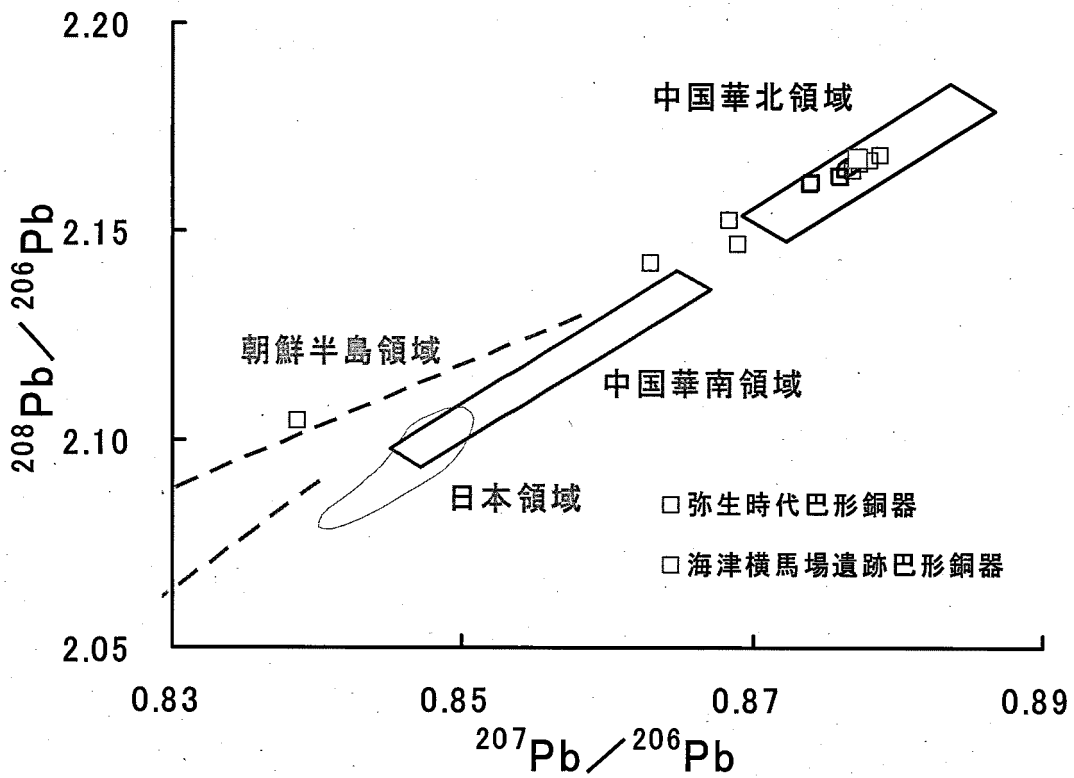


図5 海津横馬場遺跡出土巴形銅器と弥生時代巴形銅器が示す鉛同位体比分布 - A式図

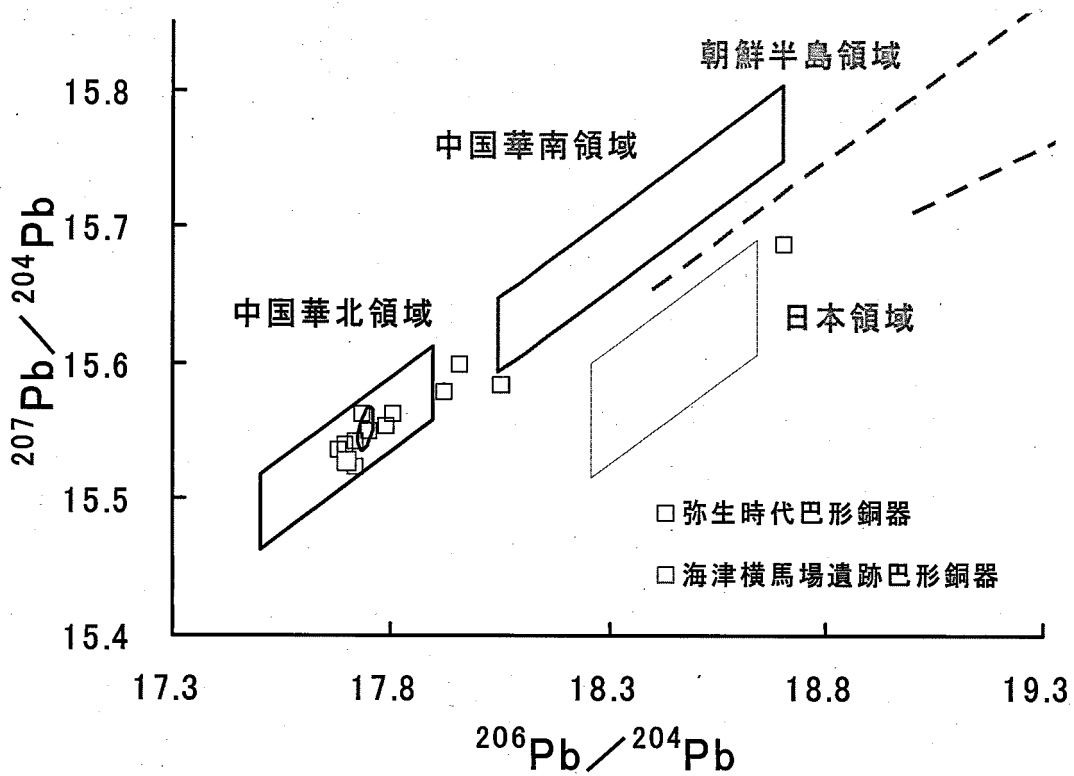


図6 海津横馬場遺跡出土巴形銅器と弥生時代巴形銅器が示す鉛同位体比分布 - B式図

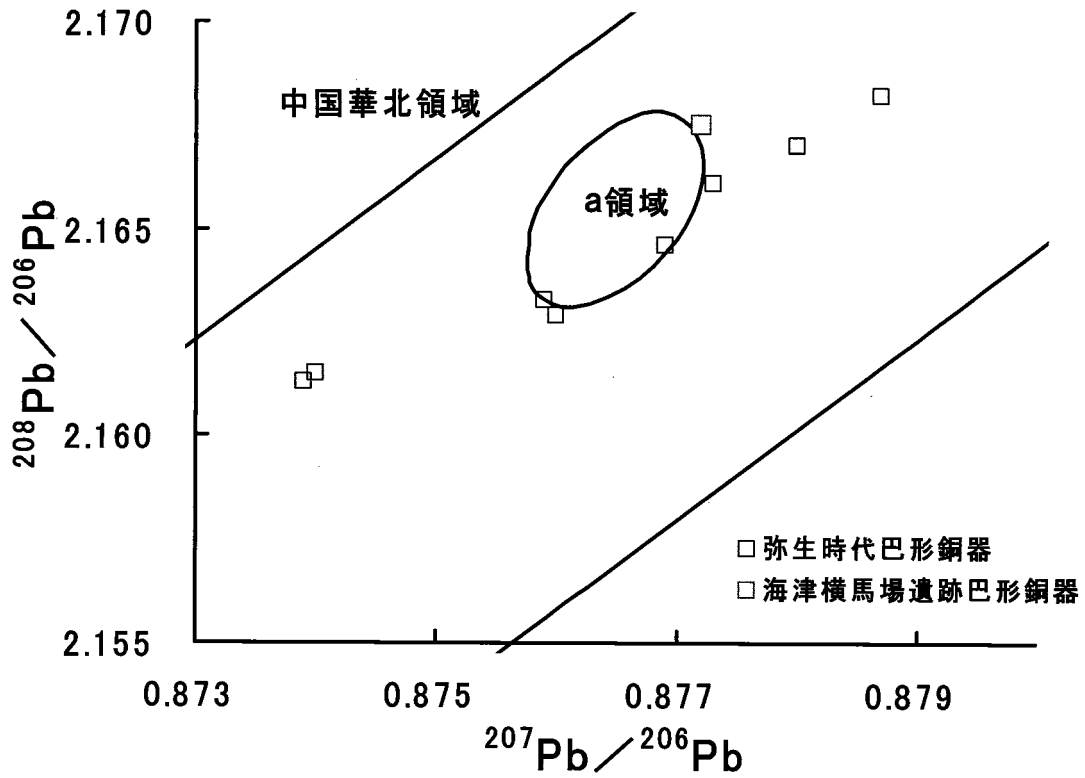


図7 海津横馬場遺跡出土巴形銅器と弥生時代巴形銅器が示す鉛同位体比分布拡大 - A式図

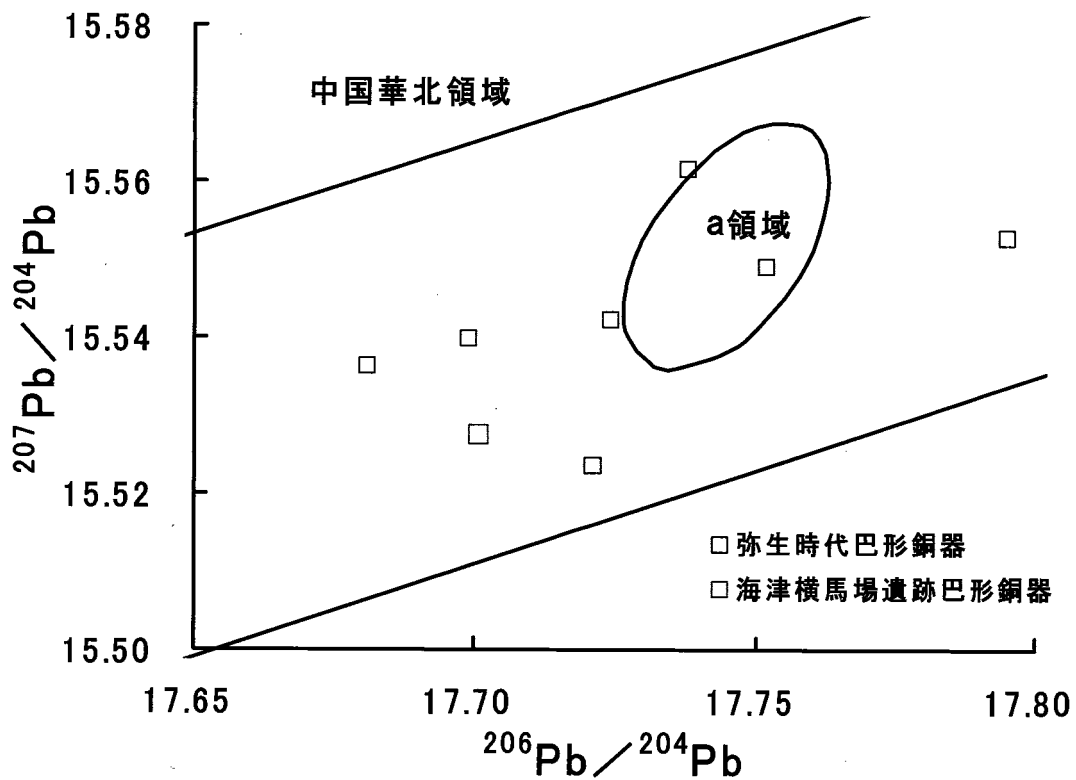


図8 海津横馬場遺跡出土巴形銅器と弥生時代巴形銅器が示す鉛同位体比分布拡大 - B式図

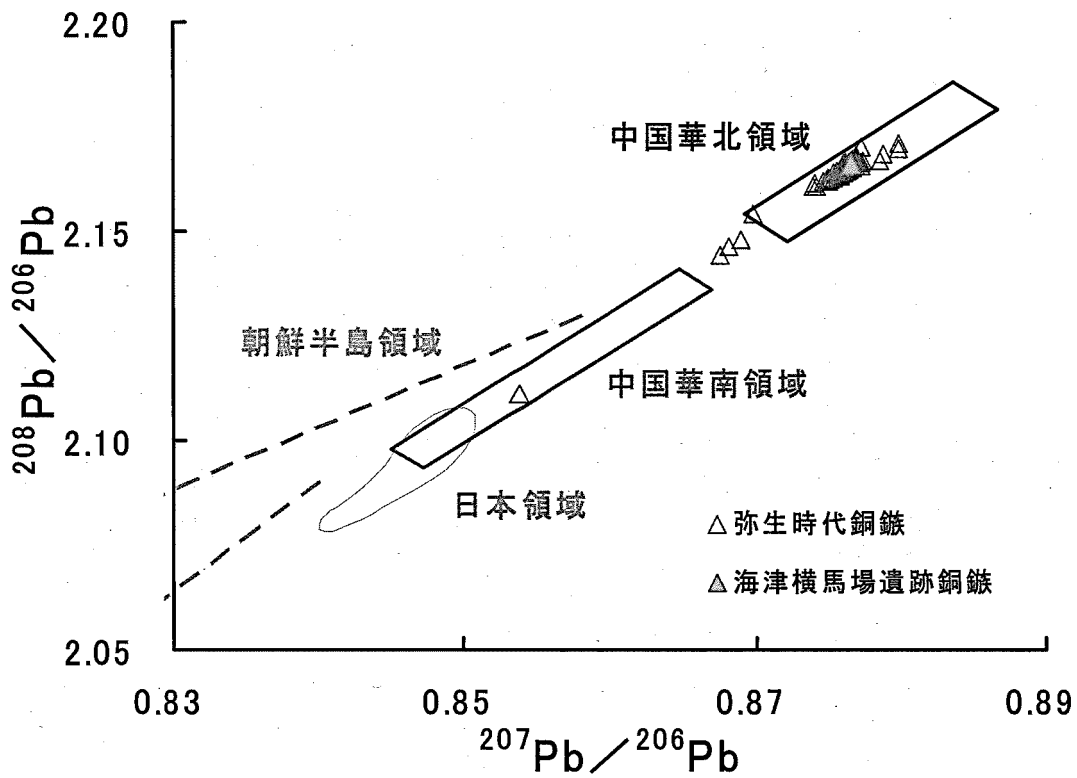


図9 海津横馬場遺跡出土銅鍬と弥生時代銅鍬が示す鉛同位体比分布 - A式図

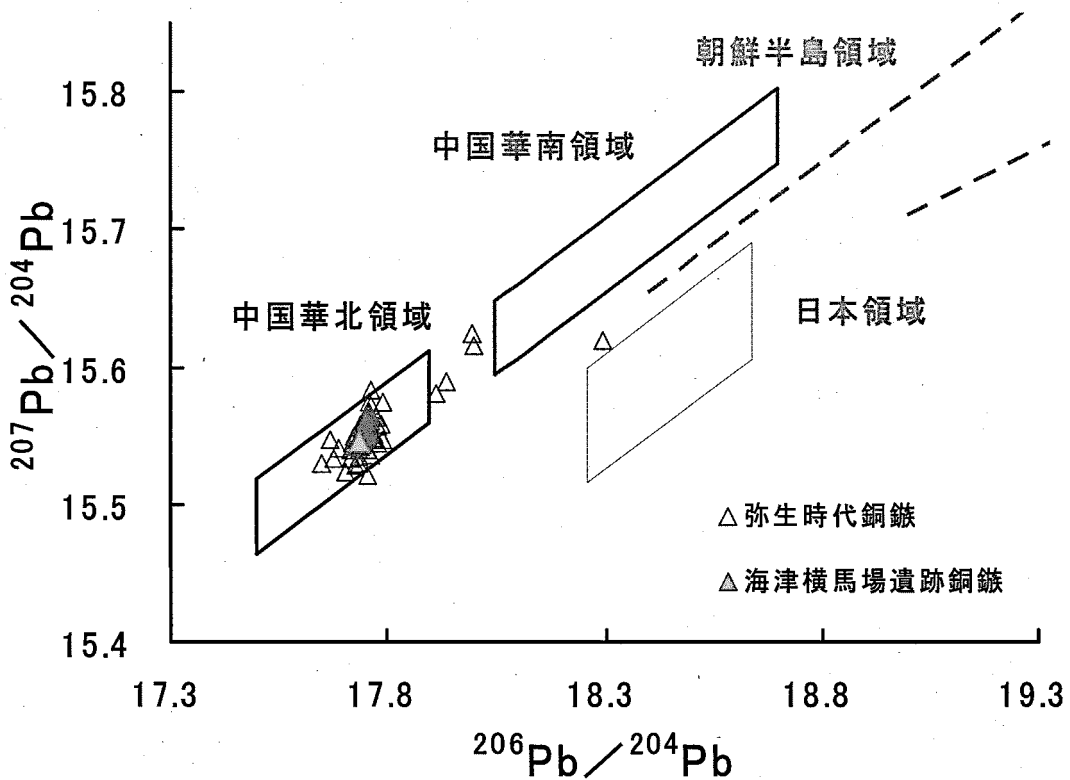


図10 海津横馬場遺跡出土銅鍬と弥生時代銅鍬が示す鉛同位体比分布 - B式図

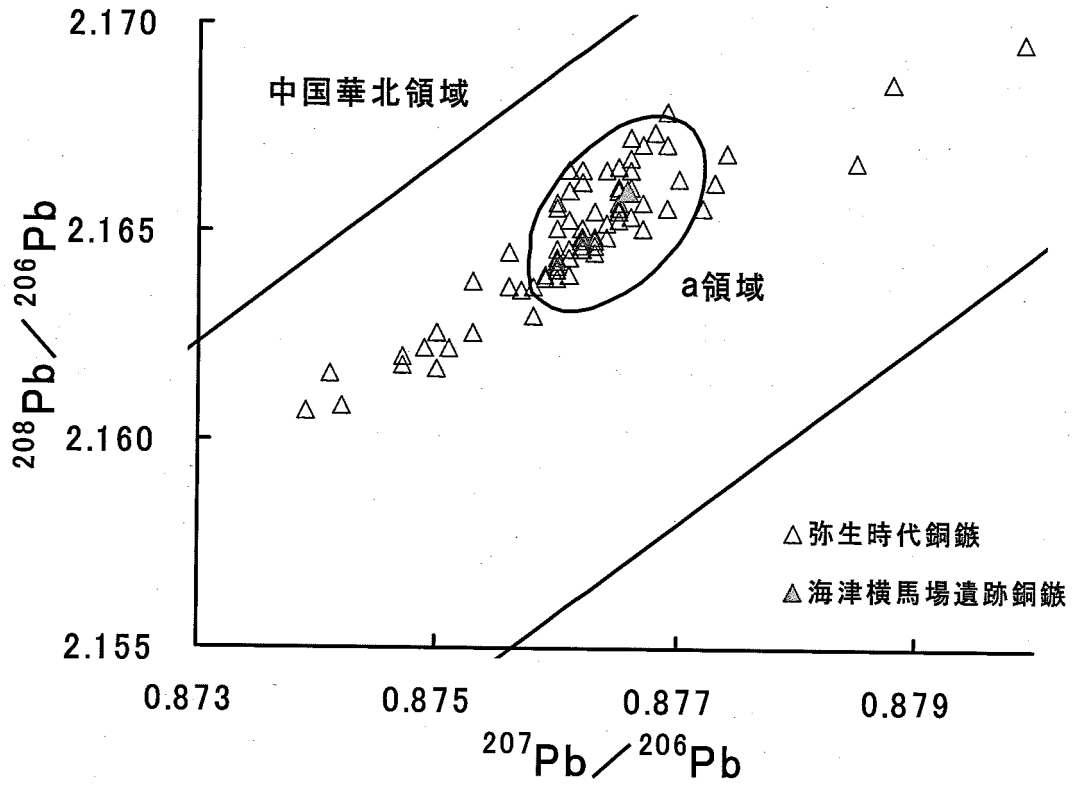


図11 海津横馬場遺跡出土銅鑞と弥生時代銅鑞が示す鉛同位体比分布拡大 - A式図

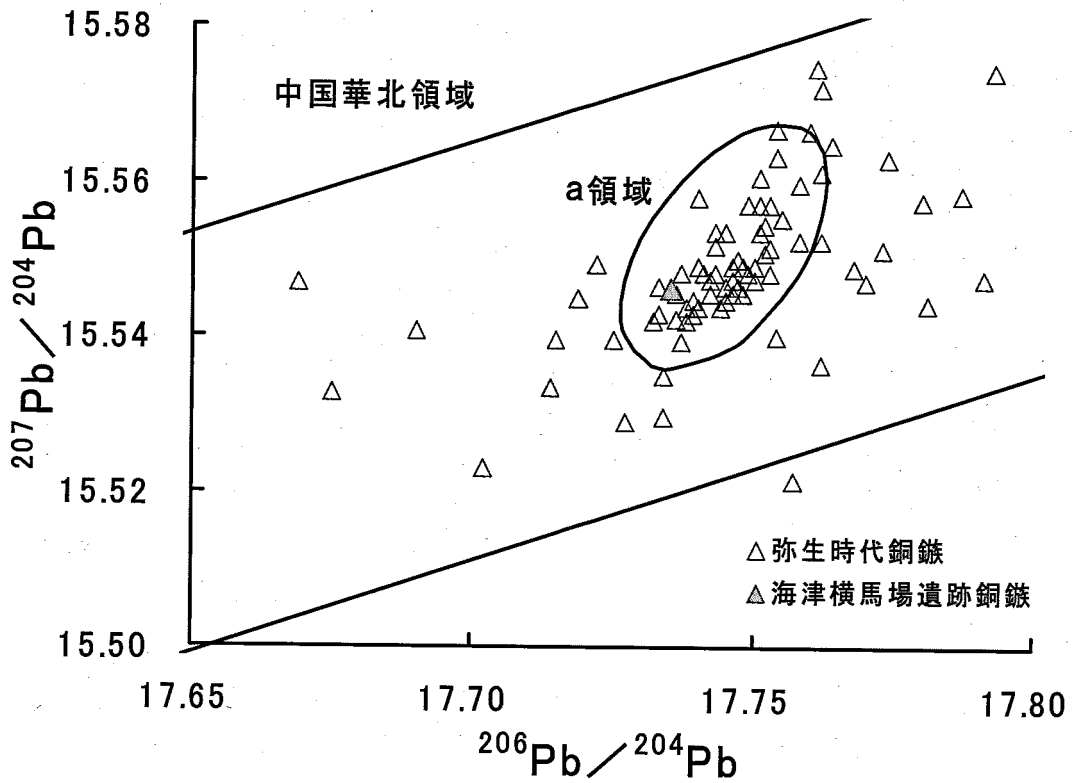


図12 海津横馬場遺跡出土銅鑞と弥生時代銅鑞が示す鉛同位体比分布拡大 - B式図

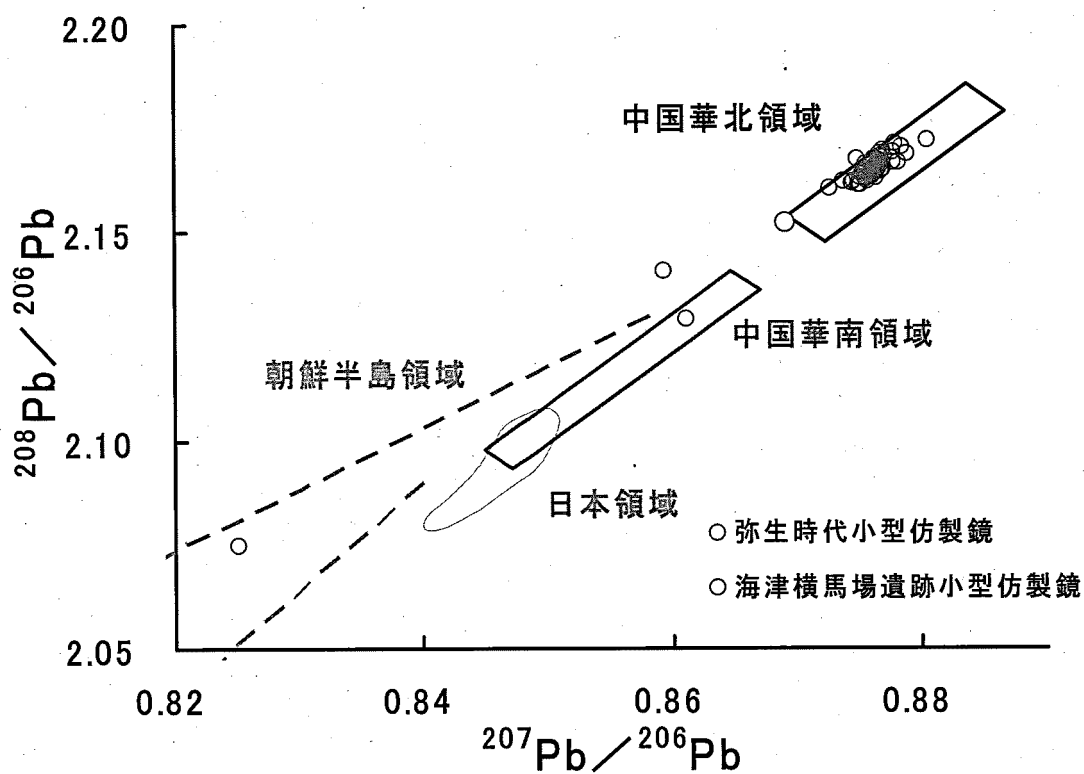


図13 海津横馬場遺跡出土小型仿製鏡と弥生時代小型仿製鏡が示す鉛同位体比分布 - A式図

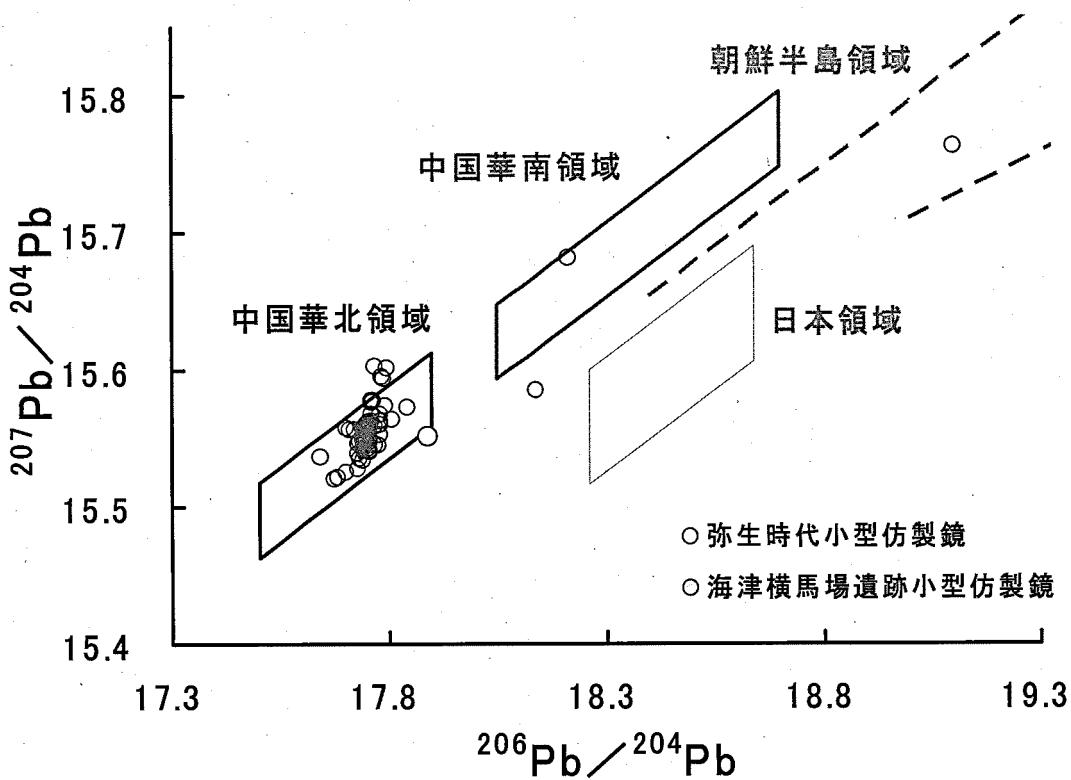
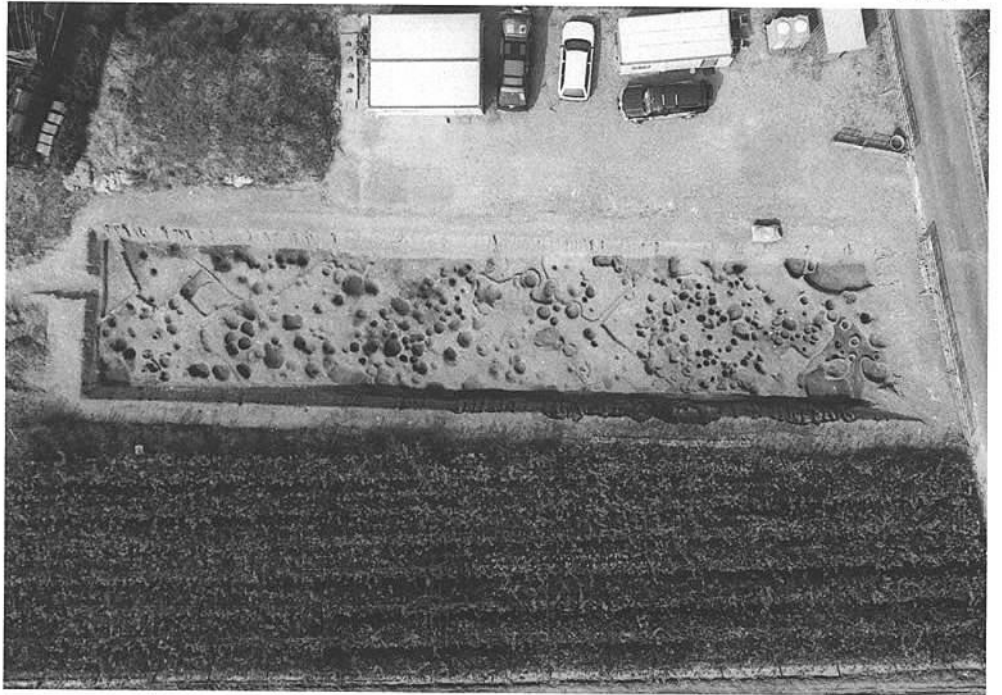


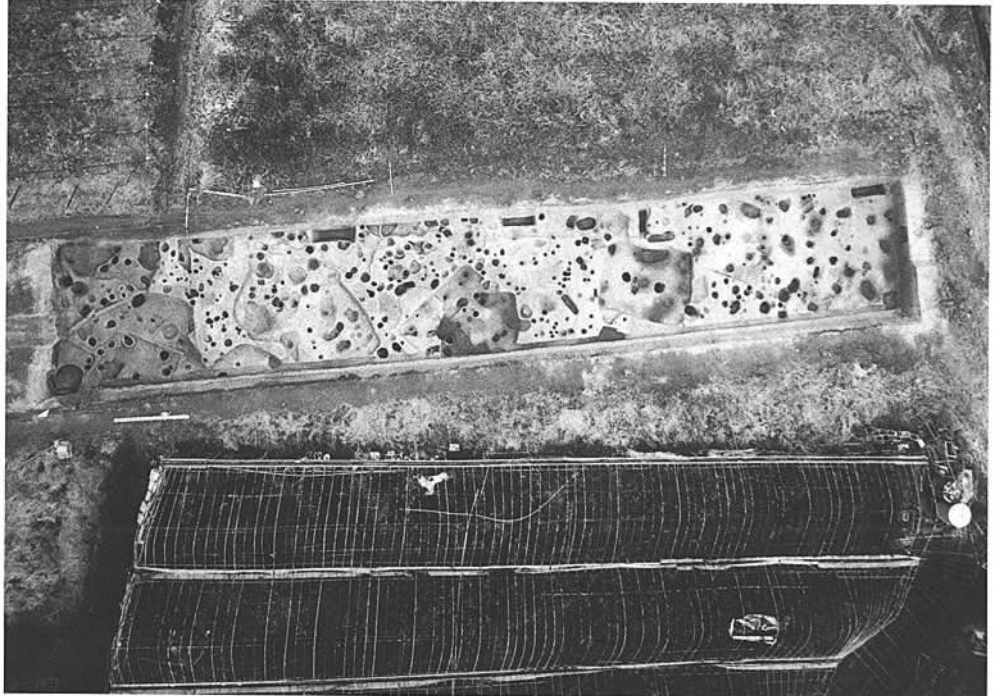
図14 海津横馬場遺跡出土小型仿製鏡と弥生時代小型仿製鏡が示す鉛同位体比分布 - B式図

版 圖

1. 第3次調査A区北半空中写真
(東から)



2. 第3次調査A区南半空中写真
(西から)



3. 第3次調査A区上層遺構
(南西から)





1. 第3次調査B区空中写真
(西から)

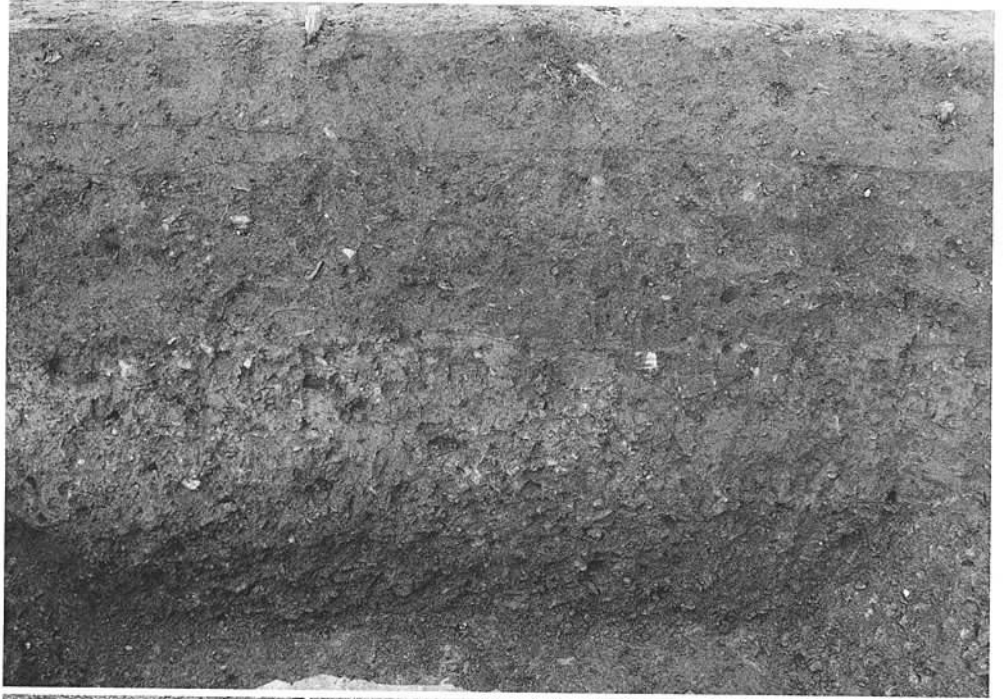


2. 第3次調査C区全景
(北東から)



3. 第3次調査D区空中写真
(西から)

1. A区東壁土層B



2. A区東壁土層C



3. 18号竪穴住居跡 (南東から)





1. 19・20・22号竪穴住居跡
(北東から)



2. 21号竪穴住居炉跡
(南西から)



3. 21号竪穴住居炉跡断ち割り土層
(南東から)



1. 23号竪穴住居跡（北西から）



2. 24号竪穴住居跡（南東から）



3. 25号竪穴住居跡（北西から）



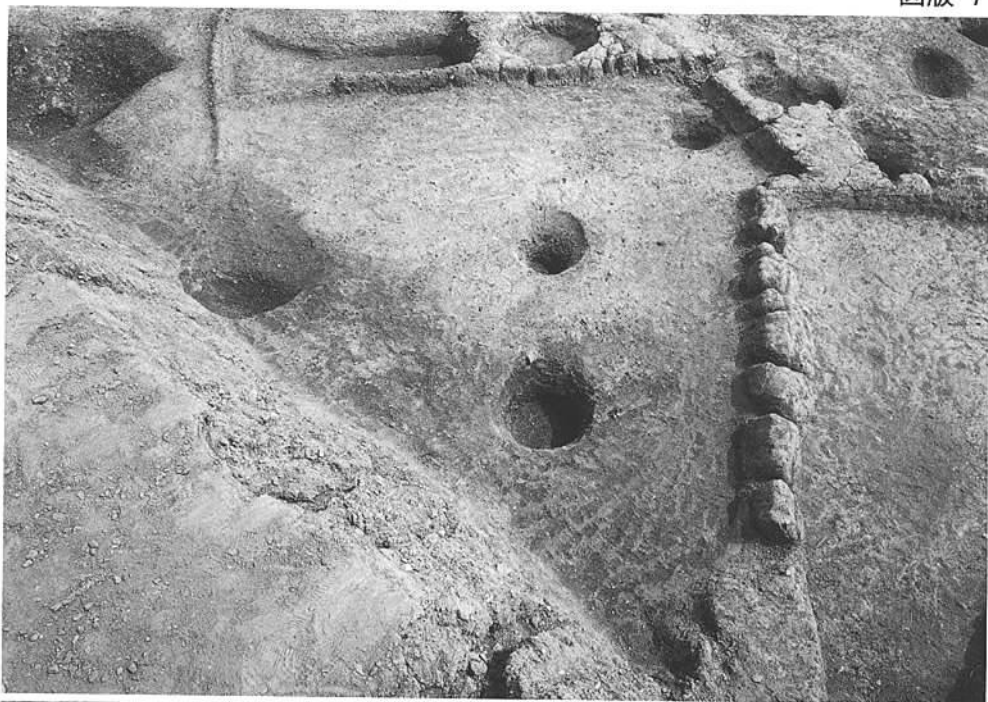
1. 26号竪穴住居跡 (南西から)



2. 27号竪穴住居跡 (南から)



3. 28号竪穴住居跡 (南西から)



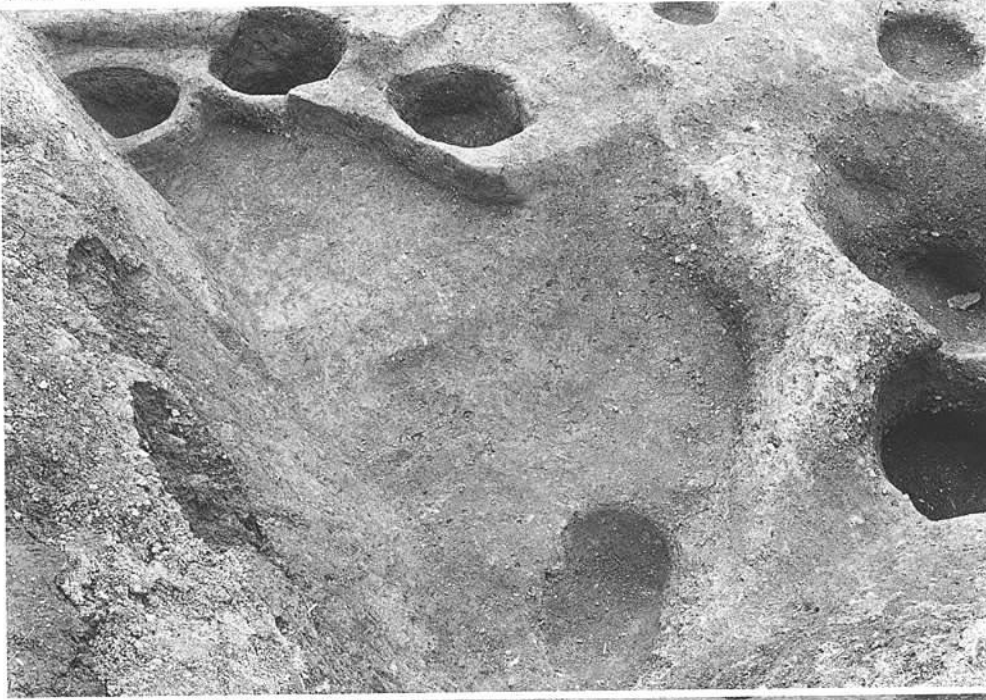
1. 29号竪穴住居跡 (南西から)



2. 30号竪穴住居跡 (南西から)



3. 31号竪穴住居跡 (南西から)



1. 32号竪穴住居跡（北東から）



2. 33号竪穴住居跡（南から）



3. 34号竪穴住居跡（南西から）

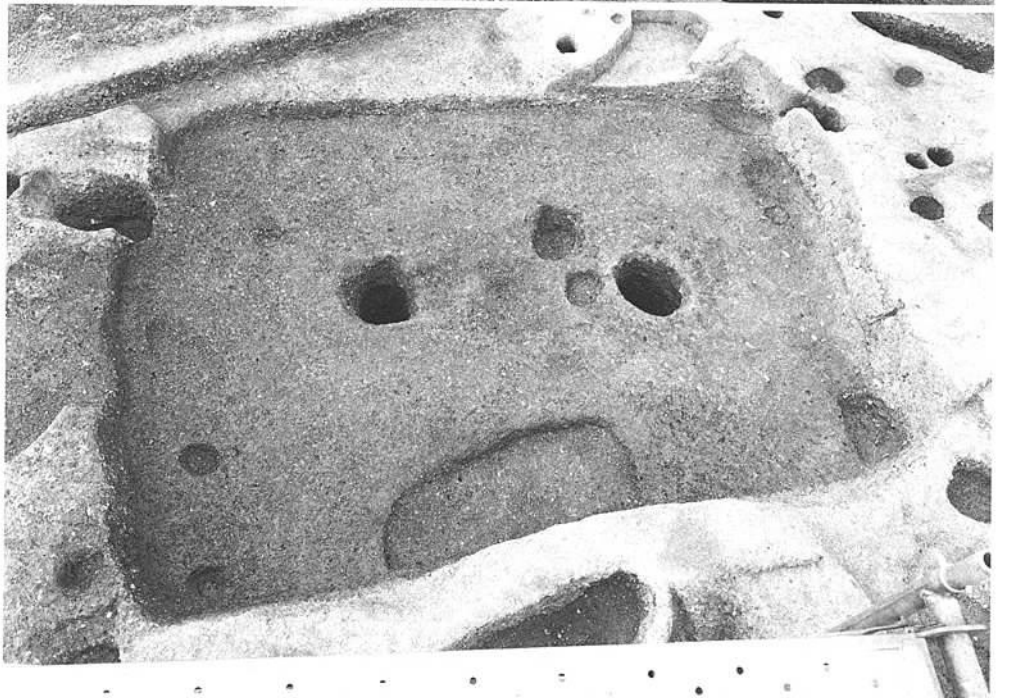
1. 35号竪穴住居跡 (南から)

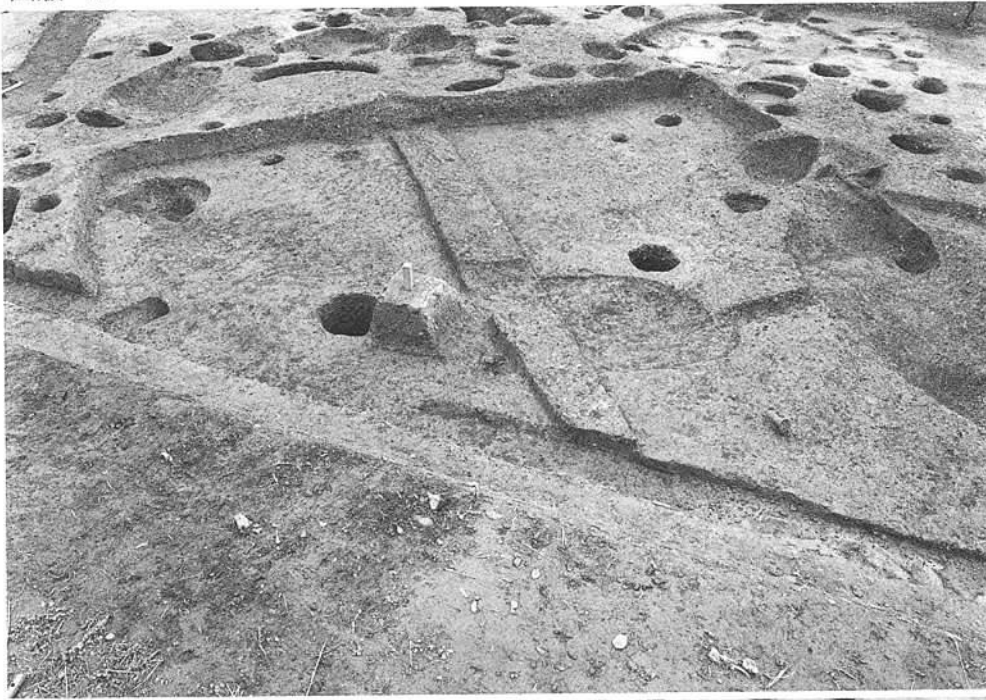


2. 36号竪穴住居跡 (南西から)



3. 37号竪穴住居跡 (南東から)





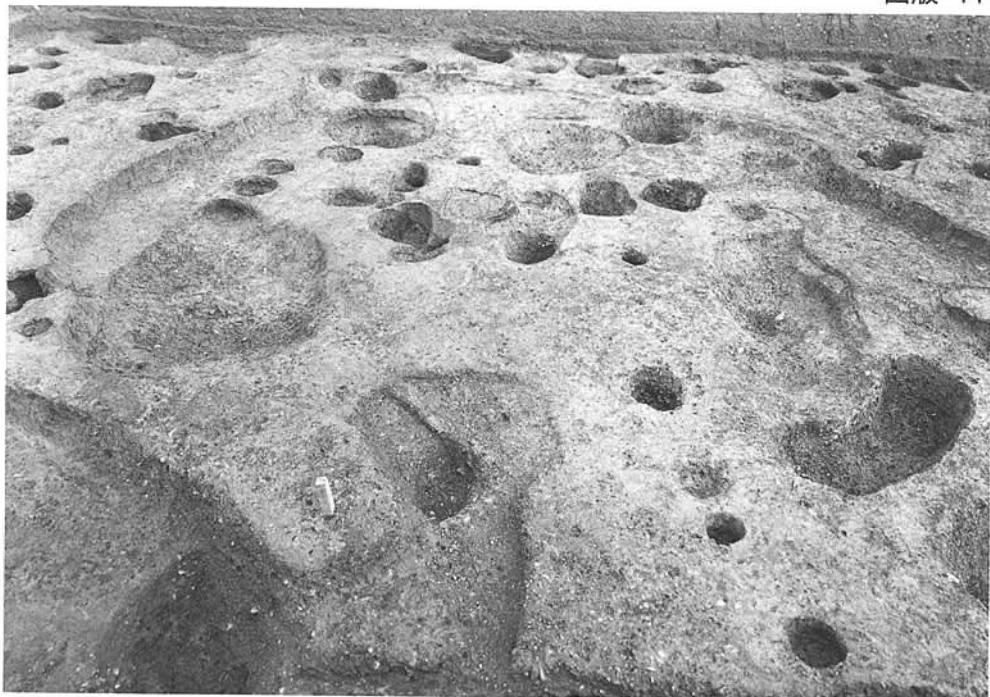
1. 38号竪穴住居跡（南西から）



2. 39号竪穴住居跡（西から）



3. 40号竪穴住居跡（北西から）



1. 41号竪穴住居跡（西から）



2. 42号竪穴住居跡（西から）



3. 43・44号竪穴住居跡
（北西から）



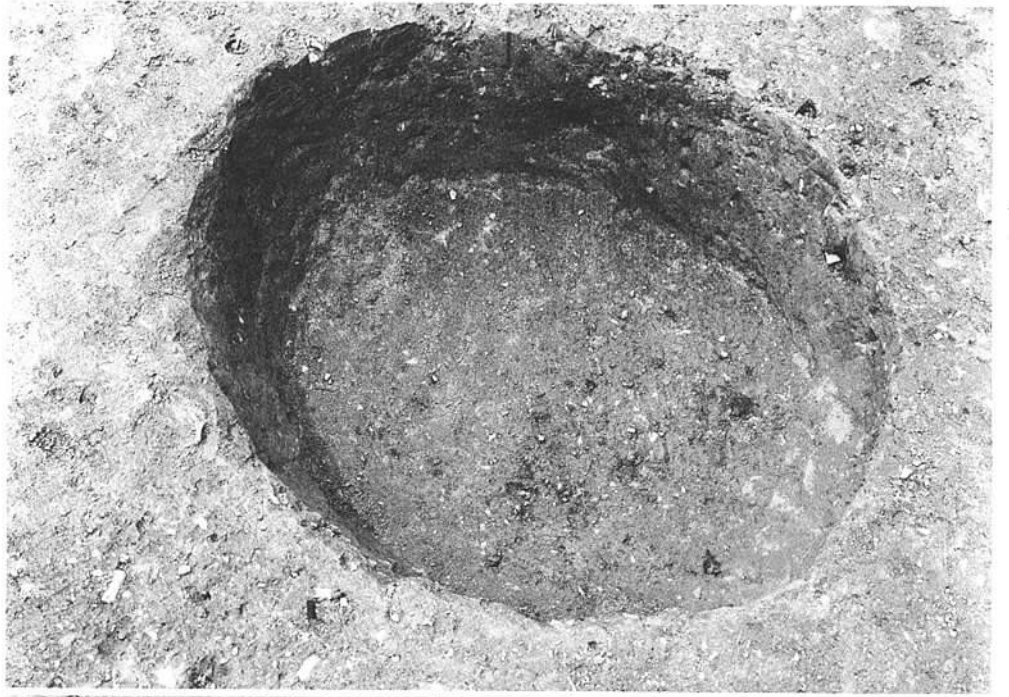
1. 45号竪穴住居跡（南西から）



2. 46号竪穴住居跡（北西から）



3. 93号土坑（南から）



1. 94号土坑 (南から)



2. 95号土坑 (北西から)



3. 96号土坑 (北から)



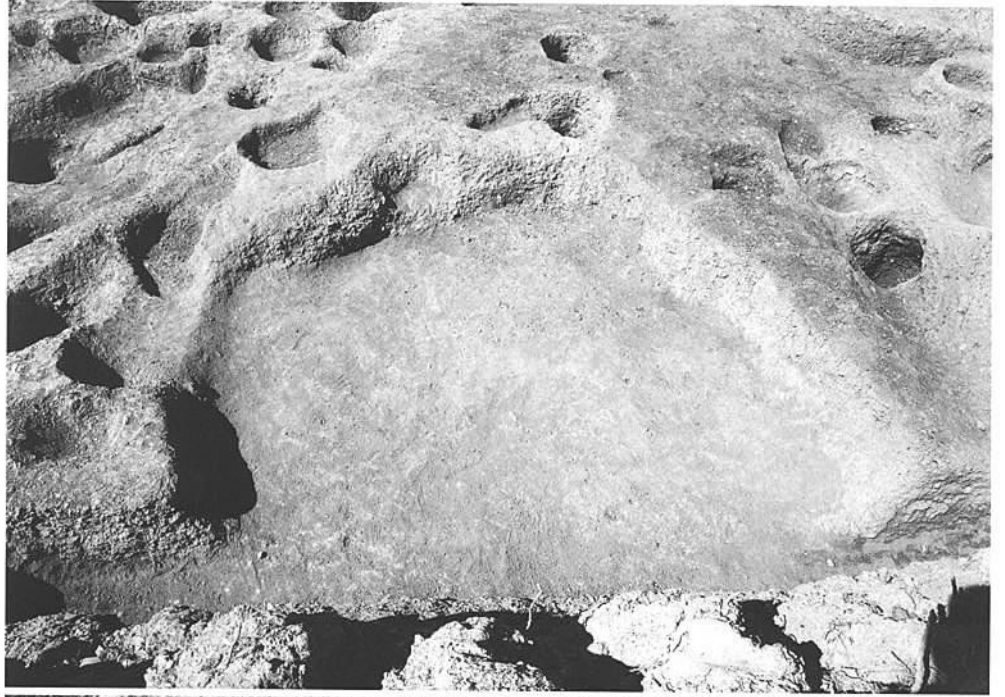
1. 97号土坑（西から）



2. 98号土坑（西から）



3. 99号土坑（西から）



1. 100号土坑 (東から)



2. 101号土坑 (東から)



3. 102号土坑 (北から)



1. 102号土坑土層（東から）



2. 103号土坑（北から）

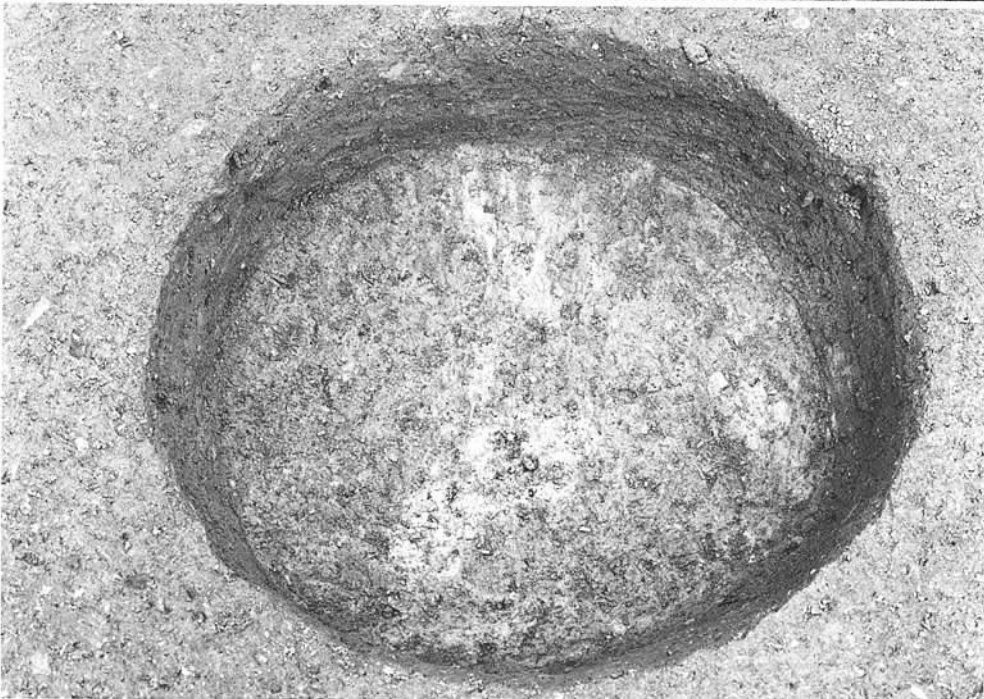


3. 104号土坑（東から）

1. 105号土坑 (北東から)



2. 106号土坑 (南東から)



3. 107号土坑 (北から)





1. 108号土坑（北西から）



2. 109号土坑（北西から）



3. 110号土坑（西から）

1. 111号土坑（北西から）

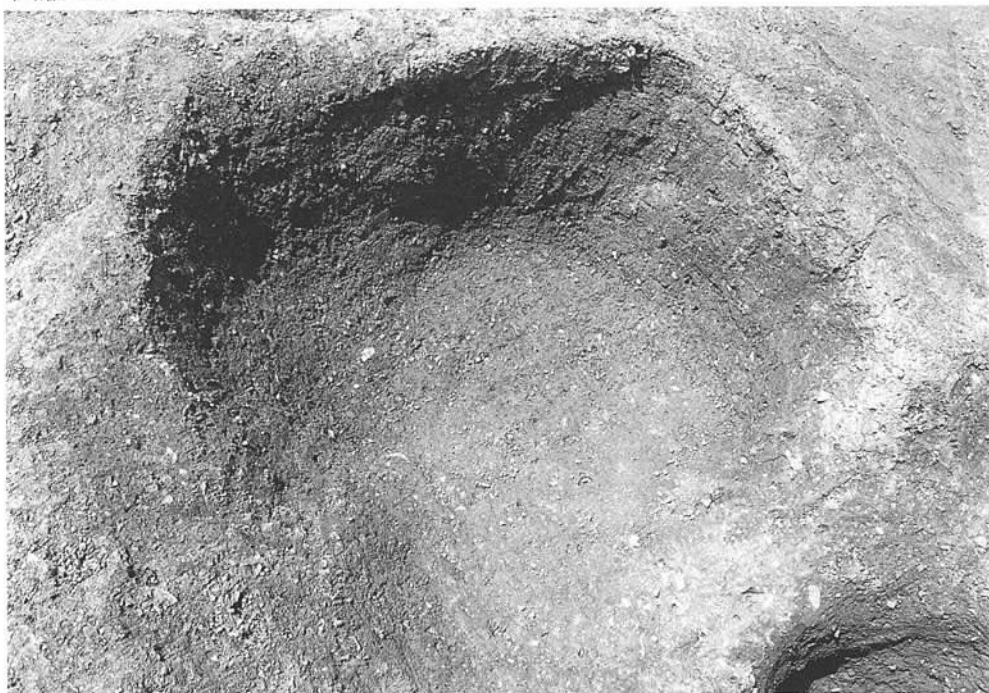


2. 112号土坑（西から）



3. 113号土坑（東から）





1. 114号土坑 (北東から)



2. 115号土坑 (北西から)



3. 116号土坑 (北から)

1. 117号土坑 (北から)



2. 118号土坑 (西から)



3. 119号土坑 (南西から)





1. 120号土坑（北東から）

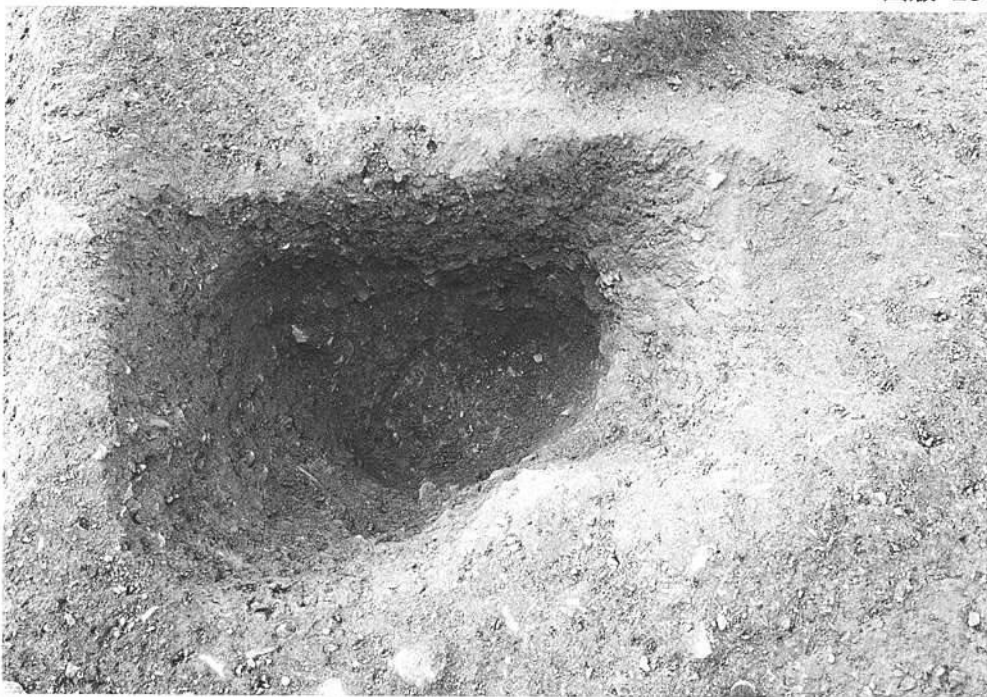


2. 121号土坑（北東から）



3. 122号土坑（南西から）

1. 123号土坑（東から）



2. 124号土坑（西から）



3. 125号土坑（西から）

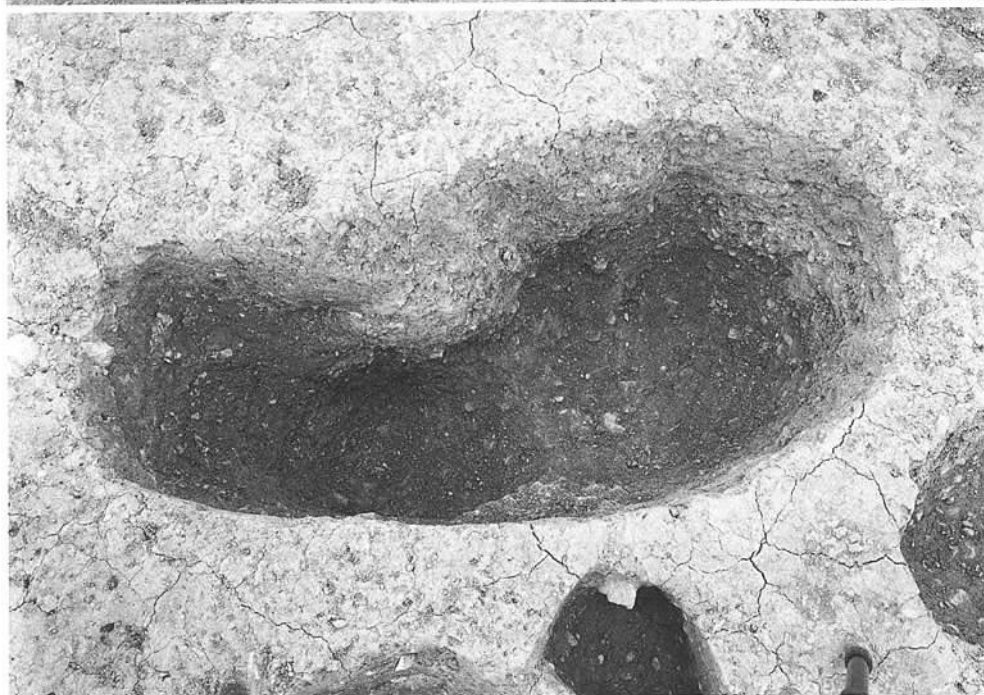




1. 126号土坑 (西から)



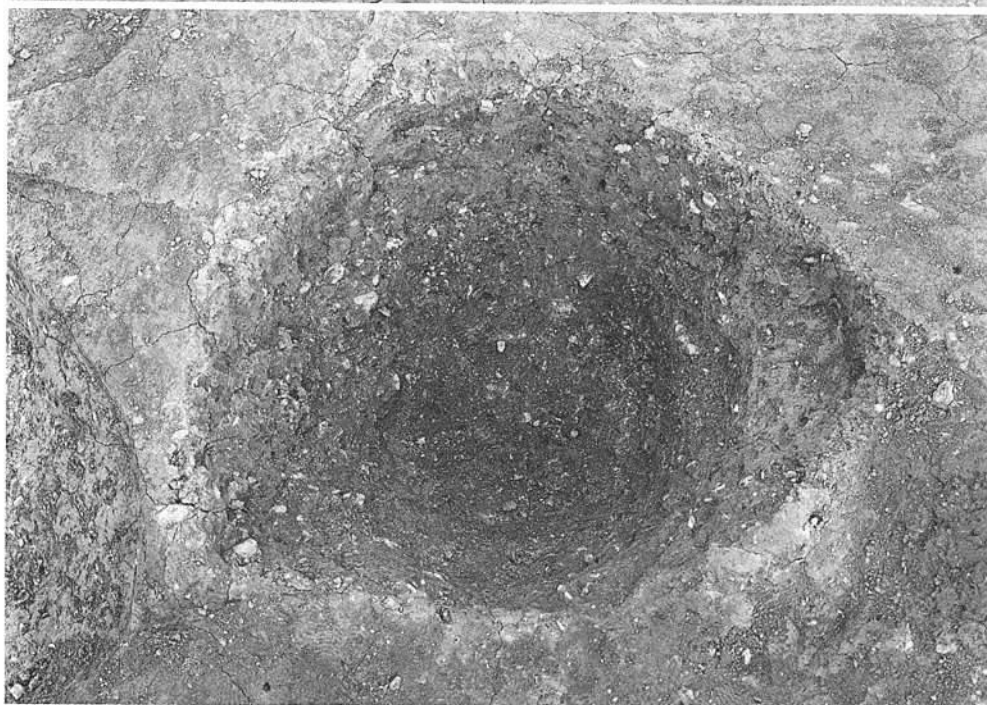
2. 127号土坑 (西から)



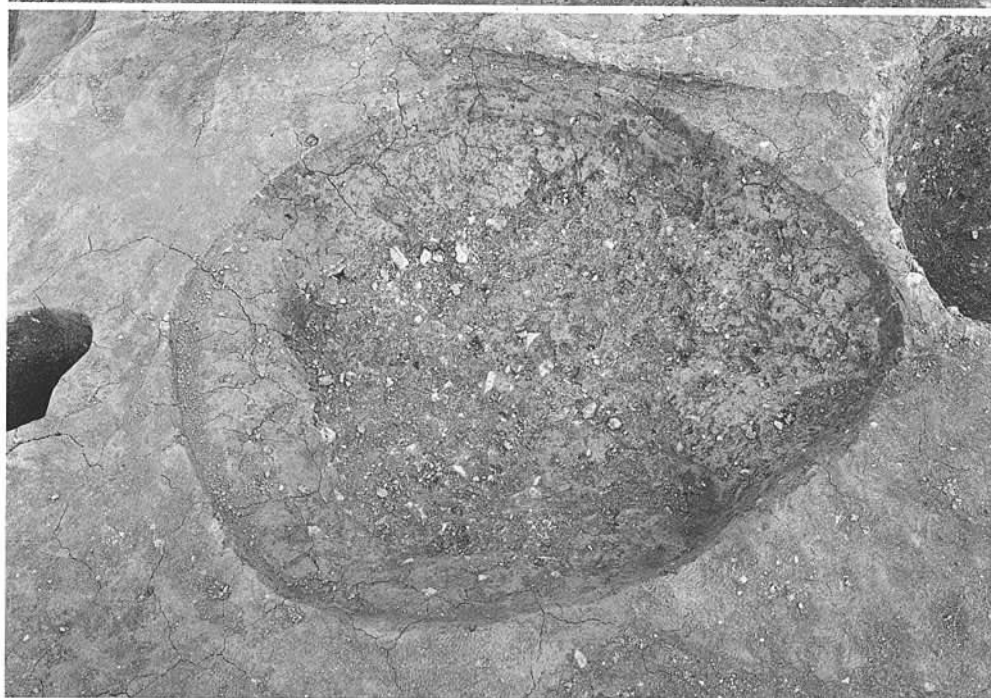
3. 128号土坑 (東から)



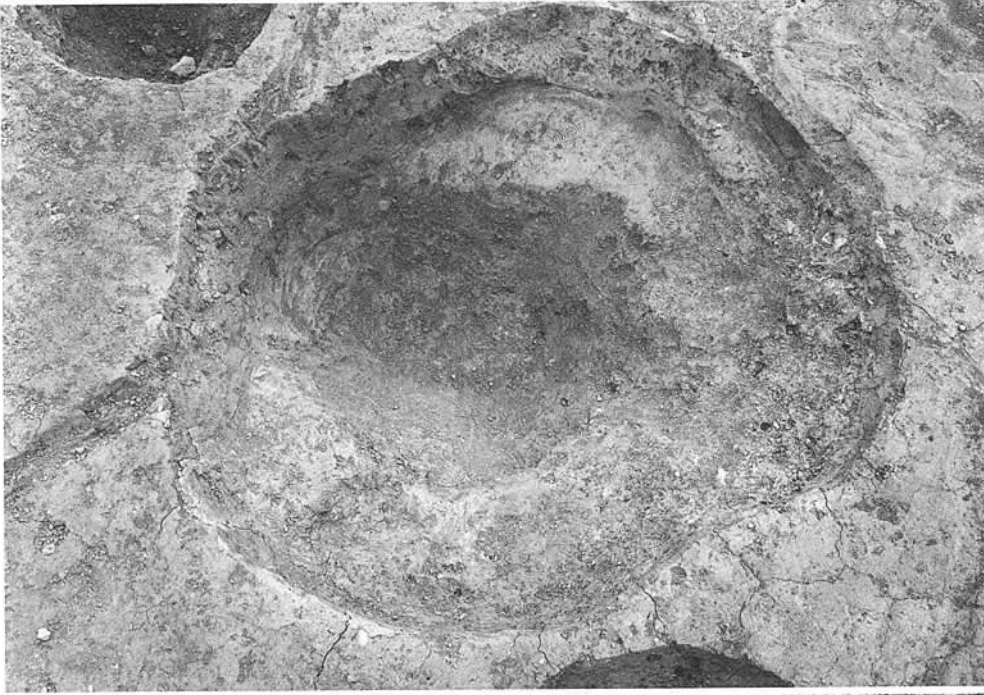
1. 129号土坑 (北から)



2. 130号土坑 (西から)



3. 131号土坑 (西から)



1. 132号土坑 (北西から)



2. 134号土坑 (北西から)



3. 135号土坑 (東から)



1. 136号土坑 (南東から)



2. 137号土坑 (東から)



3. 137号土坑土層 (東から)



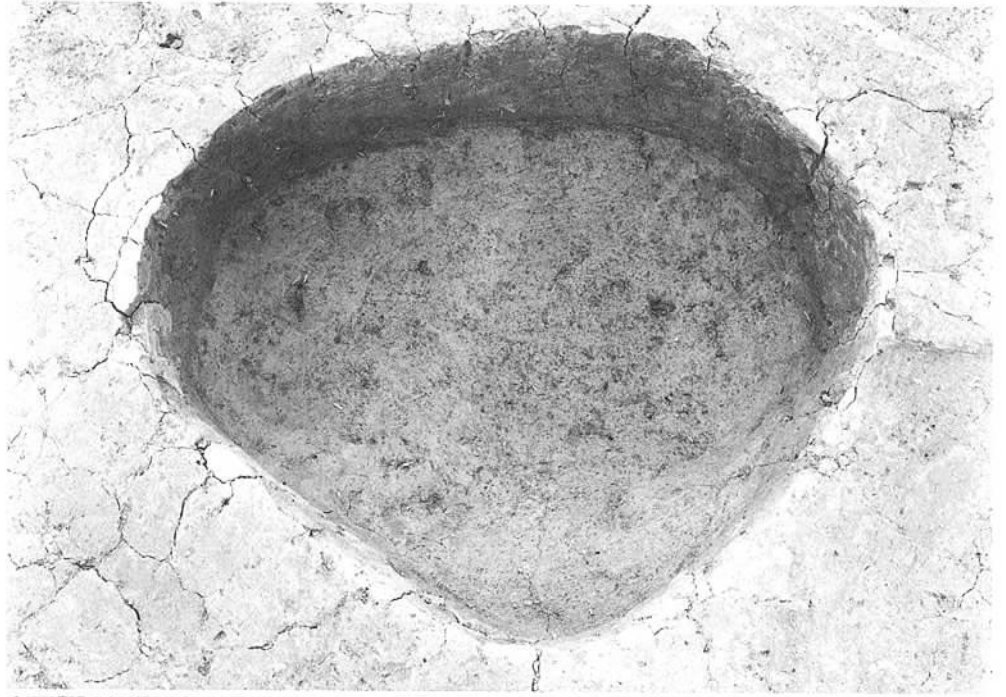
1. 138号土坑（南から）



2. 139号土坑（西から）



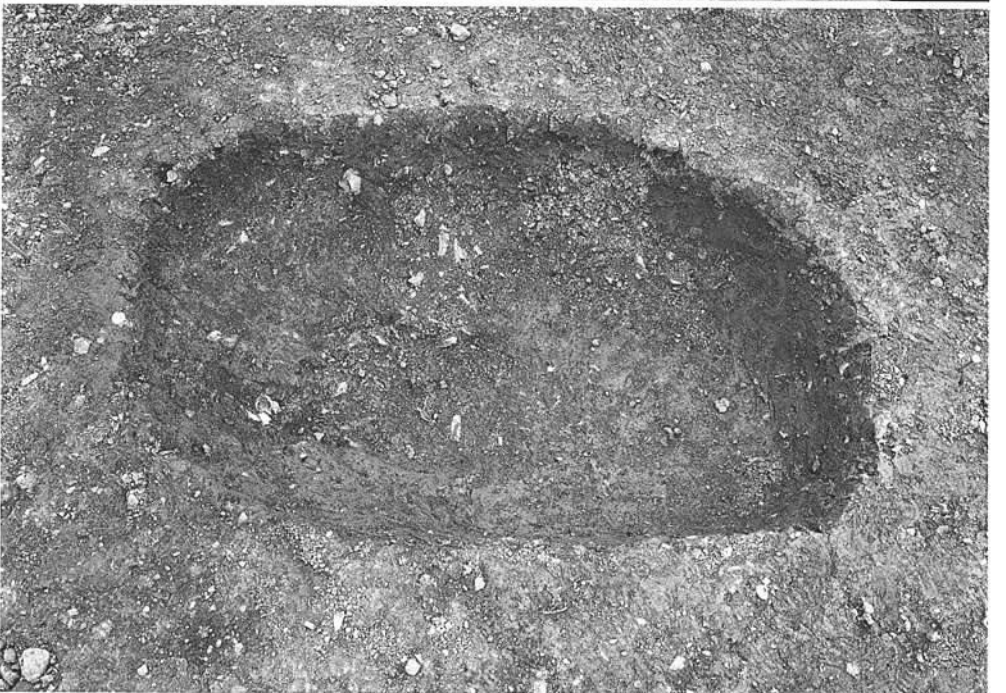
3. 140号土坑（東から）



1. 141号土坑 (北から)



2. 142号土坑 (南東から)



3. 143号土坑 (南東から)



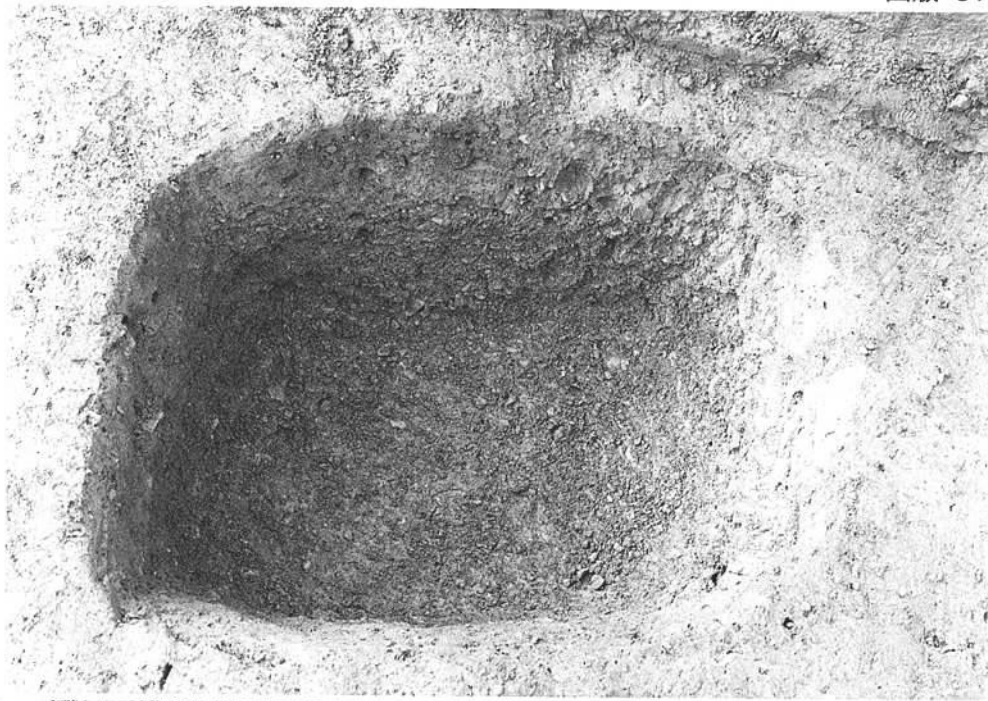
1. 144号土坑（東から）



2. 145号土坑（西から）



3. 146号土坑（西から）



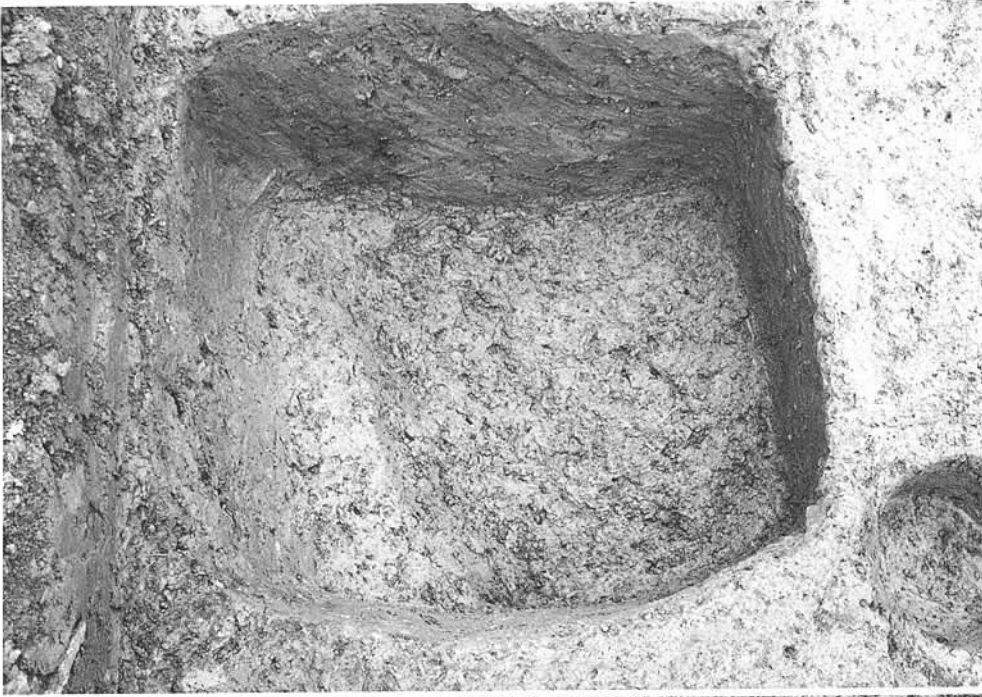
1. 147号土坑（東から）



2. 148号土坑（北西から）



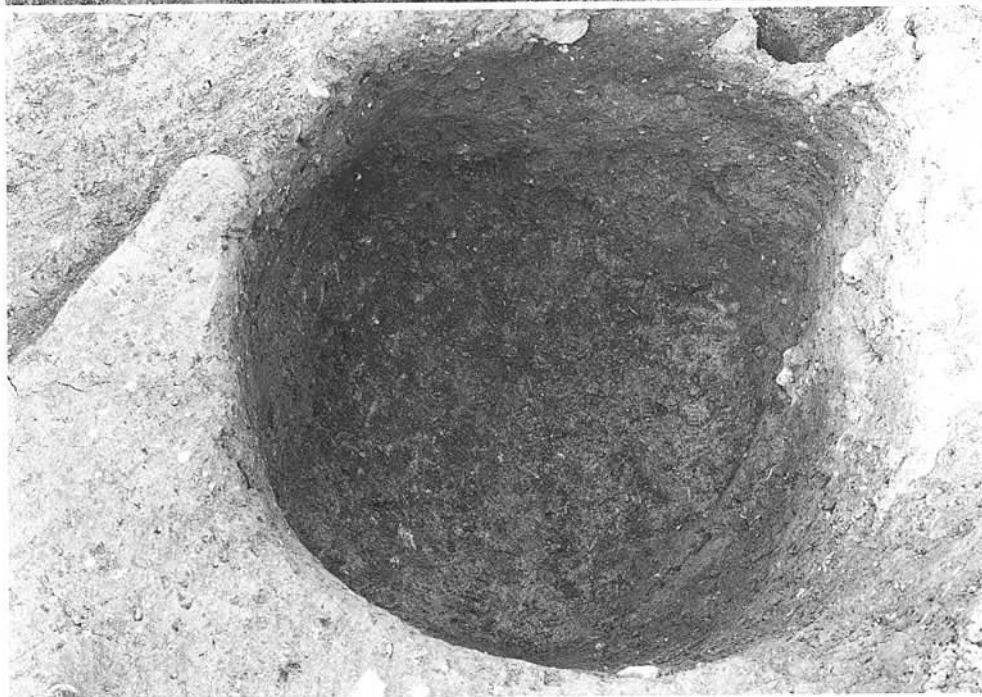
3. 149号土坑（北西から）



1. 150号土坑 (北から)



2. 151号土坑 (南から)



3. 152号土坑 (南東から)



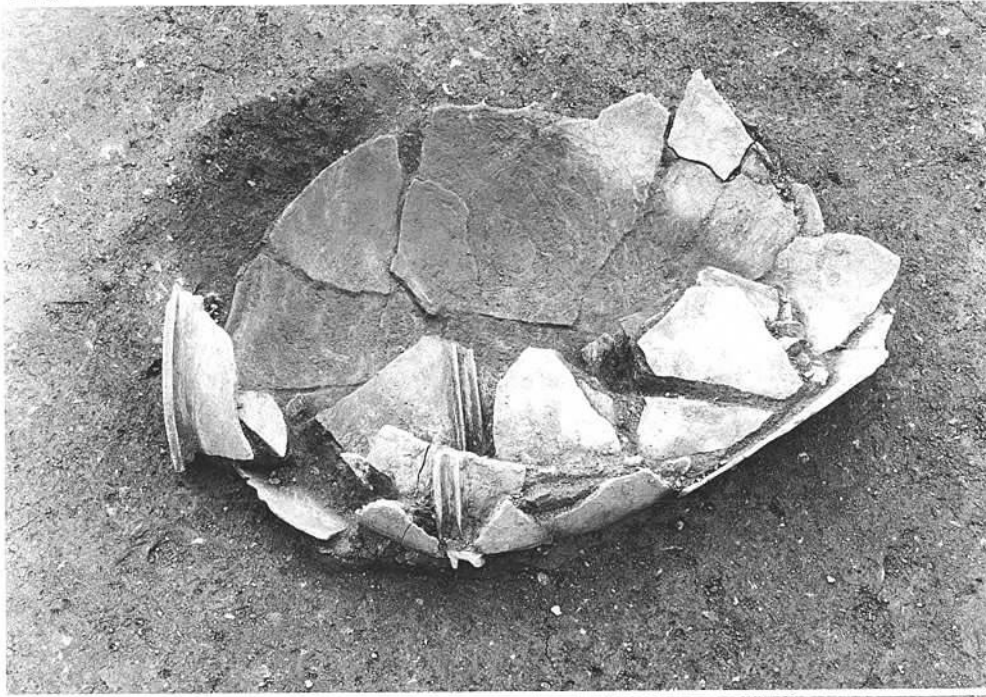
1. 153号土坑 (西から)



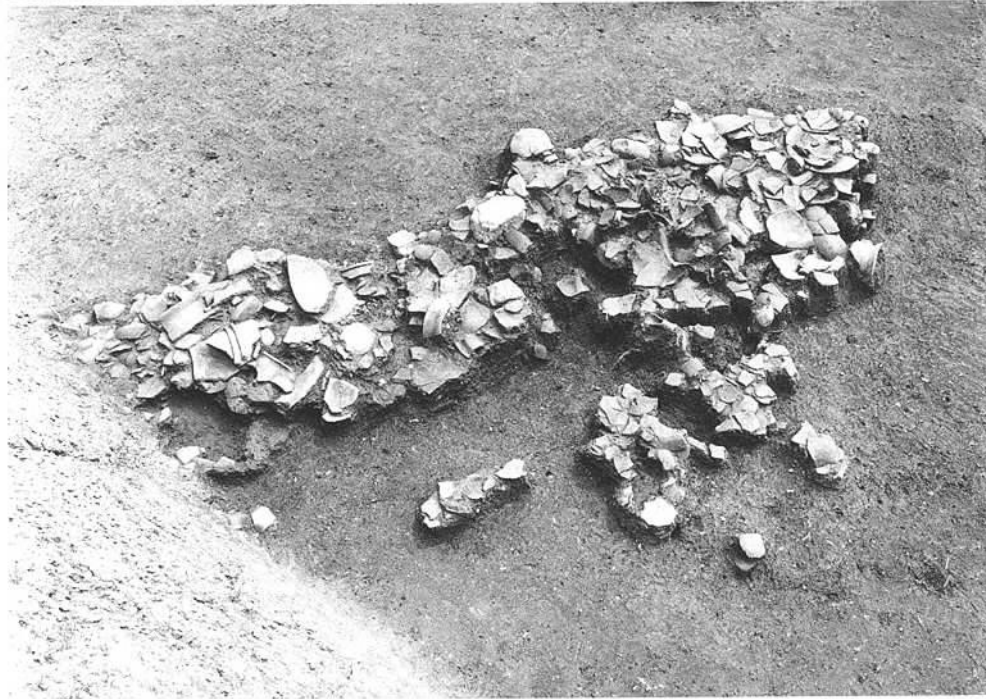
2. 154号土坑 (南東から)



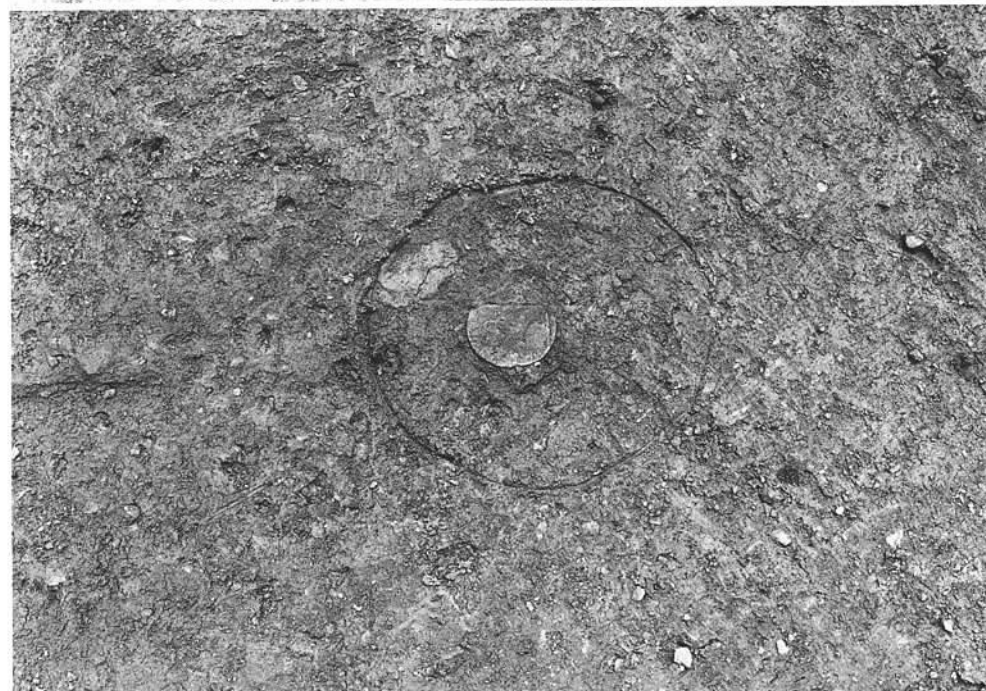
3. 155・156号土坑 (南東から)



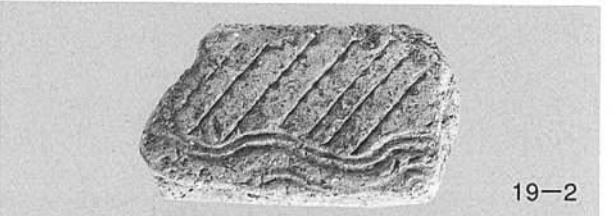
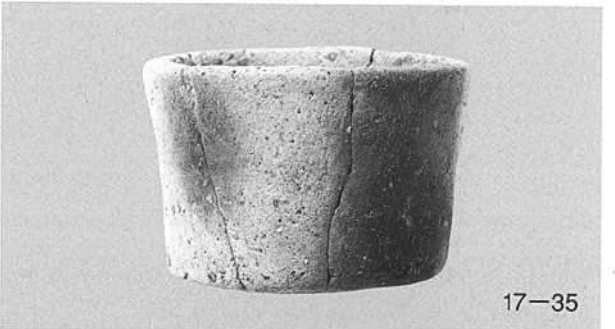
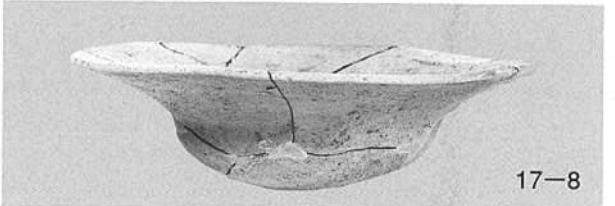
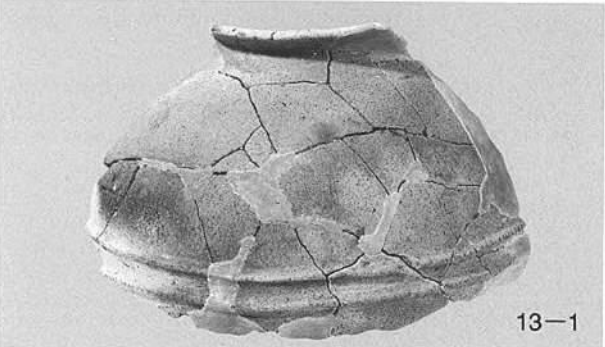
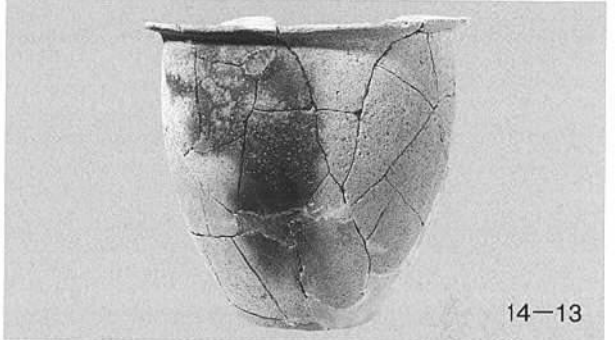
1. 1号甕棺（西から）



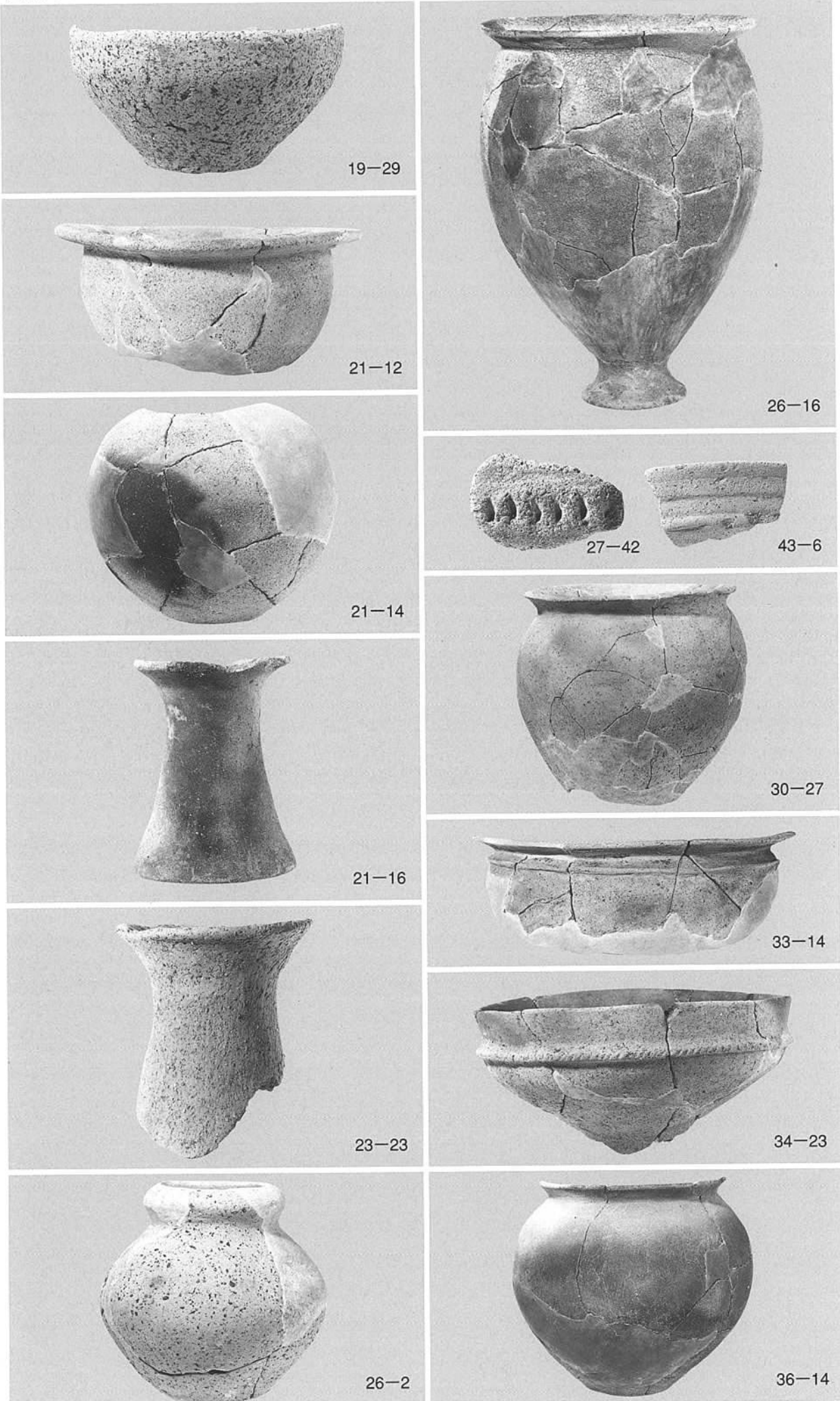
2. 土器溜まり1（南西から）

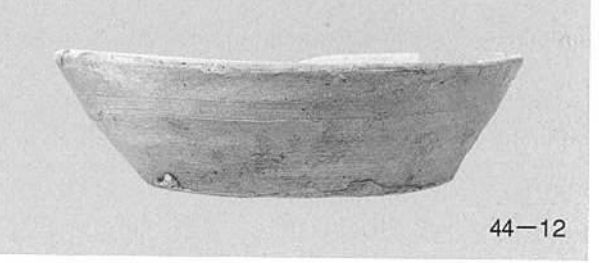
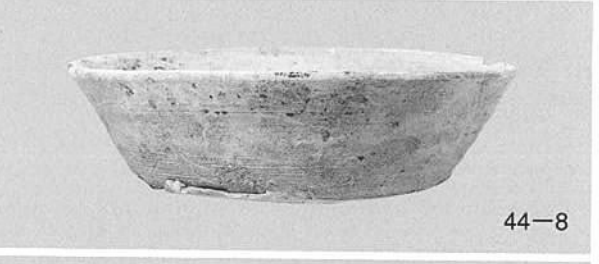
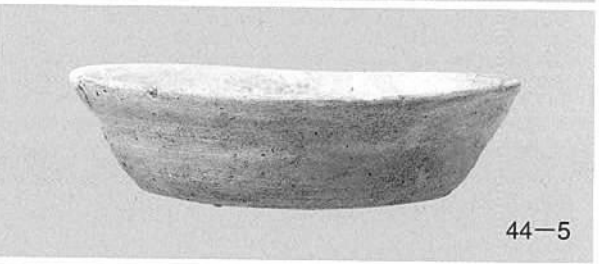
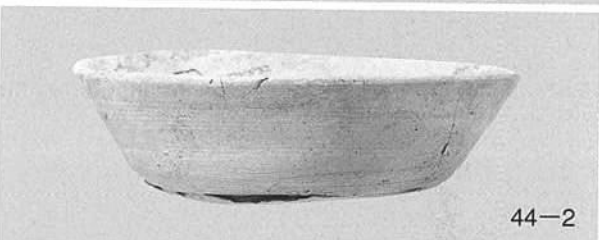


3. 鏡出土ピット（北西から）

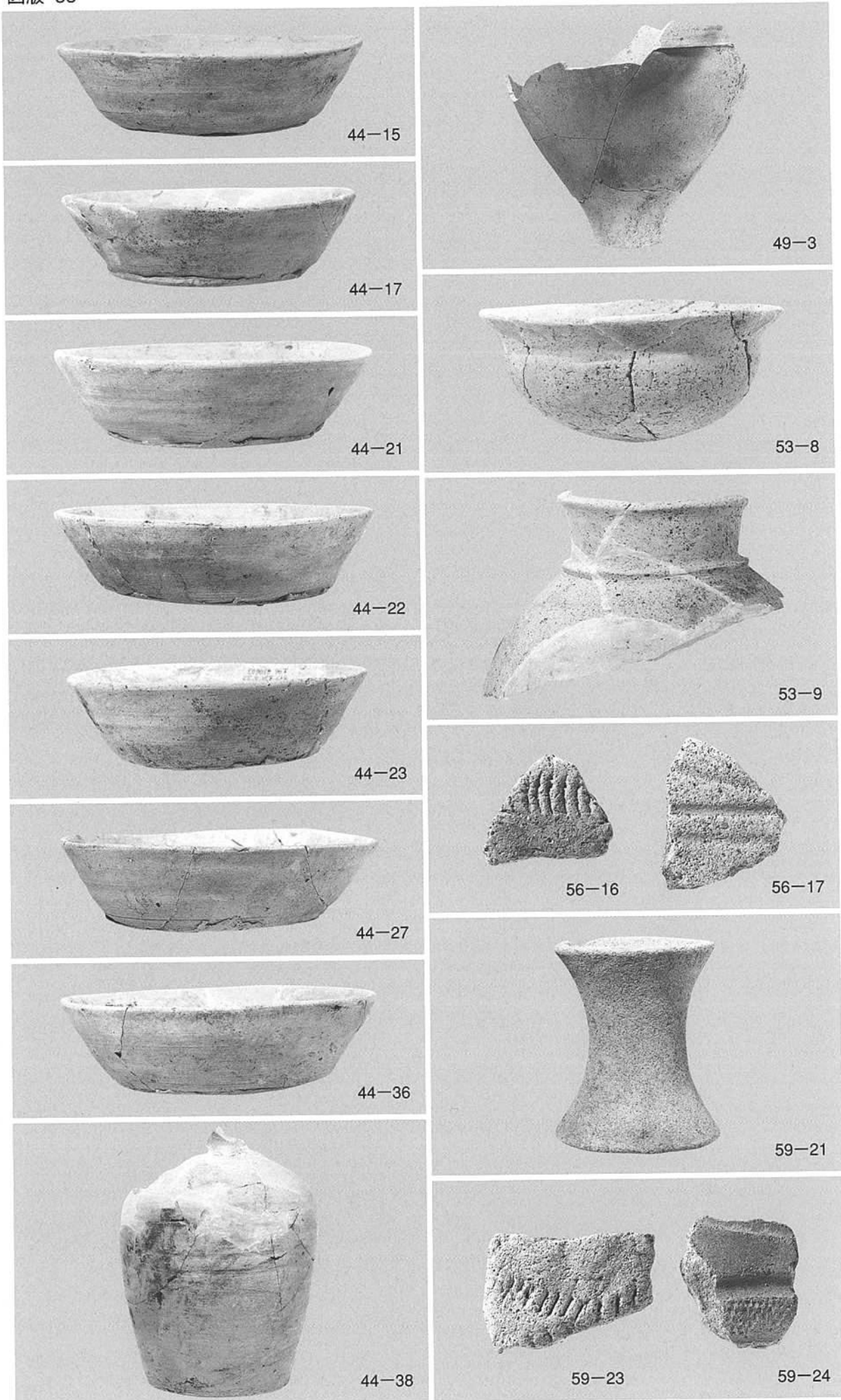


20~25・28~30号竖穴住居跡出土土器



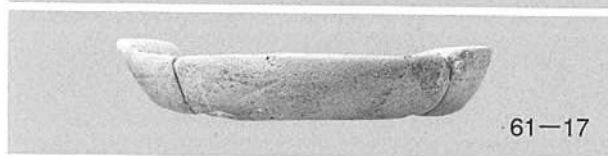


43~45号竖穴住居跡、96号土坑出土土器

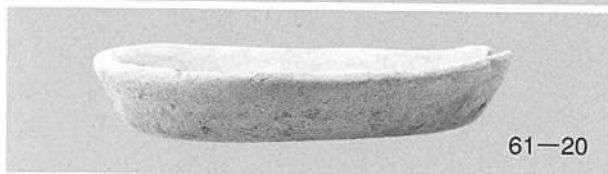




61-5



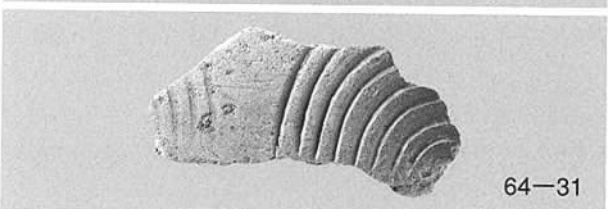
61-17



61-20



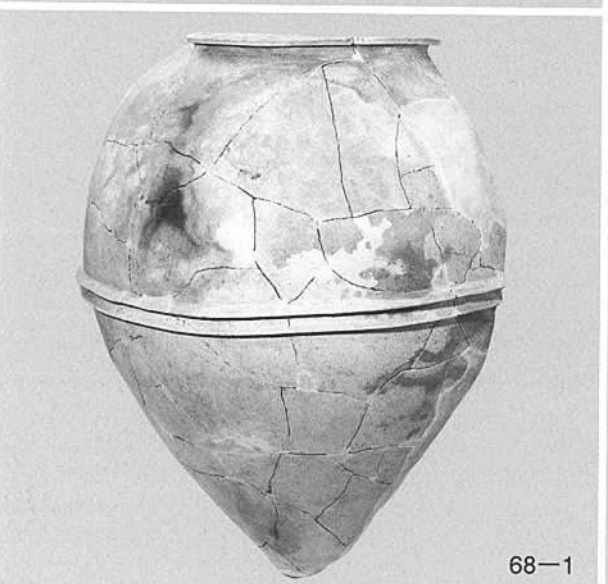
61-33



64-31



64-46



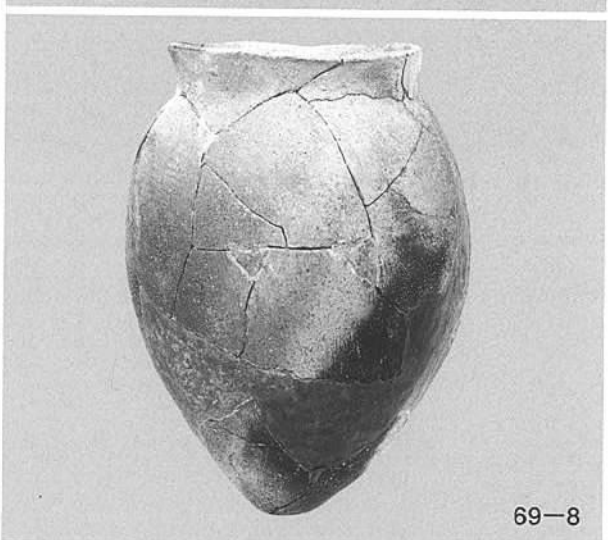
68-1



69-1



69-3

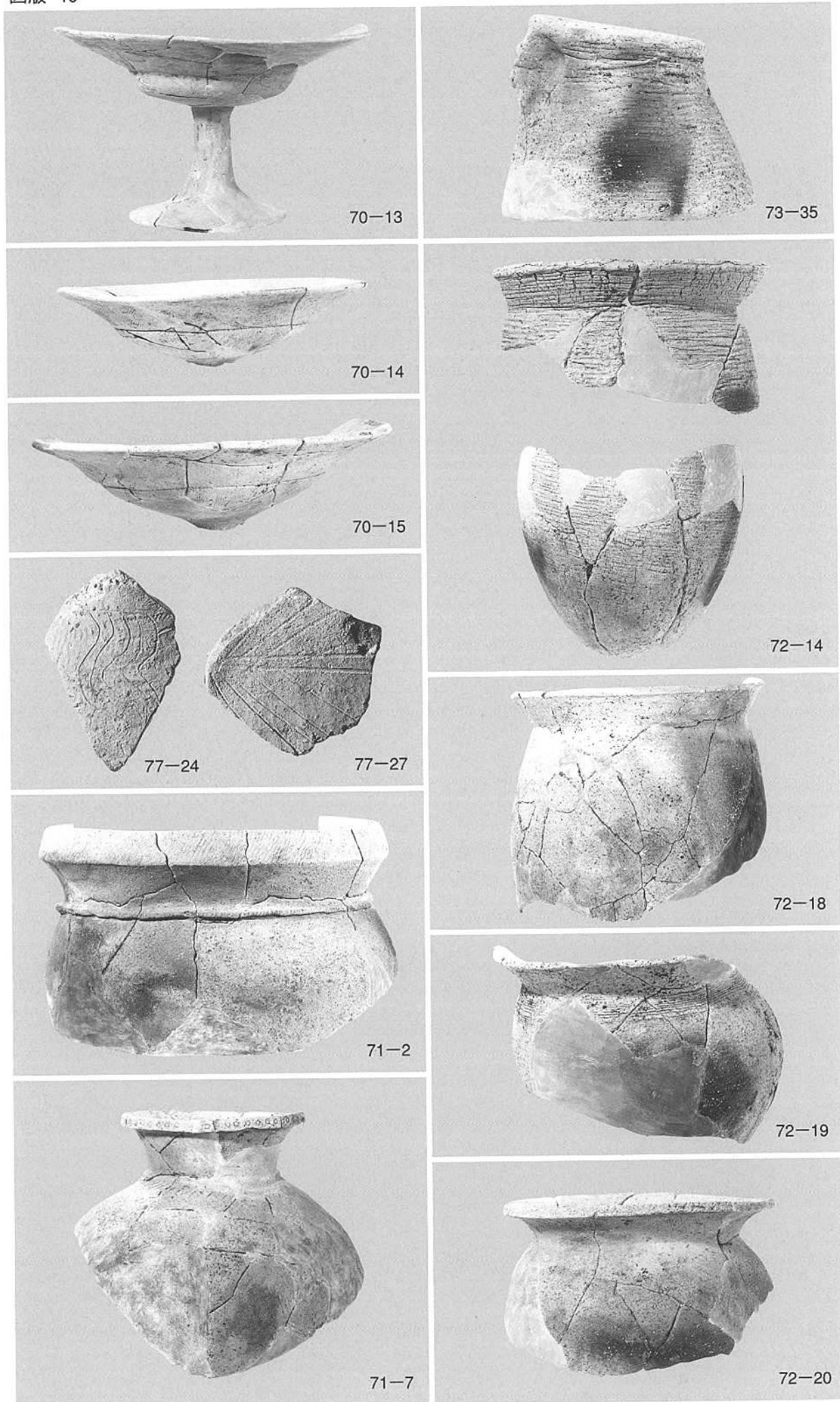


69-8

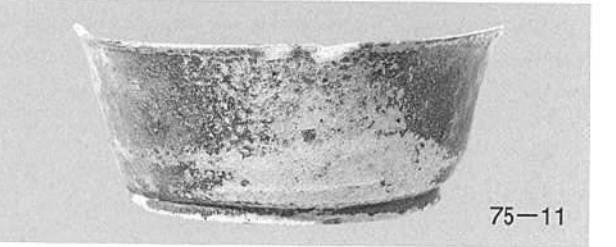
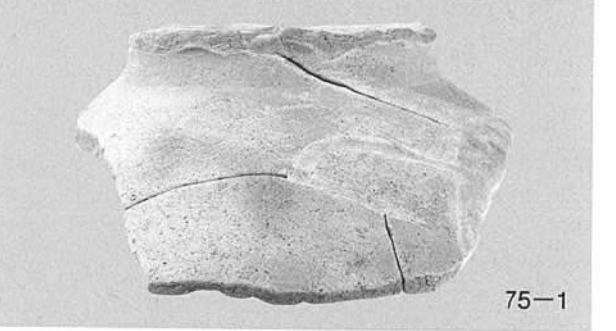
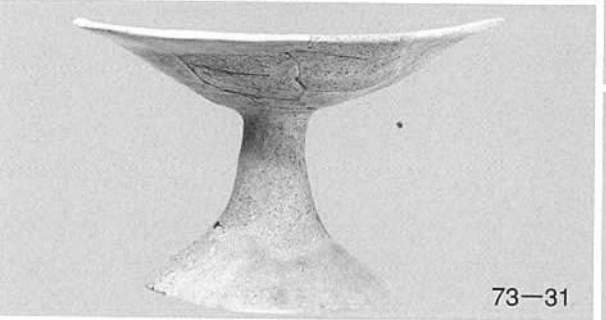
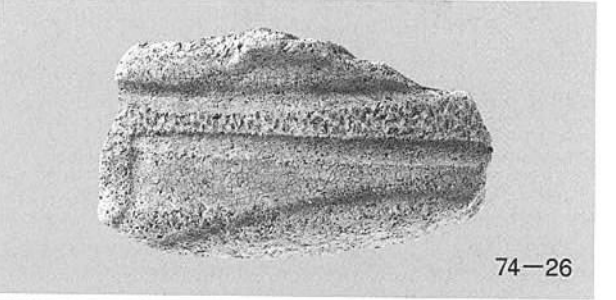
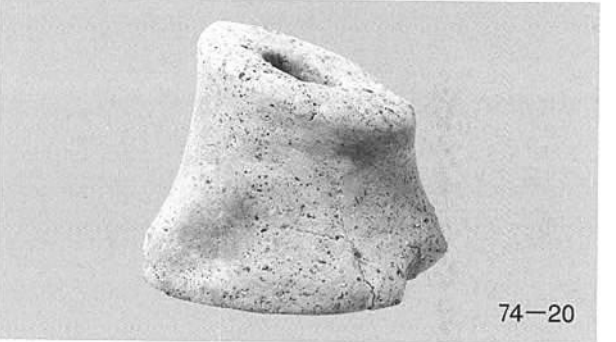
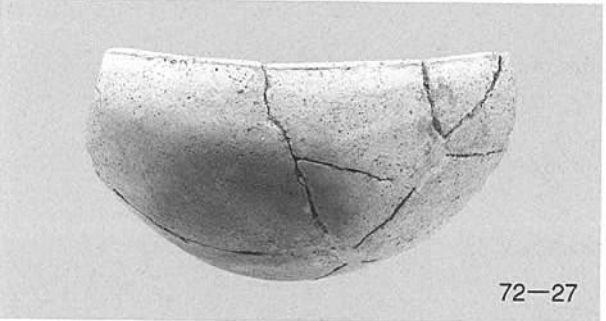
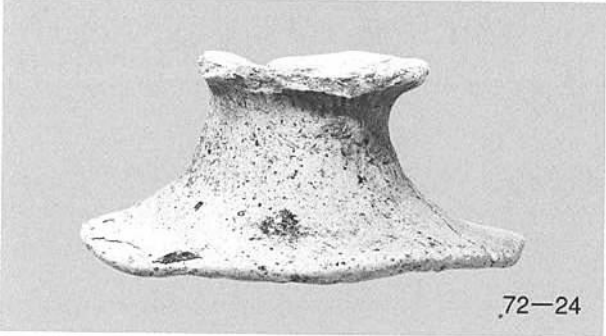
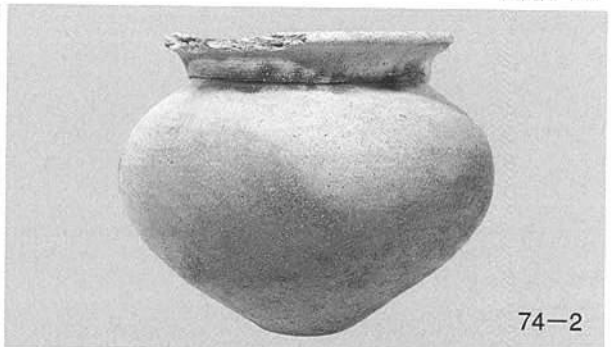
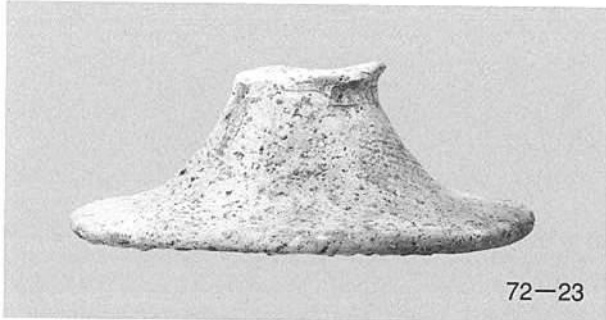


69-9

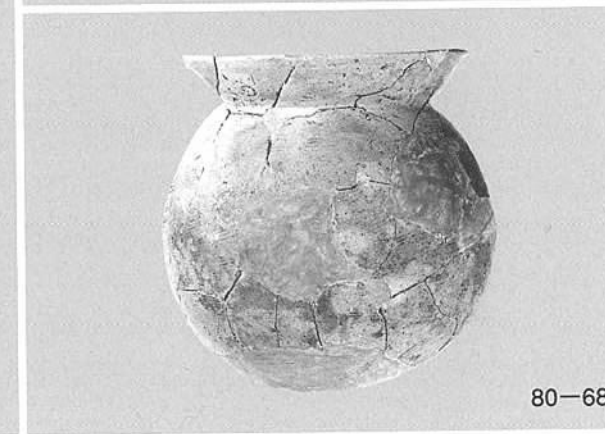
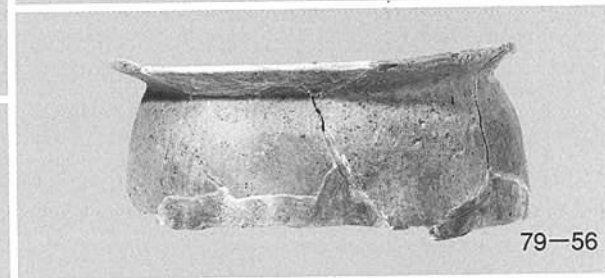
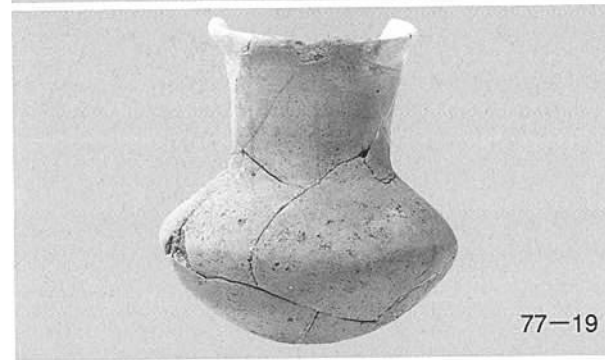
138・140・142・151・154号土坑、1号甕棺、土器溜まり1出土土器



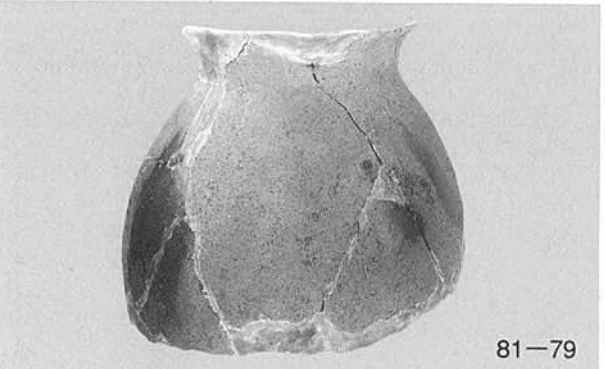
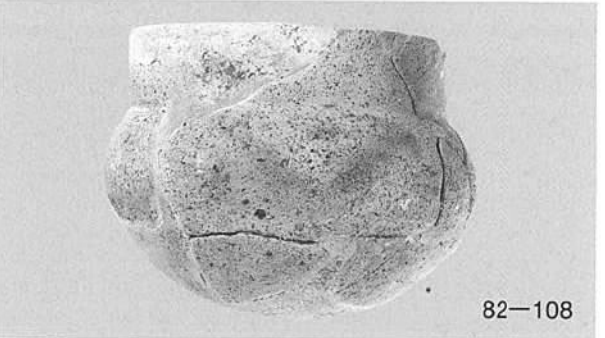
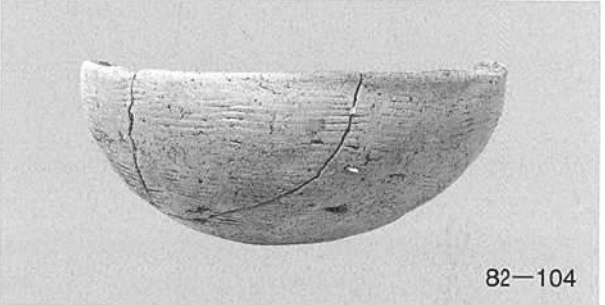
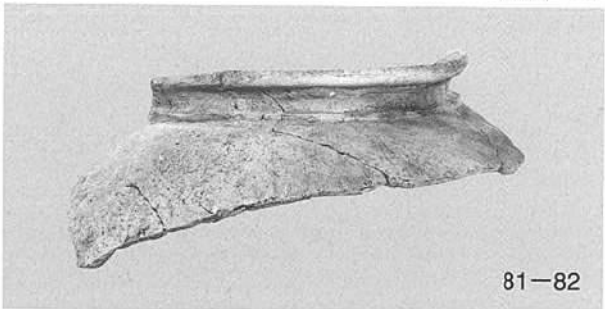
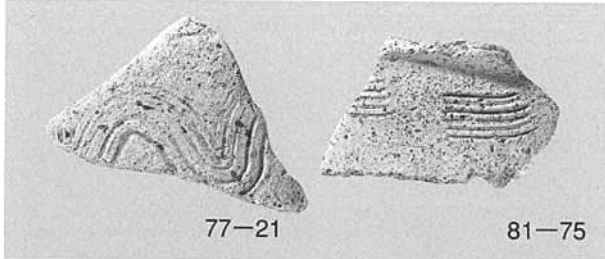
土器溜まり1・2、A区包含層出土土器



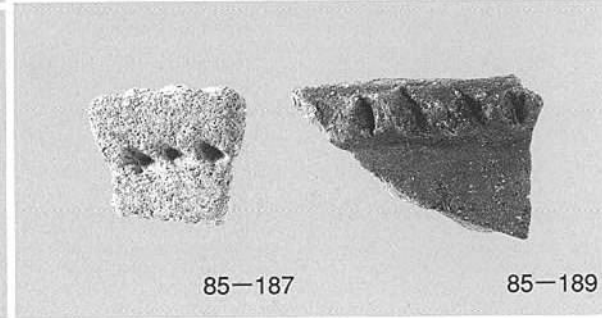
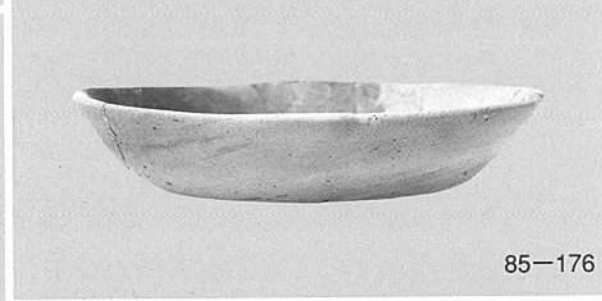
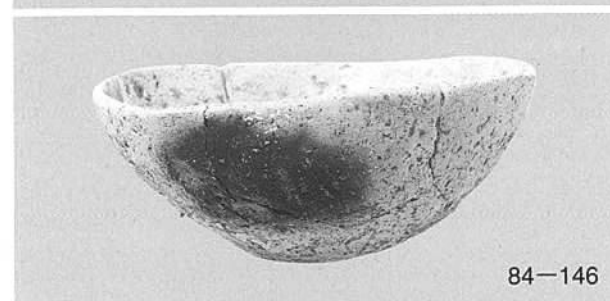
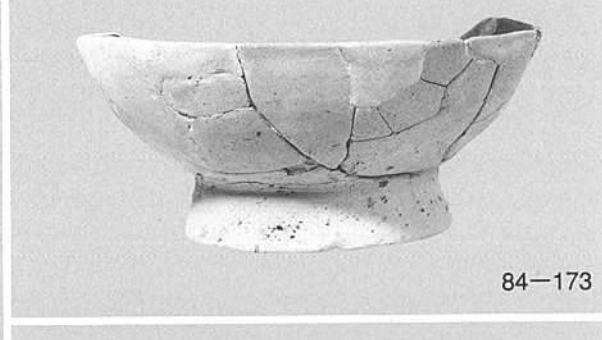
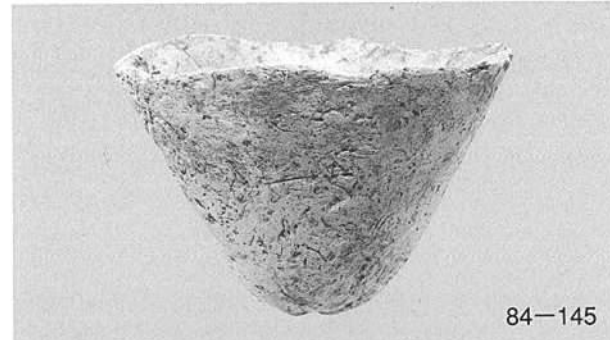
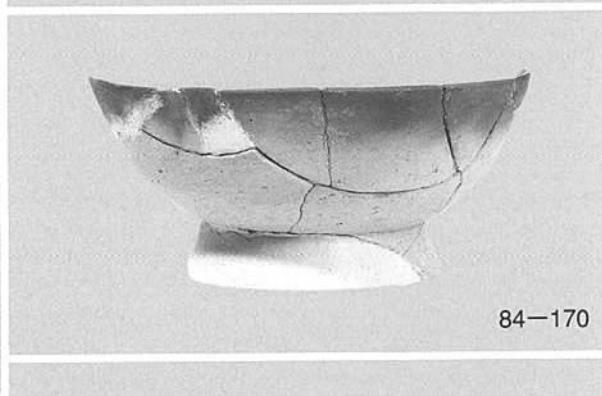
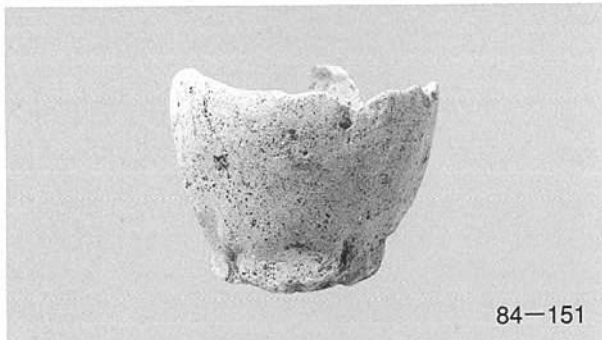
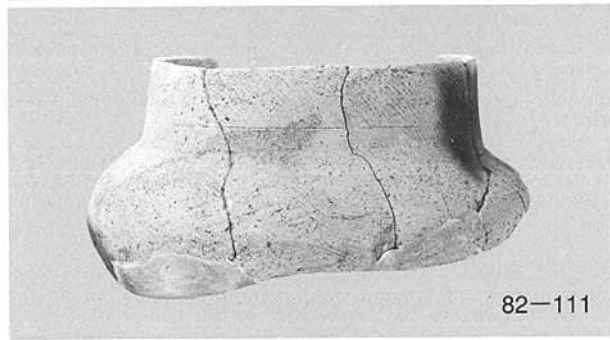
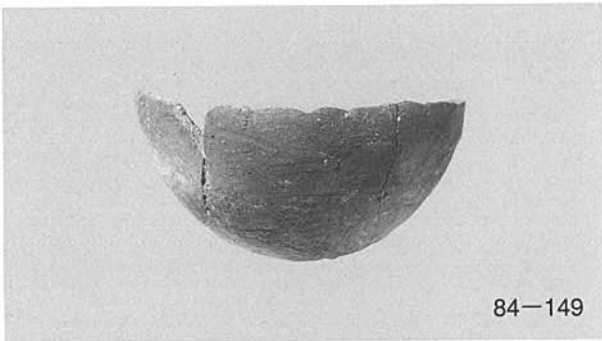
土器溜まり2、ピット、B区包含層出土土器



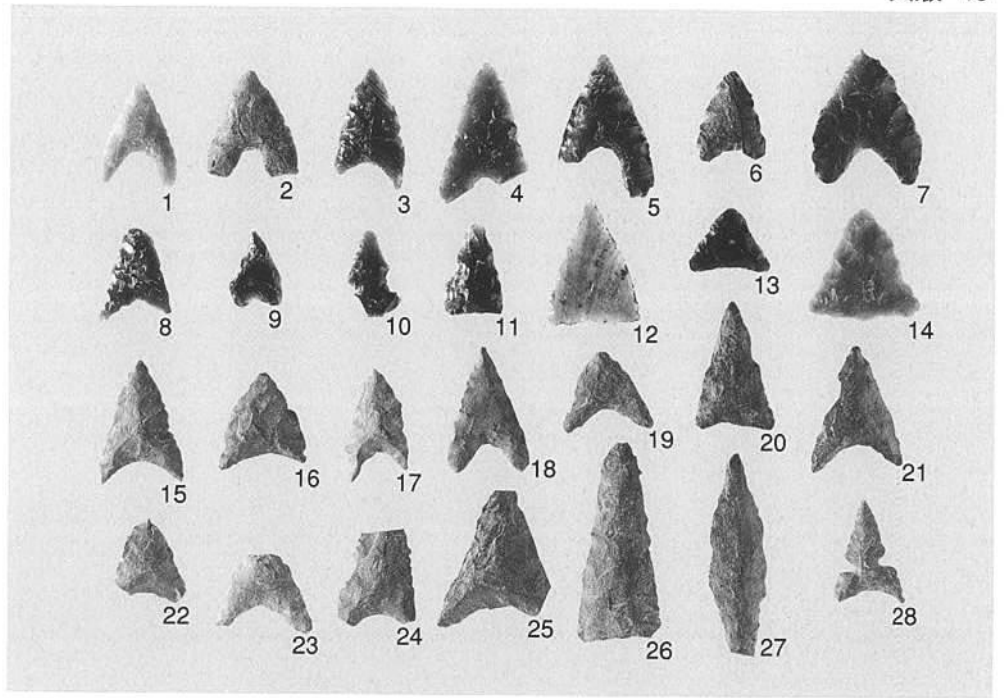
A区包含層出土土器①



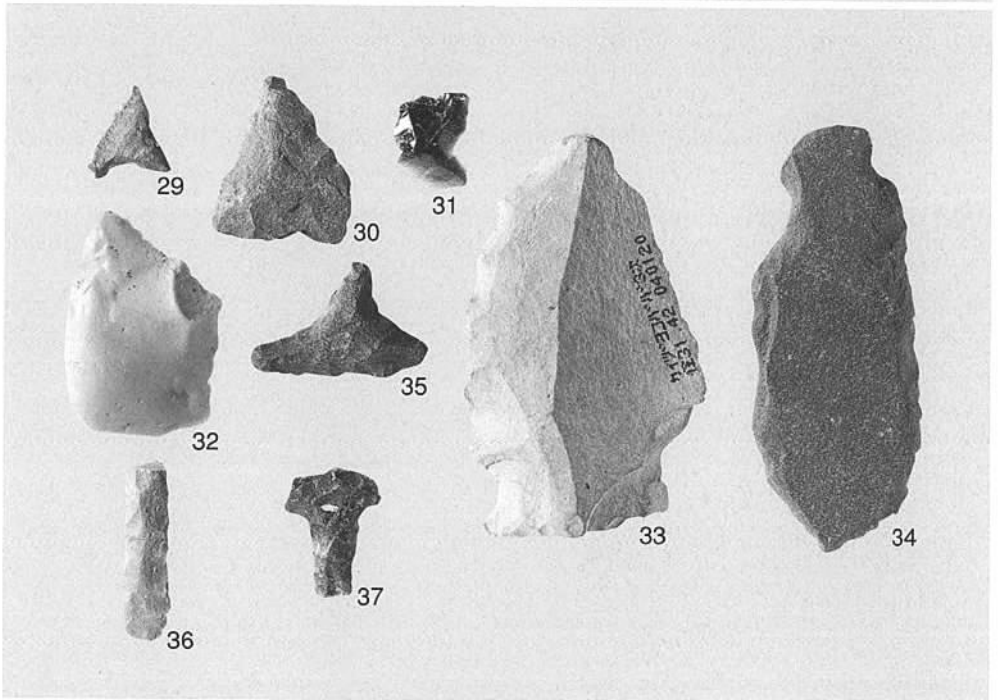
A区包含層出土土器②



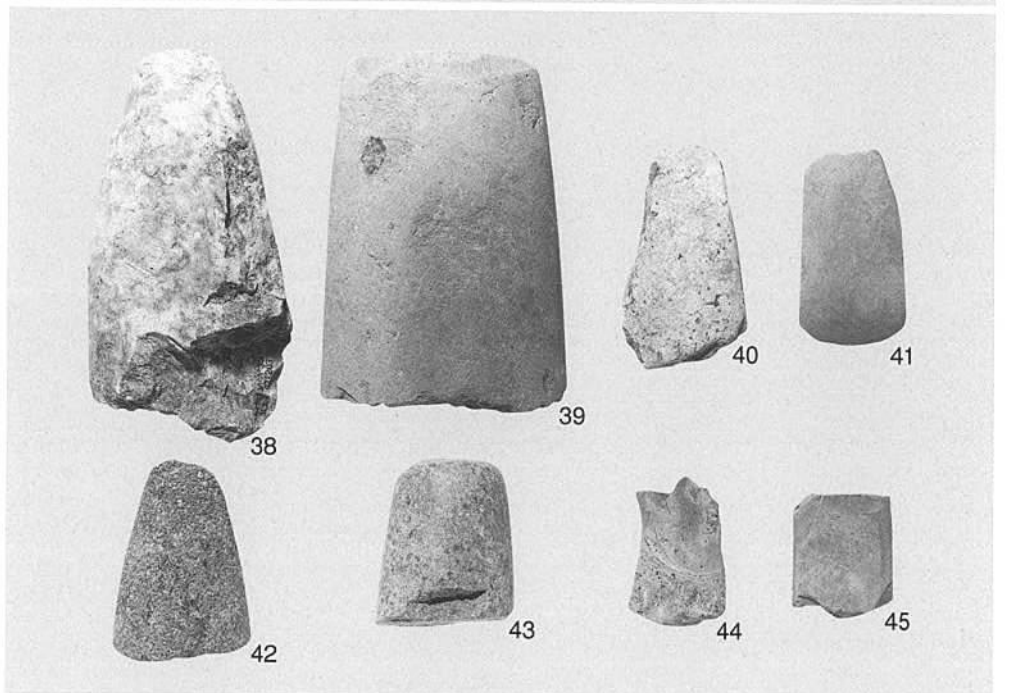
A区包含層出土土器③



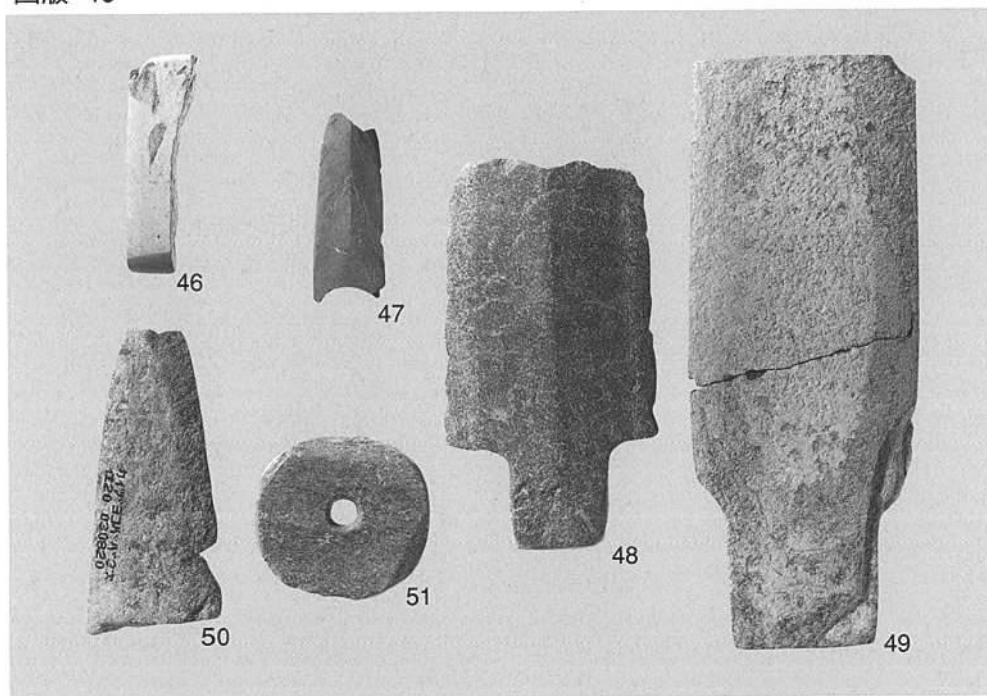
1. 出土石器①



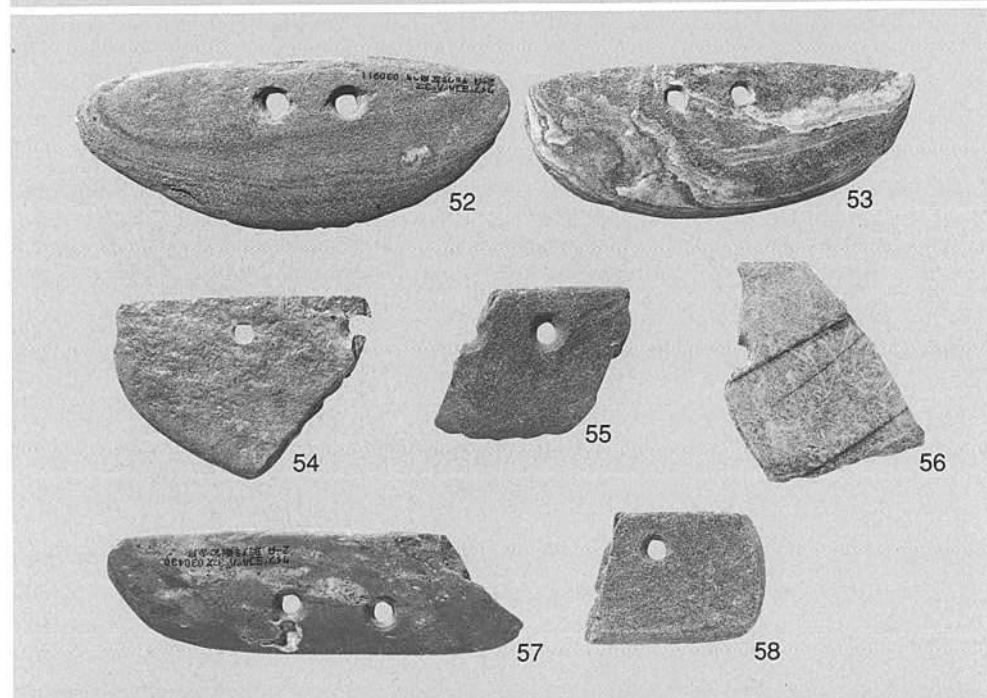
2. 出土石器②



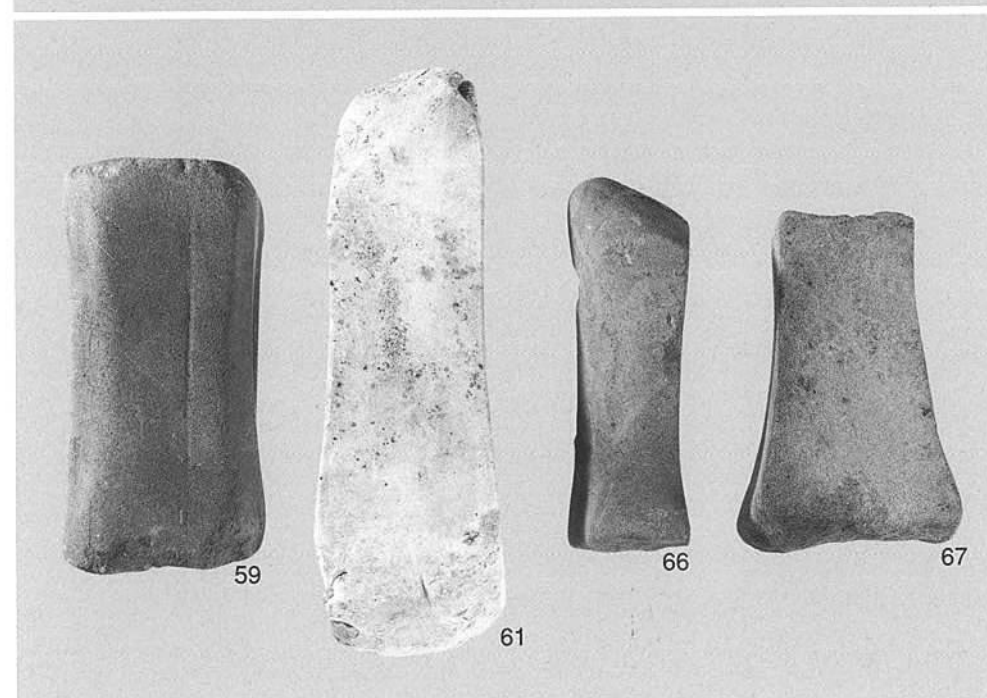
3. 出土石器③



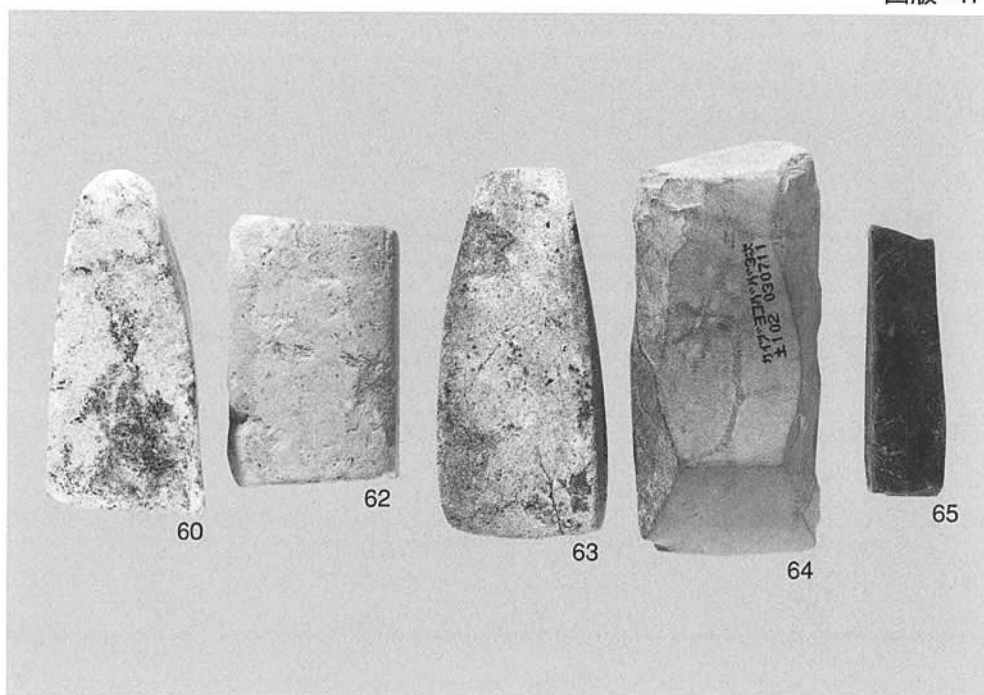
1. 出土石器④



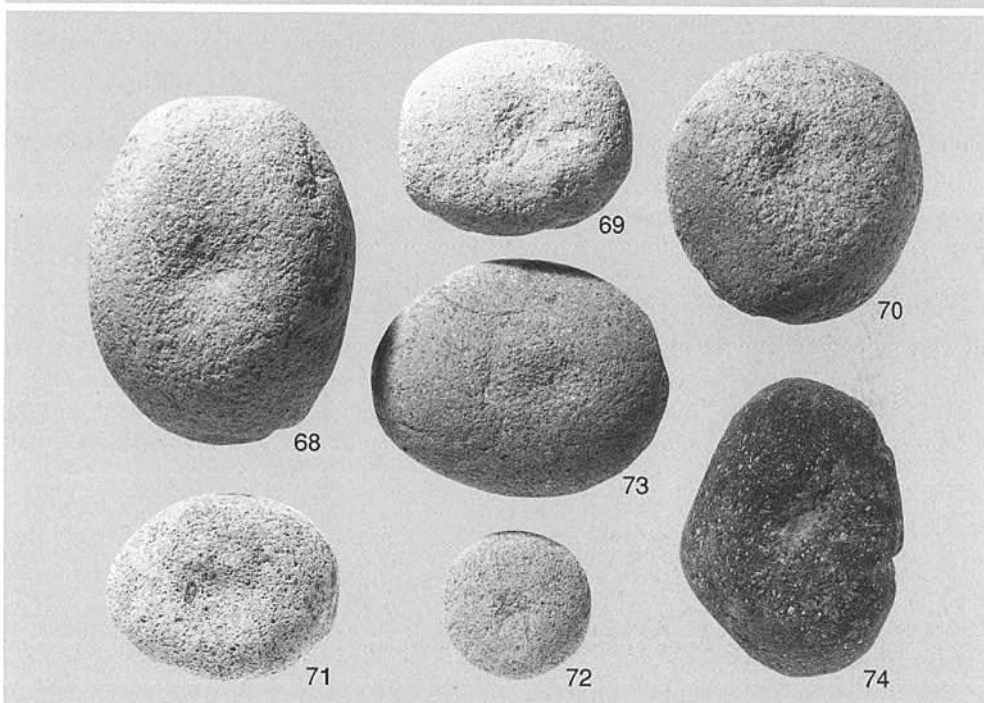
2. 出土石器⑤



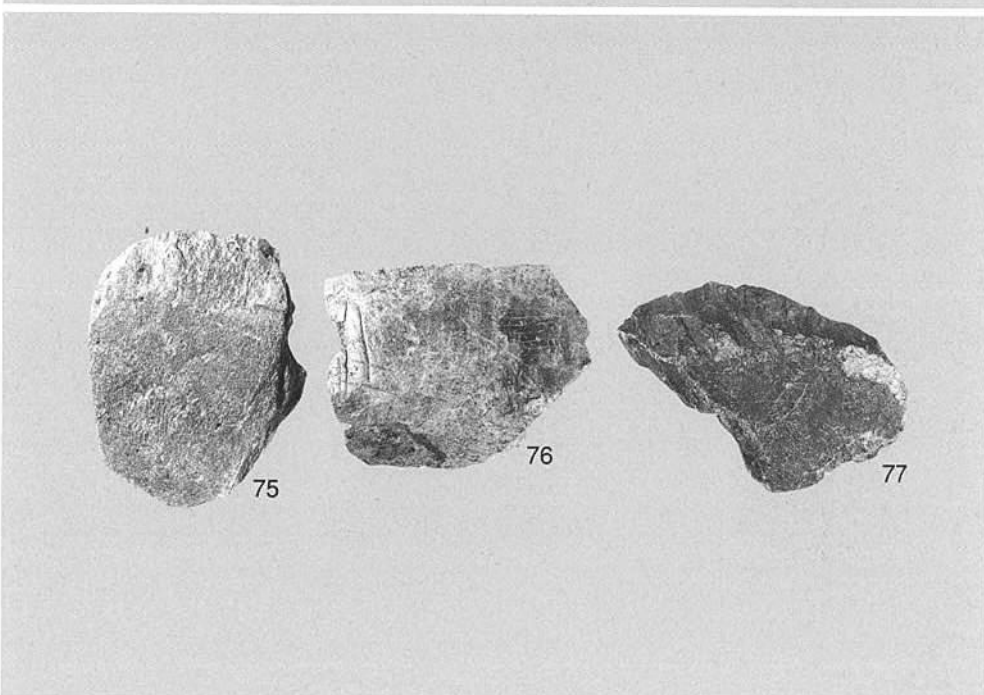
3. 出土石器⑥



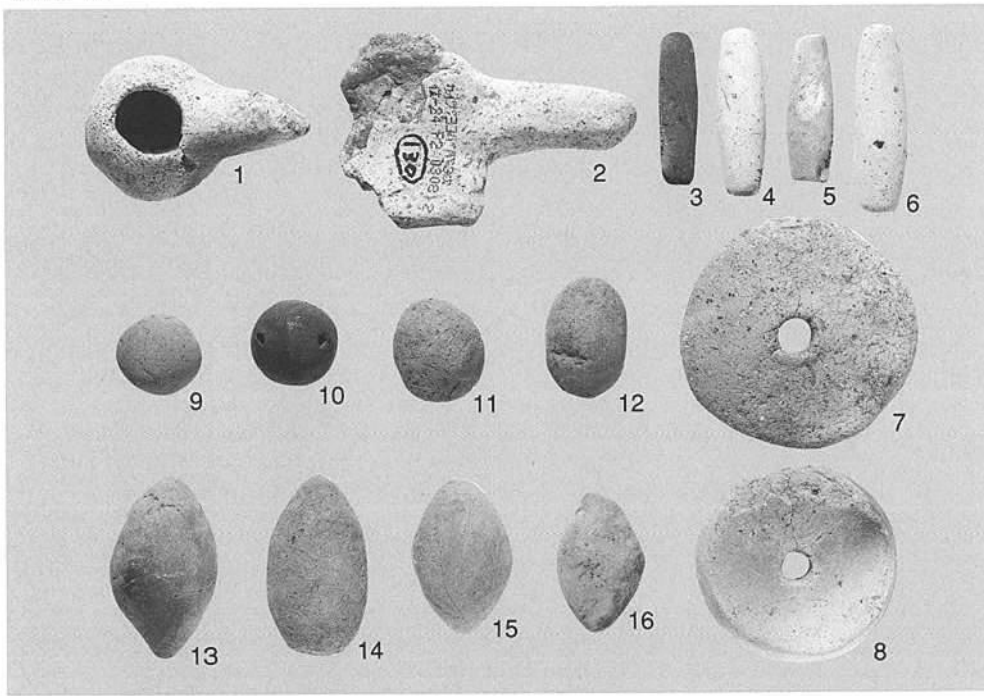
1. 出土石器⑦



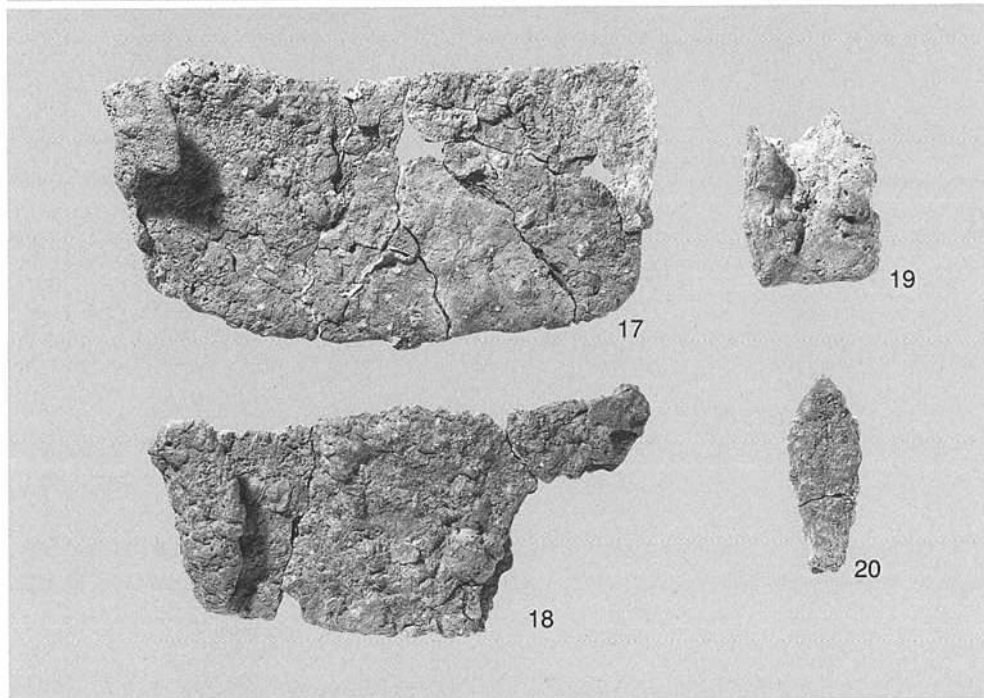
2. 出土石器⑧



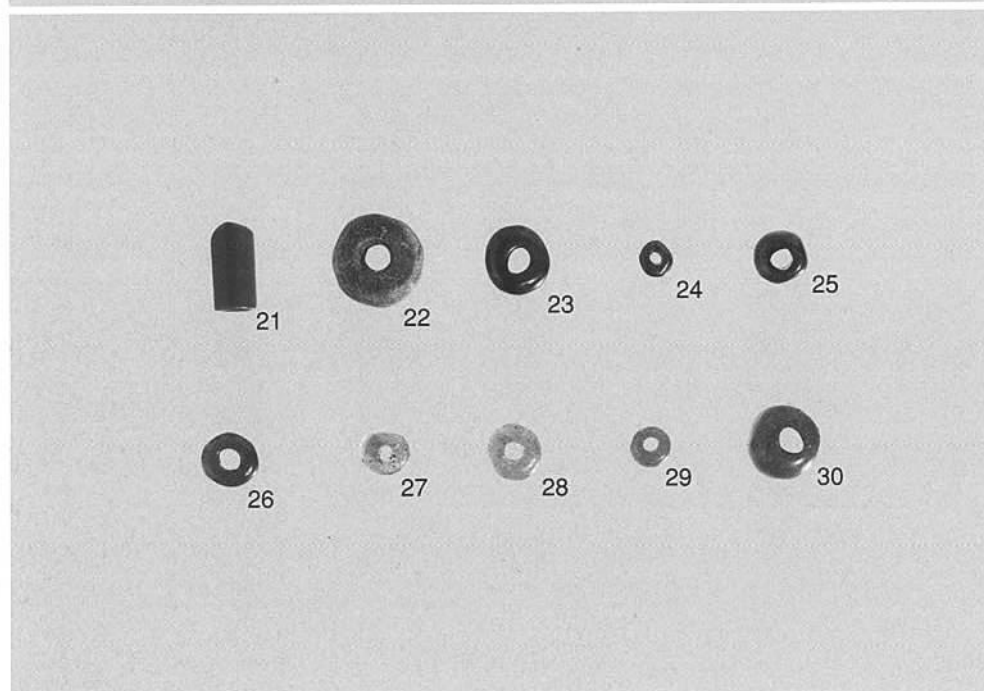
3. 出土石器⑨



1. 出土土製品



2. 出土鉄製品



3. 出土玉類

報告書抄録

ふりがな	かいづよこばばいせき							
書名	海津横馬場遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第2集							
編著者名	宮地聡一郎							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 TEL092-651-1111							
発行年月日	西暦 2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいづよこばば 海津横馬場 遺跡	ふくおかけん みいけぐん 福岡県三池郡 たかた まちおおあざかいづ 高田町大字海津 あざよこばば 字横馬場	40581	800156	30° 07' 03"	130° 29' 36"	2003.04.18) 2004.03.10	約1,300m ²	九州新幹 線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
海津横馬場 遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世	竪穴住居跡 土坑 甕棺 ピット	弥生土器 土師器 須恵器 石器 土製品 鉄製品 小型仿製鏡				

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2114107
登録年度 17	登録番号 1

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第2集

海津横馬場遺跡Ⅱ

平成18年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社インテックス
〒850-0046 長崎県長崎市幸町6番3号
TEL 095-826-2200 FAX 095-826-2201